

新しい風俗文化雑誌

風俗草紙

風俗草紙

10

10

定価
10
円



風俗草紙次号予告 (十一月号)

絶	讀	遺	載	奴	ま	に	や	地	獄	祭	（第二回）	………	日夏由紀夫	DB・アレ原作	三宅一朗訳
本	号	訪	獨	得	悦	虐	秘	画	集	………	北喜多	………	環子	………	………
そ	ど	み	あ	の	断	層	………	………	………	………	鹿火屋一彦	………	………	………	………
落	城	惨	虐	虐	虐	虐	虐	虐	虐	虐	岩堀祥介	………	………	………	………
云	ろ	て	す	く	変	態	浪	花	節	………	正岡容	………	………	………	………

特集・変態人性記

あぶ・せくすありす

いよいよ待ちに待った初秋が参りました。酷熱の夏も、アブ党にとつてはまた捨てがたい味があります。すがすがやかな風が吹き、一日一日夜の長くなる九月ともなれば、縛りよし、情痴よし、耽美の心はまたひとしおのことでありましょう。さて本号から、圧倒的な読者の御支援に感謝する意味で、口絵を四頁、本文を八頁、新たに増頁致しました。読者交歓室を拡張して、読者と編集

後記

部との親密さを深め、また続々と登場する新鋭アブ画家や、大家中堅の執筆者に頁を割いて、一層本誌に光彩を副えることと致します。何卒御刮目下さいませよう。また本号より新連載の「奴隷祭」は、このシーンにうつつつけの好読物です。サディズム文学の傑作として既に久しい間、斯界の人々に発表を熱望されていたものであります。佛文学の新鋭三宅氏の名筆を得て、その凄まじい惨美の迫力は読者をタンノウウさせて餘りあること、思います。

また「責め」の特集も、まだこれでは不満足なのですが、一応第一回特集として発表しておきます。雑誌のバラエティの上から惜しい原稿が四五本掲載洩れとなつて終い、非常に残念に思つてをりますが、少し間を置いて又、発表することに致します。なお大号も予告の通り豪華な内容で、既に原稿山積、唯今整理に忙殺されてをります。何卒今から御期待を乞います。

(T・U)

直接購読者募集

御購読は直接申込が一番確実で御便利です。

三分三冊（送料共）三百円
半年分六冊（送料共）六百円

風俗草紙

第一巻 第七号
毎月一回一日発行

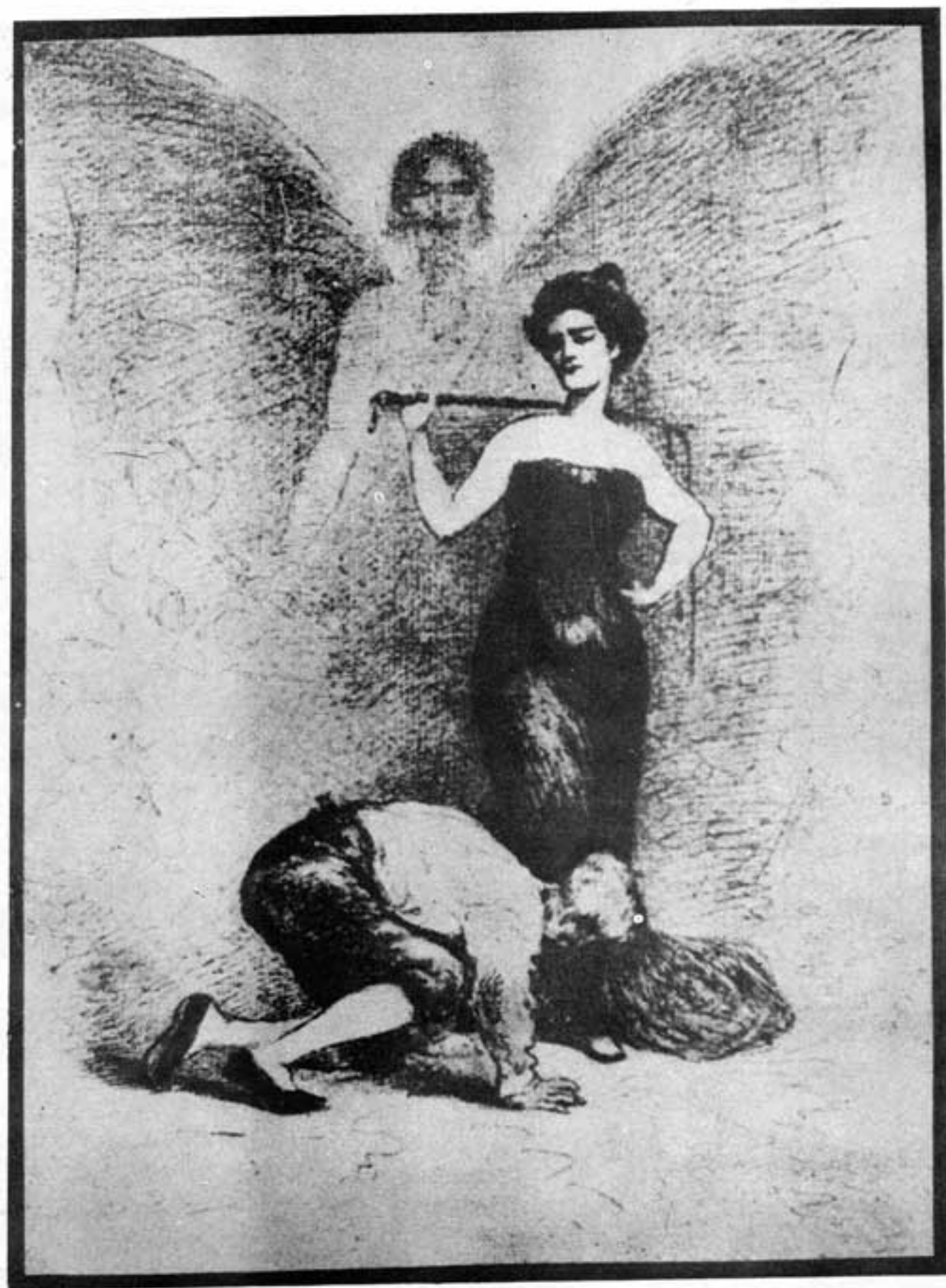
定価百円

昭和二十八年九月二十五日 印刷
昭和二十八年十月一日 発行

編集人 氏家富良
発行人 野村佳秀

印刷所 内海印刷株式会社
東京都文京区千代田三番地

発行所 日本特集出版社
東京都千代田区神田神保町二の三四
電話 九段 334 三三七番



鞭の奴隷

「女王様、打つて下さい！ 力いっぱい打つて！……」哀れなマソヒストの男は、豊満な貴夫人の足下にひれ伏して哀願する。狂熱的な、獸的な官能のるつぽが、今や彼女の鞭の一打ちから展開しようとしている。



水子

マゾヒズム画廊

馬よ走れ！

マゾの男にとって、乗馬ズボンや拍車のついた長靴をつけた女は、永遠に讃仰の的である。彼女達の逞しい腰を背に、馬車馬の如く駆けずり廻り、這ずり廻るのが彼等の夢であり、サデツクな女の欲望である。これはその象徴図





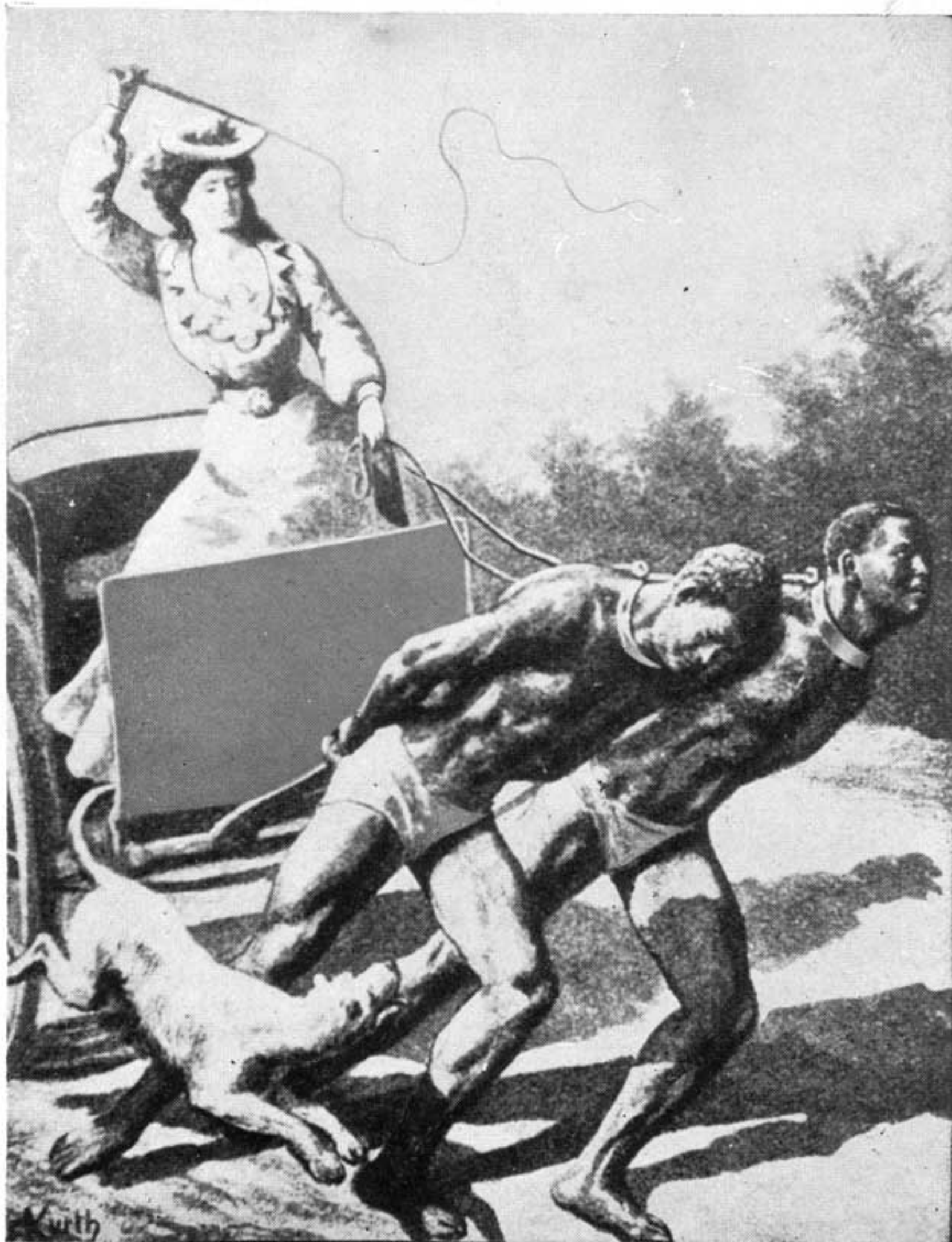
↑ 巨大な臀



↑ 美しき馭者

鞭打たれる奴隷

★マゾな男を馬に、サヂの女性を馭者に見立てることは、第一頁及びこの頁に掲げた計四葉の繪を見てもお判りであろう。もつとも右下の繪は、どちらかと言えば女性のサヂズムを描いたものだが、他はすべて虐められて歡ぶ男のマゾを描いている。本能の原始的爆発を思はせる男のサヂズムより、マゾヒズムの方が、社会的騷擾を※

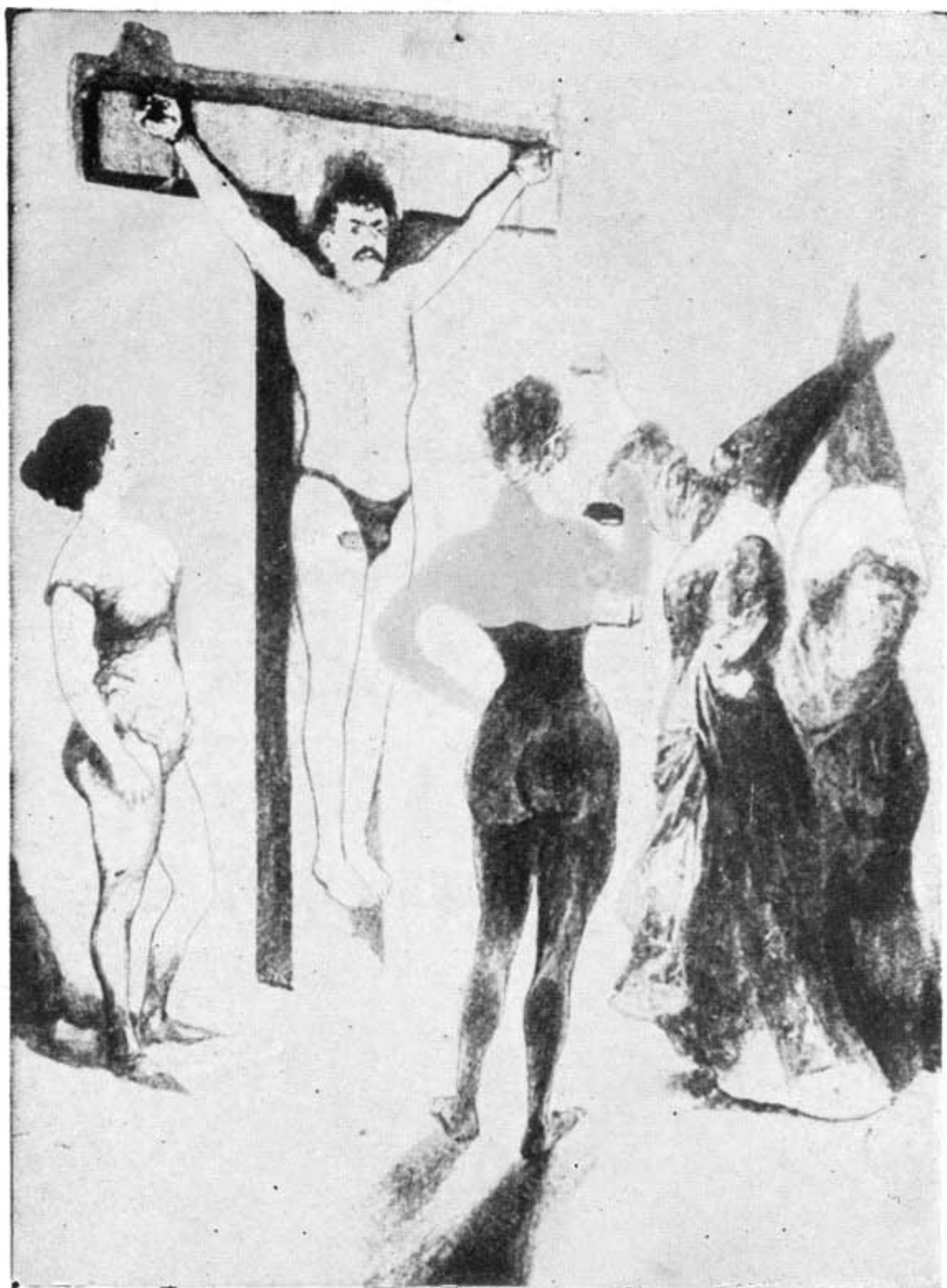


私刑

※起す率が少いし、宿命の深さが感じられるだけ、或いはより近代的なものなのかも知れない。

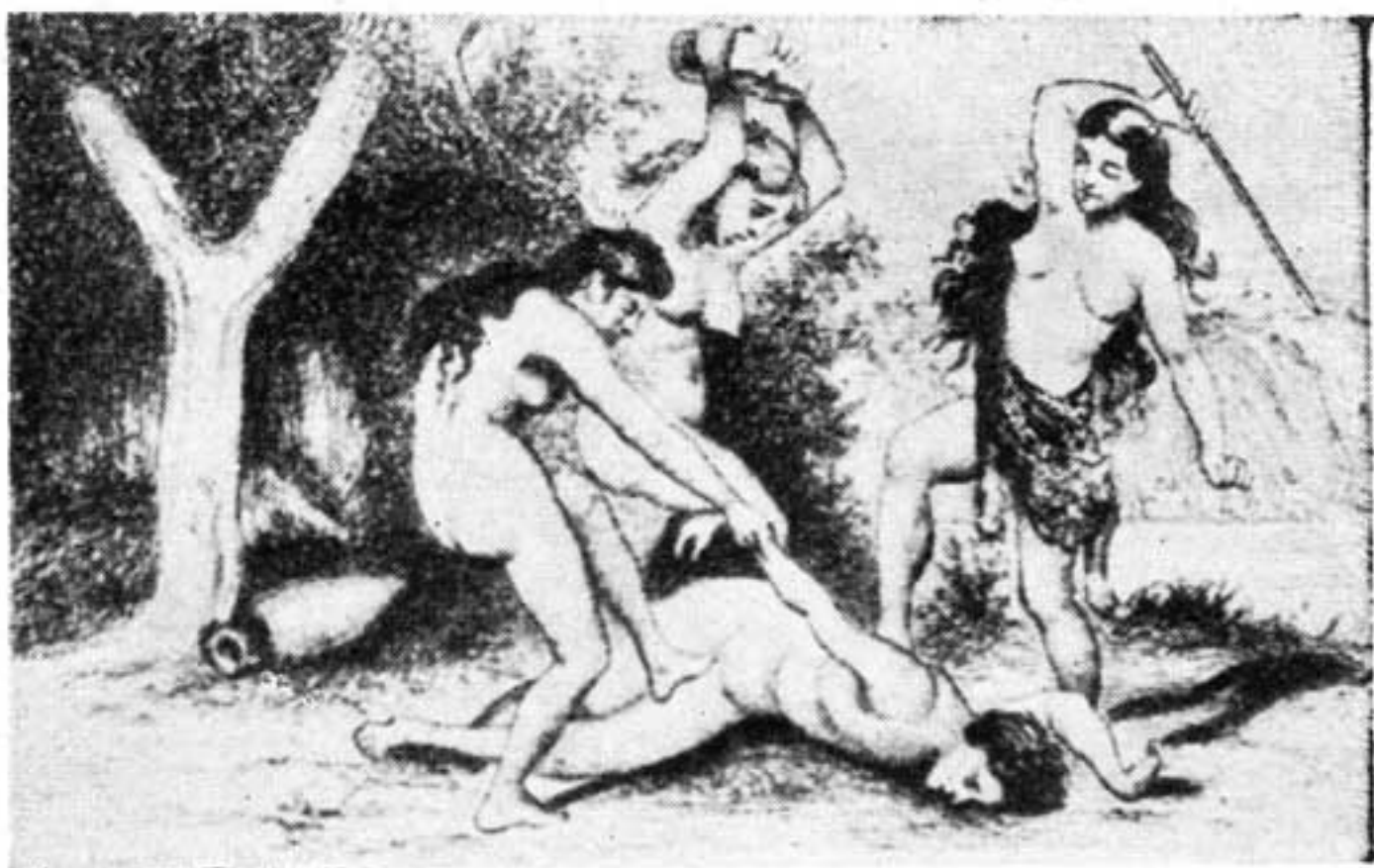
「サア、白状しなさい。お前は何をしにやつて来たの。お金が欲しいのか、私たちの体が欲しいのか——」女たちばかりの家え忍び込んだ泥棒は裸にむかれて柱に吊された。これから彼女達の残虐なりンチが始まるのである。

↓ 餌 (えさ)





↑ 監視される亭主



↑ 野性のサヂズム

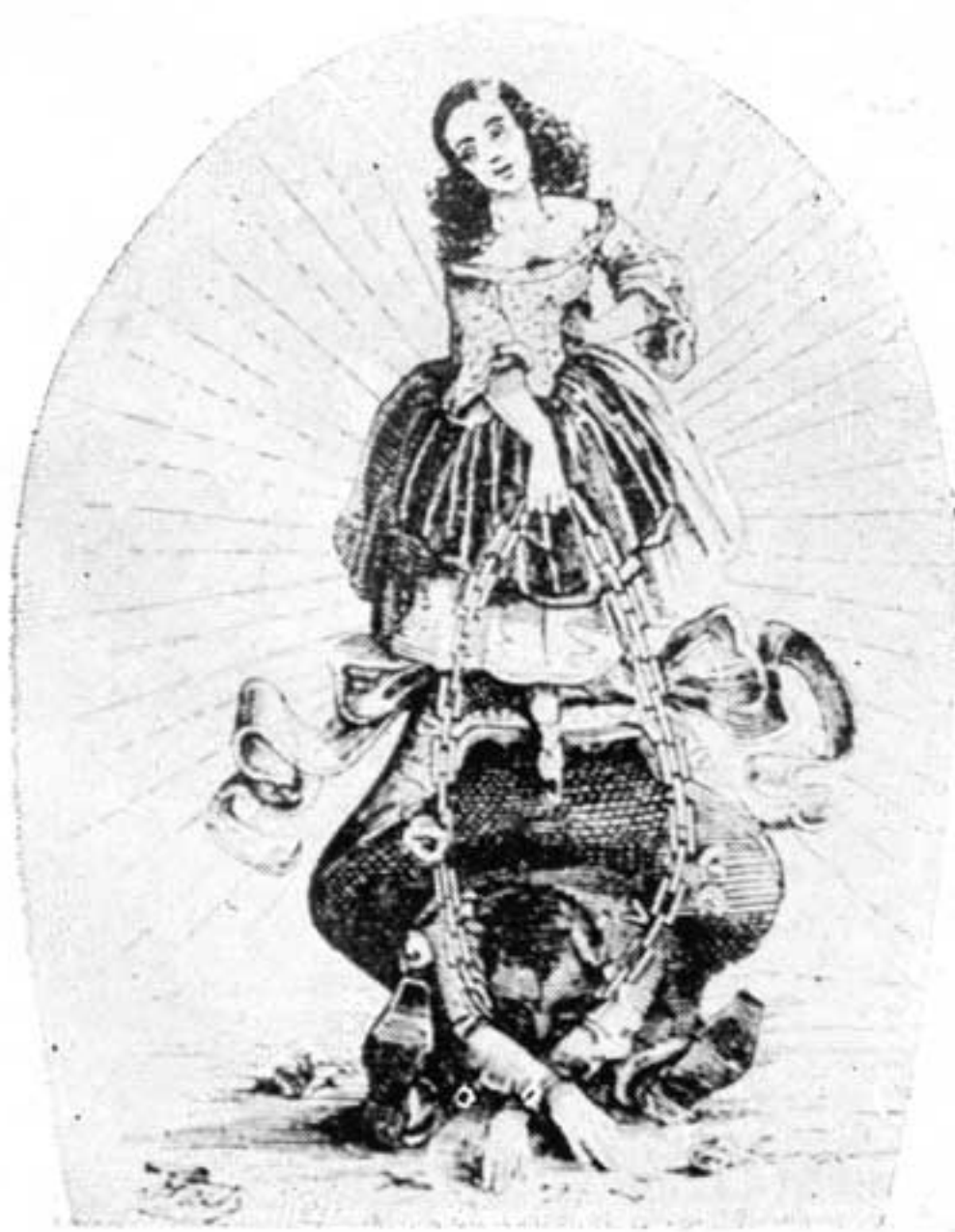
★第三頁目下の繪とこの頁右上の繪は共に原始時代の男のマゾ女のサヂを描いている。上の一葉と左頁上の繪は共に現代家庭の奇妙な病態。殊に左頁上の繪は若き妻を持つ老人の悲哀と美貌な女のサヂ性を巧みに描いている。

この頁の下の一葉と、左頁下の繪は、高貴な位置の男※

↓ マゾ紳士の陶醉境



↓ 將軍も奴隸に……





↑ 寢室の女王
← 恍惚のマゾヒズム

※性にもマゾがいかに多いかを如実に示している。左頁下の繪の男は、裸婦の足に踏まれながら恍惚となつてゐるのだ。マゾヒズムやフェチシズムの基底は一種の劣弱感インテリゲンチヤ・コンプレックスのように思えるが、そう簡単に割り切れるものではないようである。

「ううつ、いや！ いや離して！ ね、お願い！」
がらんとした部屋に、天井から吊された責め道具のきしむ音に、少女の叫び声がからみついて空しく消える。

男は何も云わない。黒く油の浮いた顔に、いけにえを見つけた獣の目が光る。目から頬にかけての創が充奮のためか、血のしたりの様に赤い。

必死に、縛めから逃がれようとする少女の呼吸と、それを楽しむ野獣の呼吸が、青白いほのおをあげて燃えさかる。

かたい蕾の乳房が、純白の下着と一緒に小さきみにふるえて、あきらめきつてなげ出された瞳が、心なしか酔った様に薄赤く染まっている。

白絹の少女の肌に、蛇の様に太縄がまつわつて、グロテスクな縞を描く。

——ぎいっ——、きしむ音に、言葉にならない少女のため息がからむ……

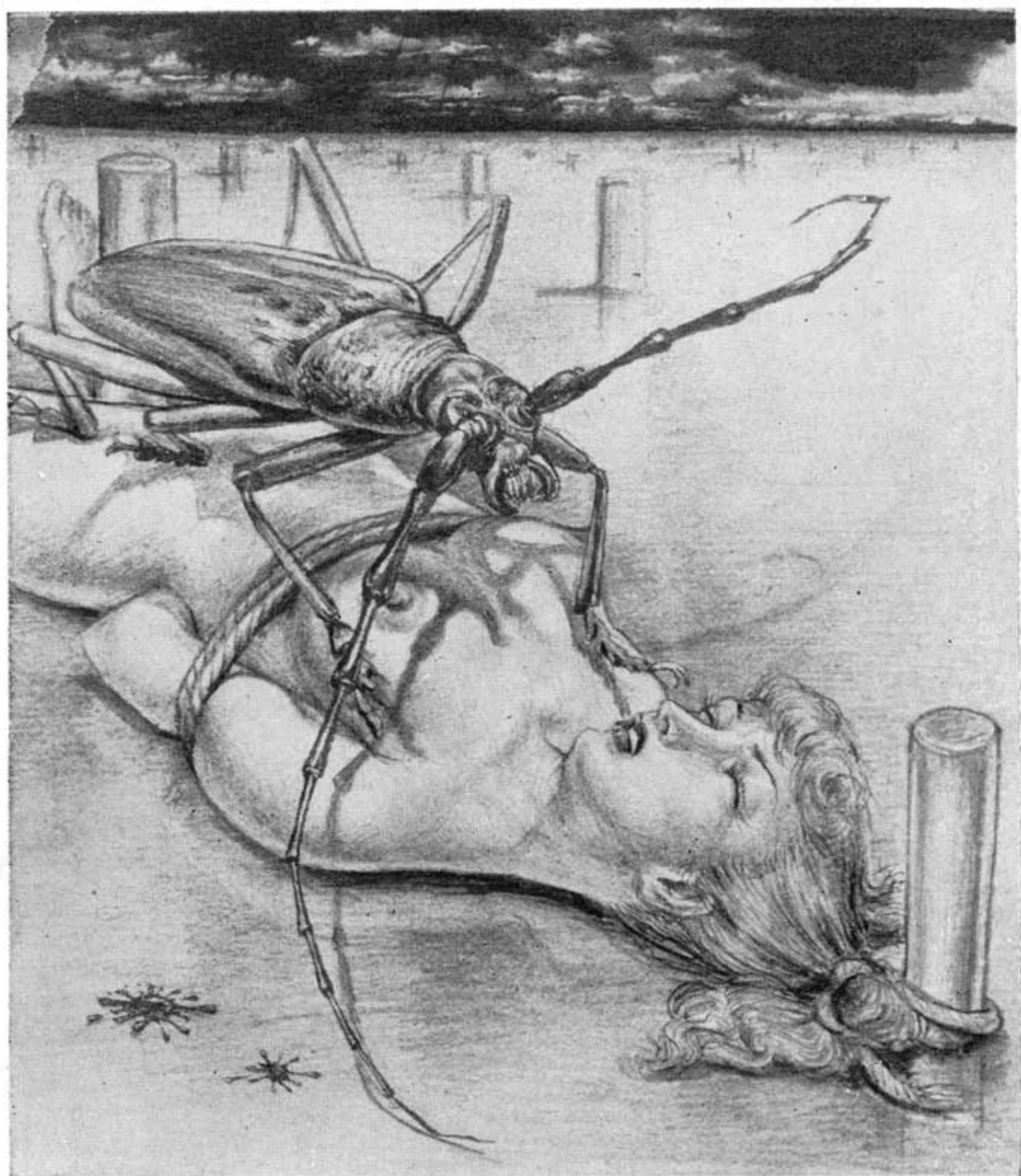


傷

の

男



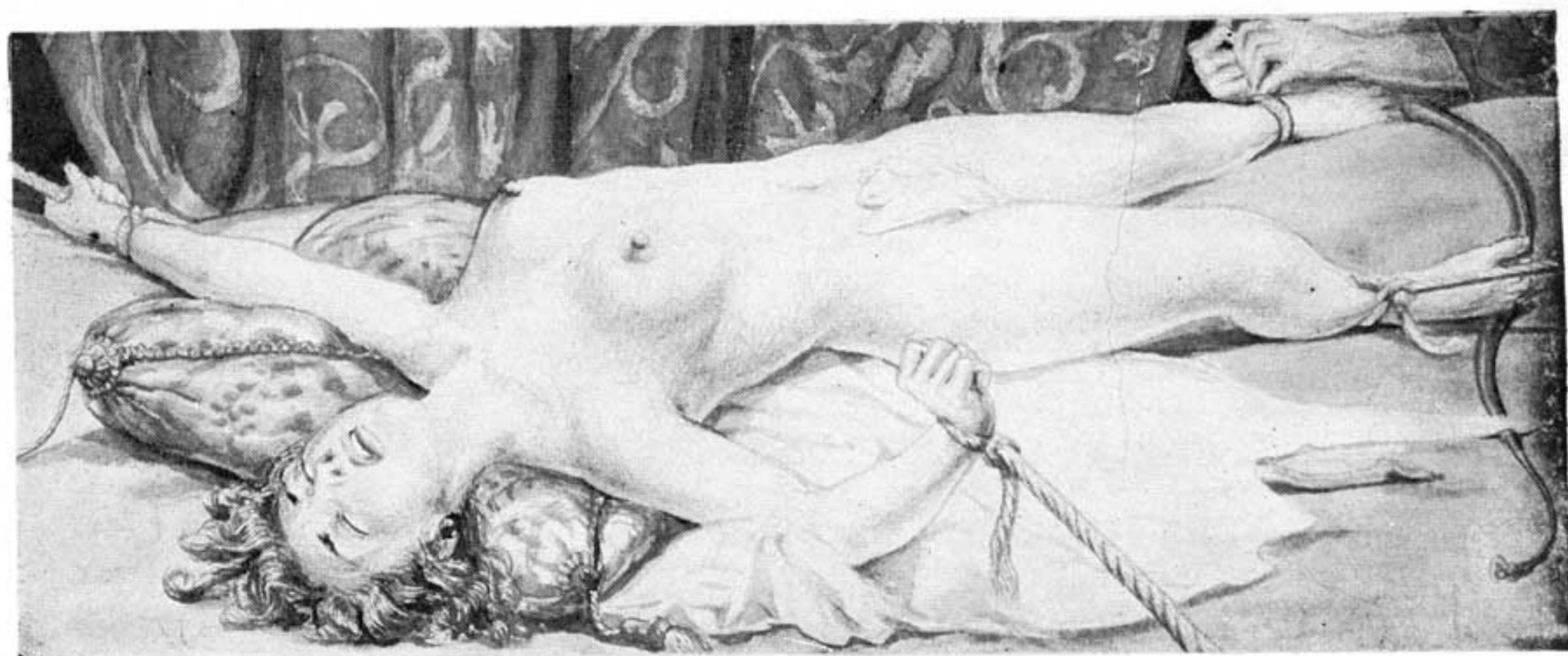


甲 蟲 の 幻 想

中 川 彩 子 妖 美 画 集

本誌は毎号統々と新鋭アブ画家を登場せしめて、読者の絶讃を博してをりますが、今号よりまた、中川彩子女氏が新たに登場致します。豊麗な女体に飽くことなき嗜虐を加える数々の構図は、きつと大方の読者の御満足を得ることゝ期待してをります。リアルな女体と幻想的な構図の巧みな調和、原始的な嗜虐の激しさと、モダンな筆觸に御注目下さい。

蟻
(あり)



責めの序曲

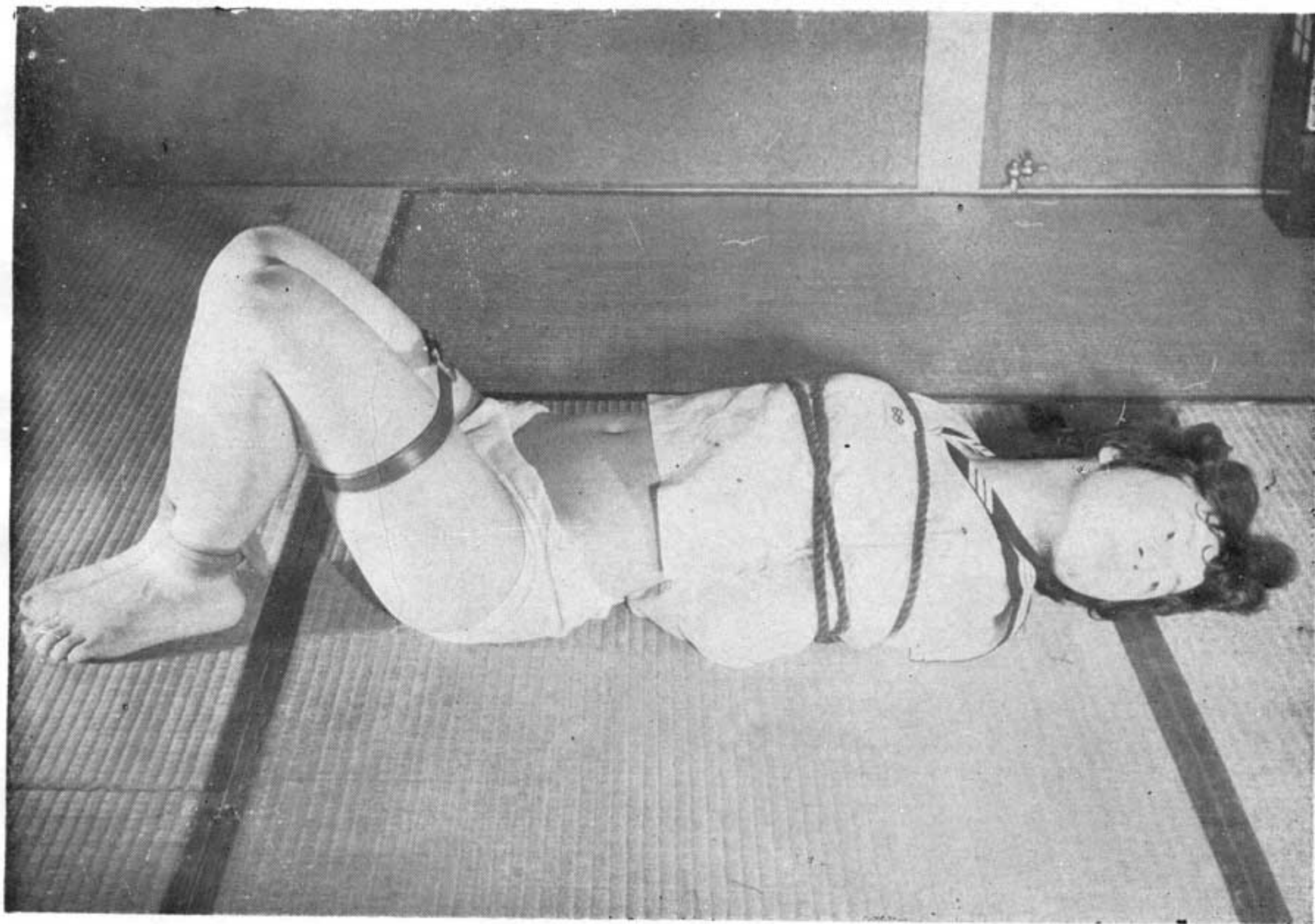
肌 れ ら れ る 責 め

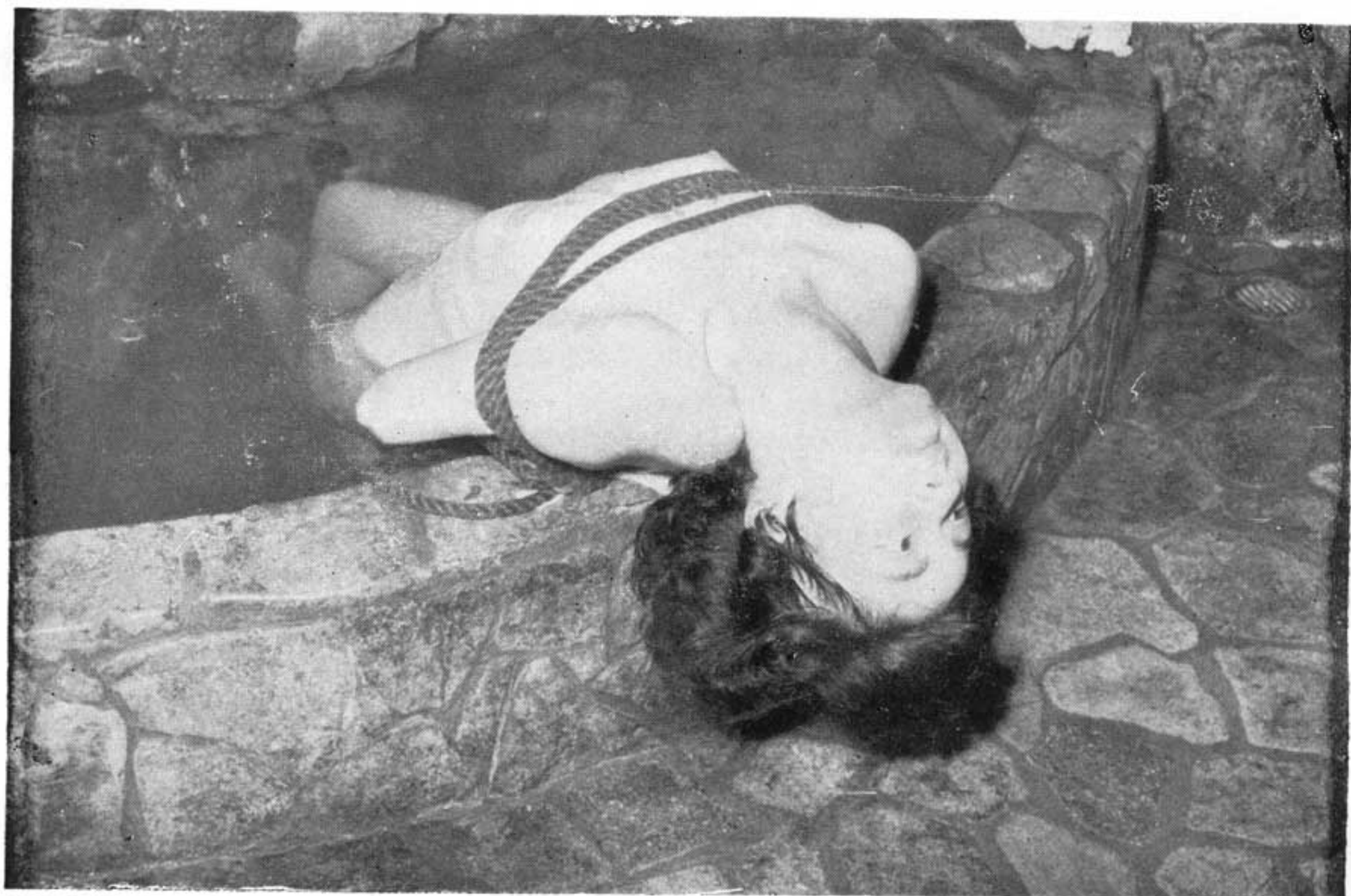
現実に女性を緊縛することは、なかなか行なえぬことである。サチスチックな絵や文章に興味を持つたり、さまざまな妄想に耽る人々が多いが、いざ実際に紐を持つて女性の体を緊縛することには、多大の逡巡を持ち、またそうした相手の女性に恵まれなかつたりして、行爲そのものはなかなか実現されない女体を縛る——ということ

は、言うまでもなく彼女の自由を束縛するのだから、現代においてはどうしても、多少犯罪的な匂いを感じぬ訳にはゆかない。これが、多くの人に空想されながらも容易に実行されぬ大きな原因であろうと、思はれる

緊縛寫真も、単に女体を緊縛して定石的なポーズを寫したのでは、意味がない。緊縛——※

食 餌 美 しい



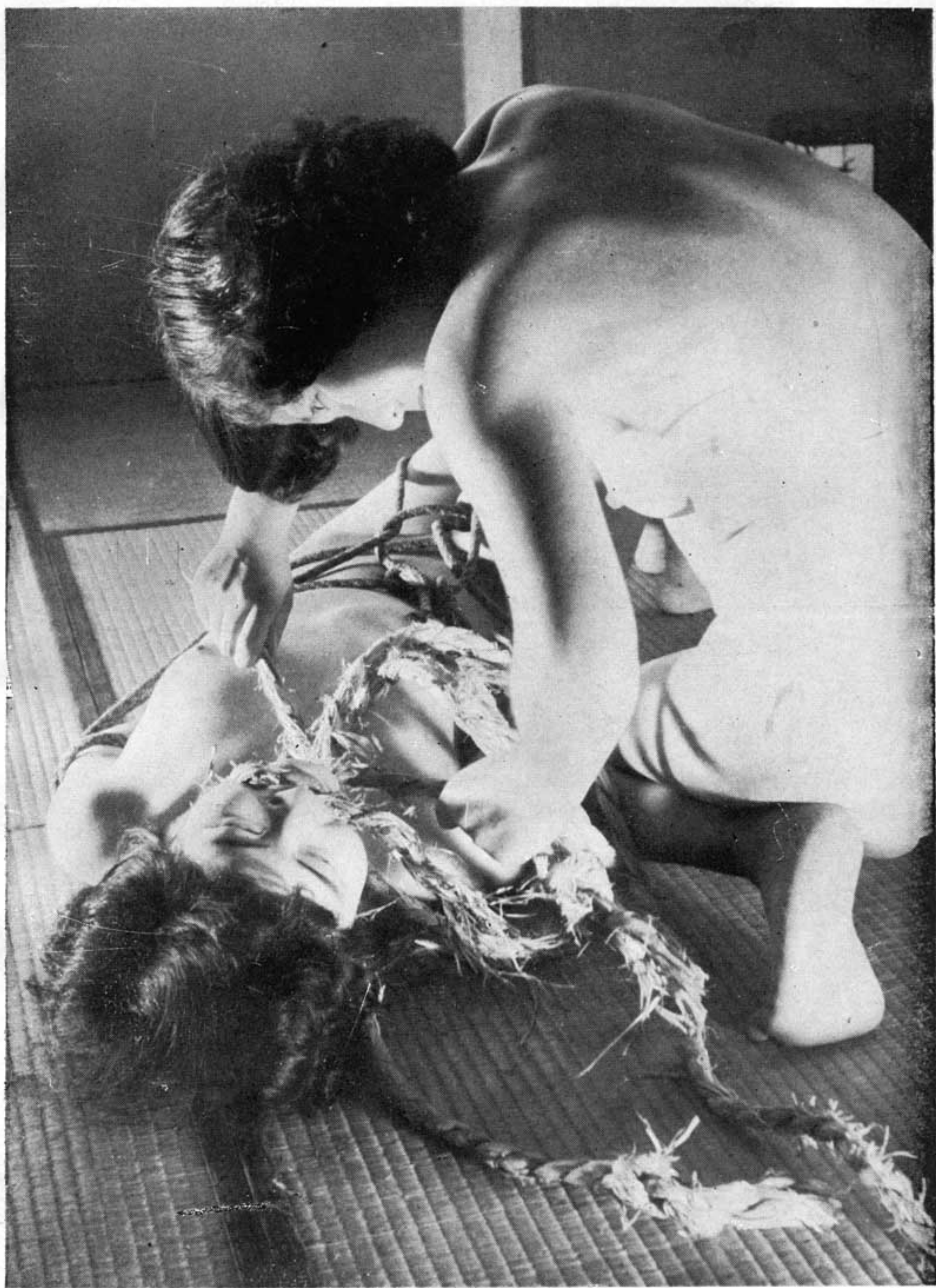


↑ 悦 虐 の 後

← 縛 ぶ ら れ て ……

※という事自体が、やゝ反時代的なものだから、様々な雰意
気醸成やカメラの技巧によつて、現代的なエロチシズムを生
み出さなければならぬ。本誌のアブ・フォトはそうした自
覚のもとに製作されるのであるが、号を追つて発表される数
々の傑作に是非御期待を乞う次第です。





虐 嗜 の 縄 荒

悦虚の幻想

え 長妻玲子



絵 口

(四色)あなぐら	喜多玲子画
マソヒズム画廊	北原 環画 (7)
傷める女三態	中川彩子画
責められる肌	本誌特選写真
悦虐の幻想	喜多玲子画

新連載
サティズム小説

奴隷祭

D・B・アレラ原作
三宅一朗訳 26

変態性慾芸術の代表的傑作！人間の獸慾を赤裸に衝く官能の巨篇第一回！

落城秘史

北の庄落城惨記

岩堀 光 (184)

秀吉軍に包囲された柴田勝家の居城北の庄！美貌のお市の方と腰元達の悲惨な最後

悦虐通信 二篇

被虐の詩集	大磯妙子 (92)
流れ行く死体	神奈川冴子 (160)
ぐろてすく	三遊亭 圓朝
日本刑罰史	遊里・吉原の私刑・拷問
第四回	深田 徹 (108)
秘録	刑場の女たち
	川野京輔 (156)

嘆慕症ざんげ 吉野精一 (164)

責めの大特集

女はこう縛られたら抵抗力を失う 伊藤晴雨 (78)

責めの泰斗が毎号特に本誌に発表する秘稿！女体を縛る秘訣を説いて興味津々

新しいスタイルの責め 喜多玲子 (35)

西のモダン派玲子が妖艶な筆先から湧き上る様々な近代風責めを語る圧巻

責めにおける各種の小道具 細谷満佐子 (89)

変態猿ぐつわ雑考 高月大三 (128)

恋愛・閨房のサヂズム 影浦 憲 (66)

サヂイズムな性のたわむれ 那加道郎 (102)

異常嗜虐四景 人見謙次郎 (97)

そごみあ放浪記 渋谷徹夫 (71)

玲子十二ヶ月画集「菊」 喜多玲子 (106)

まぞ・ふえちすとの手記

腎部狂崇症	油井啓二 (52)
甘美なる糞尿	菅芳一郎 (150)
饞えた経血	岡 和馬 (115)

レスボス通信 (女性だけの秘密な愛のサロン) 園村 恵子 (120)

そごみあ通信 (そごみあひの秘密な交歓室) 藤井 晃 (163)

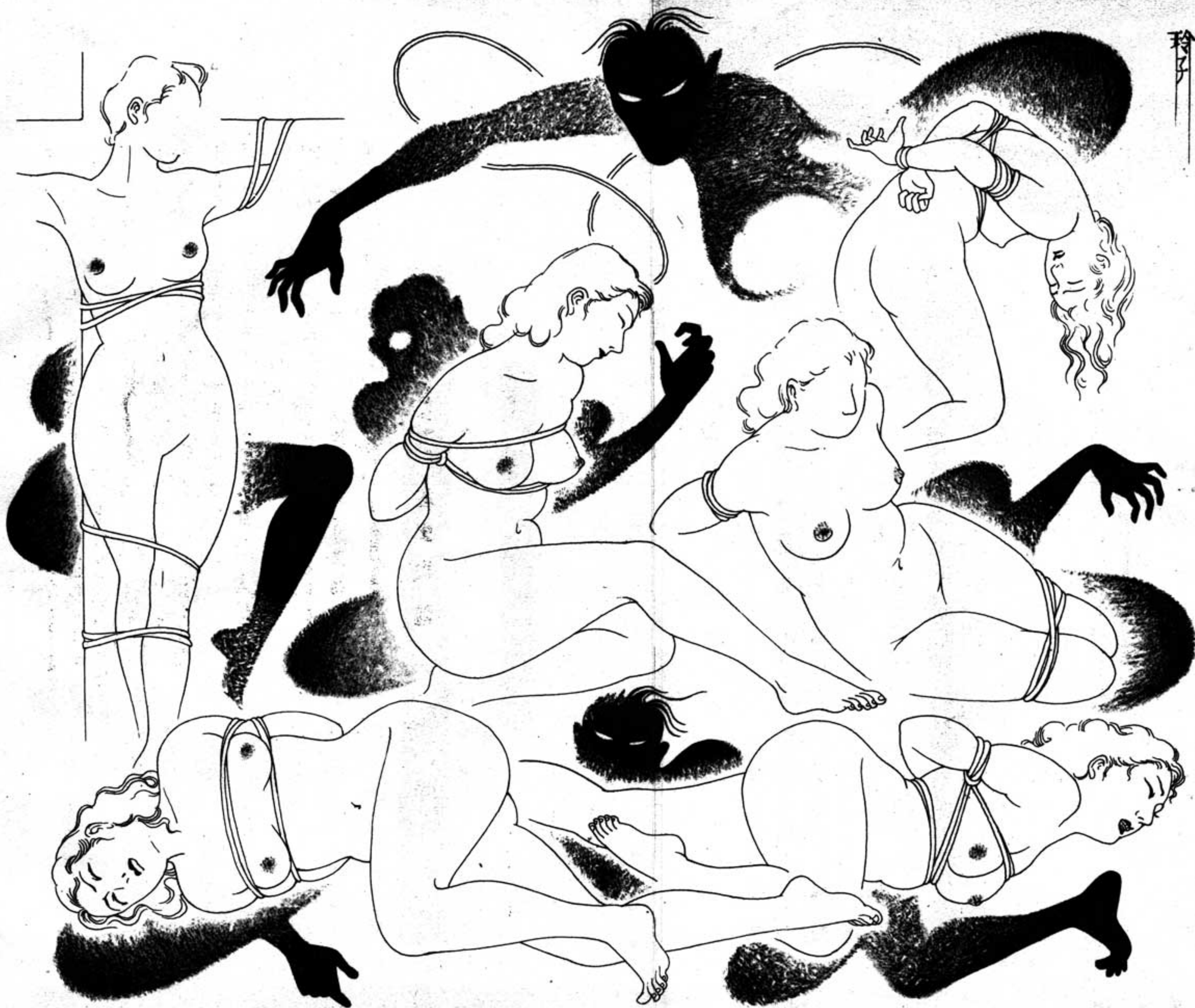
読者交歓室 (読者が語り合う新設サロン) (180)

レスボス すどおり 歪んだ女 鳥羽瑛子 (134)

マソヒズム すどおり 双生児の犬 比企狂一郎 (171)

第三回 まにや地獄 馬を見る夫人 日夏由紀夫 (42)

馬の交尾を処女に見せて喜ぶ美貌の夫人！ 愈々絶頂の読切連載！



風 俗 草 紙

現代人の新しい趣味雑誌



十 月 号

D・B・アレラ原作
三宅 一朗 譯

奴 隸 祭

「やい、この助平なケダモノ、言うことをきかないところだぞ！」アスコットは別人のような聲で叫びながら、びゅッ、びゅッと鞭を鳴らした。……

ドン・ブランヌス・アレラの『野蛮な祭』には「十九世紀中葉のルイジアナ州の風習」といふ副題がついている。全七章の鞭打小説である。奴隸制度があつたころのアメリカ南部を舞臺にしたサデイスムス小説で、この種のものにしては物語性があり、文章、描寫ともにしつかりしている。かつて酒井潔氏が翻譯したが、當時と現在では社會的情勢も異なるので、私は私なりに原著の迫力を再現すべく努力したつもりである。表題は前記酒井氏の譯題を借用した。ちなみに作者名はスペイン系の名で



あるが原文はフランス語で書かれている。

その一 妻を賭ける

「おい、どうやら夕立が来そうだぞ。久しぶりにね」
チバーズ・ジェフリイズは、我家の窓から空一面に拡がっていく大きな黒雲をながめながら、そばに寄つてきた愛妻のイヴリンに言った。

「そのせいね、やけに蒸暑くてイラ／＼すると思つたわ」

すこし色は浅黒いが、すらりとした腰つきの若い妻は答えた。

彼女は、わざと身体をななめにしてお尻を突きだすようにし、ぐツと胸を良人に押しつけながら恐る／＼空を見上げた。チバーズは、もう四十に手のとどく位の鋭い眼をした男で、このあたり一帯の農園の持主であつた。たしかに妻君は彼より十五は年が若い。

ふいに眼を射る稲妻が大きく空を斜めに走つたかと思うと、空虚な、遠くの雷鳴が、いきなり頭の上に来た。それが二、三ど繰り返されると、いきなり光と音が同時にたたきつけられ、家の前の杉の大本が轟然とたおれて行くのが窓から見えた。

「こわいわ」

イヴリン夫人は、ぶる／＼ふるえながら良人にしがみついていた。

「なんだか今の落雷が私たちの幸福のトドメを刺したような気がするわ」

「ばかな」

チバーズが小声で制したと同時に、一人の黒人が慌てふためいて部屋に駆けこんできた。

「どうした？」

チバーズがきツと黒ん坊をにらむと、どうやら今の落雷で、ちようど家の前まできた馬車の馬がびっくりして暴れたし、馬

車をひっくり返し、乗っていた男女を放り出したことが、たど／＼しい、下手な英語の説明でわかつた。

チバーズは家の外へ駆けだした。見ると、豪雨にたたかれながら一人の紳士が無残にも全身びしょ濡れになつた若い女を助け起そうとしていた。濡れた薄物が身体にへばりついてくつきりと軟い女の線を浮ばせ、肌まですきとおつて見える。それよりも太腿までまくれ上つたスカートから白い脚が泥にまみれた痛々しい美しさ。チバーズは、早く／＼と二人を取りあえず我家の玄関のポーチに入れた。

「おや！ 君はアスコットじゃないか？」

「なんだジェフリーズか！」

二人の声は同時だつた。

「こんなところに君が居るとは知らなかつた。ここはどこだね？」

「スプリングフィールドだ。奇遇だ。さ、はいり給え」

チバーズが同行の女に手をかすと、彼女は濡れた身体をもたせてきて、まるで抱かれるようにして家の中に入つた。むツちりした女のからだに、チバーズは思わず心ときめかせた。

チバーズとアスコット卿はニューオルリアンズにいた頃の友人だつた。年もあまり違わない。ただアスコットはイギリス籍でチバーズはアメリカ人である。

「結婚して、こんなところに引込んでいたのか！ 奥さんを紹介

介したまえよ」

「君の連れは？」

「ああ、あれは義理の妹さ、ミス・チャーチルといつてね」

「美人じゃないか」

「そうかね」

とアスコットは答え、何かチパーズの眼のなかに読みとろうと、一瞬、じつと冷い觀察の視線を投げた。

夜になつた。アスコットと妹は、馬車に積んであつたトランクを運ばせ、食事のときは別人のような服裝をしていた。チパーズは、うつとりとして友人の妹をながめた。金髪のはちきれるような肉体の美人だつた。高い胸、すばらしいお尻、食いつきたいような青い靜脈がすいて見える白い腕。汗気の多い果肉のように甘美な唇。

チパーズは、たまらなく彼女にひきつけられた。

ところが、ふと、彼女の手頸と二の腕に赤い古傷のアトのような輪があるのに驚いた。すると、彼女は、それを隠すように腕環をすべらした。

「馬車がたおれたとき出来たんですの」

夕食後、彼らは外を散歩した。嘘のように夕立は何処かえ行つてしまつて、靜かな空に星がきらめいていた。ヴェランダに歸つてくると、温いお茶と冷たい飲物が用意されていた。

「どうだ？」とアスコットが訊ねた。「昔ニューオルリアンズの俱樂部で鳴らした腕だ、一勝負やらんかね？」

「そいつ面白い」

たちまち昔に返つた二人の友は五点勝負のエカルテ遊びをやりはじめた。

はじめは勝つたり負けたり、二人の女も見物していたが、だん／＼男たちが興奮し熱中してきて女たちを忘れてしまつたかのようになつたので自分たちで向うへ行つて雑談をはじめた。

そのうち、アスコットが落目になり、次第々々に負けていつた。そして、まもなく、持つていた現金を全部なくし、こんどは負けるごとに小切手を書いて渡した。

「ねエ君」とアスコットは落着いた声でいつた。「せつかく君と愉快に遊んだが、残念ながらこの辺で勝負を止めなくちやならん。というのは、これで僕の銀行預金は終りだからだ」

「だが」とチパーズは、氣の毒そうに然し得意然としていつた。「復讐戦をするなら信用貸しをしてもいいよ」

「そりやチパーズ、僕だつて預金以外に一晚や二晩ぐらい賭をする財産はあるさ。しかし、まアちよつと降参して中止しよう」
「そうか、では、もし君が雪辱戦がやりたいときはどんな賭でもすることを約束しとこう」

「よろしい」

彼らは勝負をやめて女たちと一緒にになり、いよ／＼寢室に退ることになつた。チパーズはチャーチル嬢の手にキスしてグッドナイトを言つた。そのときである、あきらかに彼女はぐいと手を彼の唇に押しつけ、やけに長くキスさせながらじいツと彼の眼を見つめた。

——どうしてあんな嬌しい態度をしたのだろうか？ わざと

かしら？

チバーズは嬉しくて判断に迷った。

妻のイヴリンは先に寢室に入ってしまった。いちばん遅れたチバーズが、うつとりとチャーチル嬢の幻を頭に浮かべながら客の寢室の前の廊下の角のところへ来ると、アスコットと義妹が低い声で何かささやいているのが聞えた。

「いいか、重大なことだからね、グラヂス、ちゃんと従わんといかんぞ」

というのはアスコットの声だった。どうやら今までの調子とは違った喋り方である。それに若い女が小声で何か答えた。しばらくしてアスコットの声。

「うん、俺はそれが希望だ」

チバーズは好奇心に燃えた。しかし、それ以上は何も聞きとれなかった。あきらめて自分の寢室へ行つたが、一つのことだけがハッキリしてきた。つまり、ミス・グラヂス・チャーチルは、どうやらアスコットの義理の妹ではなさそうだということだった。

チバーズは、急に嫉妬を感じだした。彼女が友人の親戚であつて欲しいと思つた。こう考え、謎を独りで判断し、彼女の肉体を想像して一晩じゆうマンダリともしなかつた。

翌朝、グラヂス嬢は、ます／＼美しく化粧をし、昨日よりも挑発的な姿をしていた。

二日すぎた。チバーズは出来るだけその若い女に近づいて二どばかりムキ出しの腕にキスし、すばやく愛の言葉をささや

いた。

馬車の修繕ができ、明日は二人が出発するという日、チバーズは友の手をとつて言つた。

「トランプ勝負はどうするね、君？」

「大いにやりたいところだが、今は――」

「わかつてる、金が無いというんだろ。金なんか無くともいいさ、君はすばらしい賭にするものがあるじゃないか」

「そんなものはないよ」

「よく考えてみたまえ、あるよ」

「なにが？」

「君の奴隷さ」

「えッ！」

「はッはッは、君が妹さんと言つてゐるあの女は実はそうでなくて――」

「どうして、それを知つてる？」

「手頸の鎖のアトさ」

「負けた、凶星だよ」とアスコットはいつた。「じつはグラヂスはイギリスの貴婦人じゃなくてチャーチル夫人なんだ。ジャックスンシテイの金持の未亡人だったのだが、誰かに欺されて何かの署名をして破産し、身体も失つて奴隷の身分になったのさ」

「おうかたそんなことだろうと思つた」

「ところがね、彼女のミルク色の肌の下を走つてゐる血管には少しばかり黒い血が流れてゐるんだよ」

「へえ、あれでね」

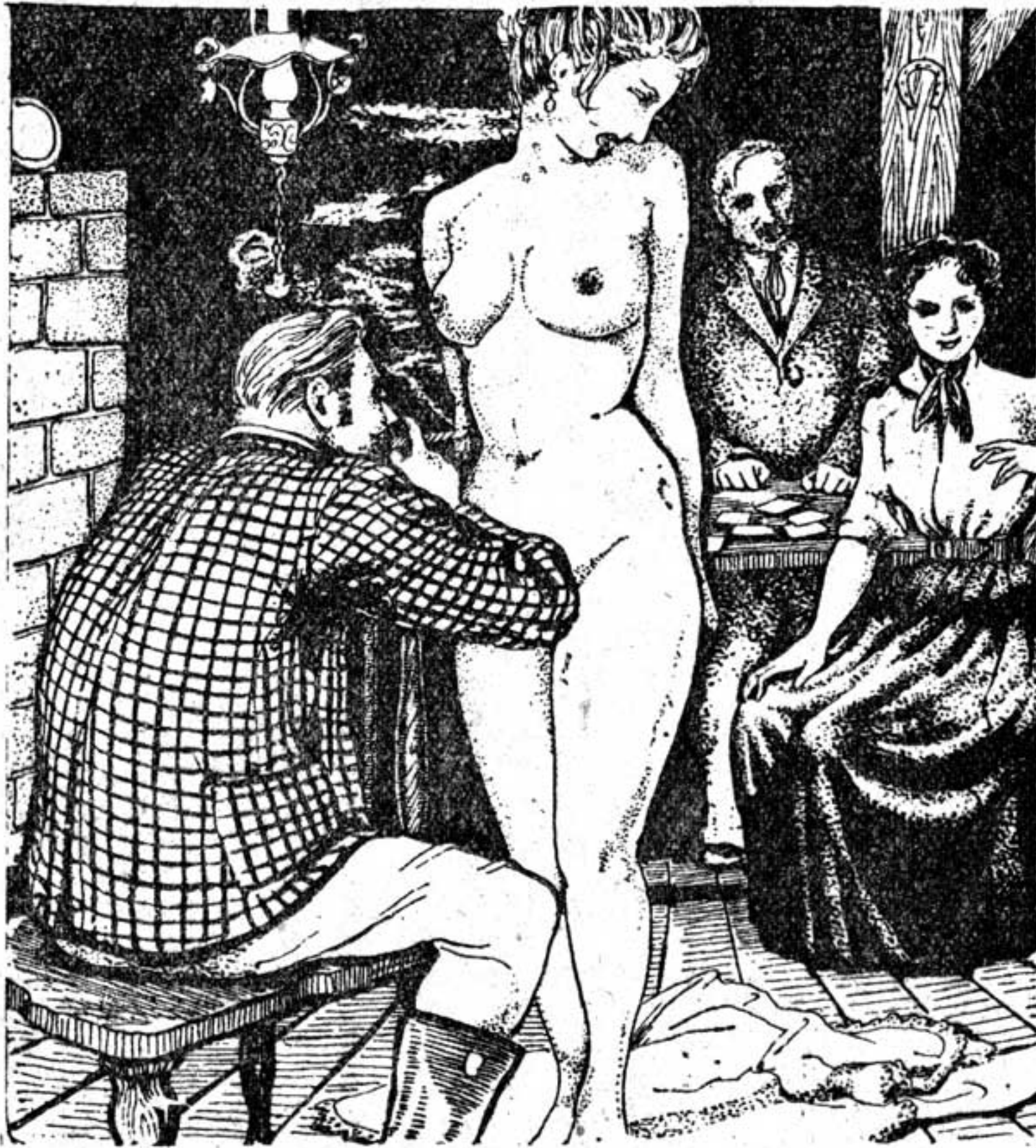
「僕は、あの女をキルワースの奴隷市場で僕の持っていた二十人の黒人女と交換したんだ」

「ぼくはあの女が気に入ってしまった。どうだ、ひとつ君が今まで負けた額とあの女と賭けないか」
「よろしい」

すぐに、チバーズは勝負の支度をし、テーブルの上にアスコットから捲き上げた紙幣や小切手を積み重ねた。そして奇怪な勝負が始まった。

アスコットは冷静だったが、チバーズは勝ちたい一念で狂ったようにノボせていた。ためかあらぬか、意外、この度は勝利の女神はアスコットに微笑みかけ、あつさり負けた分をとり戻した。

「これだけじゃモト／＼だ」とチバーズは挑んだ。「これから本勝負、もう一どやろう」



「よかろう、」とアスコットは静かに同意した。「で、こんどは何を賭けたらいいかね?」

「やはりグラヂス・チャーチルを賭けたまえよ」

とチバーズは唇をふるわし、いくぶん蒼い顔で切りこんだ。

「よろしい。だが君は何を賭ける?」

「君のお望み次第さ」

「じゃ、君の奥さんを賭けてくれたまえ」

「な、なんだと、いや失敬、きみ、いくら何でもイヴリンを――」

「でなかつたら、こちらも、グラヂスは賭けられない」
数秒たった。ふいにチバーズは顔をあげて約束した。
「よしッ、承知した!」

その二 女體拜見

農園主チバーズをここまで持ってきたアスコット卿というイギリス紳士は、いったい何者であろうか? はじめから計画的

に筋書きを運んだのか、それとも偶然にそうなったのか？

とにかく、もう賭事と女に別人のようになつていたチパーズを、おだて、おどかし、口説いて、妻のイヴリンを賭ける以上もちろん自分の品物チャーチル夫人のからだを隅から隅まで検べても構わん、君の奥さんも勝負前に検べなくてはイヤだ、賭の品物は同等の価値がなくてはならぬ、まして奴隷を売買したり賭ける以上、あらかじめ検査するのが当り前だと主張し、とう／＼相手を承知させてしまつた。

ところが、チパーズは、情欲に狂つていたあまり友人の女奴隷は検べなくともいいと言つた。これは、勝負に勝つて彼女を我物にし、あとでゆつくり独りで彼女をいじりモノにする楽しみをとつておいたに他ならなかつた。一方、彼は、妻のイヴリンに事の次第を説明し、半狂乱的に涙を流して、あやまつたり頼んだりした。承知させるのに小一時間もかかつた。やつこのことで納得させたとき、もうアスコットが待ち切れないように部屋まできた。

「奥さんはもう御存知かね？」

「うん、承知した」

「そう」

と言ひながら、アスコットは部屋に入つてきた。

イヴリンは部屋の真中に悲壯な顔をして立つていたが、アスコットが近づくにあわてて上衣の胸の切込の肌のアキに手をあてた。

「じゃ、失礼します」

アスコットは、表面は礼儀ただしく、じつさいは力づくイヴリンの襟や胸をぐつと露わにして声を上げた。

「うむ、なか／＼立派な頸筋ですね、肩も申分ない。さ、脱いで下さい」

イヴリンがモジ／＼していると、良人のチパーズが眼で命令した。

上衣が脱がれ、スカートが落ちた。残るは白い下衣だけ。とたんに、アスコットは、豹のように素早く女に近より、あつと言う間に文句を言わず下衣をムシリ取るように脱がせてしまつた。なんという早業だろう。その手際を見ると、これまで余程多くの女奴隷を手がけているに違いない。

パンツ一つになつた成熟しきつた二十六、七の女のからだ、手にあまるような二つの美しい乳房がツンと頭をもたげている。くびれた腰、ムッチリと充実して、羞恥にふるえる二本の太もも。アスコットは、ずいと近より、遠慮も糞もなく乳房を片手に握つて堅さを検べた。

「合格！」

彼は低くつぶやくと、そろ／＼と胸からおなかを撫でて肌を検べ、腰までくると、さつとパンツを下におし下げてヒップや前を見た。指先で弾力をためしたり、指を一本々々しらべたりした。

こらえにこらえたイヴリンは、今にも泣き出すかと思われたが、一瞬、大きく藻掻いてアスコットの手の下から逃げ出そうとした。

びゅッ、と鞭が鳴った。

「あッ！」

チバーズは声を上げた。いつの間にかアスコットの手に革製の細い鞭が握られていた。イザリンは真蒼になつていた。しかし、ムチは空中で鳴つただけで彼女は打たれていなかった。

「やい、この助平なケダモノ、言うことをきかないところだぞ！」

アスコットは別人のような声で叫びながら、びゅッ、びゅッ、と鞭を鳴らした。

「こいつの、この尻を真ッ赤になるまでひッぱたいたら、さぞ氣持のいいことだろう、あははは」と笑い、急に元の態度に戻り、「いや、奥さん、今のは冗談です、いや練習です。失礼しました。もう結構です」

鞭をポケットに蔵いながら恭々しくお辞儀した。

ほどなく、二人の女がチバーズの書斎へ行つてみると、早や勝負は白熱化していた。最初チバーズが勝った。彼はチャーチル夫人を我物にした喜びを空想して文句なしに勝ちつづけようと誓った。だが、第二回目は、あつさり相手にやられてしまった。チバーズの顔は真赤になり、額にじつくりと汗が浮んできた。

いよいよ最後の勝負になつた。二人とも四点。同点だつた。ランプが切られた。ふるえる手でチバーズは札をつかんだ。勝負は進んだ。アスコットは行儀よく持札を集めた。チバーズは、あまり、からだと指がふるえるので、とき／＼札を扱ひそ

こなつた。

最後の瞬間！

さッと出されたスペードのキング。ああ、アスコットは切札を持つていたのだ！

全世界が真ッ暗になり、チバーズは、そのまま椅子がずーんと大地に沈んで行くように思われた。

「では、約束だ」とアスコットは冷やかに書類とペンを取り出した。「チバーズ君、事を片づけよう。君は負けた。サインし給え」

敗者は、呆然として機械的に署名した。妻のイザリンを奴隷として渡すという証書だつた。おかしいことに、そのとき、彼は、妻を失つた悲しみより、今まであれほど憧れた友の女奴隷が自分のモノにならなかつた失望のほうが大きかつた。猛りに猛つた肉慾が一瞬にして現実感を失い、それが毒薬に變つて頭の中を狂ひまわつた。

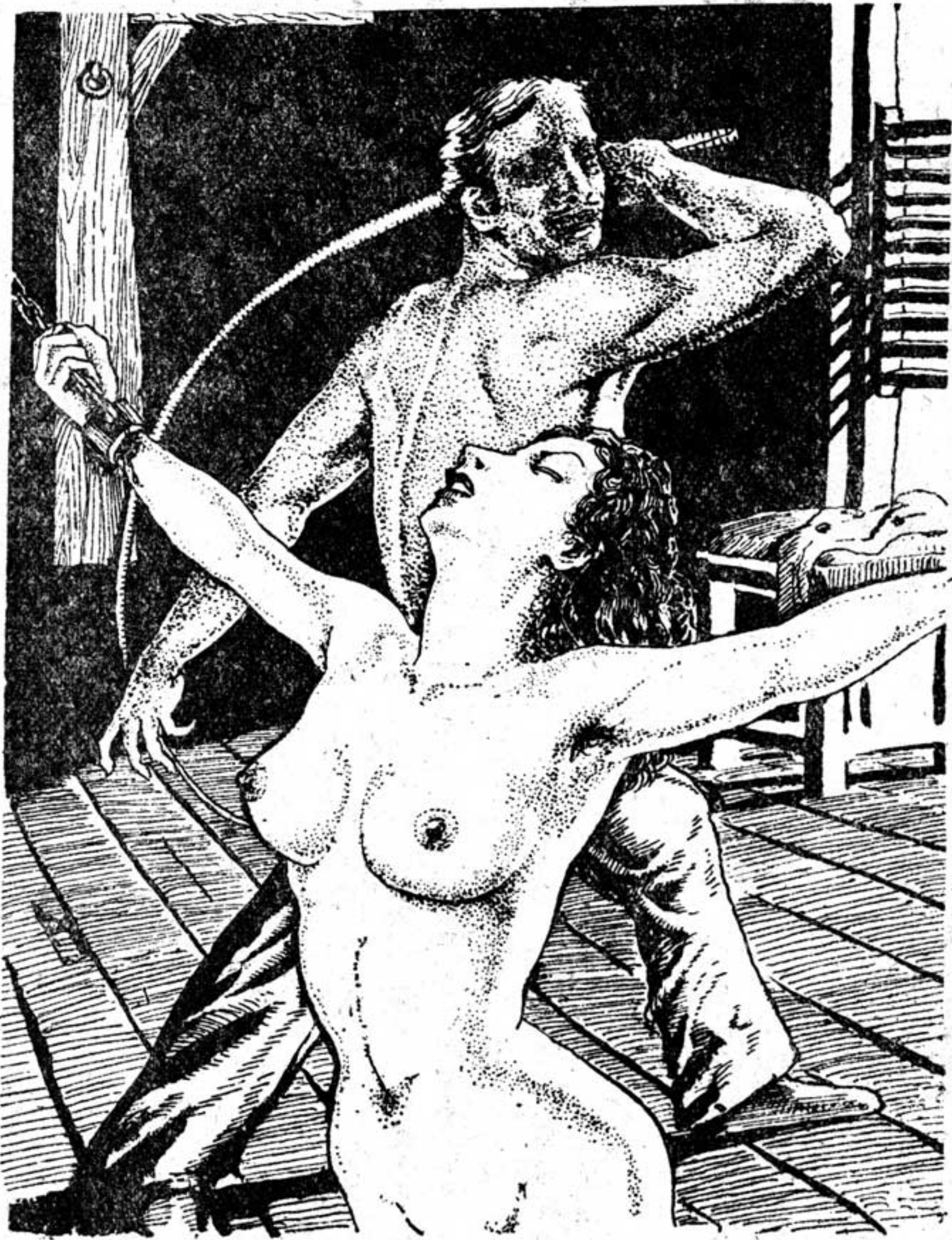
「さア、イザリン」とアスコットは他人事のようにただ呆然としている彼女に命令した。「お前は今から僕の奴隷になつた。僕について来るんだ。これからは鞭はダテに空鳴りはしねエぞ。さア行こう」

ぐいと手を引つぱられた。いやッと拂いのけた。

「おやッ、このアマ！」アスコットは舌打ちしたが、ふとグラヂスを顎でしやくり、「おい、グラヂス、こつちへ来い」

グラヂスは、おず／＼と主人のそばへ来た。

「俺の前に土下座をしる。さ、俺の靴に接吻するんだ」



彼女は命令に従った。
「そのまま向うを向けッ！」

グラデスが反対を向くと、男は、さッと彼女のスカートを
ね上げ、下衣につつまれた白い大きなお尻の塊にビュッと鞭を
あてた。

「あッー」

低いが鋭い女の悲鳴。

「どうだ、イザリン、よくわか
つたな」

彼女の新しい主人は、こう言
うと同時に彼女の手にかチャ
ガチャと鎖の錠を捲いてしまつ
た。

「さ、行こう。馬車が待つてい
る」

彼はキイ／＼叫ぶ彼女を戸口
のほうへ引ずって行つた。どう
したものかチパーズは何時の間
にか姿が見えなくなっていた。

「この牝豚」

反抗する彼女の円い肩に、び
しり、鞭が当たった。生れてはじ
めてのひどい痛さだった。

「助けてッ、チパーズ。チパー
ズ」

玄関を出たとき、階段の下の

大きな柱の影から黒い人影が現われた。真蒼な顔、人間というより幽鬼のようだった。

「待てッ！」

亡霊のようなチバーズは、チャーチル夫人が持つていたランプの光のなかに浮び上った。

「チバーズ、あなた！」

イザリンは必死に駆け寄ろうとしたが、自由を縛っている鎖をしっかりアスコットにおさえられていた。

「動くぞと撃つぞ」

とつぜん、アスコットは、イザリンを抱きあげて駆け出した。真暗な夜の夜空に電光一閃、稲妻が走つてあたりを照らした。

轟然、ピストルが鳴つてブスツと壁に一発あたる音がした。

と同時に、グラヂスがチバーズに駆けよつてドンと身体をぶつけて抱きついた。ずどん、と第二発が空に発射された。アスコットは、よた／＼と女を抱えて駆けだしたが、庭のはずれで重たくて降した。

ごおツと雷の音が近より、蒼白い電光がそこらを照し出した。その光の中に浮び上った一組の男女の姿。チバーズとグラヂスが犇と抱きあつて貪るように唇をつけあつていた。

イザリンが何か引き裂くような叫びをあげたが、あとはもとの闇につつまれた。

「チバーズ、そいつを呉れてやる。たんと可愛がつてやれ！」アスコットは鎖を引っぱりながら庭先で怒鳴った。

イザリンは手頸に食ひ入る鎖の痛さにツンと前へのめつた。

「あらした」

アスコットは、一陣の強い風にあふられながら馬車の戸を片手で開けた。

イザリンは何処へ行く？

今にも降りだしそうな暗澹たる夜空の下をカツカツと馬車が行く。その響が闇に消えてしまひ、電光雷鳴、沛然と降つてきたころ、天地も一つの暴風雨につつまれたころ、ガラシとした部屋のソファの上で、半狂乱になつたチバーズが半裸体にしたグラヂスの美しい金髪を乱暴につかんで捻じ伏せ、女も罪深い情慾にうつとりとなつて男に乳房を咬ましていた。(つづく)

読 者 通 信

ヘテロの愛に何の興味も熱情もない人間です。おまけに自分が女性である事が呪はしくつて仕様のない私は二重倒錯の袋小路で窒息しさう。誰方か、ちつとも女性らしくない女性の方、友人になつて下さらないかな、きつと私のやうな刷け口のない情感に悩んでいらつしやる方もあると思ふのだけれど、もつとも私は自分の精神能力に対するほどの自信は、容姿に関して持つてないので「愛情の対象」たる事には不適合でせう。但しよき話相手には充分なり得るつもりです。良心的なおことわりして居きます。なほ、八分ほどのサド傾向と二分ばかりのマゾヒスムス——多少の経験ある、満二十一年才の大学生です。

最後に、そとみあの方知識交換的な意味で御交際下さる方ありませんか、男性同志の愛情羨望に堪へずつてわけです。

(福岡縣 佐原 皓子)

責

特

め

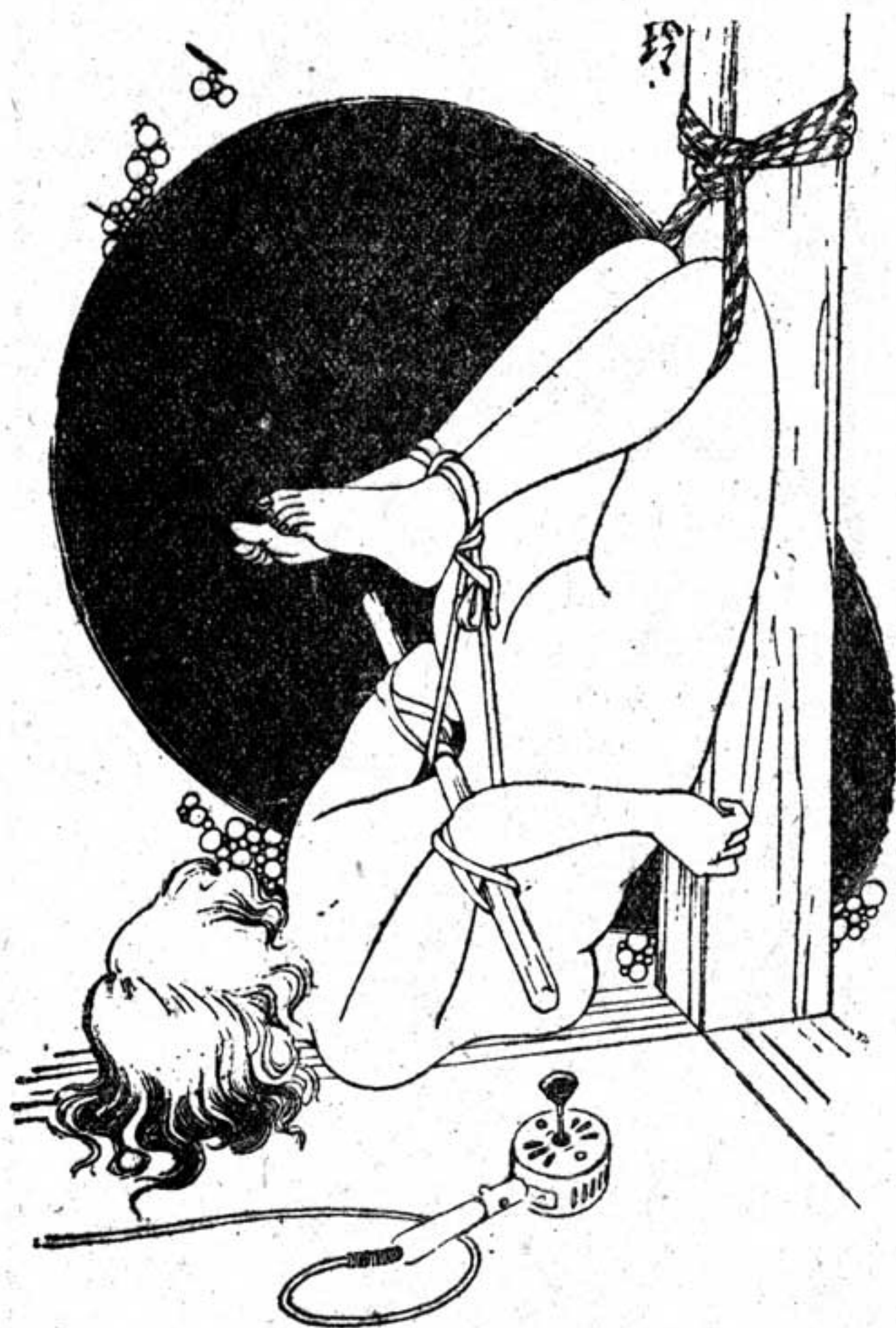
集

新しいスタイルの責め

彼女は悲鳴を上げ、私の贈り物を振り落そうと身をもがく。しかし毛虫の首飾は彼女の首の廻りて紫色の縞を光らせ、青い汁をタラタラと落しながら……。

(繪と文)

喜 多 玲 子



○毛虫の首飾ネックレス

私はいろんな夢想をする。

絵を描いていると、そのうちにだんだん構想が飛躍して来て、とんでもないことを考えることがある。それが新しい責めに類するものかどうかは自分でも判らないけれど、少なくとも過去にはなかったことは確かであつた。

現代はもう、サアドの時代ではないのだし「責め」を生活の中に消化し始めた私達には、あの大時代な舞台装置は、過ぎ去つた郷愁として残るばかりなのかも知れない。

豆しぼりの猿轡の代りに派手なプリントのネクタイが、そして桃色の扱帯の代りに、ナイロンの沓下が登場する時代になつていのである。勿論、豆し



ぼりや桃色の扱帯が決して悪いと云うのではなくて、それはそれとしての良さがあることは確かであるけれど、別な意味で今の世代の私達の身辺にあるものが新しい感覚を呼びさまし、新しい悦びを与えてくれないものでもない。

現代には「責め」のなかに血みどろな憎悪と云うものはなくて、愛情の刺戟的な一変形としての一種の行爲が、それを駆使する人々の感情の屈差をうずめているのではないだろうか。そしてそのよ

うな環境のなかに、新らしいスタイルが生れ出て来るのも当然あり得ることなのである。

私は、縛られた裸のお嬢さんに、心をこめた贈り物をする。一絲まとはぬ姿態よりも何か知ら生活につながるのあるものを、たつた一つでも身につけている方が女性は美しい、そう思った私はそのお嬢さんにネックレスの贈り物をするのである。決して鞭で打つたりしないでもつと可愛がつてあげるつもりなのだ。木綿針に糸を通して、裏の松の木から取つて来た十匹程の毛虫を珠数のようにそれに通して行く。毛虫たちは胴中に糸を通されて、青い汁を流しながら苦し気に身をくねらせ伸びたり縮んだりしているのをそのお嬢さんの首に巻きつけてあげる。

彼女は悲鳴を上げ私の贈り物を振り落そうと身をもがく。しかも毛虫の首飾は彼女の首の廻りで紫色の縞を光らせ青い汁をタラタラと落しながら断末魔の踊りを踊るのである。

さて、こういった夢想から始まった嗜癖への憧憬が私達の身辺で現実に行われる時、一体どのようなスタイルで現われるものであろうか。



○風流電気あんま

K氏は奥さんとの遊戯には電気あんまを用いる。

彼の使用するものは、最近デパートなどで販売されている四本足の電気マッサージ器ではなくて、一昔も前に売り出された、長い柄のついた不器用な型をした電気あんまなのである。丁度、赤ン坊の持つ玩具のガラガラのような型をしていて、そのガラガラの真中から横に突き出している一本の金属棒の先に、ゴムで作られたいろいろの責道具を取りつけられるようになっていものである。そのゴムで作られたものの型は三種類ほどあつて、蛸の吸盤のようなもの、イボイボのついたもの、丸いボールのようなもの、などがあつた。

スネッチを入れ
ると、グーンとひ
びくような音を立
ててその金属棒が
振動し、先に取り
つけた責道具が生
命をつぎ込まれた
ように眼にも止まらぬ早さで細かく微動す
る。

これを身体の各所に当て、押しつけながら
静かに移動させ筋肉に軽快な刺激を与えてあ
んまとしての効果を狙うのが通常なのである
けれど、この機具を接触させる場所によつて
は「責」の遊戯として絶妙の味を出す、と云
うのがK氏の言であつた。

これは一種の隣り責めに類するものでもあ
ろうか。ゴム部分の大きさは、丁度人さし指
と拇指とを輪にした穴の中へ通る位のものな
ので、そう云つたら、ハハアなるほど何か
を思いつく人もあるかも知れない。

しかしヴェウ……ン、と云うあの女性的な
微妙な音が夜の部屋から聞えて来た場合、他
の家族の人は変に思わないだろうかと云う私
の疑問に彼はこう応えてくれた。

「あまり真夜中じや都合が悪いですが、相手

が電気あんまだから平気なんですよ。それよ
り家内の無意識に出す声の方が気にかかりま
す。勿論その声を聞いているだけでも、とて
も可愛いくて愛情が倍加するんですが……」
お仕置が済むと、クタクタになつて泥のよ
うに眠つてしまふと云う奥さんは、晝間見る
と、とても潑刺として元気そうで楽しげに見
えるのは面白い現象である。

電気あんまとは少し違うけれど、電気アイ
ロンを抱かせた話があつた。

今年の三月に岡山であつたことで、地方新
聞を読まれた読者ならば御存知の方もあるか
も知れない。私はある人からその新聞の切り
抜きを送られたので知つたのだが、勿論単な
る痴話喧嘩と云つたものに過ぎないので一段
十二三行ほどのものなのである。

二号さんが浮氣をしたか何かで、土建屋の
旦那が熱くなつたアイロンを彼女の懷に捻じ
込んだと云うだけの話だが、これは面白いと
思つたので記憶から消え去らない。しかし
きなり懷へ熱いアイロンを捻じ込むなど凡そ
芸のない話で、私の場合なら、その二号さん
の素肌にまずアイロンの冷え切つたヒヤリと
した感触を味わせるだろう。それから徐々に
スネッチを入れる。

どうせ痴話喧嘩なのだし、二号さんにするくらい仲だから好きなのに違いない。傷などつけて表沙汰になる様なことは私ならばしないが、除々に熱くなつて来るアイロンを肌に抱きながら身を悶える彼女の風情には、何か知らスリルを感じることもだろう。

○責のストリップ

毛虫の首飾^{ネックレス}に引きつづいて、ミミズの腕環^{ブレスレット}甲虫のイヤリング、ナメクジのベルト等は娘さん達の服装から思いついた責めの贈物なのだけれど、或る探偵作家の作品の中に、女主人公のパンタロン（下着）の内に蛇を入れるところがあつた。元来、上も下もゴムで締めつけて袋のように要心堅固に出来ている筈のドロワーズが、ひとたび逆に利用されて、その袋の中に蛇やいやらしい虫などを入れられた場合一体どのようなことになるだろう。

その探偵小説の女主人公は手も足も縛られてしまつていて、悲痛な呻き声を上げる。此の場合、彼女は蛇の入つた、たつた一枚のドロワーズをどれほど腰から外してしまいたかつたかも知れない。しかしそうなると眼前に居る悪漢共に肉体をさらさなければならぬ

ことになる。このあたりが此の責めの心理的な微妙さなのであろうか。

「蛇の入つた袋を身につけているのがいやなら、いつでも取つてやるよ晴子さん」

悪漢にこんな言葉を吐かせている此の作者の憎らしいまでの神経が私の血の流れをズキンとさせるのであつた。

これとよく似た筋書きで、或るマニアが書いた原稿を読んだことがある。勿論、その原稿は活字にならずに終つてしまつたが。

或るサジストが若い娘を責める場面である。これは一種の責めのストリップなので、パンタロン一枚にした娘の両手を天井から吊り下つた縄に縛り付けてある、足尖はわずかに床について居る程度なので娘はどうすることも出来ない。

サジストは尖端が鉤型に曲つた針金のついたおもひ、を用意して、それを娘の腰を包んだパンタロンのゴムに引つかける。腰の周囲に五六個もそのよ

うなものを引つけられるのでその重味で今にもパンタロンがずり落ちそうになるのだがずり落ちて

しまふ処まで重味をつけないところが此のサジストの意地の悪さなのである。そうしておいて数々の聞くに耐えないようなことを云いながら娘の羞恥心をかき立てたあげく、細い竹の先であちらこちらを突つつきまわすのだ。静かに立つてさえ居ればパンタロンはずり落ちないけれど、身体を少しでも動かすと、その動きの爲に一寸、二寸、とずり落ちて行くことになるのでウエスト（胴の一番細いところ）からヒップ（腰の一番太いところ）まではまだ或る程度その速度が遅いものの、ヒップを過ぎると急激にずるずると膝小僧のあたりまで落ちてしまふ結果になるのだ。

ウエストからヒップに至るまでの経過を此の筆者は原稿用紙七枚を費してねちねちと流している耽美派ぶりには驚くべきものがあつた。ヒップ以後に於てはその筆はますますさえて活字にならない原因をここに作つてしま



っている。けだし、耽美派垂涎の名著かも知れない。

バルカン・クリイゲにもこのような場面があるのは御存知の通り。

二人の高貴な娘が侵略軍に抵抗したかどで鞭打ちの刑を受けることになるが、多くの兵隊達の見ている前で裸身になることを羞じたその娘は、臀を打たれる時に前面を覆う爲「どうか妾の口にスカートをくわえさせて下さい」と司令官に頼むのである。こうすれば両手を天井から吊られて立つたまま鞭を受け、兵士達の眼から胸は守ることが出来る。と彼女は思っている。しかし必死に哀願して口にくわえたスカートも、鞭の一撃を背後に受けて「あッ」と叫んだ時足下に落してしまふのであつた。

彼女達を取り巻く兵士達は、始めからこうなることをよく知つていて、彼女の願いは兵士達の悦びを永びかせ、期待させる以外の何ものでもなかつたと云う訳になるのだ。

○解剖を願望する娘

腕腸責めが「泣き叫ぶ青春」のポニイと名付けた木馬の責めに併用されていることは、

本誌七月号で紹介されているが、あれと同じ筆法で下剤など飲ませることはどうだろう。

硫酸マグネシヤは峻下剤でもある上に、とても苦くて飲み辛い薬である。塩水を飲ませ尿意を招いて責めるのと大同小異ではあるがコプラトラグニイのサジストにはびつたりかも知れない。尤も糞尿フエチシズムにはマゾヒストが多い筈だつたけれど。

また私は過去のある期間に手術オペレーションを見る機会に恵まれていたことがあつたが、慣れしている患者ラングはともかく、そうでない人などそこはかと





玲

ない恐怖が手術室に入るまでつきまとつて離れないと云うことを患者の口から聞いたことがある。

虫垂炎の娘さんが不気味な手術台の上でその白い裸の背中を丸めて男の医員に抱きめられながら腰椎穿刺をされる時など、何かしら嗜虐的な興奮を感じたものであつた。あの針は丁度疊針ほどの長さで太さを持つていて、し沃度チンキを塗つて、チアで拭いたあとの白々とした素肌にズブリと突き刺すスリル

けば、雰囲気は全く責め場に似ているかも知れない。

いろいろの手術器具が機械台に広げた圧定巾の上で、螢光燈の反射を受けてキラキラと光っているのである。腰椎麻酔の場合は下半身だけが感覚を失うので、患者は普通の意識を持つてゐるから、頭の横で拷問道具？が、カチャカチャ触れ合っている音を、どうしても聞かすには済まない。

開腹の場合は、或る部分は剃毛されること

は、それを冷たい無影燈の下で見ているものに異常な感じを起こさせるものである。

御存知のように、手術室に入る患者は裸であつた。

(手術の部位にも依るが)患部の治療と云うことを除

になつてゐる、消毒上の意味からなのだが、その爲に娘さんの肉体は異様な美しさを増したりする。圧定巾を患者の上に覆う前に、麻酔が利いてゐるかをためして見るのであろう「痛いですか？」

などと云いながらコップフェルなどで白い腹部を遠慮会釈もなく振り上げて医員たちは深いマスクの中の眼で笑つてゐる。あの社会には「佛の心で鬼のメス」と云う標語があるくらいなので、人の苦痛は三年でも我慢が出来る心臓の持ち主でなければつとまらないと思つたりする。

その頃、死体解剖を何度も手伝つたことがあるけれど、看護婦などあまり死体解剖を好まない筈なのに、Uと云う小柄な可愛い顔の看護婦は解剖と云うといそいそとして自分から進んで霊安室(屍体を置く処)の横の陰鬱な解剖室に出かけて来て血みどろの仕事を手伝うので噂の種になつたりしたことがあつたが、後に此の娘さんが、若い医員の下宿に度々遊びに行つて、変な問題を起して病院に居られなくなつてしまつたことがある。

U子とその若い医員とは恋愛関係だつた訳だが、彼女は異常心理の持ち主で自分のからだを彼の好きなように解剖してほしいといつ

もねだつたと云う話である。そのようなことが度重なつていっているうちに彼の方でも遊び半分に、彼女の云うままに素裸にしたU子の手足を縛り上げ、仰向きに寝かせて、ペーパーナイフか何かでそのふくよかな腹部を解剖する時と同じようにキリキリとこすり上げ、切開する真似事をしたところ、彼女は身を悶え、手足をふるわせて興奮したそう、それからと云うものは病院内にある寄宿舍から外出する暇があると、彼の下宿に行つては、解剖されるのを楽しんでいたらしい。

その頃になると、手術室のメスを持ち出し、腹膜剪刀や持針器やクレンメを彼の下宿に持ち出して、本当に腹の上にメスを走らせて貰つて呻きながら絶頂感を味わつていと云う狂態を演じていた。

これなど「責められ」の方で、マソヒストの旗頭かも知れないけれど、彼女にはあの屍体のように思うさま解剖されたい、と云う願望が早くからあつたのに違いない。そう云へば屍体から取り出した薄桃色の腸管を腸間膜を切り離した後、手洗鉢の中に一杯水を張つて浸け、水道の蛇口からジャアジャア水を出しながら、いかにも楽しそうに切り開きつつ洗つていた姿を思い出すけれど、彼女はそんな時、案外、自分が解剖されて、その取り出された腸管をきれいに洗つていよう、飛躍した考えを持つていたのかも知れない。そうでもなければ鼻の曲りそうな屍臭の中で、あんなに楽しそうに鼻唄でも唄いそう、なぞぶりで仕事が出来る筈がないから。

○穴をあけられた海水着

私が親しくしている京都の或る彫刻家は、二号さんと云う訳でもないけれど、奥さんの他にそれらしいガールフレンド？があつて此の二号さんのようなガールフレンドを時々お仕置にかけるのである。

本気に怒つて「責め」る訳ではなくて、まあ芸術家の奇行と云つた部類に属するのだけれど、考へ様によつては一種の責めと思えなくもない。

痴話喧嘩をしたあとなど、普通の人ならばばらく物も云わないだろうが、此の人は却つてそんな時には彼女を映画などに連れて行くのである。そのかわり、それが冬の季節だとオーバーと沓下だけしか着ることを許さない一緒に連れて歩いていいる彼女が、他処目にはともかく、本当はオーバー一枚剥けば丸裸だ

から、精神的な責めと肉体的な寒さとが彼女をしよんぼりとさせて先生は優越感を満足させる訳なのである。しかしまた、そのような命令をされながら、おとなしくついてゆく彼女も充分マソの要素を持つていいる筈だと私は思つたりする。

昨年の夏など、海へ避暑に行つてモタモタしたあげく、例の病気で彼女の着る水着の或る部分を十握ほど縦に切つてしまつて、お仕置だからこの水着を着て海に入れ、などと云つたそう、彼女は砂の上にうつかり坐るととも出来ないで、水にばかりつかつていたと云う話があつた。

しかしそんなことを命じたあととはとても機嫌がよくて、にやにやしながら彼女の困つた動作をながめていいるのだと云う。

また料理屋などに行つても、彼女を後手に縛つておいて、その不自由な姿のままビールを注がせたりすることもある。料理屋の女中などが出入りする部屋で、平気でそんなことをするのだから恐れ入るが、

「なアに、遊びだよ。何なら姐さんもやつて見ないか、旨く注げればチップを倍にする」などと逃げる手もある訳で、それほど不思議がられることもないかも知れない。(完)

連載・あぶ
すとおりの

ま

に

や

地

獄

第三回

馬を見る夫人

海の底のような、うすくらいなかに、二匹の馬が居た。美子は、最初、それが何だか分らなかった。きつと、夫人が、自分の自慢の馬を、見せようとするのだと思つた。しかし、やがて、二匹の馬のたたかいが暴風雨のようにはじまると……

日夏由紀夫



1

「美子さま、よくつて。
あの丘まで、ギャロップ
よ」

少し先を馳けていた多
摩子夫人は、馬の首を美
子の方に向けながら、ム
チで、はるか先に小高く
もり上つた丘をさした。
その丘は森が切れたとこ

ろにあつて、緑のしとねが、陽にかがやいていた。

「あ、あの向うに奥さまの牧場があるのね」

美子は、ひたいの汗をぬぐいながら、まぶしそうな眼をして
多摩子夫人を見た。

「そうよ。……でも、美子さま、あなたまた奥さまつて云つた
わね。私の気を悪くさせるおつもり？」

「あ、お姉様……ごめんなさい」

美子は、はにかんで云いなほす。こんな、十五も歳上の夫人
をお姉さまと呼ぶことは、なんだか、面映ゆい。美子は、十六
そして多摩子夫人は三十一だ。（もつとも、夫人はひとには二
十九だと云っているが）

「美子さまは、私に愛情がないのね。……そう云うこと、すぐ

忘れるんだから」

「お姉様、そんな、ひどいわ。……美子のこと、いちめて」

うらめしそうに、にらんだが、すぐ、

「それはそうと、敏郎さんは、どうなさつたのかしら。はぐれちやつたのかしら……」

と、うしろをふり返つた。森が切れた所に、四角く、カーペットを敷いたようになってゐる所が、ゴルフ場だ。

「いいぢやないの。男のひとなんか、ほつておきましようよ。きつとまた、あそこで引つかかつてゐるのよ。……そんなに、気になつて？」

夫人は、馬をならべると、美子の愛らしいアゴを手で、ちよつと、もちあげて、からかうように云うと、いきなり、チュツと口にかかるいキスを与えた。紅に、つやつやとぬれた二つの粘膜の接触は、ふと動物めいて、センジュアルだつた。

「まア、お姉様……」

パアつと赤くなつて、美子は、すぐうつむいてしまつた。まつ毛が、長いカゲを頬に引いた。それを好もしそうにながめて、

「さ、行きましよう。向うへ行つたら……」

何事か、貝がらのような耳にささやく。美子は、無邪気にはほえんで、

「何かしら。……そんなに面白いことですか」

夫人は、笑いをふくんだ口もとで、謎めかしうなづくと、

「美子さまには、ちよつと、まだ毒かも知れないけど、お姉様あなたに、それを、とつても見せたいのよ」

「まだ、私が、見たことがない事？」

「ええ！ もちろんよ。……美子さま、あまり美しいんで卒倒してしまふか知れない事よ！」

「まア、何でしよう！ 教えて」

美子も、つられて、目をかがやかせる。

「イヤ、ダメ。おあづけよ。さア、丘までギャロップで行きましよう」

何故か夫人のひとみは熱つぽく輝き、からみつくような視線は、美子の乗馬ズボンをびつちりはいた細い腰のあたりにまつわりついた。すんなりのびた若竹。まだお尻も小さく、もももそんなに、あからさまに太くはない。そのももが、くり毛の馬の、汗に光つたたくましい胴をきつちり、はさみつけてゐる。

やがて二人は、馬を馳け出させる。森の、入りくんだ梢の間から、煙をはいてゐる浅間の姿が見える。まがりくねつた、岩の多い森のなかの小みち。——馬は、かつかつと、かたいひずめの音を立てながら、器用に、石をはじいて、進んで行く。

馬上の、律動的なゆれ。馬の背の、力一杯緊張した筋肉のコロコロした微妙な動き。それが、ももの内側から、美子のまだ未熟な、感覚につたわる。ともすれば、ふりおとされそうに、あやうく軀がかたむく。——それをさけようとして、きゅつと足に力を入れると、馬の肉感が、びつくりするような親しさでずーんと、軀の奥へひびいてくるのだ。

「あッ、……」

彼女は何故か思わず、うめいて、手づなをにぎつた手に力を入れてしまふ。軀が汗でぬるぬるして、気味が悪い。よごれて

いるみたい。

自分をのせている馬が、ヘンに親しい感じ。秘密な親密感。

……頼ずりしたいようたわ。……また、馬が動く。

「あ、いや。……そんなに動いちゃ」

ヴラウスが、汗でベツトリぬれている。ズルズルと、生ぬるい汗のしづくが、お乳とお乳の間を、流れて行く。なめくじでもはつてゐるみたいな、軀の感じ。髪が、律動のたびに、ふさふさと、ふくれ上り、お乳がヴラウスにこすれて痛い。……

「お姉さま。……あたくし」

訴えるように、前に行く夫人に声をかける。

「なに？」

とふりかえる夫人の頬も、ほんのりと上気して、眼がうるんでいる。

「何ですか、気持が悪いの。……降りたいわ」

「どうしたの？……気持が悪いって、……軀のなかヘンなんでしょ。はきたいみたいな、切ないみたいな」

夫人は、自分の豊かな胸を手でおさえるようにする。

「ええ、そうなの。……」

「大丈夫よ。……我慢してらつしやい。ネ、今に、たまらなく好きになるわ。馬にのるのが。……わたくしもそうなのよ」

「でも、いやだわ。何だかたびれちやうの」

「あんまり、力入れるからよ。馬乗りつて足に力入れるとくたびれるのよ。馬の動きにじつと、まかせればいいのよ。可愛いいわ、そうして切なさうにしているところ」

夫人は馬をよせてきて、美子のか細い胴をきゅつと、かかえ

ると、

「さア、もう少しだから、行きましようネ」

「ええ、行くわ。お姉様」

そうして二人は、また、くつわをそろえた。

美子の少年のような腰と、夫人のうすのうすのような豊かな腰。それがならんで、馬の動きに合わせて、飛びあがり、はづみ上がり、くねる。

高原の陽は、透明な空気をとほして、まだらに二人の姿の上に、落ちる。髪が茶色にもえ、くびすじが金色の生毛をうき立たせる。

青くさい、植物の匂い。しみ出る樹液の湿気。すれ合う木の葉のささやき。……鳥のすんだ鳴声。……

2

多摩子夫人の亡夫が経営していた小さな牧場。今は、この上りが、多摩子夫人の重要な収入源になっている。だが、それよりも、夫人にとっては、ある意味でもつと、大事なことがある。

白樺の木でつくった牧場の入口の所で、夫人は、勢よく馬からおりる。お尻の肉が、ズボンのなかで、一瞬ハッキリその形をしめし、また、ズボンのなかにかくれる。

「まア、たいへんな汗！」

夫人は、美子の手をとつて、おりる手だすけをしながら叫ぶ。そして、ハンカチを出すと、美子のひたいにういた玉の汗



をすいといつてやる。美子の顔色は心なしか蒼い。

「どうだった？」

「ええ。……素敵だったわ」

美子は、まだ無邪気だ。何だか分らずにハッキリそう云う。もう何ヶ月かたつて、それが何であるか知つたら、そう云えなくなるだろうに。……

「ずいぶんお上手になつたわね。これなら今度の遠乗会にも出られるわ。ごほうびにキスして上げましょう！」

夫人は、もう堪らなくなつたように、きつく少女を抱きよせて、あえぐようなキスをあたえる。少女の唇を、喰べ込むみたいなキスの仕方。

(ひどいわ。何だか、いやだわ。これは友情のキスとはちがうわ。……)

そう思いながら、美子は、寒いように軀がわけもなくふるえる。足がしびれて、立っているのが辛い。

「お姉様、なアに、見せて下さるものつて……」

「あ、そう、……でも、だれにも云っちゃいやよ。ね約束しましょうね。人間つて見たり、したりしてもいいけど、それを人にしやべっちゃいけない事つて有るわ。ゲンマイしてね。お父さまや、お母さまにも云っちゃいやよ」

「ええ……」

美子は、「お姉様」と指をからみ合わせながら、それが、あの「人生の秘密」に関することだと、とつさ

にさとして、つばをのみ込んだ。汗のしみた下着が肌に、冷たく、べつたりとまつわりついている。

夫人は、彼女をつれて、牧場の奥へ入って行つた。そして、牧夫を見つけると、誇り高く、その牧夫の名を、呼んで、

「今、私たちの乗つてきた馬、さくの所にゆわえておいたから水でもやつておくれ」

と命じた。

「ハイ」と牧夫は、頭をさげる。

「それから、……あの、高木さんの馬はきているの？」

牧夫は、女主人の顔を見ないようにしながら、

「へえ。きてます。……第三牧舎で、さつきから、やつてますが、まだ、うまくかからないようです」

と答える。夫人は、平気で、

「そう、まだ、うまくかからないの？　うちのが、つかれているんぢやないかしら。……この間、殿木さんとこの、すんだばかりだから……」

と、事務的につづける。

「そんな事は、ないはずなんですがねえ。食べさせるものは、たべさせてあるし、それにまだ年齢が若いからネ。……そんなつかれるなんて、しぢやないし」

と、かすかに笑う。その笑いに、美子は、厭悪を感じた。あの、大人たちのいやな笑い。

「第三牧舎ネ」

「へえ」

夫人は、牧夫との会話を打切ると、むちをならしながら、美

子に、「いらつしやい」と云うと、手をとつて、ならんでいる牧舎の先の方へ、ためらわずに進んで行つた。

3

小屋のなかは、うすぐらかつた。明り通りの窓は小さく、そこから、まっすぐの光線がななめに小屋のなかにさし込んでいた。その光線は、床の、やわらかい敷わらを強くうかび上らせていた。

床一面に敷いた新しいわらは、香ばしい匂いをあたりにまきちらしていた。——そして、それとまじり合つて、何とも云えない、動物質の、頭のいたくなるような匂いが、この牧舎全体にこもっている。

美子は、全く何の気もなかつた。突然、この脱出することも困難な場所、そして処女が見るにはあまりにも適さない場所に導かれるとは、夢にも思つていなかった。「見せてあげるもの」と夫人が云つたことに、ひそかな胸のときめきを感じたのは、それがもつと種類のちがうものだと思つていたからだつた。「こつちよ。気をつけてね」

夫人に、手をぎゅつとにぎられて、（その握りかたがあまりにも意味あり気だつたが）小屋のなかへ導かれたとき、美子には最初何も見えなかつた。

「くらくて、お姉様、何も見えないわ」

「今に見えるわよ。……ここへ座りましょう」

夫人は、小舎のすみの敷わらの山のなかへ腰をどすんと落す

と、美子の手をぐいと引いた。

「あ、あぶない……」

美子は、夫人のひざの上へたほれかかつて、手をついた。

「ほら、……見てごらんなさい。美子さん……美しいでしょ」

多摩子夫人は、彼女の耳に熱くささやいた。

海の底のような、うすくらいなかに、二匹の馬が居た。

二匹ともつながれて、……そして、奇妙に悲しげな声でいないでいたが、そのいななきは、今まできいたのとは、すっかり違つた感じのものだつた。

声のおわりをながく引つぱつて、訴えるような、甘えるような、調子だつた。

そして、そのいななきの間には、永いギャロップのあとのような、荒々しい鼻息をぶるぶる立てていた。

一匹の馬は、まんなか、じつと立ちすくんで相手のうごきを、首をめぐらして追っている。もう一匹は、その馬のまわりを、いらだたしそうな様子で、休みなしにぐるぐるまわつていた。

美子は、最初、それが何だか分らなかつた。きつと、夫人が自分の自慢の馬を、見せようとするのだと思つた。しかし、二匹の馬の様子は、明らかに興奮していて異状だつた。

「お姉様、どうしたの？ この馬」

「じつと見ててごらんなさい。あのまわりまわっているオスがうちの馬よ……」

「まんなかのは？」

「あれは女。高木さんちから頼まれたの。……どう？ あの甘

つたれた様子。あたしたちと同じネ」

そう云われて、美子は、いきなり、総てを解した。そして、うすやみのなかで、突然真赤になり、

「お姉様、あたし、こんなの見るのいや」

と叫んで、顔を夫人のひざのうえにつつ伏した。夫人のひざは、火のようにあつかつた。

しかし夫人は、すぐ、美子の上半身を、かかえおこした。そして、変に上づつた声で、熱く、

「美子さん。……よく見ましよう。ネ、二人だけよ。恥かしがらなくて、いいのよ。とても美しい見ものなのよ。……」

「だつて馬なんか……」

美子の声は口のなかで消えた。

「馬の方がきれいよ。ほら、あのオスの力強さ。自分の力を誇つて、相手に見せようとしているのよ。すごいわ……。ステキ！」

夫人は、かすれ声で、囁くと、眼をギラギラと輝やかせながら、美子の掌を、自分の手のなかで、もみ込むようにして、じつと、馬の動きをみつめた。

美子も、そつと顔をあげてそつちを見た。

馬の軀には汗が、幾すじも光つていた。

美子は、もう、ものも云えなかつた。つばをのみ込みたかつたが、それさえ、夫人に知れては恥かしかつた。座っている足がしびれて、でも、身じろぎも出来なかつた。

なぜ、人間は、こんな事をしなくちやならないのだろうか。

なぜ？　これが愛なの。……

牧舎全体に、熱っぽい、発情する動物の匂いがこもった。それが、多摩子夫人と、美子をつつみ二人を異状な興奮にまき込んだ。

とりわけ多摩子夫人は、何か口のなかで、つぶやきながら、眼はつり上つて、熱い息をはきながら、あえいでいた。

美子は夫人の、そのような姿を、みたことがなかった。人がかわつたようだった。

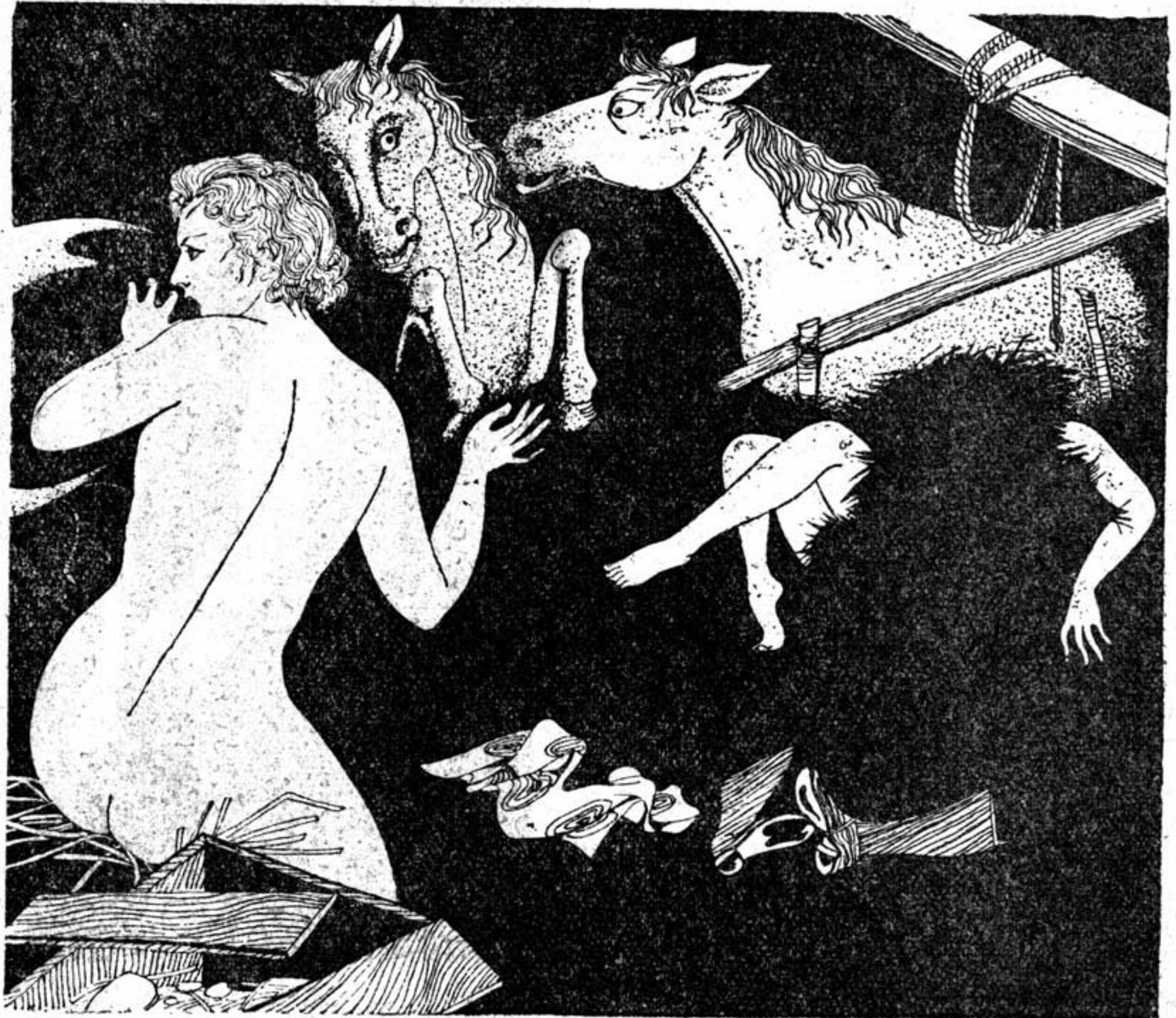
美子は、突然、顔をしかめた。ブラウスのなかへ突込んで、彼女の、柔らかい未熟な胸に触れていた夫人の手が、突然、その肉につめを立てて喰入ってきたのだ。

美子は、そのなかで、すーつと、気が遠くなる自分を感じた。

4

敏郎は、馬から、ひらりとおりると、牧場の入口のところで夫人の名を呼んだ。しかし、だれも答えるものはいなかった。

「どこへ行つてしまつたんだろう、二人共？」
そうつぶやきながら、あたりを見廻すと、柵に二人の乗馬がつかないであることを発見した。



「やつぱり、ここへきているのだな」

彼は、ためらわずに牧場のなかへ入って行つた。彼にとつて、美子は、大事ないいなづけだった。この避暑地へきたのが一月前、——二人は、毎日、一緒に遊んだ。そうした或る日、ゴルフ場で、多摩子夫人と知りあつたのだつた。

敏郎は、夫人を一目みるなり、はげしく彼女にひきつけられてしまった。優雅なものごし。洗練された会話。年増女の甘い魅力。それでいて、彼女には、どこか中性的な、青つばいものがあり、それが清潔さを彼女にそえていた。

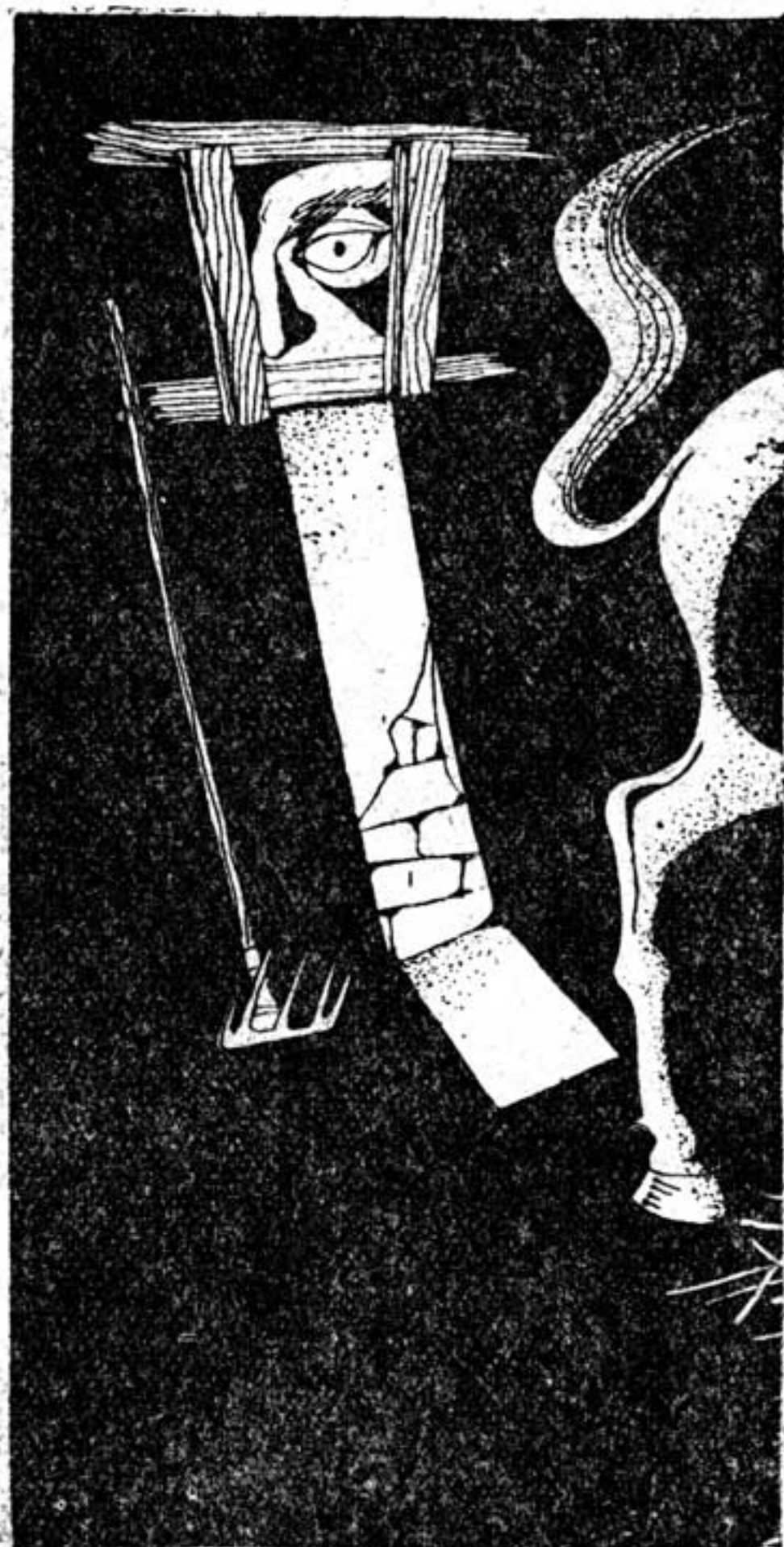
しかし、友人は、彼に云つた。

「君も参つてゐるらしいネ。だれでも、ここへきたはじめは、皆、あのひとに参つてしまふんだよ。こう云う僕もかつては、フアンの一入だつたんだがね。——しかしダメなのさ。だれ一人として、彼女に対する思いをとげた男は居ないんだよ。未亡人だから、亡夫に貞操を守つてゐるんだという説もあるが、どうもそうぢやないらしい。彼女の性生活には、吾々のうかがう事も許されない大変な秘密がかくされてゐるらしいんだ。……これは、僕の推測だが……」

その友人は、そう云つて、ニヤリと意味あり気に笑つた。

そんな友人の言葉を思ひながら、敏郎はしんと静まつた牧舎の一つ一つをのぞいて行つた。夫人は、美子に最初から興味をいだいて、近づいてきたのだつた。

「美子さまを、敏郎さんから、とつちやうわ、いいこと」



そんな冗談とも、嫉妬ともつかないことを云つて、敏郎の前で、美子の腰を抱いたりする事もあつた。ダンスのときなんかでも、一晩中、美子を抱いておどる事があつた。美子は、そんなとき女らしい柔順さで、まるで意志を失つてゐる人形のように、素直に、夫人にだかれて、踊つた。

だから、今日もまた、夫人は、彼の目をくらまして、どこかへ、美子をつれ込んでゐるにちがいない。彼は、そう考えるとねたましさと、奇妙な好奇心に胸が、さわぐのを覚えた。

ある牧舎の前へきたとき、彼は、なから微かな人の気配を感じてふと立止つた。

彼は、いそいで、小舎の羽目に近づき、ふし穴から、なかをのぞいた。目がなれるにしたがつて、そのなかの、異様な光景が、彼の目を射た。それは、おそろしいながめだつた。

二匹の馬は、もう静まり返っていた。

その手前の、しきわらの山のなかから、白い、女の足が一本のばされていた。軀の方は山のかげにかくれて見えなかつたがその蒼白いほどの足は、ずつと根本の方まで、あらわのように見えた。

息をつめて、それをのぞいている彼の耳に突然、話声がきこえた。

その声は、美子ではないか。それでは、夫人とこんな所に入りこんでいるのか。彼の心臓は早鐘をつくようだった。

「美子さま。愛は苦しいものよ。我慢して頂戴。お姉様のために、ギセイになつてネ。それとも、お姉様がきらいになつたの。こんなサタンの愛を教えてしまつたお姉様が」

「いいえ、好きよ。お姉様、美子、何だか分らなくなつてしまつたの。……もう夢中なの」

「いいのよ。……それが可愛いものよ。お姉様はネ。のろわれた女なの。美子さんみたいなの、きれいなひとをしか、愛せないのよ」

「恋人がいらつしやるんでしょう？ 皆んな、この避暑地へきている男の方は、お姉様に夢中になつてゐるわ」

「そうよ。普通の女だつたら、どんなに、それがうれしいでしょう。でも、私は、何の興味も男には無いのよ。私の恋人は、……」

そのまま、また、言葉が絶えた。

敏郎の血は、わきかえり、肉はひきつれるようだった。汗がひたいから、頸から、だらだらとたれた。

「ああ、多摩子夫人！」

と、彼は、その時、口のなかでさげんだ。彼の視野のなかに夫人の姿が現れたのだ。上半身はスポーツシャツをつけて、――それは美しい、奇妙なヴィナスだった。

「だるいでしょ。私が、見守つていて上げるから、少しお休みなさい」

「いや、お姉様、どこかへ行つてしまふから……」

美子の声には、それまでにはなかつた女の媚びがふくまれていた。

「どこへ行くのですか。私は、あなたに奉仕するのが楽しいのよ。私は、ママよ。ねかしつけて上げましょう。……この、よだれ垂らしの赤ちやんを！」

「いや、お姉様！ そんなこと、おつしやつちや」

美子は、夫人の胸にすがりついて、顔をかくした。夫人は、なほも、美子の耳に何かをささやきつづけて、美子を恥かしがらせている。

彼は、我慢出来なかつた。それが、どういふ結果を生むかも考えずに、いきなり、戸口へかけて行つて、ガラガラと大きな戸をひらいた。

外のあかるい光が、小舎のなかへ一杯にさし込んだ。

「あッ！」

二人は、大声をあげて、闖入者をふりかえつた。馬も、びつくりして、いななきながら、前肢を威嚇的に、動かした。

「だれー、今、入つてきちゃいけないって云つてあるだろ。私がここに居るときは、……」

「僕です」

「まア、敏郎さん！」

二人の声は同時だった。そして、あわててそばにおいてある衣類をひきよせて、二人のあらわな、軀をかくそうとした。

「奥さん。奥さんは、こういう性癖のもち主だったんですね」

夫人は、しばらく、唇をかみしめて、だまつていたがいそれから、ふてくされたように云った。

「そうよ。びつくりなさった？……だから、どうだつて云うの？」

美子は、夫人のひざの上に、顔をかくしたまま、雨にしほれた花のように、身をすくめていた。

「——どうと云う訳ぢやないけど、どうして、男を愛さないでこんな、美子などを可愛がるのです」

「余計なお世話よ。私が、どんな事をしたつて、あなたの干渉はうけないわ。美子さんだつて、よろこんで、私のペットになつたのよ。今日から、このひとは、私のものよ。そうでしょ。美子さん」

美子は、顔をかくしたまま、わずかに、頸をふつた。

「奥さんは、ずいぶん、ひどい女だな。馬の自然をこんな若い娘にみせるなんて」

「計画的にやつた事ぢやないわ。偶然、その場に出会つてしまつたのよ。それに私は、牧場主ですもの。見るのが仕事なんだわ」

夫人は、何とかして威厳をそこなわないようにしようと胸をはつて答えた。

「とに角、僕は、この事実を、美子の父母に報告する義務がある。早速かえつて、そう云おう」

彼もしつとに狂つていた。すると、突然、夫人は彼の手をとらえた。そして、急に、

「お願い、それだけはしないで、どんな事でもするわ」

と哀願するような調子にかわつた。美子も泣いて彼にすがりついた。

「敏郎さん、許して。私、死んぢやうわ。こんなこと話されたら……」

争つているうちに、夫人は、敏郎の胸にのしかかつて、上から、はげしい接吻を下した。「ああ」敏郎は戦慄した。

「これでも、云つてしまう？ これでも！」

夫人は、うわごとのように叫びつづけた。敏郎は夫人が、その一番の武器を用いて、自分を懐柔している事を感じ、夫人を突つばなそうとしたが、その誘惑にはかてなかつた。怒りは、彼の情熱に油をそそいだ。彼は自分でもおそろしくなる程、荒々しく、刀が湧いた。美子を奪はれた復讐でもそれはあつた。——夫人は、男ざらいのはづの夫人は、彼の情熱のために華麗な花のように、目ざめた。わきで、美子は、何もきくまい何も見まいとして、耳をおほつたまま、わらのなかへ、その軀を投げ出していた。

それから、その夏一杯、三人の乗馬姿は、いつも、この牧場附近で見かけられた。いつも三人一緒に……。

★まぞ・ふえちすとの手記★

腎部狂崇症

ところが、不意に衝動を覚えて眼をあげると、驚いたことに、私の顔から約二尺ばかり前に、華やかな腎部が二つ、ドツシリと坐りこんでいるではないか！



油 井 啓 二

画 亀 山 博

「縮図」という映画を、私は六回も観た。始めは封切館で何気なく観たのだが、それから毎晩のように通ひ、最後には遠く場末の三流館にまで足を運んだのだ。

こう書くと、人々は、あの映画のサジスチツクなシーンが目当てと思うかもしれないが、実は私が憑かれたのは、あの長い映画の中のほんのワンカットに過ぎないのだ。勇壯な軍艦マーチにつれて、芸者が一人／＼紹介されるシーンがある。

その中に一人の芸者が裾はしよりして廊下を雑布がけする後姿を、カメラが追っているのだが……。あの僅々三十秒ばかりのシーンのために、時間と金を費して六回も観たといつたら、人は笑うだろうか？ しかし、私にとっては笑ひごとではない。

あの雑布がけする芸者の腎部の素晴らしいポリウムに、私は金縛りにでも合つたように口もきけなくなってしまう。爆発的な、それでいて、えも云はれぬ感動で胸がつかまつて、思はず喘いでしまうのだ。

尤も、単にポリウムの問題なら、田舎の温泉宿の女中など、もつと／＼ドツシリした腎部の持主がいるが、「縮図」の場合は、そ

のカメラの角度が大いにアツピールしたのだと思う。あのような角度で女性の臀部を見る機会は、そうザラにはないのだから――。

大抵の男性なら、女性の臀部に魅力を感じない筈はないのだが、私の場合はちよつと違う。異性の臀部にまるで宗教的なまでの、憧憬を感じるのである。それは神秘的な人間性の根源であり、つきざる魅惑の泉なのだ。こんなにも原始的で、あるがままに美しいものは、他には類がないと思つてゐる。

私が女性の臀部に対して憧憬を抱き始めたのは、十二、三の頃からだった。その頃のあの日のこと、遠縁に当る中年の女性が尋ねて来て、客間で小半日も父と対談したことがある。そして、その客が帰つた跡で、私は何気なく客間を覗いたのだ。

床の間の前に茶つばい銘仙の客座布団があった。ところがその座布団が、可笑しな形に凹んでいるのだ。幼かつた私はそれが不思議でツク／＼と眺めた。ついこの間、母が綿を入れたばかりの、大ぶりの座布団の真中が丸くひつ込んで、容易には原型に戻りそうにもない。

テーブルをへだてた、父の座布団の方は殆ど凹んだ形跡もないのに、一方は如何にも重

量に押しひちやげられた感じ、まるで座布団が悲鳴をあげているようにも思えるのだ。私は殆ど無意識に玄関に飛んでいつた。

其処でも長々と挨拶をしたその婦人が、丁度玄関を出るところだった。玄関から門まで折からの夕陽の中を帰る婦人の後姿、その逞しいまでに力のみなぎつた臀部を、少年の日の私は讃嘆のまなざしで見送つたのだ。

この日から、私の臀部遍歴が始まつた。臀部の美しさ、逞しさに魅入られてしまつたと云つてもいい。尤も少年の私が見惚れたあの婦人は、今になつて考えると、中年婦人特有の脂肪ぶとりで、単にポリウムに於ては傑出していても、本来の美しさには遠かつたと思うのだが――。

とにかく、そんなわけで、思春期頃は困つたことに、女性の臀部が眼について仕方がない。街を歩いても電車に乗つても、嫌でも眼に飛びこんでくるのだから、こんなに安易なたのしみはない。そのうちにはだん／＼眼が肥えて、臀部の美醜が氣になつて来た。

勿論、ポリウムも絶対条件ではあるけれど、野蠻に横ひろがりしたのや、胴からノックペラ棒につゞいた臀部は興ざめなものだ。概して座高の長い女性の臀部は美しくない。腰

がドスンと下に落ちた姿態は、どうしても醜いのである。

だから、ウエストがギュツと締り、足が長い人の方が、なんと云つても、臀部が美しいのだが、なか／＼私を無條件に堪能させてくれるような、ヒップの持主は少い。

三年ばかり前の夏、友人と逗子に行つた。まだ在学中で、親が／＼の気楽な身分だから友人たちと泳いだり、ボートを漕いだりして遊び暮したが、こればかりは親友にも打ち明けられない、秘密の目的があつた。

勿論、水着をつけた女性の姿態を眺めるたのしみだが、まつたく夏は素晴らしい。コートやオーバーに蔽はれた冬の味気なさに比べて海浜の水着姿の氾濫は私を狂気させる。どちらを向いても、臀部そのものがウヨ／＼してゐるのだから……。

だが、水着ほど女性の姿態の美醜を正直に浮彫りするものはない。水着をつけると、醜い女性はいよ／＼醜く、美しい臀部はいよ／＼美しく、光彩を放つてその魅惑を誇示する。

私はその日ぼんやり砂浜に寝ていた。腹這つた私の軀の上に、友人たちは砂をかぶせてボートで沖に出てしまつた。私は首だけ出し

たまり、騒々しい海水浴場の群集の中で、なにか淡い孤独を感じていたのだ。

ところが、不意に衝動を覚えて眼をあげる、驚いたことに、私の顔から約二尺ばかり前に、華かな水着の臀部が二つ、ドツシリと坐りこんでいるではないか！ おそらく、砂に蔽はれていたため、彼女たちは私の存在を知らずに、そんなにも間近く坐つたのである。うけれど、なにしろ真正面だからドキツとした。

一人はゴバルトに上部だけ白い飾りがついた水着、左の方は朱と緑の大膽な横縞で、のびやかで大柄な女性だった。それまでは、臀部に憧憬を感じたと云つても、そんなに間近かに、しかもこんなに成熟した豊満な臀を見たことはなかつたから、私はガツと上気してしまつた。

二人ともすぐれた姿態だったが、殊に左の方の縞の水着の女性の美しさと云つたらない。くびれたウェストから、既に人妻らしく柔かな丸みをおびてふくらんだ線の見事さ、それがまるでハチキレるように、皺一つない水着に包まれて、鼻の先に坐つてゐるのだ。この女性は立膝をしているらしかったが、その臀の最下部が、シットリと濡れた砂にめ

りこむように坐つたボリニームといひ、又腰丈ヒップ廻りの比率といひ、一点の非のうちどころもない完成された芸術品だった。

ロレンスの「チャタレイ夫人の恋人」の中で、メラーズがコニーに云う。

「こんな美しいヒップはない！ これが本当の女なのだ……君は、男が本気でうちこめる柔かいふくれたヒップを持つてゐる。これは世界を支える根のやうなヒップだ」

その男が本気でうちこめるもの、一生を賭するに足りる見事なヒップが、私の眼前にあるのだ。それはすべてを包含した、聖なる殿堂、そして、正に女性そのものに違ひない。

強烈な海浜の太陽の下で、私はクラ／＼するやうな感動に喘いだ。海岸の喧騒も、数万人の人も忘れ果て、たゞ、私と、世にも美しい女性のヒップがあるだけだった。あまりの見事さに、だが、その時は殆ど無意識に、私は腹這つたまま手をのばして、両手でそつとそのヒップを撫でた。丁度、貴重な芸術品を愛撫するように……。

思つた通り、薄い水着を通して、手に吸ひつくやうなヒップの弾力に我を忘れたが、その時、反射的にビクリとしたらしい、筋肉の動きも心地よかつた。

グイと、細い胴がねじれて、その女性が振りかへつた。そして、自分の真後に、腹這つて顔から汗をポタ／＼と垂らしながら、犬のように喘いでゐる男を見出した時は、さすがに驚いたらしい。

気味悪そうに立ち上つたが、すぐ立ち去らず、不思議そうに私の顔をみつめた。私は必死に哀願の色を浮べていたのかもしれない。實際その時は、許されるものなら、犬のように四つんばいになつて、彼女の跡を何処までもついて行きたいほどの気持だったのだから――。

彼女の様子が、どうやら東京から来て、避暑がてら滞在しているように見えたから、私はその翌日も浜の人ごみの中で、必死に彼女の姿を求めた。そして、丁度昨日と同じやうな場所で、一人坐つてゐる彼女の美しい臀部を見出したのだ。

この日は、深い紺青の、何の飾りもない水着をつけていたが、あの美しいヒップの持主にまぎれもなかつた。その紺碧の色が、一層その美しい曲線をはつきりと描き出している。

そして、私はあることに気がついてドキリとした。前日の彼女の水着はダブルだったか



この日はシングルなのだ。だから、腰部の線が数倍も美しく、まるで圧倒されるように儼然と私には写るのだ。

精一杯に何気なく装ひながら、私は彼女の真後に腹這ひになつた。少しばかり見上げるようにしたその角度が、私には一番理想的だつたのだ。彼女はこの時チラツとふりかえつたが、まるで私が眼に入らなかつたように、海に視線を戻して動かなかつた。

私はその態度から、彼女が私の風変わりなトップ崇拜を知っているように思えた。明かに彼女は自分の姿態を自負し、それに対して正直に全身で憧憬を示した私を、許容したのである。

そう思うと少し余裕が出て、私はたのしみながら、彼女を観察することが出来た。しかし、近々と眺めているうちに、なんとしてもそれだけでは満足出来なくなってくる。私は喰ひこむようにみつめながら、今大波が襲つて来て、彼女の躰が私の躰の上に打ちあげられることを夢想した。そしてこの時、こんなに完全な女性の臀部によつて圧迫されること、私の窮局の理想だと云うことを悟つたのだ。

だが、夢は現実に実現した。やがて姿勢よ

く起ち上つた彼女が、なにか足がもつれたようによろめいたかと思うと、見上げている私の上に、ドツと倒れて来たのだ。

あゝ、はずみと云うのは恐しい（それとも彼女は意識してそうしたのか？）渴仰して止まない彼女のヒップが、丁度私の顔の上にズッシリと乗つてしまつたのだ。その重量感――。トツサの驚きと喜び。その火を吐くような交錯。眼も鼻も口もガツとふさがれながら私は狂喜の呻き声をあげた。

ふいと彼女の躰が浮いた。ショボ／＼した眼をあげると、もう濃い紺青の水着の彼女は波しぶきをあげながら、海の中に飛びこんでゆくところだつた。

もの凄いい人出だから、周囲の人々は、誰一人気附かなかつたらしい。ほんの一瞬、だが私の今までの生涯にかつてなかつた、貴重な一瞬なのだ。

それから夏の終りが近づくまで、私は度々彼女のヒップをたのしむことが出来た。その人の身分も知らず、まして、口をきくこともなかつたが、彼女と私の間には暗黙の了解があつたと云つてもいい。

数万の人であふれた海岸だけに限られていたけれど、私は泳いでいる彼女の足元までも

ぐつて行つて、その豊かなヒップにしがみつくことも出来た。そんな時、彼女はまるで人魚のように、その下半身をくねらせた。

しかし、夏の終りとともに、この有頂天な喜びは失はれた。当然なことだが、人影のまばらになつた海辺から、彼女の姿が消えてしまつたのである。

この女性によつて、改めて腎部の美しさ、尊さを知つた私は、もう完全なマニアだつた。街を歩く時も、私は異性の容貌を見ずにとゞヒップの美醜のみに心をひかれるのである。近所の知人や商店の娘さんたちでも、顔よりはヒップの恰好でそれと判断した。こゝの表情も正に十人十色で、一人／＼恰好に相違があるのである。

タイト・スカートやストラックスの場合は、勿論はつきり腎部の線が現はれるが、反対にフレヤー・スカートの時でも、美しいフレヤーの流れによつて、容易にその内容の優劣が想像される。

或る春はデシンのワンピースのお嬢さんの如何にも処女らしくカッチリと締つた後姿の素晴らしさに、電車の中から跡を追つて、とうとう、北多摩郡のある町までついて行つたこともある。この時はあまりしつこく跡をつけ

たので、とう／＼交番に飛び込まれ、泡を喰つて逃げたものだつた。しかし、このお嬢さんの顔は一向に思ひ出せないが、その腰の動きにつれてゆらぐ、デシンのフレヤーの波の優雅な美しさは、今でも判つきり覚えてゐる。それから毎夜新橋に出かけて、駅界隈の夜の女たちの中から、一番腎部の美しい女を選び出し、築地の宿に泊つたこともある。生理が目的ではなかつた。だからM子と云うその女に、まづ裸になつて後向きに真すぐに立つことを要求したけれど、容易にきゝ入れてはくれなかつた。

やつとチップをはずんで、うつ伏せに寝て貰つたけれど、たゞヒップばかりを、ためつ透かしつ眺められると、なにか不安な気持ちになつてくるらしい。M子は非常に嫌つた。「ふざけないでよ、恋態！」

と、M子は云つたが、海千山千のパン助でさえヒップにはまだ人知れぬ羞恥を感じるらしい。そのことは私を喜ばせてくれる。

勿論、ストリップにもさん／＼通つた。しかし、裸体に馴れた厚顔なストリップパーたちの姿には、あまり感動がなかつたし、位置としても、客席から見上げる角度は、ヒップのみが目的の私の場合少々具合が悪いのであ

る。現在のストリップの中では、私の理想に近い条件を具えた人も二人ほどいるが、肌が相当荒れているから、魅力は少い。

身長一六五糎、背丈三七糎、腰丈一七糎、胸囲八八糎、ウエスト五五糎、ヒップ九四糎。

これは現在同棲している梨枝子のサイズだが人々はこのサイズによつて、梨枝子の見事な肉体美を想像出来ることと思う。

本年度のミス・ユニヴァース・コンクールで、第三位となつた伊東絹子嬢のサイズと殆ど同程度になるが、さすがに見事なものだ。

普通は身長一六五糎だと、背丈が四〇糎内外又腰丈は一九から二十糎となる。だから、腰丈一七糎、ウエスト五五糎、ヒップ九四糎の梨枝子は、日本人としては百万人に一人の姿態に恵まれたと云つてもいい。くびれた細腰から、両側にクツキリと描かれる腎部の美しさは、私を悩殺させずにはいなかったのだ。

梨枝子は私に逢うまで、油脂会社の女事務員に過ぎなかつた。自分の美しさも知らず、ゴツイホームスパンのスカートに、ダブ／＼のカーディガンなどを着て、化粧もろく／＼知らない娘だつた。

しかし、私と同棲するようになってから、私はスカートはタイトに限り、布地も極く薄

手のジャージなどを選んだ。又、私は彼女がショート・パンツで闊歩するのを好んだが、これも布地は厚地のもの、固いものを極力避けるように注意した。

まづたく、彼女が黄色いショート・パンツをはいて飛び廻る姿は、毎日眺めても見飽きなかつた。どつしりとボリュームを保ちながら、しかも動きが流れるように身軽なことも彼女の美しさをきわ立たせているのだ。

まづ眼がさめると、梨枝子は寝衣をかなぐりすて、私の顔の上に馬乗りになる。これが私達の朝の挨拶なのだ。一度はそれがあまり長時間だつた爲め、危く窒息しかけたこともあつたけれど、第一これで死ねば、私としては安楽死と云つてもいいだろう。

洗顔する姿、鏡の前の横ずわり、中腰になつても、立つても歩いてても美しかつた。彼女のヒップを見ていると、私は何とも云えぬ安らぎを覚えるのが常だつた。何故か敬々しい畏怖の念すら浮んでくるのである。

梨枝子はだん／＼自分の美しさを悟つてくると、次第に高慢になつた。そうなるように私の方で仕向けたと云つてもいい。私は、美しいものが驕慢なのは当然だと思つてゐるのだから——、驕慢なるがゆえに、一層美しい

と云うべきだろうか——？

だから、私の生活は、彼女への奉仕の毎日だつた。いや、彼女の腎部への奉仕、と云つた方が正しいかも知れない。彼女のヒップに牛乳を磨りこんだり、香水をふりかけたりする仕事は、まづたく無上のたのしみなのだ。こうしてヒップに憑かれた私を、人々は笑うだろうが、日常座臥に、こんなにも恍惚境に誘つてくれるたのしみを私は満喫しているのだ。

愛読者通信

前略

小生風俗草紙の愛読者で、サジスト傾向を有する二十三歳の青年です。

小壯よりしばらくに興味を持ち、悩み続けて居る者です。内心弱氣で、そんな事なぞおくびにも出せずにいます。若し良家の女性で同趣味の方、マゾ傾向の方で御交際できましたなら心ゆく迄、遊びとして、趣味として、御高配を仰ぎたいと存じます。

御手紙下さる場合は、家が厳格なので、男名をお守り下さいます様願います。

東京(K・K)



ぐろてすく藝談・第三回

三遊亭圓朝

明治釋界の巨匠圓朝が舌一枚に繰繰けた凄艶怪奇情痴の世
界！ 圓朝得意の筆者が描く血みどろの極彩色錦繪……

正岡 容

一

つい最近も中村時蔵が
上演した「真景累ヶ淵」
此は、富本の師匠豊志
賀が十いくつも年のち
がう、しかも亡父の仇
の血統である新吉に契
つて、悶々狂死し、次
々と新吉の後添を憑り
殺す怪談であり、「鏡
ヶ池操松影（江島屋）」

はまた芝日蔭町の古着屋江島屋が糊付けの花嫁衣裳を上総の一
村落の小町娘に売ったため、望まれてその娘が名主の家へ嫁に
行く道、大夕立にあつて馬上の花嫁は無惨にも晴着が剝がれて
面目を失い、入水するため、その死霊が江島屋へ祟ると云う因
縁話である。

「乳房樓」は画師狩野重信が高田砂利場の南蔵院へ揮毫に行つ
た留守、美貌の妻おきわと通じた門人磯貝浪江が、奸策を弄し
て揮毫先にちかい落合の螢狩へさそいだして師匠を惨殺する
と、やがてその亡魂が幼い遺子真与太郎に助太刀して仇浪江を
討たせる譚。

美男萩原新三郎を慕つて、夜な夜なかようお露お米の幽霊
が、カラコロンの下駄の音は、余りにも有名な「牡丹燈籠」。
以上みな、明治落語界へ普ねく金字塔を打ち樹てた三遊亭円



朝が不朽の名作のかずくであるが、かの「塩原太助」の後日譚に、世にも凄惨な怪談のあることは、人、余り知るまい。

律義真つ法で、空拳、大身代を作り上げ「本所に過ぎたるものが二つあり、津軽大名に炭屋塩原」と謳はれた初代太助に二百両の金子を預けておいた出入りの男が、初代の歿後その金を貰いに来ると、腹黒の番頭は已に着服。

「云いがかりをぬかすな」

とさんぐに打ち打ちするので、口惜しがったその男は大川へ入水して死んでしまう。と、この水死体が、

本所桐生町の太助の家の河岸の棧橋へ流れ付いて放れない。竹の棒で突き流さうとした若い衆二人は川へ落ちて死に、手伝った鳶の頭もその場で発狂。流石に氣に病んだ二代目は間もなく狂い死んだ。

さて三代目の代になると、今度は、貰った嫁を姉と番頭がひどく虐めるが、嫁の実家はお武家ゆゑ、一たん嫁した以上澁りに戻るなと受付けない、八方盡きた嫁は塩原家の内井戸へ投身するので、以来、幽霊がでる云々の噂が拡まり、さしもの豪家が潰滅してしまつた。

はじめ大円朝はこの方をかくつもりだつたのが、先づ太助の立志談を完成し、小学校の読本へ入るほどの好評噴々だつたので、そのまゝになり、怪談の方は腹案のメモから金馬時代の先代小円朝が構成した速記のみが、今日遺つている。

今度はこの「塩原怪談」のような、余りポピュラーでない円朝作品の怪奇凄艶場面を専らに、諸君と探求して見よう。

二

先づ「緑林門松竹」の新助市の巻。

江戸は根津七軒町の医者山木秀永の下男で新助とて、信州入山在の生れ。

何しろイケ年をして、己の女房を旅廻りの祭文語り（今日の浪曲師）に寝取られた上、そんなだらしないヤローはこの村の恥だからと、御丁寧に生れ故郷までを追はれたと云う、愚鈍

に／＼彼女は新助に肌を許してしまつていたからである。

この新助、じつは浅草鳥越生れの新助市五郎、二つ名のある大盗ツ人で、信州入山在などは真赤いな嘘偽り。云はれて見ると、苦が味走つたいい男であるし、わが子も助け度い一心でついおすわは、手に手を取つて本庄と深谷の合の辺僻へ走り、茶店をだして世を忍ぶ。

が、数年後、おすわは新助の醉余、熟睡した晩を、亡き秀永の仇と、幼いわが子に刀で突き刺させようとしたばかりに、あはれ母子諸共、新助の刀の錆となつてしまう。

尤も、さう云う新助その人も、間もなく江戸へ舞戻つて、昔の情人またかのおせきの下谷車坂の住居で、一服盛られて悶え死ぬのは、積悪の報いで、折柄、晩夏。青葉勘ずむ上野のお山では、極悪新助の最後を弔う蟬しぐれが、しきりに蒸暑く聞えていたろう。

三

「栗田口露笛竹」では、本郷春木町の両替商紀伊国屋の若旦那伊之助が、子までなした吉原松葉屋の花魁若草を振棄てるの



で、花魁は怨み死にわが子共々死んでしまう。

この若草のおもいで伊之助は、とうとう片足を切らねばならぬほどの業病に罹つて、夜なく亡魂に悩まされ、詮方盡きて堀切の別荘で、亡き花魁の位牌と婚礼する章りが一ばん凄い。下総下矢切村の若草の叔母おしのが介添で、

「しの『これ若草、汝は伊之助さんよりほかに男はねえと思えつめて夫婦約束でしたが、お互えに物のまぢげえから子まででかして、汝エ先へ死んだが、いまちや伊之助さんも汝がにすまねえと云つてな、義理イある嫁まで離縁して、この煩つてる身体で嫁つ子をだせばどの位不自由だか知んねえのに、離縁して汝と盃イするツてえから、汝も此から伊之助さんを影身に付添うて守らねばなんねえぞ、此で伊之助さんと盃イすればこんな嬉しい事はあるめえ、俺も嬉しいから汝飲んで伊之助さんに献すだアよ若草』」

先づ若草の位牌の前の盃へ、なみ／＼と酒を酌いで涙と共にこう云うと、不思議や誰も机のそばへ寄らないのに盃が倒れ、ポタ／＼酒が滴り、流れる。

「番頭『お盃がひつくり返つてお酒がこぼれたのは、御意に叶はんのではございますまいか』しの『ナニ若草が飲んだでござえましよう、飲んだら汝エすぐに伊之助さんがにさすだアよ』おしのが取つて伊之助にさすと、忽ち吹入る一陣の怪風、満座の燈火は一ぺんに消え、とたんにサーツと盃の酒は伊之助の足の痛む部分へかゝつて、痛むこと／＼と通りでない。

が、間もなくその痛みもケロ／＼と去つて、

「伊之『実に不思議な事だ。大きにしのぎよくなつた』」

蓋し、彼女の霊が守つて呉れたのだろう、そのちも若草が細い手で伊之助の患部を撫でさすつてゐるのを見た者が、三人までもあつたと円朝は付け加え、「位牌と結婚を致しました者は天下に二人で、其頃の紀伊国屋の息子と若草と云う遊女の位

牌と婚礼致し、近くは沢村田之助が芸者の位牌と婚礼致しましたが」

と述べているが、いづくんぞ知らん、作者はこの田之助の事実からヒントを得て、この若草の物語を得ているものであることを！

なればこそ田之助を振つて伊之助、田之助の屋号をそのままに紀伊国屋ともしているのに、それをノメ／＼とこんな白を切つているところ、ここらがいい意味での大円朝の図太さと云えよう。

四

「霧陰伊香保湯煙」は、明治初年、高崎前橋辺りの生絲の事業が、漸く旺になりだしたころの情痴物語で、足利在に機場を持つ奥木佐木郎の息子茂之助は、商用で前橋へでかけているうち、海千山千の江戸芸者小滝に鼻毛を読まれ、わが家のちかくに一戸を構えさす。

ところが小滝には士族くづれの破戸漢松五郎あり、あべこべに手切れまで取られて、すぐ目と鼻の先へ彼らは茶店をだした上、苦情を云いに行つた茂之助を松五郎が泥田へまで蹴込むので、さあ口惜しくつて耐らない。

一夜、暴風雨に乗じて彼は、本妻のくのかから脇差を取出させ、血相変えてでかけて行くので、貞淑なくのは幼児を背負

い、小滝の許へ先廻りして事情を告げ、もしものことがあつてはと女に近隣へ松五郎を呼びにやる。

所へ忍んで来た茂之助は、

ピカ／＼とさし込む雷光に女の姿が見えたから、お滝が彼処に居ると心得、現在我が女房とも知らず、引抜いた一刀を持つて飛びかゝつた。(中略)くの『誰方か』と云う声も雷鳴の烈しいので聞えません。(中略)無慚にも我が女房をくのが負つて居る乳呑児の上から突通したから堪りません」

また、

「茂之助は只呆然として暫く考えていましたが、ふら／＼と起上つて、自分の帯を解いて籠の角から釜の蓋へ足を掛けて、梁へ二つ三つ巻きつけ、頸へかけて向うへボンと飛んで遂に縊れて死にました。誠に情ないことで。処へ提灯を点けて松五郎とお滝は雨も止みましたから帰つて来て見ると此の始末。さア何うしたのだらう鮮血淋漓」

此が事件の発端で場面一転。翌年の夏の宵闇には、伊香保から四万へ行く九十九折で、上州烏川で官軍に斬られた小栗上野の妾腹の娘にして眉目美しいお藤さまと女中の岩を脅している、不逞の人力車夫峰松がある。

「峰『此の奥様にぞつこん惚れて居るのでがす、どうか□□□□□□云う事を聴いてお貰え申したい(中略)橋本幸三郎と云う人に逢いてえと思えばこそ、夜道をかけて四万村まで、此の物凄い山の中をおいでなさるからにやア満更色気のねえお方でもござえやすめえ、□□□□□□□□□□、其の美しいお嬢さ

まを□□□□□□□□□□楽しみにこの山道を来たのです、□□□□□□□□□□もしお岩さん、取持つておくんなせえな(中略)かう云い出したからは俺も男だ、□□□□□□□□□□『岩』どうも呆れた奴、手込にすれば許さんぞ』ト、お岩は斬殺され、お藤は谷底へ真逆さまに墮ちて行くが、なんとこの悪車夫峰松が、かの御家人くづれ松五郎のなれの果てであろうとは――。

一方、お滝は四万温泉の女中に変貌、お藤が慕う富商橋本幸三郎に取入つて権妻(二号)となり、物語は一そう波瀾重疊するが、私は明治開化の上州路を背景に、仇な毒婦と鉄火な侍やくざと可憐に美しい幕臣の遺娘と、たゞそれらを諸君が芳年あかく錦絵のような大輪牡丹の花びらにも似た「血」のなかへ置いて考えて下さればいいとおもう。

五

終りに、「八景隅田川」。

当時は絵であり、詩であつたすみだ川西岸浅草橋場の、島田屋清左衛門の風雅な寮の景色が御意に叶つて、お微行で近習数名と通りかゝつた色白美男のさるお大名の若様が、酒肴の歡待を受け、御一泊遊ばされる。

と、この若殿が大泥棒で、夜半、手下に千両箱を担ぎださせるし、その上、

「殿『彼は好い娘だの(中略)これ亭主、無理な事を頼む様だ



が、□□□□□□□□□□『へえ、どうかその儀はどうぞ、疵物に相成りましたは』近習『黙れ疵物とは何だ、上のお手が付けば有難い事だ』(中略)と蚊帳を釣つて娘をその中へ入れる(中略)戦き怖れて居る□□□□□□□□□□□□□□□□
 □花を残酷に手折りました。此殿様は其後とんと分りません」
 秋宵、跡白浪の殿さまは、しかし全くの贗侍ではなく、じつは堀田家浪人で大原重三郎、幕末にはよくあつた放蕩無頼の、武家の次、三男だつたのであるが、因果は一夜、姦まれた島田屋の娘お秋が、この美しい無頼児の上をおもひ煩い、枕も上がらぬ大病となつたことだつた。

漸くに病因を知つた女中のお雪は、その年の冬、向島に隠れ住む己の情人白須権太夫から、重三郎の水戸在に聞こることを聞知るので、お秋をそゝのかして三百両の金を持出させ、権太夫を手引きに主従二人は出奔する。

さあ、此からがじつに千変万化なのであつて、葛飾の新宿で訛されてお秋は、権太夫に古井戸へ投込まれるし、お雪はその情人のため十本の指を斬落されて横死する。

幸いにお秋は助け出されて、間もなく焦れる重三郎に再会、正式にその女房となるが、これが悪へ転落の第一歩で、先づ雪夜、美しい贗盲の門付け芸人に化けた彼女は、招ばれて長唄を一曲語つた日本橋富沢町の質両替渡世某の向島の寮で、さそいだしたその主人を、秋葉神社ちかくいきなり懷剣で刺殺す。

「お秋巧くやつたなあ」

とそのときニンマリ北叟笑むのは、田舎訛りの名も巧みに久

助と姿やつして、かねてこの寮へ住込んでいた夫の大原重三郎である。下谷数寄屋町の芸者おろくと三転した彼女は、今度は八丁堀の材木問屋大坂屋の若旦那清之助と、盛夏、下総流山ちかくの原中の旅籠へ泊ると、深夜、強盗がドヤ／＼と押入つて来て彼らを丸裸にし、おろくのお秋は薄の原へ担ぎ去られる。但、この賊、かねて手筈の夫重三郎とその手下たちであること勿論で、

「重『滅法好い男だなア（中略）御馳走を仕たな』秋『大丈夫だよ』重『何うだか知れねえ』」

のお安くない口説もあれば、さらにお秋が凶漢に輪姦されたを言い立てに、清之助の店先へ強請に行つては、

「秋『（前略）もう着物を剥がれた上にいやな奴に担がれて、薄の中へ連れられて行つて、本当にお話も出来ないような目に遭つて』」

と幾度も／＼繰返す忌がらせもある。

が、こんな悪婆になり果てたお秋も、最後に村しぐれの待乳山、浅草聖天境内で、向島で惨殺した阿替商の伴源之助に仇呼ばはりをされると、俄に島田屋愛娘の昔に返つて「齒の根も合はずガタ／＼慄えて」とあるのが、じつに巧く、また可憐でも哀れでもある。身辺、私も中年の良家の女を幾人か知っているが、常にある意味でこのお秋に似たものを感じないわけには行かない。

六

さて近世話術界の王座たる大円朝のグロテスクシーンまたエロティックシーンは、南北は勿論、默阿彌よりも地味だと云えよう。一に此は、円朝が鳴物入り大道具の芝居囃の演出を棄てゝ枯淡円熟の域に入つた素囃のみが、現在速記にのこされていゝるからで、現に前記の緑林門松竹の山木秀永の女房殺しも芝居囃では自宅でなく、下谷佐竹三味線堀をバックにずんと派手であるし、菊模様皿山奇談の悪徒松蔭大蔵が大胡蝶の忍術を使つての山門セリ出しの豪華場面なども、全集には全くない。

前者は故三遊亭新朝が演り、後者は現下の八代目林家正蔵君が得意としている。

——終——

毎號好評のぐるてすく藝談は、回を重ねること既に三回となりましたが、次號はまたグツと趣きを變えて、古今の浪花節に現れたエログロを、作者得意の艶筆によつて描き出します。何卒御期待下さい。

尚本誌十一月號の發賣日は

十月十日です

（発売たちまち売切という状態が非常に多いので、なるべく早目にお求め下さるようお願い致します。）

特 集 ・ 責 め



恋愛・閨房の

サチズム

影 浦 憲

肩の肉はちよつと鹽からく、それに、脇の下の匂いもまじつた。やわらかい肉をきづつけているという思いには、殘忍なよろこびがあつた……

「いやン。もつと、ぎゅつと」

と、おこつて請求した。やわらかいゴムのような感触の肉を、ガクガクとかむと、そのたびに安らぐのである。

「ダメなの、私つて、あゝやつて、肩かまれてないと……かまれて、つかまえて、れる、と思うと、ぐんと手ごたえが出来て、……それがいいのね。癖になつちやつた。……ヘンタイかしら、私」

1

「噛んで、……早く、噛んで！」

と、そのときになると、きまつてそう云つた。早くしないと間に合わないじゃないの、と、とがめているような、せつぱつまつた口調だつた。

それで、円々と脂肪のついた肩のところにガツと歯をあてると、——とたんに、眉をよせて、一瞬、苦痛の表情をつくり、それが、

水にほとびれるように、ゆつくり安らぎの表情にかわつて行く。

やわらかい肩の肉を、ロー杯には、張つてアグアグと噛む感触には一種獨得のものがあつた。肩の肉は、ちよつと鹽からく、それに、脇の下の匂いもまじつた。やわらかい肉をきづつけているという思いには、殘忍なよろこびがあつた。この美しい女の愛を独占しているという実感をそゝられた。

手心をして、形ばかりかんでいると、

恥かしそうに髪を、白魚のような指でかき上げながら、あとからそう云う。はげしい情熱は、目をみはるばかりで、軀ぢゅうの皮膚が、冷たい汗にぬれた。

噛んだ肩のあとは、いつも、いたいたい赤茶色のアザになつた。キスマークなど云う生やさしいものではない。……それを少しでも目立たなくしようと、パフをバタバタとくしながら、

「いやアね。また、みんなに、何か云われち

やうわ」

と困つたような顔をする。それなら、そんなこと、請求しなけりや良いのに、その時は夢中になつて、そう云うのだ。

彼女は、有楽町のNという、純喫茶店へ出ていた。洋裁学校へ行つた位だから、良い家のお嬢さんなのだが、華やかなことにあこがれる性質があつて、そんな所へ出ている。二十歳で、スンなり延びた軀はいかにも育ちの良さそうな感じで、お給金はみんなお小遣にしてしまうのである。

白い制服にきつちり包まれた肩に、そんなアザが生々しくついていいるとは、お客はだれも気がつかかなかつた。だが、店のボーイや、同僚の間には、そのことは知れわたつていた。

お店へ出ているときも、手首や、小麦色にやけたふくらみはぎに、しみるような白いホウタイを巻いていることがあつた。

「どうしたの？ けが？」

ときくと、恥かしそうに笑つて、

「なんでもないの、伊達よ」

と云つたが、それも彼女の性癖に関係があつたのだ。彼女はケガもしないのに、ホウタイを手首や、足首に巻くのが好きで、軀のど

こかをギユツとしばられている感じがたまらなく好いらしかつた。

そうやつて、附合つて行くうちに、段々遠慮がなくなつて、色々な注文を出した。



注文を出されるまえに、こつちが、強圧的に、すると、とてもよろこんで、ひとみを輝やかせる。

たとえば、両手首を、ホウタイで、しばつ

て、それを枕の上へやつたまゝが、彼女はすきた、と云つた。自分ではどうする事も出来ない、そのマゾヒチックな感じが、とてもいゝの、と云うのだ。——力を入れると、しばられた手首のところが、血がとまつたようになる、その鬱血の感じが良いらしかつた。

その外まだ、色々な注文を出したが、みんな微妙な閨房の愛しかたのことだから、こゝへは書けない。——困つたのは、噛まれる事が好きばかりでなく、自分から、よく噛みついたことだ。

ズボンなんか、はいてると、いきなり、うしろから飛びついて、頸すじに、ガクツと噛みついたりした。

「痛い！」

飛びあがつて、ふりはなそうとすると、「もつといたくしてやる！ うんと、かんで、あと、つけてやる！」

と云つて、腕なんかにもむしやぶりついた。そういうときは、動物みたいな眼をしていて。

——そんな娘だつたが、そのうちに、銀座のヨタモンと仲良くなり、仲良くなつたらたちまちスーツと僕から離れて、会つても、ろ

くろく口も利かないようになってしまった。遊びに行こうと云つても、忙しいからと云つてとり合わない。あきらめるほどの、あつさりした変りかただった。

喫茶ガールは、まだしていたが、お金づかいは前のように派手ではなくなつた。男にみついてゐるのかも知れなかつた。あるとき、カウンターの椅子にのぼろうとして、スカートをまくつたのを偶然うしろから目にしたら生白い、そのふとももの皮膚に、ハッキリ歯で噛んだと分る赤黒いアザがあつたのを見た。——それで、彼女の最近の様子が一辺で分るような気がした。

僕から離れた理由も分つた。肩ばかりぢやなく、そんな所も、噛んでもらうようになってゐるのだ。——男が、彼女のそう云う傾向を、そののかしたのか、彼女の性癖が自然に進んだのか、——どつちか分らないが。

……どうするんだらう。お嫁に行けなくなつてしまふんぢやないだらうか。……彼女はまだ、二十歳なのだ。

2

この娘のように、はつきりしたマゾは、まだ、そこまで、行かない、潜在性のマゾ

なら、若い娘はみなもつてゐる。

例えば、先日僕は、「きんぴら先生とお嬢さん」と云う松竹映画をみたが、高橋貞二扮するところの「きんぴら先生」なる女学校の先生が、女学生たちに、

「ダメぢやないか！ お前たち。何さわいてゐるんだ。早く寝ろ！」

など、乱暴な口をきくのだが、それが、女学生の間に大人気で、彼にしかられない爲にイタヅラをする娘まであらわれるのである。

乱暴な、高圧的な口をきく、粗野な先生、

（もつとも若い男にかぎるのだが）を、女学生たちが好むことは、直接、僕も高校の先生から聞いた事がある。自分が乱暴にあつかわれ、意志を失つたもののように命令されてその通りにすると云うのが、ゾツとするほど、うれしいのだ。彼女達にとつては、それが、性にめざめ、男に恋愛感情をおぼえる第一歩なのだ。その男に好意をもつと、彼女は、男の云う通りにしようとするし、男の好む服をき、男の好むような化粧をする。そうして自分を失ふことがうれしいのだ。

トシ子は、サラリーマンの娘で、お嫁入り前のひとときを、ある小さな会社につとめた。美人ではないが、可愛らしい円顔で、男

好きのする娘だった。

「どうせお嬢さんつとめ、なんだろうけど入つた以上は、それでは困るから、僕がぴしぴし仕込むよ」

と、入社したとき、上長の浅井は云つたがその言葉の通り、入るそうそう無理な仕事を彼女におしつけ、出来ないで困つてゐると、「こんなものが出来ないのか！ 今日出来るまで居のこつてやりなさい」と叱つた。

「ハイ……」

と、トシ子は、真赤になつて、うらめしうに浅井を見上げたが、浅井は、少しも優しい事は云つてくれなかつた。

夕方になつて、遠くへ使いにやらされるような事もあり、「かえりが、おそくなると、こわいの。……明日ぢやいけません？」とおそるおそる申出ると、

「いけない！ 僕の云つた事は、命令だからどんな事もきかなくちやいけない！」

と、つゝばね、彼女も「ハイ」と云う外なかつた。

辛くて、人知れず何度も泣いたが、しかし浅井の態度には、意地悪していると云う風なところはない。トシ子が大人しいので、それ

にのしかゝつて、暴力をふるつてゐるような
 感じた。するとトシ子の方も、悲しい自分を
 あきらめるような気持になり、浅井にいちめ
 られている、と考えると、それが、ヘンな快
 さをさそつた。

そのうちに、知らず、知らず、浅井の無理
 な命令を待つような気にな
 り、

「イヤー、……だつて、
 これ大変なんですもの、
 イヤー」

とわざと反抗して、

「いやだつて？ 生意気
 なこと云うな。僕の云つ
 たこと、ダメつてすれば
 いゝんだ！」

と叱られてから、「ハ
 イ……」と悲しく涙ぐみ
 ながら、するというよう
 になつた。

浅井には、妻子があつ

たが、きりりとした男ぶりが、いつかトシ子
 の胸にやきつくようになって、もつと無理な
 ことを云つてもらいたいような、もつと泣か
 して欲しいような気が、しきりと湧きあがつ

た。

一度、仕事の計算をまちがえたのを責めら
 れて、じつと、にらんだら、

「何だ、その眼は！」

と云つて、いきなり横顔を掌ではられたこ
 とがあつた。二人の他にだれもない事務室

そうして半年位たつて、彼女は、ある夜、
 いつもの命令的な態度で、浅井にしたがわさ
 れ、新宿ののみ屋の二階へつれて行かれて、
 酒の相手をさせられ、その果てに、処女を失
 つた。

結局、

暴力をふるわれたのだつたが、彼女
 は、抵抗はしても、人を呼ばなかつ
 たし、逃げ出しもしなかつた。

男がひるむような徹底的な抵抗は
 しなかつた。こうして、彼女はお嫁
 入りを前にして、みすみす過失を犯
 したが、入社して、「僕の云う通り
 にするんだよ！」と云われたときに
 彼女の運命は、もうきまつていたよ
 うなものだつた。……

この、トシ子の例などは、若い娘
 の心のなかにひそんでいるマゾのい
 う例になると思う。その後、トシ子
 は、浅井にあきらまれて、泣く泣く、
 お嫁に行つたが、幸福に暮している
 か、どうか。



3

で、トシ子は、わつと泣き伏したが、その頬
 のやけつくような感触は、異様な感覚を彼女
 の軀によびさませた。ちつともいやぢやな
 かつた。

しかし、こんな女ばかりは居ない。
 僕の良く行く、新橋裏のバアのママム、銀

子は、若い男を可愛いがるのが好きだ。

それも主にボーイ。僕が知っているだけで三人もボーイをかかえているが、それが、そろいもそろって、女と見まがうような美少年なのだ。

あるとき、ぶらつと、入って行くと、ボーイの悦ちやんが、眼をなきはらしながら、シエイカーをふつてゐる。どうしたのときくと「マダムに折檻せいかんされたんです」

と、マダムの方をチラと見て云つた。

「うちの女の子に手を出したから、こうしてやつたのよ」

と、マダムも憎そうな顔をした。見るとタ、キの床に、素足で立たされている。真多のことだ。そして、朝から、御飯もたべさしてもらえないのだと云う。御飯なんか、勝手にたべようと思えば、いくらでも喰べられるんだが、そうやつて、云いつけを守っていると、ころを見ると、ボーイの悦ちやんの方も、その責めを楽しんでいるのかも知れなかつた。

彼は美貌だから、新入りの女給かなんか、マダムのペットとも知らずに、ちよつかいを出して、マダムのカンにふれたのだろう。

「お腹が空いたろう。可愛そうだから、これをのまして上げるよ。ホラ」

マダムは、僕たちの見ている前で、悦ちやんの顔をかゝえろと、手で、あごをはさんで無理に口をあけさせ、ジンか何かの強い酒をゴクゴクなかへ流し入れた。年少で、酒のめない悦ちやんはタチマチ、苦しんで吐いたが、そういう時のマダムは、口をゆがめて、いかにも残忍そうな、凄艶な笑いをうかべていた。

その夜、店をしめてからマダムは、女給たちを集めて、いやがつて、逃げようとする悦ちやんの躰を露わにすると、

「この子は、まだ、こんなに小供ですけど、よかつたら、たんと可愛がつてあげて頂戴」と、皮肉まじりに云つた。悦ちやんの恥かしさはどんなだつたらう。

花のような異性ばかりのなかで、男としての侮辱を受けて、そんな事を云われた悦ちやんは、どんな責めよりも、それが恥かしかつたに違いない。それが、マダムのねらいだつたのだ。

悦ちやんは、銀子のおもちやだつた、と云つて良いだろう。と云うのは、一度も、本当の恋人としては、あつかわれなかつたのだから。マダムは悦ちやんが、悩んでいるのを見ると、笑つたり、よろこんだりした。しかし

一度も、ちゃんとした扱いはしてくれなかつた。

そのくせ、しどけないなりをして、軀をもませたり、腕の下をそれと命じたり、足の裏をふむように云いつけたりする。

悦ちやんは、恥かしいから云わなかつたが、ある行爲だけは、悦ちやんに許したらしい。しかし、それも恋人としてのそれではなくドレイに許すそれだつたのだろう。……いたづら半分の遊びだつたに違いないのだ。

銀子は一方で、お客やパトロンと、ちゃんとした男女のつき合いをしていたから、芯からのサヂズムとは云えないかも知れないが、それで、満されないサヂスチックな一面がボーイにいたづらすることにそゝがれていたのだろうか？

今でこそ、バアのマダムに納つて、パトロンや金持のお客を巧みに操っているから、氣随氣儘の仕放題だが、銀子も昔、つまり処女を失う前後には、ずい分じめな思ひもしたらしい。だから、その頃の男性の暴力に対する鬱憤を、今こんな美少年たちを虐めることで、はらしているのかもしれないと、僕は思っている。



そどみあ放浪記

ギヤルソンたちは、勿論客の意向次第でマスターを通じて客とベツトを共にするわけだが、私の場合に限ってマスターは客にその斡旋を断つた。それは鳥越さんだけで充分金になつたし……

澁川 徹夫

水澤 深雪晝

美少年誕生

終戦の時には親や兄妹とも生別れ死別れで、千葉県船橋にいた。

焼け出された時に、町内の知人家が避難する跡について来たのだ。勿論歓迎される筈はなく、ずい分ひどい仕打ちを受けたが、私は必死にその避難先にしがみついていた。

それでも、蔭になつてかばつてくれた婆さんが死ぬと、もう子供心にも住むべき家ではないと思つて、私は貼紙を頼りに、市内の小さな中華

ソバ屋に住みこんだのだ。

中華ソバと云つても、日本人夫婦が営んでいて、親爺がコックで、金庫は内儀さんが預つている。私は此処でボーイとも、子守ともつかぬ仕事にコキ使はれた。豚骨のダシをとる釜炊きから、薬味切り、出前は勿論、赤ん坊のオムツまで洗はされていた。

それでいて、一銭の小遣いをくれるわけではなく、それどころか、その家の内儀さんは、三度／＼の食事の度に、私に喰はれるのが惜しくてたまらなと云つた表情で、真正面から睨みつけているような按配だつた。

尤も時期も悪い。昭和二十二年、終戦から三度目の秋で、私は十六才だつた。

或日客が来たから注文を通して、すぐ湯気の立つヤツを運ぶと、四十過ぎた、ゴルフズボンのその客が話しかけて来たのだ。

家は何処だ？ 両親は？ 学校は何年行つた？ と云うような、身上話の強要だつたが私は人恋しくなつていたから、正直に喋つたのだ。

ところが、孤児で、頼りになる親類も居な

いと判ると、男は急に駄をのり出して来た。「どうだね、あんたのようなボーイさんなら東京で高給を出して雇う店があるよ。こんな処でコキ使はれるより、よつぽど楽で面白いぜ？」

そんなことを言いながら、ジロジロと私の駄を眺め廻すのだ。見知らぬ男の、そんな視線が気になるほど私は大人ではなかった。ソバ屋の夫婦の酷使に音を上げていた時だから私はすぐ男の話に飛びついた。

無性に東京が恋いしかつたし、どんな目に逢つた処で元々だ。此処より辛い処は、そうザラにはあるまい——と云う気持があるから話は簡単に決つた。

その男は何故か住所は明かしてくれず、翌日の正午に上野駅の改札口で待つてゐるから必ず来い、と云つた。この時はソバ屋の夫婦とも運よく外出していたから助かつた。私はその晩ねむれなかつた。

翌日は掃除を済ますと、すぐ前日の出前の井を回収にゆく。高下駄をはき、白い前だれを掛け、井を入れる袋をさげて出たまま、私は二度とソバ屋に帰らなかつた。借があるわけではないし、公然と暇を貰つてもいいわけだが、その時の私は懸命にそうしたのだ。

上野駅にはもう男が来ていた。生れ故郷の東京——。私はワクワクして、男の言葉も耳に入らなかつた。

私が生れたのは浜松町の駅近くで、実父は下駄商を営んでいた。今はもう覚えてゐる人もあるまいが、「履物の澁川」と云えば、相当に名の通つた店だつたらしい。私の母は後妻で、他に異母兄弟が三人、同腹の妹が一人あつた。

勿論、このまま育つたら、こんな放浪記などを書く私は存在しなかつたであろう。戦争がその強大な力で、私の一生をねじ曲げてしまつたのだ。

焼けた跡だから地理が皆目分らなかつたがとにかく男について行つた。焼残つた小綺麗なアパートだつた。後で知つたのだが、角筈の淨水場に近い処で、アパートの窓から瓦斯タンクが見えた。

此処で、私は始めてマスターに会つた。その時はもう午すぎだつたのに、マスターはまだベットのの上にいたから、驚いたのを覚えてゐる。外人でも着そうな、派手なガウンを羽織つて、洋モクをふかしながら、切長の眼で私をジツとみつめた。

細面で青白く、オールバックの髪が長い。

私はそれで、始めは画家かと思つた。とにかくバタ臭くて、神経質な感じがあつたのだ。年齢は三十七、八に見えた。しかし、実際はもう四十五を過ぎていて、髪を染めてゐることを、後で知つた。

とにかく、つき会つたことのない人種だと思つて、私は緊張した。例の肥つた男が一人で喋つた。そして、マスターと別室に行くと今度はやたらに御辞儀をして歸つて行つた。男が歸つてゆく後姿を見ると、何のゆかりもない男だが、心細くなつて、私は殆ど涙ぐみそうになつた。

二人になると、マスターは私の両手をとつて見て、

「ずい分荒れてるな」

と、呟いた。毎日ソバ屋で薪割りや洗濯、炭を手ずかみでつかんで暮していたから、人前に出せた手ではなかつたのだ。

「まあ、暫く此処で遊んでな。そのうち新宿の店で働いて貰うから……」

それを聞いて、やつと私はホッとした。

しかし、それからの毎日はなんとも私には納得出来兼ねるものだつた。毎日仕事もなくブラブラ遊んで、食事は当時としては相当贅沢なものが、潤沢に与えられる。小遣もタツ

プリ支給されて、映画にでも盛り場にでも、自由に遊びに行ける。

私にして見れば有難すぎて途惑った。閑だからと思つて、部屋の雑布がけなどをするとかえつてマスターから、こつぴどく叱られた。

手が荒れる、と云うのである。朝晩温湯に

ひたしてから、コールドクリームを磨りこむこと。夜は薄い手袋をはめて休むことを、励行させられた。だから、一ヶ月後には、我ながら自分の手とは思えぬほど、なめらかな肌になった。

手ばかりではない。高価なレモンや

牛乳で顔も、肌もこすつたり、叩いたりする。勿論毎晩の入浴も欠かさない。それから服装の身だしなみも、とても喧しかった。何時もズボンの折目は切れるように、靴やハンカチも汚れないようにと、そんな点はとても喧しかった。

喧しいが、マスター自身も、清潔すぎる程



身だしなみがいい。私は主人のする通りに見習えばよかつた。スプレーで、香水をかける

ことも、ネクタイの結び方も覚えた。だから以前のソバ屋の小僧は、僅かのうちに見違えるような、洒落たボーイに仕上がつたのだ。

私の母は、もともと神楽坂あたりで、芸妓

りしていた。だから、始めてギャルソンの御仕着せを着せられた時は、鏡の前で自分でぼんやり見惚れた。

ズボンは派手なチェックで、一時流行した腰の線がクツキリ出るような仕立だつた。これに上衣は白のダブル、蝶ネクタイ。赤靴と

いう服装で店に出た。

東京に来て丁度三月目だつたが、髪の毛が格好よくノビるまでに、三月かかつたのだ。

それまでには使いで何度も店に来ていたから、毛色の変つた喫茶店だと云うことは知つていたし、三ヶ月の間マスターの薫陶を受けているから、自然に店

していたのを落籍されて、後妻に入つたらしい。評判の美人だつたと聞いたことがあるが色白で、如何にも色つばい人だつたと思う。

私はその母に生写しで、よく母から、

「お前は、女の子に生れればよかつたよ」と、云はれたものだつた。齡よりは多少小柄だつたが、色白で、女の子のようにふつく

の空気にすべりこんでいった。と云つても、マスターはまったく女性的ソドミアで、パトロソや情人もいたから、私とは直接に肉体関係があつたわけではない。

とにかく、私から見れば、マスターはなにか幻想的な雰囲気を持つていて、それにひかれて、私は自然に彼の希望通りに変貌してい

つたと云える。

耽溺の履歴

店はたのしかつた。先輩のギャルソンが二人いたが、私が一番年少だつた。お客も「徹ちやん徹ちやん」と、大事にしてくれる。新顔のギャルソンは、すぐ人気の焦点になるのだ。

大体、こんな店では、給仕と云つても、かえつてお客の方で私たちをチャホヤしてくれる。皆から機嫌をとられて、私は毎晩いい気持ではしやぎ廻つた。勿論誘惑は多かつたけれど、この時代は、それでもまだマスターの云いつけを守つた。だから、客をとつたのは翌年の春からで、すべてマスターの云いなりになつた。

客は鳥越さんと云つて、伊豆の方に大した地所を持つてゐる大金持だつた。四十九と云つたが、もう後頭部が禿いて、珍しいパイプや時計を蒐集する外には仕事もない、結構な身分で、何時も人に騙されてばかりいる人だつた。マスターはこの時、私の水揚料(?)として、法外な金額を吹つかけたらしいが、鳥越さんはあつさり承知したと云う。

この時は赤坂の方のホテルに泊つた。私は先天的に、ウールニングとしての、媚態に長じていたらしい。宵から泊つて、さんざん彼に機嫌をとらせ、スネたり、愚図つたりしてやつと二人が眠つたのは、もう明け方近くだつた。

この一夜で、私は鳥越さんを完全に虜にした。鼻の頭に汗を一杯浮かべた彼の、歡喜の表情を見て、五十男の彼をナメ切つて仕舞つた。まつたく、それ以来、どれだけの金を彼から引出したか、自分でも見当がつかない。

ギャルソンたちは、勿論客の意向次第で、マスターを通じて客とベットを共にするわけだが、私の場合に限つてマスターは客にその斡旋を断つた。それは鳥越さんだけで充分金になつたし、誰の自由にもならぬ、美貌のギャルソンがいることは、店のために有利だつたからだ。

事実、私を目当に、他の同種類の店の常連たちが、私の店に来るようになったりして、毎晩大変な繁昌ぶりだつた。金にも衣服にも不自由はないし、毎日が面白くてたまらなかつたものだ。

ところが、皆からチャホヤされてみると、野暮つたくて、人の好い鳥越さんだけの相手

をするのが馬鹿々々しくなつた。不自由で気が利かないことに思えて来たのだ。一人でも多くの客と、遊んでみたいと云う気持が、押えられなくなつて、とうとうマスターとの約束を破つてしまつた。

始めは或る若いスポーツマンで、雑誌などによく写真が出てゐる美丈夫だつた。その人は、土曜日の晩には必ず店に現はれた。私はある土曜日の晩、気持をそそられるままに衆人環視の中で、彼の厚い胸にもたれかかつた。

「こつやつてると、安楽椅子に坐つてゐようだ。Tさんの躰は熱いね」

「徹ちやん、マスターが見てるよ」

Tは頬を紅潮させて笑つたが、禿の鳥越さんに馴れた私の眼には新鮮で、やつと人並の情事をしてゐるような氣持がした。ギャルソン仲間の軽口や、のろけの仲間入りが出来る、と、思つたりもした。

その晩、私はTと腕を組んで外に出た。カウスターから、マスターがジツと見つめてゐるのも、平氣だつた。その夜の、鳥越さんとの約束もスツボかしたのだ。その後、以前Tと一緒によく店に来ていたK大生が、学業を抛つて郷里に歸つたらしいと聞いても、私は

鼻唄まじりだつた。

Tは、間もなく関西に赴任したが、この頃は私の有頂天な時代で、怖いもの知らずだつた。チャホヤされるままに、美貌を鼻にかけて我儘の仕放題だつた。火遊びが面白くてたまらず、さまざまの客と出掛けた。勿論、鳥越との関係も続いて、会う度に金をセビつた。軽薄にフワフワと暮らしていたのだ。

そのうちに、客ではないが、店の近所にいた地廻りの、多少兄貴株の塚田と云う男と関係が出来た。彼は、自分の名前もロクに書けないような男だつたが、眉が迫つた、短気らしい男前だつた。店には紳士的な、インテリの客が多かつたから、かえつて反動的に塚田にひかれたのかもしれない。

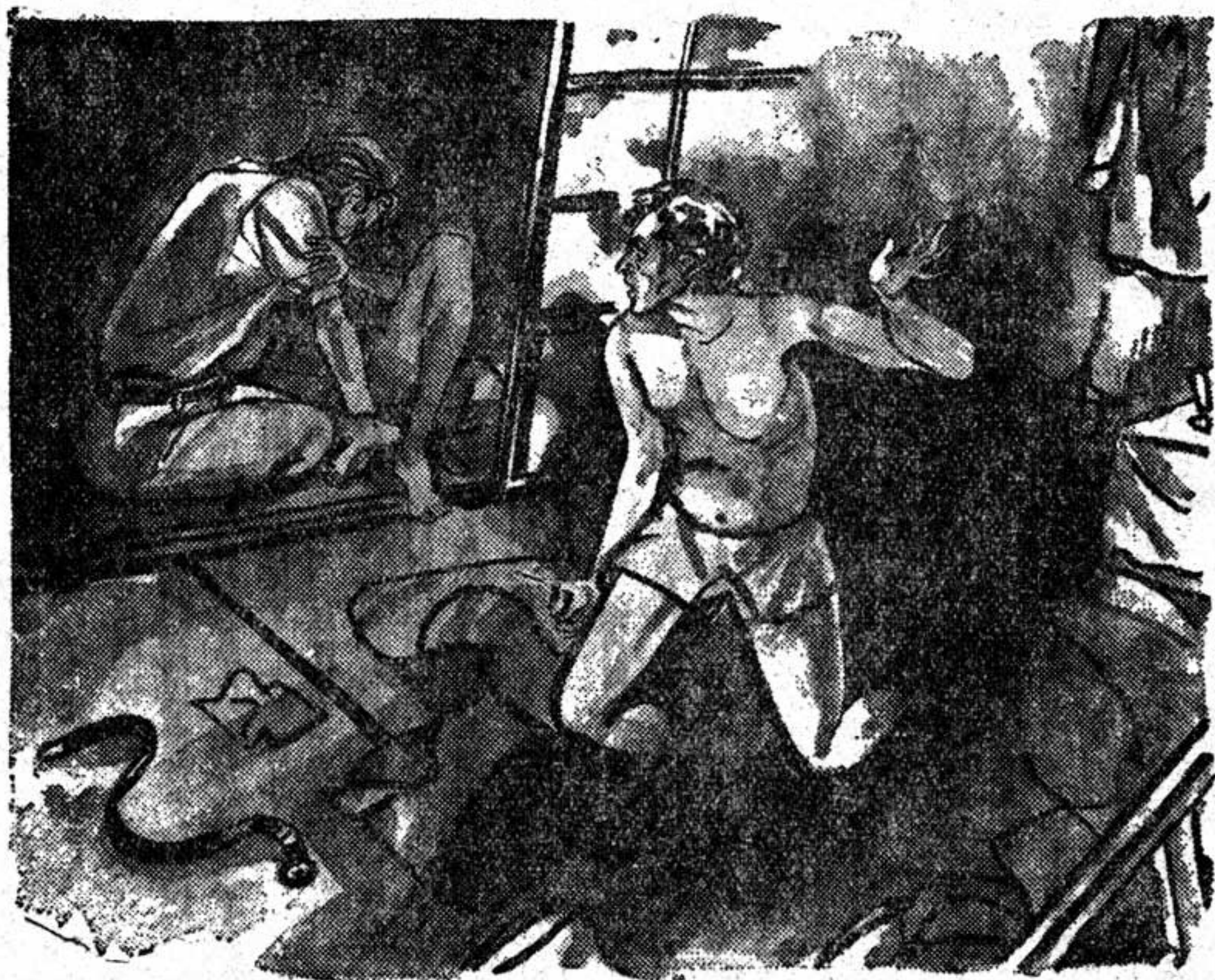
十九の節分の日だつた。彼から電話がかかつて来て、何時になく澁谷駅で待つていろと云う。気になつて行つてみると、彼はその頃流行つたミルキー・ハットを眼深にかぶつて様子が違つている。

「徹公、ちつとばかり間違いがあつたんだ。俺はこれから横浜の知合いのところに行つて暫く様子を見るつもりだ。お前一緒に来るか？」

「お兄さん、一体どうしたのよ？」

「急ぐんだ。ついて来るか、来ねえか、どつちだ？」

彼の思いつめたその調子にひきずり込まれて、私は思はず肯いて仕舞つた。そのまま、東横線に乗込もうと云う塚田をとにかくなだめて、私は店に引き返えした。マスターは留守だつた。私は何喰はぬ顔で居合はせた客から金を借り、金庫から酒屋の拂いに用意してあつた、六万円ばかりの現金をつかんで、飛び出した。当時は私の我儘から、マスターとの間もうまくなかつたし、私より若



いギャルソンたちも入つていて、私はいい加減、店に不満やら倦怠感やらを感じている時だった。しかし、とにかく、浮浪児同様の私を救い上げてくれた恩義あるマスターに、私は後足で砂をかけるような真似をして店を出たのだ。

横浜の知人と云うのは、やくざ仲間ではなく、塚田の軍隊時代の戦友だったらしい。戦友と云つても、並大抵の戦友ではなく、無聊な外地の守備隊暮しで結ばれたソドミア同志だったのだ。

しかし、戸川と云うその男は、土地の船会社につとめ、妻と乳飲児と三人で穩かに暮らしていた。その二階に塚田と私は転がりこんだのだ。

戸川は病身で感情をあまり現さない男だったが、親切に遇してくれた。だが、その細君の方は露骨に我々を嫌い、私がラックスで洗顔し、クリームを磨りこんだりすると、さも苦々しそくに眉をしかめた。

私は始めて店を離れ、塚田も別段仕事があるわけではないから、金があるに任せて、当座はダラダラと自墮落に遊んで暮らした。しかし、その内自然に金に詰つてくる。塚田と云うのは押出しはいいが、無学で単純な男だから、やくざの他には使い用がない。

横浜に来て二月目に、彼は恐喝であげられた。そのため、東京の方の余罪も判明して起訴され未決送りになつて仕舞つた。それでも私は四、五回は差入れに通つたが、その内、ニッチもサッチもゆかなくなつた。

横浜には顔見知りもないし、力仕事などが出来るような私ではない。と云つて、今更店にも帰れない。途方にくれて戸川家の二階でゴロゴロしていた。戸川が会社から帰つてくると、階段を駆け降りて、煙草を無心するような日がつづいた。

戸川と話こんでいると、若い彼の妻が、ヒステリックな声で夫を呼んだりする。井戸端でスカーフを洗つたりしていると、不意に話かけて来て、

「上野には、あんたのような人たちが、大勢いるんですつて？」

と、嘲笑したりする。世間知らずが云はせる言葉だったが、私にはグツと来た。しかしそれでも戸川の二階の、西日のさす部屋から離れなかつたのは、この頃から、もう戸川の人柄にひかれていたのだと思う。

その年の盂蘭盆に、子供を抱えて実家に帰つたこの細君は、そのまま戸川の家に戻らず

人を介して、莫大な慰籍料を請求して来た。

戸川が相手にならず、放つて置くと、今度は家庭裁判所から出頭通知が来たりした。

人員整理が其所此所で断行された時で、戸川は病身で欠勤が多かつたため、勤め先の船会社をクビになる。大喀血はすると云つた騒ぎがつづいて、私は夢中で飛び廻つた。

「徹ちゃん、君が一番貧乏籤をひいたね」

と、蒼白な顔で天井をみつめながらそんなことを云う戸川の、瘦せた頬を見ていると、私は無性に胸が痛くなつて、居ても立つても居られなくなつた。

だから、私が本当に人を愛したのは、この戸川が始めてだったと思う。熱が上つたと云つては一喜一憂し、彼の口に合うよう、食事ごしらえにも気を配つた。本当に夫婦のようなつもりだった。病気が病気だから、肉体の交渉は、別れるまでに、僅か四、五度に過ぎなかつたけれど……。

そんな私が切り盛りする家計だから、すぐ行きづまつた。病人の薬代にもことを欠くようになつてくる。それが何より辛くて、病人の手前は無邪気に、のんびり構えていたが、どうにもならないのは始めから知れている。とうとう勤めに出るようになった。勤めと

云つても、私に何の仕事が出来たらう。駄で習い覚えたことをするより仕方がない……蛇の道は蛇で、ハマのその道の顔にワタリがついた。

此処は東京の店のように、喫茶店形式ではなくて、もつと露骨に出来ている。客は遊ぶのが目的でやつてくる。だから二階には暗い小部屋が沢山ある仕掛になつてゐる。私のように世の中の表面に浮び上れない男(?)たちが、二十人近くもトグロ巻いてゐる。新宿の店に比べて、まったく陰鬱なところだつた。私は夕方まで病人の看病をしてから、出掛けて、深夜に眼の下を黒ずませて戻つてくる。客はあらゆる年齢層を含んだ日本人、それからハマだけに、外国船の船員も、駐留軍の兵士たちも来た。

私は此処では「チェリー」と呼ばれてゐたが、辛かつたのは、新宿時代の御馴染さんとたまに顔を合す時だつた。如何にも倫落の果てと云つた場所だから、客の方でも眼を見はるのだが、私は一円でも余計に収入を上げたいばかりに、嫌な客でも、さんざん機嫌を伺つた。丁度、新宿時代とは逆なのだ。

戸川は敏感な人だし、病気だから一層神経が尖つてゐる。一言も口には出さなかつたが

万事悟つてゐる。口には出さないが、時々猛烈な嫉妬を起す。私が商売用に新調した服やエンジのワイシャツなどを、鉄でジョッキョキ切つて、凄惨な眼で睨みつけられる。

「出て行け! 俺はこの家で、一人で死んでやる!」

「お兄さん!」

飛びつきながら、嬉しいのか悲しいのか判らなかつた。ただ、病人の駄に障ることが心配だつた。

出て行けと云われても、心底から女房氣取りだから、別れる氣はサラサラない。保釈で出た新宿の塚田が、二人重ねて叩き切つてやるなどと大きなことを云つてゐると心配してくる人もあつたが私は平氣だつた。戸川と一緒に殺されるなら、どうせ病氣で先のない人だし、一そ世話がなくていいと云うつもりだつた。

その頃は戸川のやつれた顔を見ているだけで生甲斐があつた。彼の駄なら、足の裏を舐めても、汚いと云う氣はない。それどころか大小便の世話も嬉しさこそあれ、嫌だと思つたことは一度もない。彼が咳一つしても、啖を吐いても、その度に身が細る思いをした。ところが、この頃になると、戸川の親類た

ちが放つて置かなくなつた。信州から兄と伯父に当る人が出て来て、私達の生活は終りになつた。私は恥も外聞もなく泣き喚いて、朴訥な田舎の人たちをあつけにとらせたが、戸川自身が、もう別れる覺悟だつた。

それと云うのも、私の身を思つてのことだつたらうが、とんだ椿姫で、戸川が寝台車で信州に発つてからは、三日ほど食事もしないでぼんやり臍抜けのようになつて仕舞つた。

その後は、氣持の支柱も失つて、自墮落に落ちてゆくばかりだつた。御話にもならないようなことを仕出かして、二度ほどサツにあげられたこともある。

金持の中国人の情人になつて、少しばかりいい思いをしたこともあつたが、これも半年とつづかずしくじつた。あつちにひつつき、こつちにひつつきして暮しているうちに、我ながら、「新宿の徹ちゃん」時代の面影はなくなつて仕舞つた。

船橋から出て来てから、七年になるらしい。根なし草とか、うき草の身とか云う言葉は、果敢ない倫落の女の形容詞らしいが、ウールニングの名に於て、私に冠してもいいと思う。

晴雨秘稿・第二回

女はこう縛られたら
抵抗力を失う

承知の上で縛られた女ならば、女自身快感を覚えるものであるから、女は縛つて玩ぶ、言いかえれば縛つてからの交情を喜ぶものだと私は信じている……

(繪と文) 伊藤晴雨

一本の縄が其の使用法によつて犯罪を構成したり、或は犯人を捕へて社会の安寧秩序を保つという風に、前者は黒、後者は白という分野を持つて居る事は、飴というものが使い方によつては、黒と白とに分けられぬのと同じであると古人は云つてゐる。

「孝子飴を見れば親に薦めん事を思い、盗人飴を見れば戸を開くに用いんとす」

中国では水飴を流して敷居の戸を外したものと見える。一瓶の飴にして既に然りである。

閑話は扱ておいて、人を縛るといふ事は日本古来の裁判には附き物の様である。罪の疑はしさは之を論ぜず、口先だけでは何と言つても、疑がはしきものは先づ縛つて置いてそれから調べるといふ風に、取調べに先立つてまず縛るといふ事が役人の考えであつた、と言つていい。

明治初年に三島通庸に反対した爲に、彼の福島事件を起した河野広中が東京で捕縛されて、福島へ送られる途中、手首を縛つた縄が肉に喰込んで疵を生じ、折柄の暑中に其の縛つた所から蛆を生じたという有名な話は、聞くだけに身の毛のよだつ様である。

徳川時代の岡ツ引の縄は麻縄を用いたと思われるが、明治時代の警察では絹絲の縄を使用したという。絹絲の縄は最も丈夫で切れる虞れがないので、劇場の宙乗りなどに用いられる。(現在ではワイヤロープを使う)

筆者の知つてゐる寄席廻りの役者に、石原美津男という横浜の不良少年上りの女形が居る。

大正時代の銀座のカフェーライオンのボーイに雇はれ、高島田の髪を被つて振袖を着て接客して居た。この女形を真の女と思つてセッセと通つていた有名人があつたが名前はワザと秘しておく。

この男が後に女形になつて東海道巡業中静岡のある博徒の親分の妾と通じて、親分に感附かれ、両手を絹絲で縛られて阿部川へ投げ込まれ様とした事があつた。とこれは本人の話であるが、絹絲で縛られた両手

はどうしても切る事が出来なかつたそうである。

女が縛られて居る形容詞に、荒縄で縛られていると言え、如何にも痛そうに聞えるのであるが、女が絹絲縄で縛られて……といえ、痛そうに感じないのは正に事実である。

「空家に美しい女が縛られて居る」といつただけで、其の女の形の幻想はクッキリと浮んでくる。

ここが被縛芸術？ の面白さである。

「女は縛つて玩ぶべきものだ」といつたら、一部道学者先生連から大抗議が来るかも知れないけれども、遊戯分子を加味して（女が承諾の上で）縛られた女ならば、女それ自体快感を覚えるものであるから、女は縛つて玩ぶ、言いかえれば縛つてからの交情を喜ぶものだとは私は信じて居る。

勿論何にでも例外はあつて、「縛られる」という事を大業に考えて居る女は特別の神経を有する、それこそ変質家であつて、通常神経の女ならば一度縛られて交情されたら、普通の交情を喜ばなくなる。これが多くの女の常態である。飴の様に柔かな女の肌に縄の喰い込む時の女自身の情感は、灸

をすえた後の軽いホテリとほぼ似た快感を覚えるのである。

二

男が女に対して突然縛らしてくれといったら、大抵の女は「そんな事いやですワ」と判で押した様な答をするに違いない。しかし餘程蟲の好かない男でない限り「いやですワ」と言つて男の前から姿を消す様な事はない。イヤだと言うのは、よろしいの反語と思つていい。

これから女の手首を取つて縄をかける手際が容易な事ではない。非常に六ヶ敷いのである。縄の掛け方には、昔は一定の方式があつて縄を掛けられる人の位・階級・職分によつ



てそれぞれ形式を異にし、武士の階級に対する差別待遇とも見られたのであるが、それは公式の裁判に於ける場合に限られるの



其後を記すものば？

て、戦場で敵を生けどりにするといった様な場合に、一々花結びや、綾取り、菱縄など形式一点張りの縄の掛け方をやつては

も無いものである。心の中では喜んで居ても表面嫌がつて居る所に言外の妙味がある。明治時代の女郎の「居振り」という奴は此の間の

居られない筈である。

結論として手足の自由を奪つて逃げられない様にするのが目的であるから、此の場合には方式を一々踏んでは居なかつたに違いない。

女を捕へて縛る事は一種の遊戯として、現代人の間に行われて居るのであるから、必ずしも古人の定めた様式にこだわる必要はない。なるべく相手の体を傷つけずに自由を失はせる事が最良の目的であるから、先づ縛る手際の綺麗な事を尊ぶものである。

もつとも、「サア縛るよ」「勝手にお縛りなさい」とケロリとして居られたのでは、味も素ッ気

機微を考えて行はれたもので、現代人にはこんな馬鹿氣た手間の掛つた事をされて、女郎を買う者は絶無であらうが、振られれば振られる程熱くなるのは人情である。金で買つた女が目前に居乍ら言う事を聞かずイザと言う間際になつて、床の番人ばかりさせられて其都度目的を達しないで帰るのを居振りというのだ。

きわめて悪質の娼妓が、氣に入らぬ遊客に対する反感の表現であつて、王(ギョク)という名目はあつても空文であつて、遊客は娼妓に対して交接を強要する事は出来ない。

遊廓は現代にあつても公然と肉体の売買を認めて居るのであるか、さればといつて嫌がる娼妓を暴力を以つて交接しても強姦罪が成立するのだと、或る法律家の言であるから、色男には誰かなるで、揚代金を拂つて登樓した客が相方に告訴されたら間抜けこの上ない。

内心では喜んで居ても、嫌ですと言はれて之を何とかする面白さは、他人の所有する骨董品を強いて譲り受けて喜ぶ心理と共通点があり、之を悪い方面に見ると、姦通と強姦という所迄落ちつくのであるが、其

所まで行かない様に女を縛る遊戯が行はれて居るのではあるまいかと、私は考えて居る。

縛られた女を見る男（或は女でも）は一種の尖った神経と、激しい胸のときめきを覚え、不感性の人で無い限りは胸の鼓動は高まり、或者は呼吸が切迫する様に覚えるものである。

女を縛る時、女の肉体の感触は一種の動物電気となつて、男の神経に伝はり女の乳の部分に縄を掛ける場合に、女の息は男の切迫する呼吸に一体となつて、コイツス以上の快感を覚える。

又、女性同志の不自然なる或る種の行爲同様、文字にも形容にも全く説明し得ない快感があるもので、女と男との年令の相違とか双方の立場というものも、多分の関係は有るにしても、男が縄を手に握つて女の身体に掛けて居る、極めて短かい時間は最大のコイツスに匹敵し、大抵の男は女と接する以前に多少の射精をして居るのが普通である。

これをしばしば行う人は女の縛る事に依つて快感を得て女との交接を喜ばざる極端な者もあるので、こういう人にとつて「女

を縛る」事は性慾的に極めて必要なのである。

三

「被縛」を喜ぶ女はどういう体格の女が多いか、という事を研究して見るのも興味のある問題である。

「イヤです」と云い乍ら男の方へすり寄つてくる様な女は、被縛より受ける快楽を喜ぶものであつて、自己の身体を自分で緊縛する事は出来得ない事であるし、自己の体の緊縛を矢鱈に、誰にでも頼むという事は羞恥心があつて出来ない。

という事になると、芸妓などの場合には客に頼んで縛つて貰い、自分から進んで逆な立場で強姦されて、喜んで居るといふ様な妓も相当に多い。こういう女に限り「縛るのを好む」客に出遇はないで神経質となり、中には狂暴性を帯び酒の勢を借りて客に縛られて、始めて吾に帰るといふ様な被縛遊戯の域を越した、危険性を帯びた女さへもあるから、こういう場合に「女を縛るのを好む男」に出遇つたとすれば、その女は非常に幸福である。

明治時代の活動の弁士に杉浦翠波という人があつた。北海道札幌狸小路の札幌館に、主

任弁士をして居たこの人は、まだ活動写真というものを見た事のない北海道へ最初に雨降り写真をもつて興行し、樺太辺迄廻つて巨利を占めたという人であつた。

この人がまだ、見習い時代、彼の下宿に訪ねて来た神楽坂の芸妓があつた。名前は失念したが、瘦せぎすの小股の切れ上つた意気な女であつた。

美しく結い上げたつぶし島田髷を、格子戸を開けるなり自分でメチャメチャに壊して、髷の根がガツクリと抜けてしまつて人情嘲の豊志賀の髪を引くという凄じい頭髪をして、丁度松浦君の所へ女の訪問客の来て居る時を見はからつて、飛込んで来た。ギシギシきしむ梯子段を夜叉の如き勢をもつて飛び上つて来た。而して松浦君の胸ぐらを取つて室中を引廻し、女の訪問客に武者振り附くと云う乱暴振りに堪り兼ね、松浦君は有りあわせの細引で其の芸妓を縛つてしまつた。其の後で女は××××××××××。

それからの松浦君は女を縛つてからでないとコイツス不能患者になつてしまい、女は性力を消耗して骨と皮の様になつて肺を病んで死んでしまつた。

女が自分で髪を壊して、縛られる爲に乱暴を働いたという事が、女が最後の息を引きとる時に始めて判つたと松浦君は語つた。

縛られるのを喜ぶ女は、概して神経質のものが多く、其の爲相手となる男は、臆充質の中肉中背の人が多い様である。

四

「女を縛る」秘伝という様なものは、格別に無いが「法は伝うべし、術は伝う可らず」と古人も云つてゐる様に、術は以心伝心のもので、縛る人と縛られる人の間には、間髪も入れ得ない自然に一脈相通するものが無ければ、うまく女を縛る事は出来得ない。

それは太神楽の丸一が、高座で皿の曲芸を演じ、投げる皿と受ける皿とが互に入れ交つても、一枚の受け損じが無い様に、女の体に掛つた一本の縄は、女の急所をピタリと押へて一瞬の間に縛り上げて了う、と言う練習が必要であつて、縄を持つてからどう縛ろうかなどと考えて居る様では、全く駄目で、女の方で気抜けがして縛られるのが嫌になつて了う。

話しが順調に進んで、縛られる事を女が

承知したら、女に対して手加減や、手心を必要は少しもない。ピシピシと手早く縛り上げてしまふ事が肝要である。此の場合に、妙な感じや感情を以つて縄を取り上げると、女は嫌悪を感じて縛られるのを断わる様な事に、出遇うのを忘れてはならない。

これを手取早く云えば、女を縛る時は全く色情感を皆無にして、虚無の心境に入らなければならぬので、他人の妻君であろうと、愛人であろうと、そんな事は毛頭考へる事はいらない。心頭滅却し禪の三昧境に入つた如き態度をもつて、極端に云えば女を一個の物体と思つて縛るので、丁度運送屋の店員が荷物に縄を掛けるのと、何等変らない様な態度が必要である。

この様な態度で女に臨めば、女も亦安心してどんな縛り方をされても、縛り上げる迄は全く無抵抗、快く縛る事が出来るものである。

女を縛る秘事も云う可きは、女に対して恐れず、遠慮せず、冷静な態度と精神を以て縛るのが秘事である。併し冷静という事は、云う可くして仲々行はれ難い事で、殊に人数集まつた宴会の席上などで、居合せた芸妓を縛る事などは餘程の手練と、多分の動物電気（妙な云い方であるが）の所有者でないと

出来ない。

「一寸縛られて御覽」「そんな事イヤですワ」「……………」ここでグット一押し押し返す精神力があるか無いかという事が、勝者敗者の分岐点である。

碁の名人の勝負と同様、結局は体力の問題になつてくる。今一押しという所で押しが利かないと、女に逃げられてしまうのである。虚心坦懷を装つて女の自由を奪つてからの後は、これを常識に訴へる事と、縛つた人の自己反省に求める外はないから、ここにおいては省略する事が当然である。

五

女を縛つて或る種の目的を達した以後に起る人情に就いては、よい結果と悪い結果と、東西相反し、南北相異なる如く、正反對な結果を招来する事があるので、今は其の良い結果に就いて語る事にする。

政界の大立物として代議士で有名な某氏（特に名を秘す）は、容貌風采頗る揚らず議會壇上に雄弁を振つて天下を震駭せしむるが、女にかけてはいつも失敗が多く、これと言う時に女に巧みに裏をかかれて馬鹿を見る事、挙げて数う可らず。いつも友人

の笑い咄になつて居たが、自己の経営する事業に熱心なるが如く、女の方も執拗でこれと思ひ込んだら、決して途中で退却するという様な事はしない。トコトン迄追いつめるといふ悪癖が嵩じて、新橋の芸妓を螢見物に事寄せて誘い出し、大宮公園の或る温泉旅館に二人で泊つた。

私の友人に斯道の達人が居て、女に対しては一種の哲学を持つて居るが、其の男のいふ事が面白い。「女が男と一緒に連れ立つて行くといふ事が、既に男に許して居るのであると言つて居る。

理性に富んだ現代の女性には、一寸通用し兼ねるが「現代に処女なし」と定めて掛つて居る人もあるから、そういう見方も亦一種の女の定

義かも知れない。某代議士は女を誘つて、前記の旅館で一箋傾け、今夜こそはと女を口説いたが、例の如く体よくお断りを喰つて、女は電話でハイヤーを呼んで帰ろうとした。帰へられてはそれ迄の苦心が水の泡とばかりに、電話口の女を暴力で押えつけ、かねて

用意の細紐で女を縛り上げて了つた。離れの間が隔つて居るので、女の叫び声はおもやへ通じなかつたと見えて、女に救援の手は届かなかつた。

翌朝ガツクリと根の抜けた島田番の元結を、旅館の女中に借りた鋏で切つて、意気



な櫛巻きに結び替えた。芸妓は其まま某代議士と共に、睦まじ気に関西旅行の旅に上った。

数日後には莫大な借金を代議士に拂つて貰つて、彼の事務所へ納まつて居たという実話がある。

女を縛つてから女の方で男へ好感を持つ様になつた。いい例としてのこの話の如きは、けだし異例と思はなければならない。全部の女が縛られて後に、守宮酒をのまされた様になるものではないから、危ない橋はなるべく渡らない方がいい。

六

女を縛る法というのが、昔しの秘画に在つたがそれは単なる机上の空想で、実際には決して行い得ない方法である。秘画の一部である以上強姦であるが、これは作者の構図上の遊戯に過ぎない。又風俗上、風教上にも有害だと思ふから、ここには説明を避ける事にした。

責めの研究を真面目にして居る大学生が筆者の某書肆に与えた原稿を、出版前に内見したいと申込んで来た。蟲のいい学生である。法医学の立場より女の責めを研究し

て、博士論文を書くのだといつて居る。面白い学生である。

編集長氏家君より与えられた豫定の紙数が盡き相になつたから、結論として女を縛る時の縄の扱い方を記して「縛る遊戯」をする人々の参考にしようと思う。

女を縛るには度々言う如く、女の乳の上に縄をかけてはいけない。強いて之を行えば、女が恍惚境に入る以前に、胸部を圧迫して、折角の興味をメチャメチャに打ち壊す事があるから、注意せねばならない。

縄は成るべく柔軟なものを可とし、新らしい細引等は用いぬ方がいい。

新らしい細引は「蛇口」を除けば、女の手首に喰い込む工合が強ければ強い程、女の忍耐が続かなくなる事もあるから、なる可く古い紐を用うる方が縛る方も、縛りやすいし、縛られる女も感じがいい事を知らなければならぬ。

猶、女を縛る縄や紐に就いての、人体に及ぼす感度、其の他に就いては稿を改めて記事にする。

★

★

★

伊藤晴雨先生著 會員 頒布 價五百圓

凄艶女體 秘畫集 拷問私刑

手梳和紙台紙付 豪華艶麗彩色特型映入 限定會員頒布版 第一集 (五枚一組) 本畫集は獨特の豪華印刷の上に不世出の名人伊藤晴雨先生が要所に直々手指しをほどこした艶麗豪華他に類を見ぬものである。限定版につき至急御申込み下さい。

東京都千代田区神田神保町二ノ三四 日本特集出版社代理部

好評嘖々の讀者優待

責め 眞撮 影會

讀者優待の責撮影會の第一回は三班に別れ好評裡に終了いたしました。第二回は又々新趣向をこらして九月二十三日(日曜日)開催致します。御申込は至急ハガキにて御願致します。詳細は折返し御返事の際御通知申し上げます。會費二千圓

東京都千代田区神田神保町二ノ三四 日本特集出版社

特 集 ・ 責 め

お種具 に各道 める小 責けの

そこで、やゝ専門的なサジストたちは、「絹麻」と稱する、細い麻を整理して、絹のような触感を出したものを使うようです。これならは皮膚への抵抗も少いし……



谷 子
細 満 佐

歌舞伎の「責め」

浦里を

浦里を

庭の古木にくくりつけ

折しも降りくる雪吹雪

箒おしとり打つ音に

禿みどりが取りついて

旦那さん

御勘忍あそばせと

すがる禿も共縛り

……

これは、端唄『浦里』（本調子）です。

歌舞伎舞踊劇『明烏』の、あの遊女・浦里の『雪責め』のそれを詠ったものです。

『明烏』は、明和六年、浅草蔵前の豪家の伴・伊之助と、新吉原葛屋の抱え遊女・三吉野の情死事件を、初世鶴賀若狭掾が新内にしこんで、『明烏夢泡雪』と題したものが最初。

これを、嘉永四年、江戸市村座で初演するときに、新内では下卑ているというので、清元千蔵が作曲、櫻田治助が作詞したものが、『明烏花濡衣』で、——春日屋時次郎、じつ

は赤穂義士佐藤与茂七と、山名屋浦里との情話から、あの浦里の『雪責め』までが、その大要です。

頂点は、浦里が、時次郎と馴染みを重ね、みどりという娘までなしたが、時次郎は金の工面にこまり、堰かかっているのを、密かに首尾して忍んでいたところ、ヤリテお萱にみつけられ、時次郎は突き出され、浦里は降る雪の中、松の木にくくられて、みどりともども『責め』られる、その『雪責め』にあるわけで、数多い歌舞伎劇の『責め』の場面でも、ズキズキするような迫力があることは、大方の先刻ご承知のところでありましょう。

ここでは、『雪責め』のほか、『縛り』、『括り』、『吊し』、箒による『打ち』など、いわば『責め』におけるおおよそのものはいつています。

そういう意味でも、この『明烏』の『雪責め』は、『責め』に関心をもつ者にとり、絶対にはずせぬものです。

だいふ、前おきが長くなりましたが、『責め』における各種の小道具を、この『明烏』の線にそつて、みてみましょう。

職業淫虐症娼婦

『サディズム』(加虐症)の元祖マルキ・ド・サドや、『マゾヒズム』(被虐症)の元祖ザッヘル・マゾツホを生んだだけあつて、さすがにヨーロッパは、『責め』の本場のようです。今次の大戦で、どうなつたか判りませんが、独逸ドレスデン博物館には、各種の『責め』の小道具——とくに『マゾヒスト』用の小道具が蒐集されてあつたことをみても、それが如何に旺んであるかが、推察されましよう。

じじつ、戦前のヨーロッパ——なかんずく佛蘭西パリや独逸ベルリンの売春窟には、『職業サディスト』や『職業マゾヒスト』の娼婦がいて、多くの異常症患者たちの慾望をはらしていたのです。

そこに集る、異常症患者たちの中には、上流社会の紳士や、富豪などもあつて、晝は社会的に、品よく、常識的に活動しているくせに、一旦、夜ともなれば、その晝の『彼』からはとうてい想像もできないほどの、非常識的な行爲に耽つている姿があつたのです。

——天才と気違いとは紙一重などいいますが、異常症と普通人とは、表裏常在しているものなのでしょうか？

しかし、この分析は、ここでは不必要であ

りましょう。

何故、『責め』るのか？

何故、『責められ』るのか？

それらについての詳しいことは、いずれ、記すことゝしまして、——まず、『責め』の主流の一つである『打ち』の小道具から……

二枚張り『兩ミシン』バンド

『わが身を捻つて他人の痛さを知れ』

という諺がありますが、異性を虐待し、その苦痛を想像し、これにより、烈しい性感を感じるのが、サディズムです。

ふつう健康な精神の持ち主は、このような異常感覚は表面には出ないものですが、しかし、こうした感覚は、多かれ少かれ、人人の内奥にひそんでいるものです。

たとえば、——何かの機会で夫婦喧嘩などして、カーツとなつたあげく、夫が妻をピシヤリと平手打ちしたときに、一種異常な感覚——ゾクゾクとしたときでもいおうか、なにか性的な感覚に痺れるときがあり、妻は妻で、打たれてジーンとなりはしたが、それが、単に痛い……というだけの感覚ではなしに、何かビリビリとするような快感に疼くときがよくあるものです。



これは、内奥に潜在している倒錯性慾が、
そういう衝撃で、ハッとめざましたのであり、
これが亢進すると、本格的に加虐、ないしは
被虐症となる訳です。

加虐、または被虐症も、はじめ軽いうち
は、単に、平手打ちくらいで済ましていられ
るようです。

たとえば、幼児の悪戯を叱責するとき、
臀部を平手打ちする……といったような形式
で――。

ところが、それが亢進してゆくに従い、そ
んな簡単なことでは、満足しなくなつて来ま
す。

何かもつと強い苦痛と耻辱を相手に！

そこで、手近かなものをもつてする『打
ち』となるのです。

まず、バンド、から見て行きましょう。

『キツド』(羊皮)^{ひつじかわ}、『カーフ』(犢皮)^{こしうしかわ}、『セー

ム』(鹿皮)^{しかかわ}、『クロコダイル』(鱷皮)^{わにかわ}などが

あるが、広幅、厚手の一枚皮のものや、いわ

ゆる『無双』のものよりも、細幅、薄手二枚

張り『両ミシン』のほうが、効果的だといわ

れています。

これは、人間の皮膚感覚中、もつとも多く
分布している『痛点』(痛みを感じる感覚点
で、全身の総数二――四×百万)^{かひる}に対し、よ
り多くの刺戟を与えるよりは、少く与えたほ
うが、感覚的に強く痛みを感じるからであつ
て、――たとえば、平手打ちで打たれるより
も、指二本で打つ所謂『シツペ打ち』のほう
が、痛みが強いと同じわけです。

もちろん、この場合、その『打力』の強弱
にもよりますが、『責め』における『打ち』
は、折かんだはないのですから、無意識的に
『打ち』にも、力が加減されていることはい
うまでもないでしょう。

したがって、バンドによる『打ち』も、細
幅、薄手の二枚張りのほうが、効果的だとい
われるゆえんであります。

特 集 ・ 責 め

異常嗜虐四景

「二、三日めしをやらずにいると、女は壁をあげようにも壁は出ないし、もがこうにももがけないし……」そういうKの眼に、メラメラと燃え出しそうな炎は、妖しいというか、息がつまりそうにみえた……

人 見 謙 次 郎

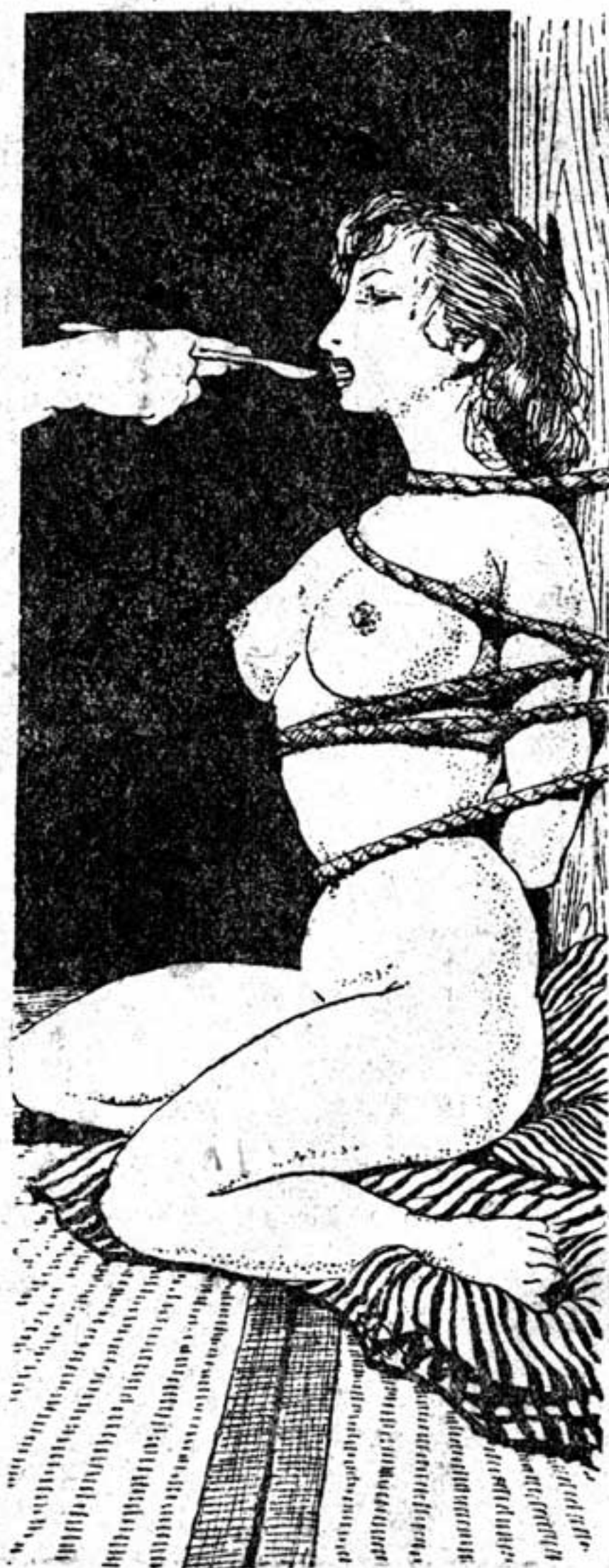
男女の結合とか夫婦和合とかの言葉は、人間の世界に道徳という社会生活の基準が作られてから発生したもので、本来生物学的にみれば、男性と女性の関係は一種の闘争である。

種属保存と一族繁栄のために、男性は女性を征服しようとするし、より優秀な種属の種を受けようとして、女性はいいつも目前の男性に反抗する。これが本能となつて、性行為中の男女の形態にも表情にも、つねに憎悪の極のような外貌を現わすのは、自然が伝えた本能の伝統である。

そうして、いわゆる『責め』こそ、人間の性的本能を、もつとも原始的に現わしたもののかも知れない。

男性側から女性側を征服するのみならず、カマキリ的一种には性行中に雌が雄の頭から喰いはじめて、わずかに接触部だけを残し、なおかつ性行をつづけているものすらある。雄の部位は、まことに満足そうに雌に密着したまゝである。

ここに私の知人の数人について、その害例を書いてみたい。



食事責め

友人Kの家は高円寺の小さな住宅街にある。まわりを木立ちにかこまれて、門はいつも閉じたまゝである。呼鈴を押すと細君が出て来て門のカンヌキを外してくれることになつていた。

が、その日に限つて、いくら押しても出て来ない。様子知つた家なので、私は裏へまわつて木戸をあけた。不在ならば、縁側へでもかけて待つてゐるつもりであつた。

すると、

「すみません……」
残暑でまだ暑いにもかゝらず、障子をしめきつた中から、細君の声がした。

「いらしたんですか。K君は？」
「はア、今しがた出て行つたんですけど」

と、障子をあけて現れた細君をみて、私はゾツとした。平常から面長のやせた顔立ちではあつたが、それが真つ蒼で、唇の色もない。額に乱れかゝる髪が、白い襟脚にもつれ後手で合せてはいるが、しどけなくハダカツた胸からのぞいた肌にも蒼い筋が、ふるえるように浮いていた。

「どうしたんです、ご病気ですか？」

「はア……いえ」

と、いゝながら、無理から笑おうとする細君の頬に、かすかに血ののぼるのがわかつた。

私は、ハツと、うなずくものがあつた。

それは日頃から、Kが一種の変質的な愛情をもつて細君にのぞんでいることを知つていたからだつた。——結婚後五年になるが、その変質的な夫婦生活の故にか子供が生れず、二人つぎりの生活をつゞけている。まだ二人は、Kが三十を出たばかりで、細君は廿五六だつた。

以前——二三年前までは、細君は生傷の絶えまがなかつたが、その後は肌に傷はないかわりに、手首や足首に、いつも環状線の赤いシミが出来、ときにはそこから血がにじんでいることもあつた。

それでいて、夫婦はいたつて幸福そうだつた。ある日のこと私は、

「君、細君をあまりイジメては可哀そうだね。あんな貞淑な、おとなしい人を」

と、云うと、Kは脂切つた精力的な顔をほほ笑ませて、

「いやね、あれで女房のやつ、喜んでゐるんだよ。僕もあゝしないと満足できなくなつち

まつたんでね」

と、云つたことがある。

満足さえしているならば、あえて他人の僕の干渉するところではあるまいと、其後はすてておいたのだが、その日の僕は、いささか驚いたわけである。——

「しかし、お顔色があんまり蒼いんで——」
と、いいながら部屋のうちを覗くと、布団が敷つばなしで、その裾のほうには、茶碗が一つとスポンが置いてある。

「おなかでも、こわしたんですか？」
細君は、かねてから僕が知つてゐることを気付いてゐるのでか、うつむいて云つた。

「あの、……ご飯を喰へさせないのですから」

「えッ、ご飯を？」

「この三日間ばかり、カタクリを茶碗に一ぱいずつしか……」

私は驚いてしまつた。これでは、元氣だが繊細な質の細君は病氣にもなるだろう。……しかし、それ以上はつツこんで聞けないことなので、私はK家を辞した。

翌日だつた。勤先から電話をかけて、退けどきにKとあつた。ビールを飲みながら、
「君、細君にご飯も喰わせないで可愛がつて

「おいては、病気になるぞ」

と、一寸酔がまわつてから云つてやつた。

するとKは、相変らずニヤニヤして、

「なに、空腹に堪えられないときの昂奮はふつうの女の何増倍にもなるからね。声をあげようにも声は出ないし、もがこうにも、もがけないし……たゞ、それだけしか考えられない境地で、じつとしている気持が君にわかるかい？」

そのときのKの、アルコールのはいつた眼に、メラメラと燃え出しそうな炎は、妖しいというか、息がつまりそうにみえた。

それから別れて行く途中で、

「じゃア、また……」

と、云つたKの精力あふれるからだ――。

それはこれから昂奮した十九貫の肉体で、あの十一貫あるかないかの細君を、空腹でヨロヨロしているのを、責めることの楽しさに、ワクワクと胸を躍らせているように、私にはみえた。

水 責 め

しかし、K夫婦の行爲は、それだけではとどまらなかった。

一定の行爲をつゞけると、それに飽きてし

まつて、また次の方法を考え出すらしい。

ある日曜日の午後だつた。私は、必らず会わなければならぬ用事があつてKを訪ねると、容易に細君が出て来ない。例によつて裏木戸へまわつて、はいろうとしたが、ここも鍵がかゝつてゐる。

仕方なく引返そうとした私の耳に、ウーン……ウーン……と、いう細君のらしい唸めき声がきこえる。

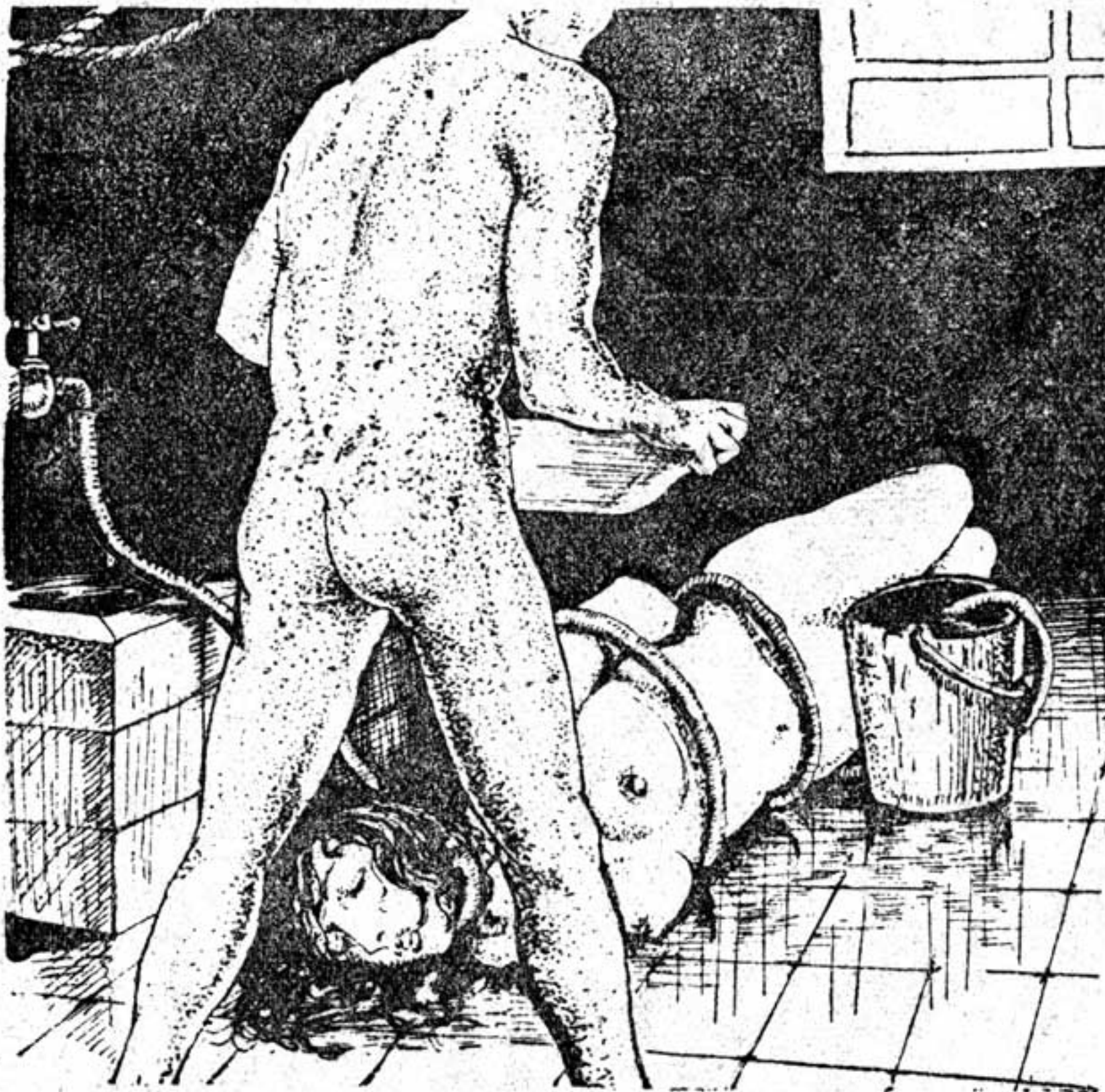
当時――去年の春の始めだつたが附近に晝強盗が現れて、留守居の女とみれば暴行や強盗をやつて行くことが、しばしばだつたので、私はハツとして、裏木戸の脇の垣根の破れから這込んでしまつた。

唸めき声は裏座

敷の方だつた。私が、縁側から、

「奥さん、いますか？」

と、声をかけると、唸めき声はハタとやんだ。首でもしめられたのではないかと、怖る立つてゐるところへ、



「なんだ、君か。どこからはいつたんだ」

いきなり、おこつたような声で、座敷の横の廊下から現れたのはKだつた。その姿は、サルマターツで、昂奮で赤い顔をしている。眼まで血走っているようだつた。

気がつく、その手も、からだもぬれている。春とは云つても二月の終り頃で、まだ背広の下へセーターを重ねていても寒い頃なのに、裸で赤くなっているKをみて私はびくりした。

「どうしたんだい？」

すぐに頭に來はしたが、知らぬ顔で云つた。

「いや……なに」

と、おこつたような顔だつたKは、急にニヤニヤした。が、同時にブルツと身震いして「まア待つてろ。すぐ済むから」

と、云つて引返した。

果然と、私は立つていたが、マフラの襟からゾーツと寒気がしそうだった。

五分ばかりたつて、Kはドテラを着て出て來た。そして座敷へ私をみちびいた。

火鉢にはカンカンと火がおこっている。ウイスキーを、ホットにして二三ばい、たてつけにあおつてから、

「ホウ……いゝ氣持だ」

まだ昂奮から醒めきらないように、私のいることも忘れたように、Kは云つた。

そこへ細君が出て來た。冷たく血の氣のない頬で、唇の色がなかった。ただ眼だけがギラギラ輝いている。あの頃よりも一層、頬はうすく、肩の骨はとがつているようだつた。パーマした髪が、いま拭いたばかりらしく濡れて、頭の地肌に喰ツついている。

「いらッしやいまし」

と、云つた声がかすれて、小さな膝がまだふるえていた。――

つまり、この日の夫妻は、浴室で『水責め』の陶酔にひたつていたものゝようだった。

あとでKが自由するところによると、

「寒中の水責めが、一ばんいゝ。こごえ死ぬかと思うほどの苦痛の底で、ただ情念だけに生きていることを意識するんだからね」

「それで細君も満足するのかね？」

と、きくと、

「そりやそうさ、苦痛に堪えられないで逃げ出そうと思ふらしいが、それでも逃げられない何かが、引止めているんだ。理窟や観念では理解出来ない、本能だね」

と、自分でも自分を、いや自分たち夫婦を投げ出してしまつて、しかもその中に満足を

一ぱいに味わっているらしかった。

露出責め

私の高等学校時代の友人に、文学好きで文学書ばかり読んでいるのがいた。暗いロシヤ文学については、特に興味をもっているらしく、彼自身、つねに暗鬱な顔をしていた。

これが、私の住まつている所から程近い荻窪の奥へ引越して來たのは去年の夏だった。

私は、ときどきその家へ遊びに行くのだが、彼は三十を三つ出ているのに、細君――いや細君というのではないらしく、いわば同棲生活をしている女とでもいうのか、妻だと云つて私に紹介したことはなかった。初対面のとき、Sは彼女を

「お世話になつてゐる吉田さんだ」

と、云つたのだから、――その吉田という婦人は、三十七八の肥満した、色の白い、そう美人というほどではないが、なにかしら男性をそりそうな濡れたような腫と唇をもつていた。

その住宅というのが、小さな邸宅と云つてもいゝ明るい洋風の建物で、Sの現在の地位では住めそうもない家だった。つまりその婦人から、Sの生活の大部分が補われているよ

うだった。——云つてみれば、若い燕だろ
う。

常には、Sは、以前に変わらず、長い頭髪を
額へ垂れて陰気な顔をしているのに、婦人は
いつも明るく開ききつた牡丹の花のような感
じを与えた。

ある日のこと、私がSの家へ行つての帰り
に、やはりその近所にいるある未亡人に出会
つた。Sの家へ行つたことを私が云うと、

「あら、あのSさんのお邸ですか！ まア、
あそこ奥さんはヘンですつてねえ」

と、オシヤベリの未亡人は云う。

「何がヘンなんです」

「いやね、いつも裸で二階の窓から覗いてい
らッしやるんですツて」

そう聞いて、しばらく経つてから、私はあ
る日、Sをたずねて行つた。門をひと足はい
ると、ピシリーツと、鞭の音がした。

ハツとして立どまつた。バラの生垣越しに
みえるテラスの上へ、吉田さんの真ッ白い豊
満なからだ、転げるように駆出して来たで
はないか。

あッと私は息をのんで立ちすくむ。

その私と、吉田さんの眼がマトモに会つ
た。ハツとしたように、両手で胸と前を押え

て引返そうとする吉田さんに向つて、室内か
ら、またもピシリーツ……と、鞭がハネ返つ
た。

吉田さんは、その鞭に白い肩先をまかれて
一糸まとわぬ姿のまゝで、彫刻のように突ッ
たッてしまつた。明るい陽が、その肌一ぱい
に当つている。子供を生んだことがないとみ
えて丸く盛上つた乳房、ゆたかな弾力を思わ
せる腹から腰の曲線、——それが私と真向い
に、生垣の真紅のバラの花をちりばめてみえ
たのだつた。

私は息をすることも出来ないほどに、立ち
すくんでしまつた。——三分か、五分かわか
らなかつたが、私の眼の中に焼付いてしまふ
頃に、吉田さんは引ッこんで行つた。

あとでわかつたことだが、吉田さんの裸体
を人眼にさらし、その羞恥心にもだえる姿を
がみて楽しむのか、あるいは、美しい吉田さ
んの肉体を他人の男性にみられることによつ
て起る嫉妬の感情でSは自分を掻き立ててい
るのか、その辺の事情はわからないが、とも
かくも私は『露出責め』の奇癖にSが陶醉し
ていることを知つたのだつた。

不 犯 責 め

最後に私は、私自身の告白をしなければな
らない。以上のような友人をもつている私は
しぜんこの『責め』について興味を覚えて
来た。私自身、生来虚弱的な体質なので——結
核の二期はとうに通りすぎてしまつている——
——今もつて妻を娶つていない。

しかし性慾は人一倍あるのだが、それを人
並に遂行すると、自分の生命を縮めることに
なる。だが、恋人は二人ばかり——一人は二
十三歳の娘で、一人は私と同年の三十三歳の
未亡人だ。

私はこの二人と会つて、自分を満足させ、
相手も満足させつゝ、私の体力の消耗を防が
なければならぬし、しぜんの行爲が、やがて
一種の変態行爲になり、これが習慣となつた
ものだつた。

未亡人との場合は、専ら私のアパートの一
室で会ふのだが、ある程度迄は行つても、決
してそれ以上の行爲は行はない。つまり完全
な情事ではないのだ。

こうした行爲は想像以上に苦痛なことであ
つた。体力の消耗防禦になるよりは、終末の
ない情念の奔騰に私はだんだん瘦せ細つて行
く感じだつた。

(おわり)

特 集 ・ 責 め

サディズムな性のたわむれ

彼女は自分で自分を虐めたい慾望にかられるまゝ、自分の最も愛執する下腹部に刺青の苦痛と自虐の陶醉を味わいたいと考えるようになった……

那 加 道 郎

模倣サディスト

たまたま或る会合の席で、嗜虐の話題が中心になつたことがある。一応は社会的にも健全な地位にある紳士と云う名のお歴々だったので、彼等がこんな話題に興味をもっているやうなことに、私はまず奇異な感じをいだいたのであるが、話が酣になるにつれて、どうやら彼等は、自分ではいつぱしのサディスト

として自覚している模様なので、これにはすくなくらずおどろかされたのである。

彼等は例外なく二号や三号くらいは囲つて、漁色三昧の生活を追っている人たちで、云い合せたやうに、

「色事も刺戟がないと退屈するので、この頃は女を虐める遊びを始



めた」

と云うのである。そして、

「どうせ物質で解決できる女なんだから、すこしくらい傷をつけたつてかまわない、女なんてどうせ男の遊び道具なんだから、鞭とか革ベルトで思いきりひっぱたいて、めっず腫れくらいつけた方が実感が出て面白い」

と云うようなことを話していた。とうてい今日の時代に適用する常識ではないし、こんな話を真面目にきくほうがどうかしていると思われるだろうが、こんな時、うつかり下手に眉でも顰めようものなら、

「そんな微温的な感覚では、とうていサディスティックの陶醉など味わえるものでない」と一遍に軽蔑されてしまいうるような空気である。だからみな、一応は肩をそびやかして自己のサディストぶりを誇示せざるを得なくなる。

そこで、いきおいの赴くまま各自は尾鰭をつけた自分の体験談を吹聴する。一人が喋るともう一人が、前の話に負けまいとして、さらに凄惨目をおもしろくする話をする、と云った按配で、夏の夜の怪談ならぬエログロ談義はいっ果てるともないほどであった。

いずれも誇張と自己陶醉に粉飾された無責任な放談であるから、もちろんほんとうに耳をかたむける興味などおこらなかつたが、私は彼等の話をきいているうちに、フトこんなことに思いついたのである。

女遊びに憑かれた金とヒマのある人たちのあいだに、アクの強い遊びの「型」として、女を虐める遊戯が流行り出してきた、それは羞恥と節操に麻痺した恐るべき露出症状で、ほんとうに彼等が云う「遊び」以外になんの内容ももたない、いわゆる変態的四疊半趣味なのではないだろうか――。

男が女を虐めて昂奮し悦ぶ心理を、今日の常識では誰も「変態」と嘲笑うものはないだろうが、このように単なる遊びの具として、女を虐め、サディスティックな模倣に肩をそびやかす傾向に対して、私は何か慄然とするものをおぼえてしかたがない。

健全であるべきはずの男女が、性の満足を助長するため殴つたり殴られたりしてそれが最高の刺戟でもあるかのようになら考えている。まして物質で解決できる女だからと云つて、無謀な暴力をふるうなどと云うのは寧ろ滑稽千万な話である。

想像サディズムと云うのがあつて、女の迫害される絵や写真を見てエレクトし、それで満足を得ているものがあると云う。いわゆる非実行派で、実生活においては女にきわめて無表情であるが、想像の世界ではあらゆる残酷をほしきまにする、彼はそれだけで満足するのである。実行派の諸君に云わせると、それはサディストではなくオナニストであると軽蔑するが、私は寧ろ模倣サディストなどより切実で性格的なものを感じるのである。変態的四疊半趣味とはおかしな言葉であるが所詮は模倣サディストは旦那趣味であつて、そう長つゞきのするものではない。

模倣サディストのサンプルになるような話がある。自らサディストをもつて任ずる或る男が、斯界の大先輩であるS先生にたのんでマゾヒストの女を紹介してもらつた。彼の写真技術は素人離れがして、それまでにS先生について責めポーズの写真を何百枚となく撮しているの、さつそく女を縛り、責めポーズを何枚か撮した。その日はそれで女を帰したが、それから幾日かたつてまた女を呼んで幾ポーズが撮した。そんなふうに約一年くらい、めんめんと同じことを繰り返して

いたが、彼はとうとう女の牀に指一本触れなかつたと云うのだ。

私はこの話を、この頃知りあつたその女から聞かされたのであるが、彼女は初めS先生からその男を紹介される時、

「写真を撮つたり、実行したりするんだが、すこしくらい痛い思いをするかもしれないけど、心得ておいてもらいたい」

と念をおされたと云う。だから彼女は、

「一年間もそうして写真モデルとしてつきあつてしまつたけれど、それまでにどれくらいあらあらしい男の暴力を待ちのぞんだかわからなかつたのに、あのひとは縄をかけるのにも『痛くないかい?』と幾度も念をおすくらいで、わたしはいつも満ち足りない気持で帰つてくるよりほかはなかつた」と嘆いていた。彼女は自分でも云っているほどひどく醜い女であるが、それでも、

「女は殴られる時がいちばん美しいのではないでしようか、わたしは殴られる自分の姿を鏡にうつして見るのが何よりたのしいのです。自分でも恍惚^{うつろ}としてしまうくらい美しいと思えるんです」と云っていた。

それにしても、一年も同じ女に接していな

がら、こんな簡単な願望さえかなえてやれなかつた男が、いつぱしサディストのつもりでいるのだから恐れ入る。

マゾヒストと刺青

刺青のことを「がまん」とも云う通り、彫物にはかなりの苦痛がともなうもので、責めの心理では自虐に共通し、刺青のあるものはマゾヒストとも云えるだろう。

この刺青のことで、突然、ある未知の婦人から相談をうけたことがある。刺青は関東が本場だから私に、刺青師を紹介してくれと云うのであつた。

私は最初、この婦人が鉄火肌の莫蓮女か、でなくてもどうせ泥水稼業の女くらいに思つて、いゝ加減^{かへん}な返事をしておいた。するとすぐ手紙がきて、急に自分の方で彫ることにしたから、何か奇抜な図柄を考えて欲しいと云うのである。刺青の箇所は下腹部の、それも陰部のすぐ上に五寸四方くらいの大きさに入りたいと云うので、私はこの婦人が玄人女や莫蓮女ではないように思え、ちよつと好奇心をおぼえた。と云うのは位置が下腹部で五寸四方くらいの大きさなら、入浴の時などでも

手拭をちよつと当てただけで他人に気づかないですむ、そんな心遣いまで想像されたからである。

そこで相談をうけた図柄も、できるだけ穩当な女らしいものを選んだ方が無難だと思つたので、月並ながら牡丹とか櫻を主とした構図を二、三枚描いておくつた。その時「刺青は一時の感情にまかせて入れるものではないいちど入れてしまつた墨は永久に消えないのだから、くれぐれもいゝ刺青師に相談して計画的にやらなければいけない、間違つてもあとで後悔するようないゝ加減な素人彫はやらないほうがいゝ」と云うようなことを一言つけくわえておいた。

一週間くらいいたつて、私はまたこの婦人から手紙をもらつたが、果して彼女は歴とした堅気の職業婦人であつて、私の手紙を見て自分の方で刺青をすることを急に中止したからやはり東京の名人と云われる人を紹介して欲しいと云い、そのあとでおどろくべき身の上をこまごまと書き綴つてあつた。

彼女はかなり昂進したマゾヒストで、ずっと前から中年の未亡人と同性愛に陥ち、嗜虐の交渉をつゞけていると云うのである。その

未亡人がサディストであることはもちろんであるが、その交渉の顛末は遺憾ながらこゝでは披露できないほど凄絶なものである。

彼女は下腹部愛執の性癖があつて、少女時代から自分の部屋にこもつてひとり鏡に自分の下腹部をうつして眺めることに異常な昂奮をおぼえると云うのである。それがいつしかマゾヒズムの感情に芽生えるにしたがつて、彼女は自分で自分を虐めたい欲望にかられるまゝ、自分の最も愛執する下腹部に刺青の苦痛と自虐の陶醉を味わいたいと考えるようになった。これが、前記の未亡人と交渉をかさねるようになる、いよいよその願望が強烈になつて、そこで私にその相談をしてきたと云うわけである。

ところが、彼女の刺青願望を知つた未亡人は、刺青師なら自分も知つてゐるから、いつそのこと自分の目の前で入れたらいいだろうと云うことになり、その翌日、未亡人は彼女を刺青師だと云う若い男のところへ引つぱつて行つた。そこで話がきまると、彼女は後手に縛られたうえ柱にくゝりつけられて蠟燭の火で陰毛を焼かれた。そしていよいよ墨を入れる段取りになつたのであるが、それがなん

と、彼女の予期しなかつた骸骨の海賊マークだつたのである。しかもその刺青師と云うのが、どうやら専門家ではなく、針のつかい方などもひどく乱暴なので彼女はとても我慢ができなくなつて、その日はぶつちがいの部分を一寸五分ばかり彫つただけで中止してしまつたのである。

彼女は翌日、私の手紙を見て急にその骸骨の刺青にイヤ氣がさし、次の約束の日にそれを拒絶したので、未亡人とその若い男から言語に絶する私刑を加えられた。そのため彼女は一週間ほど寝こんでしまつたが、寝返りさえできないその疼痛のうちにさえ、マゾの血は鬱勃として抑えようもなく、彼女は自分で自分の軀を縛つて、疊の敷き目に立てた線香に身を寄せ、下腹部に灸をすえて自己苛責の愉悅を味わつてゐると云うのである。

さらに最近の手紙では、「あの私刑以来、その未亡人との交渉を断つてゐるが、いまの自分には未亡人を失ふことはどうしても堪えられない」と云つており、「これから時折逢つてみたいと思うが、どうであらうか」と云う質問であつた。

マゾヒストには、腹切り願望と云うのがあ

る。白虎隊とか浅野内匠頭などの切腹の絵を見て昂奮したり、鏡の前で腹切りの真似をしてアクメに達するものがある。これが昂じてくると、ほんとうに自分の腹に刃物を突き立てるようになる。私は、彼女にこんな危険を直感したので、彼女とその未亡人の交渉について下手なことは云えないと思つた。これは骸骨の刺青などには代えられない、彼女の美しい下腹部に生涯ぬぐい去ることのできない汚染をとゞめようとも、いまのところ彼女をすくうみちは、未亡人との交渉をつゞけるよりほかはないと思つたのである。

愛 読 者 通 信

私は本年二十七歳、独身の青年です。

私は責められたり責めたりする事を唯一のたのしみにしてゐますが、まだ一度もその経験がないんです。

病ころうと申しますか、最近荒物屋の店先の荷造紐を見てもよからぬ幻想にふける事があります。このような趣味の方特に女性のおつきあいをお願いしたいものです。

(大阪 岡田生)

玲子十二ヶ月
菊

—其の二—



玲

鬼頭は美代子を画室の中に運び込むと、内側から鍵をかけた。

「フ、フ、これでよし、と」

そうつぶやくように云いながら、口元を歪めてにやりと笑った鬼頭は、縛られたまま椅子に腰をかけさせられている美代子の背後に近付く、

「美代子さん、今日はどうあつてもモデルになつて貰うぜ、あれほどはねつけられた俺だつたが、そうされればされるほど、君のヌードにパッションを感じるのだ。他の女は駄目なんだ、君のからだでなきや駄目なんだ……」

ギラギラと眼を光らせながら、鬼頭は酔つたように制服の上から美代子のからだをまさぐつた。

「いやッ。いやです、あッ……」

「ウフフツ、そう云うだろうと思つて縛つてあるんだ。正木の奴にはモデルになつても、此の俺のモデルになるのがそんなにいやかい。フ、フ、しかしもう駄目だぜ、俺は君を手に入れる爲には理性も何も忘れ果ててしまつたのだ……」

異常な興奮にかられながら、乱れた長髪

をかき上げた鬼頭は、美代子の服に手をかける。

「さ、おとなしくするがいい」

「ああッ……」

もがき、哀願する美代子。しかし彼女には抵抗する自由が許されていないかつた。

………

何も彼も剥ぎ取られた乙女の膚は小麦色に輝いていた。緋色のカーペットの上に縮めた彼女のからだには、手にも足にも蛇のように縄が巻きついていて、虹のような羞恥の呼吸を吐く度に胸の隆起に縄が喰い込むのだ。

鬼頭は嗜虐的な愉悅に酔いしれていた。くわえたパイプの火が消えてしまっているのにも気がつかない。

「……素晴らしいポーズだ。〃縄と処女〃とでも画題につけるかな、ウフフ、正木の奴ア君にこんな素晴らしいポーズがあることを知らないだろうな。まあゆつくりかかつて、もつと俺を感激させるポーズをする様に虐めてやるぜ」



それは何と云う意地の悪い言葉だったろうか、美代子は唇を血の出る程に噛みしめて、羞恥の責め苦に耐えていた。倒れた花瓶から散りこぼれた黄色い吹上菊が、彼女の運命を

暗示するように、カーペットの緋色の上に映えている。

だが鬼頭の眼の中にはこの黄色い花さえうつつていなかった。(文と繪喜多玲子)



日本刑罰史・第三回

遊里吉原の私刑・拷問

この世の龍宮とばかり江戸ツ子に渴仰された不夜城『吉原』のひとかわむいた裏面では、こんな『明烏』を地で行く惨劇が演ぜられていたのである。

深田 徹

(一) 廓脱けの吊るし責め

清元のなかの文句では、——廓をぬけて小紫——などとおいらんの吉原からの脱出をいとも簡単に片づけてあるけれども、なかなかどうして、監視の目が光っており、遊女の逃亡は、やさしいことではなかった。十両盗めば首かとぶような時代。十両、二十両から、それ以上の大金をもらつて身売りをし、飼われてきた女郎であるから、

廓内からの脱走、駈落、は一ばんの大罪とされていた。旧軍隊、監獄部屋、アメリカ南部の黒人、等々、奴隷制の労働が行われたところでは、この点は共通している。

金がかかつているから、おしい、という損得づくばかりではなく、一人の逃亡を大目に見のがすものなら、集団の逃亡も起りかねず、ひいては、奴隷制そのものが破滅におちいるからであつた。

それゆえ、その制裁法も、もつとも嚴重を

きわめた。伝馬町の大牢でも、最苛重とされたところの『吊り責め』が私刑として加えられたのである。極悪人を收容した伝馬牢でさえも、女囚にこの責めをほどこすことは、三百年間に、まれだつたようである。この世の龍宮とばかり江戸つ児に渴仰された不夜城『吉原』の、ひとかわむいた裏面では、こんな『明烏』を地で行く惨劇が、しばしば演ぜられていたのである。苦界とはまったく巧い表現ではないか。

縮緬を捕縄にするやり手婆々

くたばる程どやしなと遣手いひ

などの川柳は、その辺の消息をつたえて
いる。

吉原における私刑、拷問には必ず一枚加
わつて、悪虐のかぎりをつくす、この世の
鬼のような遣手婆。

この遣手というのは、たいてい、遊女で
年期のあけたもののなかから、酷薄無情の
性質のものを選りぬいて、抱えの遊女の監
視役としたものである。

悪虐な行爲の出来る試験に通過したエキ
スパートのようなもので、虐めるのが性来
好きなのも加わるのであろう、勇みたつ
て、遊女が抱主の命令にしたがわなかつた
り、抱主の不利となるような行動をとつた
り、または、廓というものにとつては最大
の反逆である踏み倒しての脱走をくわだて
たりしたときには、見せしめも手伝つて、
折檻に折檻を重ねるのである。

いちばん軽い刑罪は、数日間の絶食。便
所掃除などである。

少しひどくなると、小刀針と称する三稜
刺で、臀を刺し、または、裸にして、縛

り、水を全身にぶつかけたりする。相手を傷
つけない、くすぐり責めなどは、もちろん、
大いに利用されたことであらう。

一番ひどいのが、『釣るし責め』で、縛つ
て梁に吊るし、臀を打ち、もし失神すれば、
水を顔にふきかけ、かすかに呼吸しはじめ
るのを待つて、また責めるのである。

吊るし責めのことを、世間一般では、ぶり
ぶりにかける、と称していて、この折檻を受
けた遊女のなかには、生命を失つたものも多
かつた。

明暦の頃までは、公然と懲罰する仕置場
が、廓のなかの一定の場所にあつたのであ
る。日本の封建制度は、江戸時代に於て確立
された、といつて良く、遊廓という形式も、
江戸時代になつて完成されたもので、それ以
前には、現在の私娼のように、一般の人々の
間に出没して、営業していたわけである。遊
廓は、完全な奴隷制度で、遊女にはひとかけ
らの自由もなく、掟を破つた遊女は、公然
と、罰せられたのである。

このようにして殺された遊女は、手足を縛
り、菰に巻いて、『投げ込む』という簡単な
方法で始末をされるのであつた。

投げ込む、というのは、貧乏な者が死ん
だとき、まつとうな葬式ができないので、
その遺骸に銭二百文だけをつけて、寺に送
りこみ、その寺にある総墓という大きな穴
のなかに投げ入れて、経を読むこともなし
に葬つたために、そのような言葉が生れた
のであるが、江戸で投げ込みの行われた寺
院は、両国の回向院、橋場の総泉寺、深川
の靈巖寺、同じく浮心寺などであつた。

話を遊女の責めにかえそう。

『曲本明烏夢泡雪』によると、時次郎とい
ういい男が出来て、その男に実をつくそう
とするために、抱主の言うとうりに働こう
としない遊女浦里は、やりて婆の杉に、し
ばられ、ひかれて、雪のつもつた庭の古木
にくくりつけられるのである。

「コレ浦里さん。毎日々々、手をかえ、品
をかえて、おまえを折檻しているが、せめ
られるお前より、せめる役目のやりての方
が、どれだけ迷惑か知れたものじゃない。
よいかげんに気をかえて、時次郎さんを思
い切つて、奉公大事に勤めたらどうだい。
サア、返事はどうだ。しぶとい人だよ。人
にばつかり口をたたかせて、コレ浦里さ



ん、お前は耳がつぶれしやんしたのかえ」
などと、いやみたらたらならべたあげ
く、竹ぼうきで、打って打って打ちのめす
のである。

「親方さんのお情で、いつそ殺して下さい」

せ」

と浦里が、息もたえだえにたのむと、

「そのように性根がすわつたらぜひに及ば
ぬ。いかにも望みどおりに死なしてやろう
が、それもひと思いには殺しはせぬ。可愛さ

余つて憎さが百倍。さいわい今宵のこの雪
に、凍えて死ぬなら死に次第」

すると遣手婆の杉が、

「殺すなどとは、もつたいたない。下見世な
りと、または、そうかにでも、売つておし

まいなされませ」と、損得づ
くの場面とはなるが、この下
見世におろしたり、そうかと
いう最下等の遊女に売つたり
するのは、後で述べるように、
位の高い遊女にとつては、一
つの責めとなつたのである。

さて、釣るし責めである
が、先に述べたように、明暦
の頃までは、公然たる仕置場
があつて、すべての遊女が見
られるように、その責めぶり
を公開して、掟の持続に努め
たのであるが、後には、姿を
消したところを見ると、あま
りの残虐さに、禁止されたの
であろうが、掟を破る遊女た
ちに対する折檻は、場所をか
え、品をかえて、秘かに行わ

れてきたのである。

(二) 禿の責め

先に記した吊責め、遊里のことばで、俗にブリ／＼と称えたは、躍動旋回する様子の、単純な表現からでた語である。風俗見聞集にはもつとも、この責めについて、

——常々の仕置は、妻妾または老婆などの取り行うことなれど、竹篋ブリ／＼は彼主人が自身にする也——とあり、遊女屋の主など男手でじかに責めたことが多かつた模様である。

逃げたあと禿は対に縛られる

という句が残っているが、廓脱けが出るというように係の新造ばかりでなく、遊女につき添いの禿（童女）二人も縛られて、「お前たちが知らぬはづあるまい、なぜ密告しなかつたか」と、年端もゆかぬ者を責め苛んだことを窺がわせる。

禿は、幼少のうちから遊里に売られた、使い走り役の小娘であるが、名のとおり頭髪の一部を剃り落しており、おもに遊女屋と揚屋、客と遊女のあいだの文使いその他

に追い使はれたものであつた。

その禿形を強いたのも、目的は特異な風俗をさせておき、これにより廓外えの逃走を予防するためには違ひなかつた。彼女たちはこうして幼少から廓の氣風に慣らされ、堀にかこまれ大門に閉ざされた新吉原のうちを世界として育ち、ゆく／＼は器量に応じてそれ／＼の階級の遊女へと成長するのであつたけれど、もと／＼金で買はれた家畜にひとしい商売奴隷の身の上。その間にやり手婆や、樓主の家族などの手でしば／＼殴打、絶食などの私刑に遇はされたことは、左にあげる多くの川柳がはなはだ雄弁にそれをもの語っている。

「よい音の折檻坊主禿なり」

これは毛のない頭の素肌を打擲される、痛ましさに触れたもの。

「長ギセル禿鉄砲よりおそれ」

「たゞかれる煙管禿はみがいてる」

「手がきゝんせんとメソ／＼禿泣き」

此言の雨よりはやく降つてくる、キセルの痛さに脅えて、叩かれる煙管そのものにさえ、一種の畏怖の念を抱かずに過せぬ童女の、憐れな境涯を活写してあまりあるではな

いか！

「まゝ子根性の餓鬼だとやり手いひ」

「居ねむりを煙管でおこすむごいこと」

やり手婆あは大がい遊里のうちで長年、新造、飯焚きなど勤め上げた古手の、子のないヒステリックな老婆の仕事。その冷酷さ、苛責のない苛め方の陰険さがよく表われている句である。

「馴染客禿の縄を解いてやり」

「やつた菓子禿どこかで食つてくる」

「サア寝やといはれて禿よみがえり」

顔しりの客の情けでつらさを免がれ、貰つた菓子一つでも隠れてゐなければ口にできない、年少奴隷の惨めを詠んだもの。

じつと、禿たちはみな、愛憐や温情に餓えながら日夜ヒマなく酷使をされ、そのすえ栄養失調とか睡眠不足から病いに臥せることが起つても、ほとんど医薬をもちいず放置されたまゝ顧みられぬ懸れた存在なのであつた。

(三) おろしという制度

遊里のなかの女たちに対する私刑は、全国の各地の廓ごとにいろ／＼様々の刑が行

われたであろうが、こゝに吉原の例を引いたのは、何といつてもそれが諸国の遊廓の規範として見られるからである。

こうした遊里の私刑というものは、大別すると、客遇いのよくない女えの科罰と、まゑに挙げた逃走未遂におわつた遊女えの制裁と、この二種類がおもである。

そしてこれらの私刑の起りは、江戸より



以前、すなわちクマツメ、舟娼のたぐいが定着して遊女と呼ばれ、長者という、抱主に支配された鎌倉の頃、あるいはそれ以前からはやく私的制裁が行われていたと推測される。ものゝ本にも、美濃の青墓や、近江の鏡山の長者などが、抱えの少女など虐待したことがほの見えているからである。

として、実施されだしたのは、何といつても江戸の吉原や、京島原、大阪の新町のように、集娼制が遊廓として成立しはじめた江戸の初期からであろう。幕府が、吉原の内部にある程度の自治権をさし許した、そのことからこの悪弊がついに明治五年

「娼妓解放令」まで三百年のあいだ、吉原はじめ各地の遊廓に怪しまれぬ結果を生じた、そうも解釈される。

で、廓においての遊女たものもつとも軽い制裁といえ、まづ「おろし」と呼ばれる規定であつた。「おろし」とは、漢字で書けば「下ろし」つまり今でいう降等の制度のことである。

そも／＼寛永から後、吉原では遊女の階級を三位にわけ、うゑから順に太夫、格子、端といふ、京阪ではそれを太夫、天神、端と呼んだ。

樓主は、太夫職をはる女が怠けて客足が減ると、懲戒の意味でこれを格子におとし、また格子女郎にそうした者があれば、たゞちに下位の端女郎に格を引下げてしまふ規定であつた。

このことを「太夫おろし」とか、「天神おろし」とか称えたので、右の位づけは「細見」にくわしいようにたゞの品格ではなく、同時にそれ／＼の揚銭の高下を伴っている。

だから、女たちが格を下げられると、そのことはたゞちに彼女の肉体の相場が切下



げられたことを意味する。きのうまで松の位の太夫でも、格子女郎に貶され、ぼその日から、格子なみの値段に軀の切売りをしなければならぬ。

公家や武家のあいだでさえ女性性が、進物や贈答にさかんに利用された時代、遊里の女たちにとつて、おのれの肉体の相場のこんな下落がどれだけ苦痛であり、恥辱に思われたかは、ちよつと現代のひとつの観念には縁遠

いことである。この点をよく理解しなければ、「おろし」という制度が結構これで、むかしの遊里では私刑という目的にかなつていたことが通じないと思われる。

事情によつて、右の「おろし」につけ加え、労役制が伴なうた場合もあつたようである。

『吉原角町の万字屋庄左衛門のもとに、万壽という格子女郎があつた。』

一人の客に深いりして、ほかの客への勤めをおろそかにし、主の意見もきかず、捨てゝおくと他の女郎のため見せしめにもならないので、庄左衛門もやむなく遊女をやめさせ台所に廻して、女中のように召使うことにした。

と、万壽というものの、生れつき賢く器量にとんだ女であつたから、これも当分の懲らしめだからこそと肚を据え、下女たちの古布子をかり着して、ちつとも恥じた様子がなく、女中のする手業をなについとわずマメに立働らき、また買物があれば、その布子姿のまゝ中之町へも出て、何につけても臆せず堂々とやつてのけた』

この話は、洞房語園にでゝいる、「おろ

し」にある意味のレジスタンスを試るみた遊女の挿話である。西鶴もこれと似たような話を、あげて記している。が、この話はずまり、一般の例としては降等を恥じて、首くゝりを遂げたりメソついたりする女がおゝかつたことを裏書きしたものだといえよう。

(四) 遊女、雇女、藝妓等の刑罰

「おろし」より酷しいが、一時的な科罰としては、吉原ではふつう殴打、絶食、水責めなどが行われたものである。

上客の氣を買いそこねて不首尾になつたとか、じぶんの不快、勝手から勤めを疎略にしたとか、たえずお茶ばかり引いているとか、要するに抱え主の不利益なことを招いたとき、やり手が目つけ役としてそれを内証へとゞけると、お女將分の差図でたちまち打擲の折檻がはじまる。

それでも成績や行状があらたまらない時は、雪隠の掃除を強いたり、物置え押込め数日の断食に遇はせるなど、さらに效目がないとなると、つぎは丸裸かにして縛りつ

け、たえ間なしに軀や顔へ水を浴せかけて苦しめた。

この水責めでは、水気で濕つてくると軀を縛した苧ナワが縮んで、肉を締めつけ、痛くてがまんできぬことになり、泣叫ぶのである。おり／＼は、こうして行き過ぎて責め殺してしまうという惨虐も、生じたことが書物に残っている。

娼家の風として、江戸時代の吉原には、遊客に対する制裁法もあつた。すなわち、無銭遊興者に対する「桶伏せ」とか、浮気客に当てつけの「鬚切り」とか、面白いリンチの話が伝えられている。

「さん切にしなとゾロ／＼上草履」

けれども、紙面のつごう上で、こゝにはその事実をあげることにとめる。

廓内の女でも、本ものゝ遊女でないもの、遊女屋とか揚屋、引手茶屋の雇女などが、もし遊女の馴染み客といふ仲になつたりすると、この女は発見され次第にクビになり、その家ばかりではなく廓内のすべての店での就職を禁じられることに決まつていた。この追放刑はもちろん、遊女の営業を保護するため

の意図である。

また、女郎でない吉原の芸妓は、お座敷の取り持ちのほか、売淫は一切かたく戒められ、これが曝露すると、見番から除名され、妓樓への出入り禁止という重い処分に遇はされたが、このこともその目的は、まへの雇い女の私通の場合と同様である。

だから、吉原芸妓はのちまで、向島などの遠出先でのみ秘かにそれを行う習慣が生まれることになつた。

(完)

愛 読 者 通 信

小生近所の本屋にて風俗草紙を見かけ、早速買い求めて読みました所、小生の同僚があまりにも多いのに嬉しくなりました。

小生(十九才)サジストで一人で悩んでおります。と言うのは、相手になるマゾ的な女性がいらないからです。今は一つ年下の同性に責めたり責められたりして貰つて満足している次第です。もし小生に同情して下さる女性の方がありましたら、文通なり交際なり願えれば幸に存じます。

(大阪府中河内 N K)

まど・ふえちすとの告白

饅^すえ た 經 血



飛び立つような思いで、便所の戸をあける。そして、懐中にかくして来た懐中電燈でパツと照らす。その黄色っぽい光線の中に、ありありと私の理想の物を見出した時の喜び……

岡 和 馬

事務所で大汗をかきながら、官庁に提出する書類の検討をしていると、電話があつた。

「常務さんでいらつしやいますか？」

と、馬鹿丁寧に念を押してから、急にくだけた調子で、

「ホーさん、あたしですよ、酔月……。声で判らないなんて、不実なものねえ——」

それで、待合「酔月」の女將だと判つた。

酔月は昔から行きつけだが、女將が自分で電話をよこすことは滅多にない。

「今夜はねえ、どうしてもホーさんに来て頂かなくつちや……とにかく待つてますからね、よござんすか？」

勝手にそれだけ喋ると、電話はあつさり切れて仕舞つた。如何に馴染みの女將でも、これではあんまり不得要領な話のようだが、私にはピンとくるものがあつた。

例の件だな……、と思うと、もうそれから仕事に手がつかない。年甲斐もなくソワソワして、どうにも考えが纏らないのだ。従つて、同じ質問を繰り返かえして、社員を面喰らわせもしたりする。

私は今年四十三才で、中学に通う男児二人の父親でもある。亡父の代からの、精密機械の工場を経営しているが、まづ三流会社の、

三等重役と云つたところ——。しかし、向う意気が強い頑張り屋で、事業上のことなら決して誰にも負けない私だが、妻にも云えない秘密の性癖がある。

「弁慶の泣きどころ」と云うのか、この点については、どんなに自省してみても、理性では割り切れないのである。これには我ながら弱つた。

大体、我々の年輩になると、一応金銭的に余裕もあるし、チャンスもあるから、どうしても色欲に走るようになる。又、四十男の鉄面皮からエログロに興味をもつ仲間もいるが、私の場合は明かにこんな単純なものではない。絶体に他聞をはばかり性質のものである。こんなことが、世間に知れたら、私はまづ、首でもくくらないことには始末がつくまい。

ところがそんな秘密をほのめかすようなことを、口走つて仕舞つたのだ。酒の上の口軽と云えばそれまでだが、これはやはり意地汚ない蒐集欲からだつたと思う。

その夜は取引先を招待して「酔月」に行つた。少々ややこしい用件も片づいたので、客が帰つた跡ホツとして、私は女將を相手に呑み直していたのだ。ところがその夜は、電話

をかけても若蝶と云う妓が来ない。別段肉體関係があつたわけではないが、始終呼んでいた芸奴だから、どうしたことだろうと思つた。「何処かえシケ込んだのかな？」

「いいえ、遠出でもないようですよ。あの妓も癩症だから、きつと頭痛でも病んでるんでしようよ。普段は元気なようでも、やつぱり女は厄介なもんですからねえ——」

と、云うような話になつて来たのだ。私は何気なさそうに構えていたが、内心は飛び上るほど嬉しかつたのだ。

「フーン、そんなもんかねえ、例の時には、若蝶のような若い妓でも、やつぱり多少どうかあるものかな」

「そりやあ、あなた、人によつて違いまさあね、あたしなんぞ、歳が歳だから、もうあつさりしたもんでござんすがねえ——」

こんなことを話しながら呑む酒は、素晴しくうまかつた。私にはなによりの酒の肴だつた。私は話が途切れないようにひそかに細心の注意を拂いながら、この五十路を過ぎた女將から話をひき出していた。

ところが、陶然とまわつた酔と、抑えきれない欲望から、私はとうとう口に出して仕舞つたのだ。

「ところで女將、僕あそいつを、まるで一度も見たことがないんだ。こいつはあんまり意地のない話だし、色道極意のために、一度でいいから観察したいんだがねえ——」

「御冗談！」

と、女將は本当にとんでもない、と云つた顔つきをして見せた。

私も、まづたく氣まぐれの冗談ごとだが——と云つた態を装いながら、しかし、もう一押しして見た。

「まあ話の種だ。何処のどんな女のやつでもいいから、女將、一つ骨折つてくれよ」

いくら酒の上だとは云つても、私も全然無思慮で云い出したわけではない。待合の女將なんてものは、まづ何より商売大事で、客のこととなると、案外口が堅いことも知つていたし、苦勞人だから、こちらの酔狂な注文も軽く捌いてくれるかもしれぬと思つたのだ。

「そんなものは、殿方の御目通りに入るような代物ぢやございませんよ。第一、そんなにお望みなら、あたしなんぞにおつしやるまでもない、奥様に耳打ちなさればよござんすもの」

「いや、ワイフは子宮筋腫と云う奴でね、十年も前に手術でさつぱりと抉出してしまつ

た。だから、もう彼奴は女じゃないんだ」

これは本当だった。丁度十年前に妻は子宮を除去してしまった。又、それ以前にしても妻は元々神経質なほどの潔癖家だから、そんな汚れ物が私の眼につくような不始末は決してなかったのだ。

だが、経血を、一度も見たことがないと云ったのは嘘だ。単なる話の綾にすぎない。現に、私の部屋にはその蒐集品が少なからず秘蔵されているほどだから――。私はどう云う神経のいたずらか、女のMに対して異常な憧憬を抱いている。月経と云う文字を見ても激しく亢奮する。だから、月経帯などの新聞広告を見たりすると、苦しいほど動悸が早くなってくる。完全な経血フェチストなのだ。

しかし、私のこの歴史は案外まだ新しい。青年時代も、それから結婚してからも、まだ妻が健康だった頃には、こんな性癖はなかった。だから、この悩みが始まったのは戦後の

レに駆けこんだ。ところが、勝手の知れぬ他処のビルだから、どうやら婦人用のトイレに入ってしまったらしい。が、気がついた時はもう遅い。

そのまま用を足しながらふと気がつくと、隅の方に貼り紙があつて、

「落し紙以外の物は、下の箱の中に御入れ下さい」とある。なるほど、その下に白くペンキで塗った、丁度痰壺ほどの罐があつて、キツチリ蓋がしまっている。婦人用の水洗便所なら、必ず設備されているものらしいが、私には始めてだから珍しかった。

便所で捨てる紙以外の物とは何だろうと思つて、私は何気なくその罐の蓋を明けたのだ。とたんに、赤いものがパツと眼を射た。白いタイルの便所だから、如何にもその色は鮮やかだったのだ。最初は吃驚したが、やつと事態が呑みこめた。女のMをふくんだ脱脂綿――。私はそれ



ことである。

五、六年前の五月だったと思う。用があつてある小さなビルに行つた。その日は少し腹具合が悪かつたので、対談途中で慌ててトイレ

まで、メンスを知らなかったが、まだ少年の頃、家の便所で時たま、そんな脱脂綿らしい赤いものを見たことはあったのだ。

「血らしいが、一体どうしたことだろう？」

それが幼い私の疑問だったが、女性に月経なるものがあることを知ったのは、ずつと後年であつたと思う。

とにかくその時の刺戟はあまりに強かつた。私は容易にその便所から出ることが出来なかつた。おそらくはその罐に投じられてから、まだ間もないと思はれるような、生々しい色である。

不潔感は露ほども感じなかつた。なんと云うか、それに吸いつけられるような、あこがれで一杯だつたのだ。

私がそのトイレットから出て来た時は、相対時間が経過していた。その上、私の態度が至極落着かず、しどろもどろだつたから、訪問先の相手は、ずい分面喰らつたらしい。私はその時、ズボンのポケットに、記念すべき第一番目のコレクションを秘めていたのである。

それまで、何の道楽もなかつた私は、それから一途にこの蒐集に没頭して行つた。これは如何ともなし難い、宿命だつたと思つてい

る。つまり、私の妻が普通の健康な女性だつたとしたら、たとえあのトイレでMを見たにしても、きつと何気なく見過して仕舞つただろう。少くとも今の私のような、異常な経血のフェチストは生れなかつただろうと確信している。

私は妻を熱愛している。だから、信じられないかもしれないが、妻以外の女性とは断じて、肉體関係はない。(もしそんな女性があれば、蒐集は案外容易なのだろうが——) 妻は美しく心豊かで、私にとつては申分のない伴侶なのだ。ただ、手術によつて子宮をとり去つて仕舞つたことを除けば……。

私はそれまでに妻に対して、何一つ不満を感じていなかったつもりだが、実はまだ若いにも拘らず、妻が既に月経のない躰であることに對して、潜在的に不満を感じていたのかもしれない。

愛妻にただ一つ欠けているもの、経血——。私はそれに濡かれたのだ。

その夜、酔月の奥の一間で、私は顔馴染の妓も呼ばず、一人チビチビと酒を呑んだ。その紫檀の卓の上には酒の肴が並べてある。女將が集めてくれたコレクションだ。

もう既に茶つばい黒色にひからびて、あの

鮮かな色はないが、私にとつては、なんと貴重な品だろう。脱脂綿のも、チリ紙の分も、私はその原形をこわさぬようにつとめた。

バンドを用いる爲か、どのコレクションも殆どある一定の形になつてゐるのだが、その形が失はれては意味がない。だから、私の取扱いは慎重を極はめる。

もう一つは、私にとつて始めての蒐集だから、眺める度に相好をくずさざるを得なかつた。ぼかし模様の富士絹の腰巻、その後中央部にはまさまざとシミがある。それをジュツクリと眺めては盃を選び、脱脂綿をソツとつまみ上げ、臭いを嗅いで又独酌する。世の中にこんな楽しみが外にあるとは思えないのだ。

仲居たちは遠ざけて、時折銚子を運んでくる女將も、そんな私の狂態にはさすがに果れ顔で、

「女遊びなさらないと思つていたら、どうして、御道楽もいろいろでさんすねえ……」

と、苦笑している。いくら金にものを云はせたとは云つても、二流地の待合だからこそ出来る芸当なのだ。私は蒐集のためなら、金に糸目はつけないし、女將は金を溜めるのが道楽だから、この商取引は円満に成立する。

この夜の品物の主は、女將に追及しても笑つて云はなかつたが、恐らく仲居か出入りの芸妓たちであろう。しかし、私はそれ等のうち、「これとこれは同一人だろうか」と指摘すると、女將は掛値なしに驚嘆してしまつた

らしい。

「大したお目ききで、怖いようですねえ」と云つたが、私にとつては簡単なことだ。臭いで判るのである。臭いと一口に云うが、体質其他によつて、やはりそれは千差万別なのだ。体臭が

異なるように、それにも相違がある。まつたく、私のコレクション

のコレクション、ヨンの場合、眺めるたのしみと同時に嗅ぐたのしみがある。カラカラにひからびたものでも、その臭気は残つてゐる。それは云いようのない、一種独特のものだ。

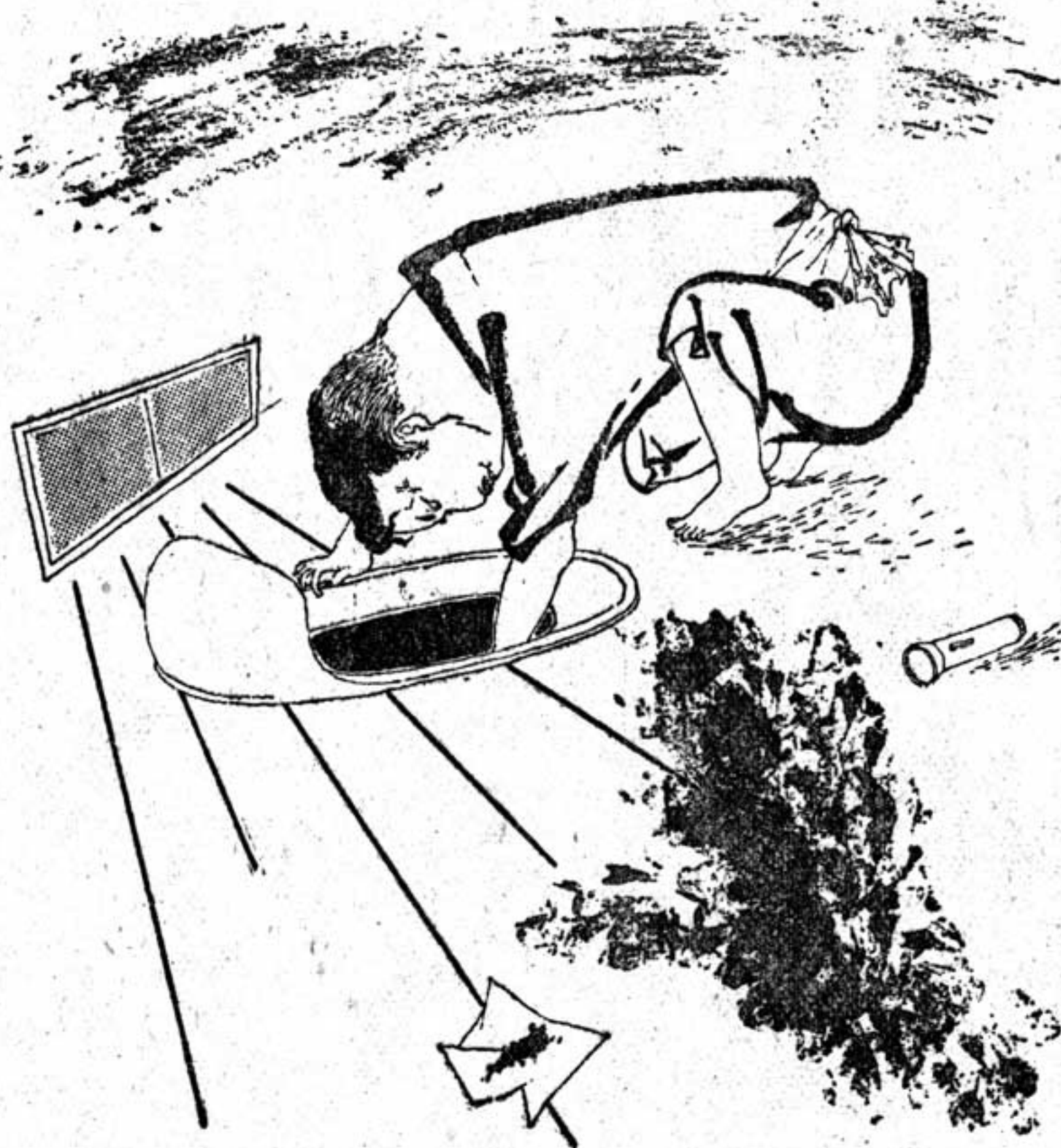
私はこのコ

レクションを、自宅のキャビネットの中に秘蔵している。自分で特別に製図して、指物師に作らせた箱の中に、一つづつちゃんと整理してリボンで止めてある。その下のカードには蒐集の日場、場所、氏名、年齢などを記入するが、名前の判つてゐるのは極く僅少で、殆どは氏名不詳である。その場合は推定年齢だけを書き入れる。

名前が判つてゐるものの中に、自宅の女中が二人いる。十七才と二十才の若い女中たちだが、これを手に入れるには実に苦心を要する。本人は元より、妻にも家人にも内密で入手するのだから、その苦労と云つたらない。しかし、この苦労にもなにか心の浮くような期待とスリルがあつて、私はこの蒐集の時期が来るのを毎月たのしみにしてゐる。

勿論二人の女中たちのメンス予定日はちやんと判つてゐる。それが今日か明日かとなると、ソワソワしてくる。それほどの注意力で観察してゐるのだから、月経になるともう私にはピンとくる。女中の後姿を見ただけで判るのだ。

晝間は出社してゐるし、人目が多いからどうにもならない。だから我が家の蒐集は深夜に限つてゐる。二人の息子や、妻に気取られ



るようなことがあつたら、穩かな家庭生活が根こそぎ破壊されて仕舞うだろう。

幸か不幸か、自宅は戦前の建築だから水洗便所ではない。そして、此処以外には蒐集の場所はないのである。私は何回となく失敗した後で、次のような方法を考え出した。家人がみんな起っている時は、危険も多いし、便所の利用も多いから、どんなに注意していても私の欲しいものが汚染して入手が困難になる。

だが、氣をつけていると、彼女たちはMの時は、夜中に一度便所に通う。それは尿意のためよりも、むしろ衛生物の交換のためらしい。そして、その時間も大体定まっている。そこで、私はまづ家族が寢靜まつて仕舞つてから、予備工作のために便所に入る。

つまり、折角の蒐集品の汚染を防ぐためである。この爲にはいろいろな方法を実行してみたが、なかなか完全にはゆかない。油紙で糞尿の上を蔽つてしまえば完全だが、家人にも悟られないよう、又、汲取人夫にも疑問を起させないような方法でなければならぬ。

結局、現在行っているのは、パラフィン紙を使用するのである。あらかじめ寸法を合せて切つてあるパラフィン紙で注意深く糞尿を

蔽つて仕舞う。彼女たちが脱脂綿や、チリ紙を投下する場所は大体決つていたので、(殆ど前方に落す)その辺りにはパラフィン紙を二枚敷く。

この工作のためには、狭い場所に腹ばいになつて、入念にしなければ失敗する。私は相当肥満しているので、この工作はなかなか骨が折れるのだが、来るべき期待で胸を躍らせながら、細い針金やら、細長い火はさみのような道具を利用して慎重に準備するのである。

パラフィン紙は、多少光るようで氣になるが、一番自然である。しかし、それとて、準備してからあまり時間が経過したのでは効果がないし、又、目当の女中が入る前に、他の者が糞尿をすれば、万事窮すなのだ。

そんな時にはもう一度道具を持つて、やり直しである。準備してから、今か今かと、便所の方の物音に氣を奪はれる。この時の氣持はなんとも云えない。妻と枕を並べて床に入つてはいるが、神経はすべて便所に集中して眠るどころではない。

だから、便所から出た足音が、女中部屋の方へ消えるのを待つて、私は起き上る。飛び立つような思いで、便所の戸を明ける。そし

て、懷中にかくして来た懷中電燈で肥壺をパツと照らす。その黄色つぼい光線の中に、ありありと私の理想の物を見出した時の喜び……

これを針金で釣り上げるのだが、汲取つたばかり、底が深い時などは、容易なワザではない。便器のフチを片手でしつかりつかんで、懷中電燈は口にくわえ、右手で針金をあやつるのだが、多でも汗びつしよりになる。しかし、決して汚いとも、臭いとも思つたことはない。喜びの方が大きいのである。

若し、この情景を見た人があつたら、会社の株主総会の時よりも、もつと真剣な表情をしている私に驚くことだろう。然り、もはやこの時、私はMにとり馮かれた鬼だと云つてもいい。

月に二回は、こうして深夜に幾回となく便所に通うのだから、勿論妻に疑はれたこともある。そのたびに私は「下痢氣味なのだ」とつくろつた。だから、心配した妻から、無理に腹薬を飲まされたこともある。又、便所で使う道具類の始末、持ち運びなどにもずい分頭を悩ましたが、窮すれば通ずで、なんとかポロも出さずに現在に至つてゐる。

たのしみなのは、不時の来客が、メンス中

だった場合である。こんな時は二度と入手し難いから、少々汚染しても蒐集する。

つい最近、日曜で在宅していた時、妻の姪が来た。まだ女子大在学中の処女である。話していて、どうも来潮中だと思つたから、彼女が便所に立つと、すぐ、入れかわりに行つてみた。案の定、しかも、巧い具合にほとんど汚れていない。嬉しかった。しかし、この時はトッサのことで、何の用意もなかつたから、そのままトイレットペーパーに包んで、何くわぬ顔で懷中して自室に戻つた。だが、知らぬ間に、着ていた白緋の上布の、懷のあたりに少々附着してしまつたらしい。妻がそれをみつめて、「こんなところに、どうしたのかしら……」と、不審がつているのを見て、私は少からず狼狽した。

しかし、この時の蒐集品は、私の最も秘蔵するところとなつてゐる。本当に入手した時は、手を合はせて拜みたいほどに嬉しかったのだ。それと云うのも、この妻の姪が、若かりし頃の、つまり健康な女性だった頃の妻に生写しだからではないかと思う。

やはり、私の経血蒐集は、妻に欠けているものに対する憧憬と悲願であるらしい。

マゾヒスト通信

早速小生儀御社御発行の風俗草紙の最初よりの愛読者にて、御社のこの書出現により小生の喜び如何ばかり、全く生甲斐を覚えました。

小生は当年卅九才で、妻子と三人です。専門学校を経て最近迄会社勤めに永らく過し現在は被服製造加工業を営み居ります。

小生の病癖は、簡単に言うとなり男性マゾです。中学校三年位より、自分が変態な事を知り、以後類似の雑誌等を以つて一人なくさめて居りました。先妻も（死別）現在の妻も小生に理解無く亦、共鳴さずのも無理かと存じます。

幸ひ御誌の出現に依り、社会に同病者のあるを知り、安心感を抱きました次第です。どうか御助け下さい。一度でもよいと思ひます。

サデ的女性と会見致し、色々と懇談致し度いと存じます。

小生は、自身云うのもおこがましい次第ですが、やせ型で美男です。もつとも幼年

時代少年時代はとても美しかったので、村の芝居等の催しでは、いつも女装して女形をやらされました。これが小生の今日あらしめた原因でしょう。日本髪を結つて、九月号喜多先生の（あんどんのある責め場の）如き姿をやつて見たいと思ひます。和服を着るのに一本一本紐を締め、最後に広帯を胸高に締めるなど、何とも云えない陶醉を覚えます。そして幾本もの紐を使用して、様々な責めを受けたのです。しかし実際に行つた事はありません。

又こんな事を感じる時もあるのです。

「まにや地獄の第二回凌辱開花」の責め芝居の責られ役になつて見様かとも……

伊藤先生、喜多先生等に、無償でよろしいから責めのモデルに使つて頂きたいと思ひます。

岡山近郊に小生に似た病癖の方があれば、遠くてもよろしいから小生が参ります。色々と御話を交し度いのです。

何卒よろしく御願ひ致します。読者交歓室の神戸生様が一番近い方と思ひますので是非、御連絡下さい。（岡山縣M・T生）



★ お庭のとうもろこしの葉が、夕渡る風にさやさやと鳴っています。ひる間の汗をお風呂でさっぱりと洗いおとし、汗でじつとりとしめつてしまつた下着もかえ、私の大好きな、秋草を散らしたお浴衣をきて、お机に向うと、身も心も、洗いきよめられたようにさつぱりします。……肌へすり込んだオーデコロンがほのかに匂つて。……やるせなく、惱ましい夏の夕ですわ。……こんなとき、襟あしの青いような可愛い子でもこないかしら。……こんなとき、来てく

——女性だけの秘密な
愛のサロン——

レスボス通信

「いや恥かしいわ……そんな……ひどいわお姉様……」
「いゝのよ。しなさい。ネ、汚して、思いきり汚して」……

園村 恵子

れたら、気絶するくらい、うんと情熱的に、してあげるのに……

早いもので、この欄へかせて頂くように

なつてから、もう三ヶ月たちました。この通信で四回目ですわ。……はじめは、こんな公開の雑誌なんかで、お呼びかけするのがとても恥かしく、それに、お呼びかけしても、お

応え下さるかたがいらつしやるかどうか、とても心許なくて、筆も滯りましたが、もし一人でもレスボスのお友達になつて下さる方が出てくれば、どんなにうれしい事かしら！と、そののぞみだけにすべてをかけて、おもい切つてお呼びかけをしましたの。……

ところが、どうでしょう！ はじめての私の通信が出てから、まだ二ヶ月ほどの間なのに、十人の方がお手紙をくださいましたのよ！ それも、みんな、胸もどきどきするよな、はげしい、はげしいレスボスの愛のお手紙なのです！ ……それもみんな若いひとばかりよ……

レスボスの愛を、かつえたもののように望んでいたのは私ばかりぢやなかんたんです！ こんなにも何人もの女性が、あのレスボスの愛の陶醉にひたりたいと、吾と吾が胸をおさえながら身もだえしていらつしやつたのよ。……なんて、哀しい、切ないことでしよう！ ……このうつし身を同性の愛撫にゆだねたいと、そのみを願う女心のあやしい情熱がそれらのお手紙には、むつとするほど、こもつておりましたわ。

今、恵子は、それらのかたと、会つて、あついあついレスボスの愛の誓いを交したり、

遠くにいらつしやつて会えないかたとは、レスボスのお手紙を交換したりして愛の毎日を送っております。……どんなお手紙かつて？ いやだわ。お手紙は公開出来ませんわ。雑誌とちがつて、個人にあげるお手紙だつたら、どんな事でも書けるので、とてもすごいことも書きますのよ。男のかたが見たら「女同志つてものすごいなア」つて、びつくりしてしまふような事も書き合いますのよ。

恵子考えましたの。——その方たちの、はじめのお手紙だけなら、この通信へピックアップしてのせていいんじゃないかしら。勿論、住所が分るような文章のところや、……あんまりスゴイ個所は、けつてよ。……恵子が、こんなこと思いついたのは、レスボスの愛に魅せられるものを内心で感じながら、レスボスの愛がどんなに良いものか知らないでいらつしやる初心なお嬢さんや、それから、雪子さんのお手紙にあるように、毎月この欄をひそかによんでいらつしやりながら、思い切つて私にお手紙を下さる勇氣をもたない恥かしがり屋の女性のかたのためなのです

わ。……こんなお手紙を見れば、思い切つてお便りを下さる方があるんじゃないかと、そんなはかない望みからなの。……

これらの方も、恵子のそういう気持を知つたら、私あての私信をのせた罪を許して下さいと思うわ。……だつて、レスボスの愛を自分一人の胸にたたんでおくことが、どんなに切なく苦しいものが、私達が一番知っているんですものネ。ひとだすけよ。……お友達をふやして、みんなで楽しましようね。

それから、男のかたで、このお手紙をよむ方がありましたら、ここから女心の複雑さにくみとつて頂きたいの。女は感じ易く、きづつき易い生きものなのです。そつといたわつて下さいませね。興味本位で、およみ下さいませよう。……

雪子さんから、はじめにきたお便り。すつきりした便箋二枚にぎつしり書いてありましたわ。

『レスボス通信』の園村恵子様。私は十八才の今年、大阪の〇高校を卒業した娘でございます。お友達（悪友！）から、風俗草紙の第一号を見せて頂きましたの。そしてあなたの通信をみせられ、同病になやむ私はいくら力づけられたか分りません。でも、このことだけは親にもうちあけられなかつた事ですから、まして見知らぬあなたあてに手紙をかくなんて及びもつきませんでしたの。ところが、第二号を見て、勇敢に告白なさつた方が数人もいらつしやるのを知つて、とうとう、心をきめてお便り致します。どうか、後記の私の所にあてて、御返事頂戴ね。

差出人は×××として下さいませんか？ でないと両親が不審がるでしょうから。この差出人なら、私のお友達（風俗草紙をかして下さつたかた、つまり悪友で、私をとて可愛がつて下さる方）です。ので、両親も大丈夫です。



恵子さま。私は、こんなに歳が若いのに、変態なのかしら。同性に虐められるととてもうれしいの。そして、うつとりと溶けるようになってしまふのよ。この間の六月十九日も光江ちゃんとは、とても口では言えないような事をして、私をいじめましたの。光江ちゃんは二十三で、〇〇生命の経理につとめているンですけど、今、私に夢中なのよ。いいなづけの方もいるのですけど、結婚しないと云ってます。恵子さまも一度おいで下さらなにかしら。金曜日ならいつも皆るすですから。男のかたは乱暴だからイヤよ。女だけであそびたいわ。……」(雪子)

それから、遊びかたが色々かいてあるんですけど、とても、ここへは書けないわ。恵子もずいぶん色んな遊びかたしたけど、そんなのはじめて。恵子よりずっとスゴイの。でも、恵子うらやましかつたわ。世のなかのひとみんな忘れて、気の合つたお友達と二人で、そんな好きほうだいのこと仕盡したら、どんなに楽しいでしょう! と思つて。

外にあるいている雪子さんをみて、こんな秘密があることを想像出来るひとが居るでし



ようか。女つて本当に魔ものね。

弓子さんのお手紙もそれにも増して、なやましく、人間の秘密を知り初めた処女のもたえが、そのままこちらにつたわつてくるような感じがしましたわ。弓子さんのお手紙をピックアップするのは、とても可愛想な気がするのですけど、こんなひとが居らつしやつたら、心安まるかと思ひ一部だけ載せます。……弓子さんゆるしてネ。

(とてもきれいな習つた字で) 恥かし乍ら此のお便りを書いております。手がふるえて思う通りかけないのかなやましゅうございます。今、夜中の一時すぎで

す。家中のものみんなねむっているなかで、私一人、小鳩のようにふるえながらお姉様に、お手紙をかきます。なんだか悪いことをしているみたいで、おそろしいようです。でも晝の明るい所では書けそうもないのです。お姉様、計らずもお姉様の風俗草紙を手に入れました私は、ひろい世界のなかで、唯一人のお友達を見出したような大きな期待で胸をふくらましていますの。このお手紙、何度書こうかかきまいかと迷つたことでしう。でも、このような女性の方も多くいらつしやると思ひ勇気を出しましたの。

お姉様にだけ、私の秘密を教えてもよいと決心いたしました。お姉様、私ネ、はづかしい悪戯を覚えて終つたのです。でも悪いことぢやないでしょ？ 私の友達もしております。しかし、お友達の云うような強いエクスタシーは、私にはありません。どうした訳でございましょうか。私だけそうであれば、生れつきの片輪ではないでしょうか。私は、本当にお友達のすごいのをみせつけられた事がありますの。それ故、一層胸が苦しいのです。色々悩みましたけど、ダメですの。

お姉様、お教え下さいませ、どうすればよろしいのでしょうか。

私は、去年高等学校を卒業して、今、会社につとめております。会社のお友達とレスボスのようなお交際をする、二、三のチャンスがありましたがいいつも幻滅でした。(中略)——本当に恥かしいことばかり書いてしまいましたどうしようかしら。自分で書いた事を始めからよみ

なほして見ますと、独りてに興奮してしまいそうですわ。また今夜も、なくさめなければ眠られぬ夜でしょう。一日千秋の想いでお姉様の御返事をお待ち致しております……」

弓子さんは、まだ本当のレスボスのよろこびを教えて頂かなかつたお嬢さんなのね。スゴイのを見せつけられて、「ああ！……切ない」と興奮して、でも、まだアクメは覚えないお嬢さんなの。そして、こういう方こそ、私みたいなレスボスの女が一番心ひかれるひとなのよ！

——でも、弓子さんはきつと、男の好きなひとが出来れば、その方へ行くでしょう。思春期の一時期のなやみ、そういう気がします。……本当はレスボスなんて覚えなくて、男のかたに愛されるべきね。レスボスつて哀しいのよ。男の愛がきらいになる悪魔の遊びですもの。純真な弓子さんを入れたくないわ。……お床のなかで悩む弓子さんの姿を想像して、お手紙を頂いた晩はねられませんでした。そして長いお返事を差上げましたわ。

そう、こんな方からもお手紙がきました。その方は二十四歳。そして一度結婚なさった方なのです。

「夫は性的不能に近い人でしたので、なんのよろこびも知らずに、約三ヶ月で別れました。

その後家の事情からキャバレーへつとめるようになりましたが、そのとき一緒に働らいていたある年上の女性に愛され約五ヶ月程、一緒に暮しました。生れてはじめて、はげしい女の喜びを知りました。そのひとは、ふとした事からケンカして別れたのですが、どうしても忘れられず、二年間、行方をさがしましたが会えませんでした。色々な男性ともつき合いましたが、男のひとはどうしてもお友達としてしかつき合えません。女の方は、心安くつき合つて下さつても愛情をうちあけると、びつくりなさつたり、笑つたりして相手になつてくれないので苦しみました。



昨日日本屋にて、ふと風俗草紙を手にとり園村さまの通信をよんで、すくわれたような気持になりました。恵子様、私と同じ悩みをもち、私を理解して下さる方はないでしょうか。そしておつき合い下さる方はないでしょうか。……どうぞこの悩みを救つて下さいまし、お願い致します」

(幸子)

なんて悲しい告白でしょう。愛を求めてさまよつていらつしやる幸子さんなのです。私がお相手になつてあげたいけれど、姫路では仕方がありませんわ。……どなたか、幸子さんの満されないレスボスに愛をそそいで上げる方はいらつしやらないかしら。

桃子さんのお便りは、会社でもお書きになつたのか、富士銀行とわきに刷つてある便箋五枚に達筆でぎつしり。それに、私にささげる詩が別に入つておりました。

「レスボスの愛のサロンに君臨していらつしやる貴女様に見知らぬ友としてのふみを、お許しになつて下さいませ」

という書き出しで、詩のようなお言葉でお便りが書いてありました。

桃子さんも、はつ恋を、同性の友に捧げた方でした。そして、その不幸におわたした恋の思い出が、彼女に、レスボスの愛への開眼となりました。

このいとしい生の情熱を、われとわが身で抱きしめなければならなかつた孤独の夜のまどろみ。満たされない愛を、幻影にまでからませた愚かしさ。夜の私は快樂の下僕でした。

そうして、そういうレスボスの交を世間からは不自然と笑われようが、さけずまれようが自分のかたい意志は、それを求めつづけて行くでしよう！ と云つていらつしやいます。

私はあなたのみ前に愛を願つております。たとえ一日でも二日でも！ お逢いして、つかの間の、いのちをもやしたいのです。あとはどうなつても本望です。私は満二十歳になります。年上の方を慕います。……私のレスボスを満して下さい

る方がいらつしやつたら、ぜひ紹介して下さいませ。

(桃子)

とても情熱的な方ね。こんなひとに愛されたらスゴいでしょうね。でも桃子さんは、その後、お便り下さらないので、どうしたのかと思つております。この通信みたらすぐ御返事頂戴ネ。恵子あんな情熱的なお返事上げたのに、お返し下さらないなんて悲しいわ。

ああ、そう、こんなに色んな方のことを書いたのなら、秋子ちゃんのこと書いちゃあげなくちゃね。秋子ちゃんのは、二度目のお便りを紹介しようね。秋子ちゃんは、高校三年生。前にすてきなお姉様がいらつしやつて、京都の下宿へ遊びに行くと、夜お寢床のなかでギュツと抱いて下さったんですつて。

——でも、お姉様のおつしやるようなこと、何もなかつたのよ。只、息がつまるほど抱きしめてくれるだけでしたけど、私、何も知らなかつたので、それだけでよかつたの。少しも優しいところなくて、荒々しくてこわかつたのよ。でも、好きだつたから仕方がなかつたの。(中略) あたしお姉さまのおつしやるこ

と、すこしもいやだとは思いませんわ。男の人と女の関係なんか大きらい。でも秋子、よくわからないのよ。どうぞお姉様、教えて、お願い。あたし、お姉様に愛されたいわ。京都へいらつしやつて！ ネ、お願い。でもバカね、私、こんなことお願いして。お姉様あたし、いんなこと、まだよく知らないのよ。笑つちやいやよ。知りたくて仕方がないけど、人にもきけないでしょ。知ってるような顔してすましているけど、本当はよく分らないの。でも、時々夜中、お姉様の云うように淋しくてたまらない夜がありますわ。そういうときは、どうしていいか分らないで、ただ、やるせないような気持ちになるだけなの。どうしてなのでしょう。

写真きつとお送りします。かわいくとれたのを。父母は全く私に干渉しませんから封書で下されば絶体大丈夫よ(後略)

秋子ちゃんのお手紙は、いつも可愛ゆくて

思わずほえまれます。キレイな字ね。

今月は、お手紙のことで一杯になつてしまいました。まだ、御紹介出来ない手紙ものこつていますけど、この次にいたしましょうね。これを見て、勇気を出して私にお手紙を下さる方がいらつしやつたら恵子はどんなにうれしいでしょう！ ……未知の友よりのお手紙を待つ気持には、恋のアバンチュールに似た楽しさがあります。危険なたわむれかも知れませんが……

恵子、このごろ、レスポスの新しい遊びを一つ考えました。とても、刺激的で、いいのよ。

この遊びが出来るのは本当に好きな子とだけですよ。いわばこれを出来るかどうかで愛のあかしになるのよ。

二人でお風呂に入るの。そして、よく軀を洗うのよ。すつかりきれいになつて、二人共、一片のあかもなくなつて、むき玉子みたいになつたら、恵子が、流しの上に足をなげ

出して座るの。

そして、その上に、その子を座らせるの。恵子のももを、またいで、馬乗りになるように。恥かしがつて、仲々しないわ。……でも、無理にのせて、それから、そのままの姿勢でメイク・ウオータをさせるのよ。

「いや、恥かしいわ」

「ぢや、愛してないのね」

「そんな……ひどいわ、お姉様」

じつとうらめしそうに見ます。

「いいのよ。汚れたいの。しなさい。ネ思い切り汚して」

そうやつて、なだめたり、優しくしたり、おこつたりすると、しまいに、顔を真赤にして、泣きべそをかきながら……。

その快よさ。

ずんと、軀中へひびくの。

「お姉様、ごめんなさい」

「いいのよ。有難う。これで本当の恋人ね」

「お姉様、あたし……」

ひひと抱きすがつて、愛の感激にひたるの



です。……こんな素晴らしい遊びがあるでしょう。……レスボスなればこそだわ。……だって、汚されるんですもの。……

それから、レスボスをなさっているかた、または経験なさった方で、手記をお書きになる方はいらつしやらないかしら。なるべく、率直に、すなほに、書いて私宛にお送り下さいな。よいのがあつたら編集部へ推薦しますわ。虚構をまじえず事実をありのままを書いて下さいね。のせた分には原稿料をさしあげます。

それから、大阪の住吉区にお住いの方が、レスボスの愛人を求めています。お近くにすむ方、いらつしやいませんか？（御希望があれば住所をお知らせします。金曜日なら、いらつしやつて頂いてもいいと云つてます）——その他、先にあげたお手紙の方とお附合なされたいかた、いらつしやつたら、御希望お寄せ下さい。男の方はダメよ。

お手紙は編集部気付、園村恵子宛に。ぢや、また来月ね。

さようなら

代理部 目録

伊藤晴雨著五枚一組映入手差價五〇〇圓下共
凄艶女體拷問私刑秘畫集（寫眞）

特選写真キャビネ印畫紙 三枚 五〇〇圓下共
第1集むせび泣く悦虐秘圖 寫眞

晴雨隨筆 第一冊
責の四十八手 小型和裝美幀 價一三〇圓 下共

晴雨隨筆 第二冊
繪物語血血郷談 小型和裝二色刷 價一三〇圓 下共

晴雨隨筆 第三冊
危機一髪畫譜 小型和裝美幀 價一三〇圓 下共

晴雨隨筆 第四冊
與力同心岡ツ引 小型和裝美幀 價一三〇圓 下共

晴雨隨筆 第五冊
性犯罪と私刑 小型和裝美幀 價一三〇圓 下共

紅夢樓主人著縮刷凸版刷和裝（同性色情史）
美少年論 價一〇〇圓 下共

キド・ド・シュトック著 B六判二二六頁
被虐の家 價三二〇圓下三圓

東京千代田神田神保町二ノ三四
振替口座東京二四二五一番

日本特集出版社代理部

★讀者各位の御希望により代理部を新設致しました左記書籍御希望の方は代理部宛致金書留又は小爲替にて御申込み下さいませ尚書留御送附御希望の方は書留料加算御送金下さいませ

特選写真キャビネ印畫紙 三枚 五〇〇圓下共
第11集 岩風呂の被虐寫眞

特選写真キャビネ印畫紙 三枚 五〇〇圓下共
制服の女學生（良家の女子大學生特別参加）

峰岸義一著 B六判 二五〇餘頁
千零夜 價二五〇圓下三二圓

伊藤晴雨著 並畫菊判 和裝美本
責の 話 價五〇〇圓下三二圓

伊藤晴雨著 A五判 和裝美本百餘頁
黒繩記 價三〇〇圓下二四圓

伊藤晴雨著 A五判 和裝更紗表紙
責のこれくしよん 價三〇〇圓下三二圓

伊藤竹醉編 菊判和裝美本
小説に 責の代表名作選 價三〇〇圓下三二圓

伊藤晴雨著 價五〇〇圓下三二圓
十二カ月行事奇態刑罰圖譜

喜多玲子筆コロタイプ八枚一組下共三百圓
悦虐姿態素描集（2）

特 集 責 め

変態さるぐつわ雑考

あツと聲を出しているつもりが、うー、とより出ないし、「かんにんしとくれやす」と言おうと思つても、「うーうー」としか聲になりません……

高 月 大 三



縛り絵の最後のピリオドを打つ重要なアクセサリーとしては、猿ぐつわは忘れられない役目をしているかも知れない。云うならば、生きのいゝ刺身に利かせたわさびの感じとでも云うべきか。

縛り絵に猿ぐつわが描かれていないと、画龍点睛を缺いた感じがする、と云う声を度々聞くことがある。確かにこれはその通りで、猿ぐつわのみでは独立して考えられないものであつても、

逆説的に考えれば「猿ぐつわ」と云う言葉や文字の裏には、縛られた女を聯想し、其処に絵草紙的な凌辱場面を想像し得る。これは刑罰的な責め折檻や、白状を強いる拷問等の産物ではなくて凌辱、強姦等の方に関係がより深いと私は見たい。刑罰としても用いられていたことを決して否定する訳ではないが)

元来、声は女の武器の一つである。涙が、靜的心理的な女の武器と考えれば、悲鳴は、動的肉体的な武器と考えられる。力を持たないか弱い女性が、襲いかゝつて来た相手をたとえいくらかでも制圧する爲と、救いを求める爲に発するカン高いソプラノは、防犯装置の

非常ベルにもたとえられよう。

その非常ベルさえも奪い取つてしまうのが猿ぐつわなのである。哀願も、弁明も、呪咀も、あらゆる声を封じられて、襲撃者の思いのままの凌辱に屈服しなければならないのだ。

次に紹介するのは筆者が涉獵した此の種の責め本（春本に対して私はこう呼ぶことにしている、「人面鬼」「泣き叫ぶ青春」「バルカン」等の類書のこと）のうち戦後京都で入手した孔版ものの、中の一文であるが、第一人称としての猿ぐつわに対する表現の面白さと、戦前の花柳界らしきものが舞台になつてゐるため一個の商品となつて人間性をふみにじられてゐる女主人公の自虐心理が現れていて心を奪われたものゝ一つであつた。

表題は「ふるきず」

——おかあさん（女將のこと）は、わたしを裏二階の三疊に押し込んで、きつい言葉で叱りました。恩知らずとか、義理しらずとか、氣狂いだとか、いろいろのことをいつて、昨夜福本の座敷から逃げ出したわたしを責めつけるのです。でもわたしは春木屋のぼんぼん（若旦那のこと）に逢えなかつたのは口惜しいと思ひましたけれど、福本から逃げ出したことは後悔はしていません。いくらお金を出してくれた人だからと云つても、あの股野の旦那さんにわたしのからだを好きなようにされるのはいやでした。せめてそうなる前に一度ぼんぼんに逢うて話したかつたのでした。しかし今となつては、もうわたしは股野の旦那

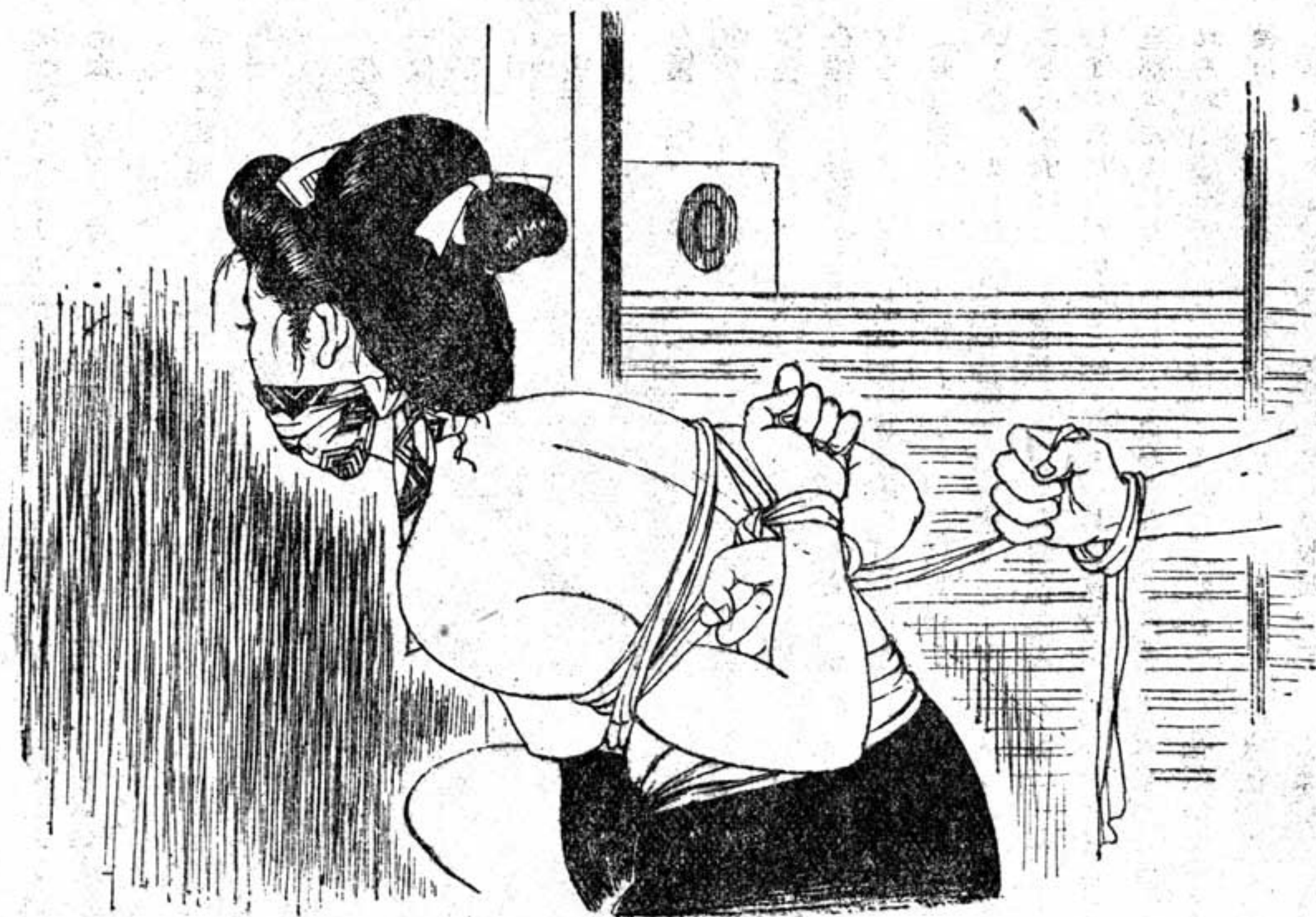
さんのところへ行くより仕方がありません。「しめ菊はん。あんた、ようもあての顔に泥ぬつてくれはつたな。福本のおかあはんかてえらいおこつてはんのや、今晚は逃げたりでけんようにするさかい、そのつもりでいゝや」おかあさんは大きな声で、男衆の捨どんを呼びました。——中略——わたしはお腰（腰巻）一つにされてしまいました。おかあさんはわたしの両手を背中へねじあげて、細紐で縛り上げるのです。わたしが痛さと羞かしさに身をもがくと、捨どんがきつい力で押さえつけました。

「旦那はんは口応えしたり、ひいひい泣き声あげんように、口をくくつてやり……」おかあさんは捨どんにそう云いつけて、わたしの口の中へハンケチを二枚まるめて詰め込みました。わたしは口惜しくて泣けそうないきがしてしまいましたので、却つて不貞くされたようにだまつて口を開いて、ハンケチを歯で噛みしめていました。口の中一杯につまつたハンケチが咽喉の中の水気を吸い込んで、しばらくのうちに口の中がカラカラに乾いて、吐氣がしそになるのですが、ハンケチを吐き出そうとしても口の上から手拭で覆われてしまつてゐるのでそれが出来ないのです。声

を出して捨どんに少しゆるめて貰おうと思つても、うーうーと押さへつけた、こもつた声が出るばかりでどうにもなりませんでした。裸にまでされて、こんな姿のまんまで、股野の旦那さんの好きなようにされることは、死ぬよりも辛い羞しいことには違ひないので、そのかわり自分から進んで身をまかせたのではないことだけが春木屋のぼんぼんに云い訳が立つと思ひました。

「お腰は旦那はんにはづしてもらいや」

おかあさんは——中略——口の中のハンケチはジトジトに濡れて舌をヌルヌルと押えつけていました。あッと声を出してゐるつもりが、うー、とより出ないし、「かんにんしくれやす」と云おうと思つても、「うーうーうううーうー」としか声になりません。その苦しさはとても口では云えないものでした。旦那さんは——中略——口惜しくて、羞しくて涙がポロ／＼とこぼれ口を縛つた手拭を濡らしました。いつそ舌を噛んで死んでしまおうと思つて歯と歯の間に舌を入れようとするのですが、口一杯にひろがつたハンケチが邪魔になつて、舌を噛むことさえ出来ません。……そのうちにわたしは、いつかうつとりとした氣持の中に落ち込んでゆきました。口



のハンケチは、いつの間にか取られてしまったが、わたしは今度は声が出そうになると一生懸命に敷布を口に噛みしめていました。

後略。

最後のあたりは、猿ぐつわを外されてしまったにもかゝらず、敷布を口に含んでいる風情は、この作者凡手ではない。また文中にしめ菊が舌を噛もうとするところがあるが、さるぐつわには、声を出させないと云うことの他に凌辱に逢う女が舌を噛んだりしないように、それを防ぐ意味も多分に含まれているのだらう。

自由を奪われて凌辱的立場にある女性が考えることは、自ら生命を断つて、最後のレジスタンスとしてその屈辱から逃れようとするのであらうが、それさえも此の場合は許されないのである。

前述の場合は、ハンケチを二枚まるめて口に押し込んだ、と云うのだが、「切利支丹迫害史」には捕えられて刑場に引かれてゆく犠牲者たちがデウスの名を口々に唱えるのを防ぐ爲に、それぞれの口中に路傍の小石や馬糞をつめ込んでその上から布切れで縛つた、と云うことが明らかにされている。

中世紀に行なわれたスペインの宗教裁判などでは、囚人に法廷で弁護をさせないために鉄製の玉に針を植えたものを口の中に含ませたりしたものらしい。恰度、栗のいがを口の中にかまされたようなもので、声が出せないばかりでなく、静かにしていても多数の針が口中を刺戟して、此の上もない苦痛であつたらしいことは想像出来る。

先日大阪新世界の某劇場を覗いた折に、お定まりの雲助二人が鳥追い女を引つさらうと云うシーンにぶつかった。

ところが一人の雲助が女を押えている間に今一人の奴が縛るものを探すが、見当らない、とゞのつまり自分の六尺褌を外して、それで女を縛ることになる。女が身をもがいて救いを求めるので、褌をあわてゝ猿ぐつわに代用して口に持つてゆく、そこで見物がどつと笑

うと云うことがあつた。ギャグとしては泥くさい筈だが、私はこれは一応戴けると感じた。変態的效果を狙つた猿ぐつわでは、こうした汚れもの、臭気のある布片、例えば男女の汗にむれた下着、沓下などが用いられるようである。

次に紹介するのは、二十四年に東京の某書房から出た活字本「鞭と青春」よりの一文である。

——フランツは、情け容赦もなく、ヘンネをその部屋の大きなダブルベツトの上に引きずつていきました。

ヘンネは両腕を囚人のように後に廻して縛られていましたが、それでも狂気のようになつて身を藻掻いていました。そして、その美しい唇からは断えずこの暴々しい、従兄に対する呪詛の声と、絶望的な悲鳴が洩れているのでした。

たつた一枚の純白の絹の下着は、ところどころ破れ果て、むき玉子のような肌が殆んど濡れていて、抱きしめて運んで行くフランツのたくましい腕には、その絨のような感触が伝つて来て彼の情炎は燃えさかるばかりでした。

(この朝の小鳥のような囁りを、何とか封じ

てしまわなければ)

フランツは、ダブルベツトの上に小鳥を放り出してそう考えると、不意にヘンネの下着を剥ぎとりました。それで彼女の口を覆うことを考えたからでしたが、急場に考えついたこの素晴らしい企てに彼は有頂天になつていたのです。

(下から剥がして上を覆うなんて、我ながら何と云う妙計だろうか。一石二鳥とはこのことに違いない)

しつとりと汗を吸つた彼女の下着は、それは薄桃色のうす絹で作られていて、むせるほどのえも云われぬ香気を含んでいるのでした。

高貴なこの娘の花のような唇を、娘自身のからだの匂いで覆うことは、フランツにはぞくぞくする程の充奮を感じさせるこゝろみな



ので、その爲にヘンネがどんなに屈辱に打ちひしがれるかを心の中で思いえがきつゝ、それを小鳥の口と鼻との上に巻き付けたのです。ヘンネの囁きは口を覆われた爲に呻き声に代りました。

——中略——彼女はフランクのそのような下品な、下等なあざけりや羞しめの言葉が自分の耳のなかに飛び込んで来るのを、どれほど口惜しく思つたか判らないのでした。フランクは、ゆつくり自分の着ているものを外しました。それは長い旅の間に殆んど取りかえられていなかったもので、非常によこれていました。

ヘンネは、そのよごれた布切れが、またこの上から自分の鼻を覆うのだと云うことを、目がくらむような屈辱感のうちに知る他はなかつたのです——後略——

単なる猿ぐつわとしてだけのものではなくて、その用いたものゝ持つ特種の臭気を、育ちのよい女性に対する屈辱的な嗜虐感として押しつけ、喜びを感じていることは特筆に価するし、果ては自分のものまで使用し、下から剥して上を覆うなんて……と機智に富んだせりふのあるあたり、一寸戴ける。

素肌と褌とが交錯している此の物語りの内

に、このような、変態的なさるぐつわの描写が一度ならず、何度も型をかへて出現するとは、このような妖しい感覚が此の作者の好みの中に強く根ざしていることを証明する。

末尾の方の章には醜い娘が友達であるところの美しい娘ヘンネを虐げる章があり、その時、二十日鼠を口中に無理矢理に入れて、脊下で口覆いをするところがある。これも、変つたさるぐつわと云うべきであろう。外国の婦人には、鼠は、蛇と同じ位の恐怖の対象になることを御存知の諸君なら、これが、どれほどの効果のある、意地の悪い猿ぐつわであるかが察しがつこうと云うもの。

我が国では、猿ぐつわと云えば、豆しぼりと云うのが相言葉のようになつていて、釣は鮎に始まつて鮎に終る、と云うのと同じように、猿ぐつわは、豆しぼりに始まつて豆しぼりに終ると云うのが定石になつていようだが、この豆しぼりというやつ、その昔、おそらく上流階級の人間は、豆しぼりの手拭など持たなかつたと考えてもよいから、虐げられる女の対象としての男の社会的地位を説明していて余りあることも興味のあることである。

(完)

原稿募集

★経験談・告白・手記

(四百字十枚から十五枚以内)

誰でも自分だけの奇妙な秘密な経験を一つや二つ持つているものです。殊にアブ党諸兄ともなれば、一寸知人友人には話せないが、といつて自分だけの胸にしまつてをくのは惜しい、といつた話があるに違いないと思います。どんなお話でも結構です。御申込の秘密は厳守しますから安心して御投稿下さい。

★アブ・ストオリー・小説

(四百字二十枚から二十五枚以内)

アブ・ストオリーとは前記の異常な体験談などを、やゝ小説風・物語風にまとめたものです。

★掲載分には一枚壹百円から貳百円の間で稿料を呈します。但し原稿の返却はお断り致します。

送り先は

東京都千代田区神田

神保町二の三四

日本特集出版社編集部

レスボス・すとおりの

歪んだ女

利子の床はソヨとも動かない。けれどほの暗い中に利子の瞳はすべてを見つめて、兩足を縮め、呻きを嚙みしめ……。

鳥羽瑛子

濱田稔畫



偶 像

隣室から、なにが可笑しいのかワアツとばかり笑声がひびくと、もうひろげた教科書の活字が浮いて見える。

利子は鉛筆を投げて、ぼんやり頬杖をついた。窓の外に黒く桐の木がかぶさつて見える。大きな桐だ。二階のこの窓から、丁度その花が見頃なのだ。淡い藤いろの、大きなその花びら……。だが夜はこうして、たゞその葉も花も、黒く大きく月光に濡れているだけ——。匂いもない。

桐の花の咲く頃……。乙女にはセルの着物が似つかはしい。利子は朱とクリームの、荒い立縞のセルに、モスの三尺を胸高に結んでいる。さつき、風呂で洗ったばかりの髪は、二つに分けて肩に垂らしたお下げ。制服の時にはかくれていた胸のふくらみが、若草色の帯の上でふくらんで見える。

窓一杯に吹きこんでくる、青っぽい風と真向きに、初夏の宵の若いもの憩いだ。

その撫で肩が、グイと押された。

「ねえ、利子。高杉先生の御部屋にゆかない？」

壁側の机に二、三人集つて、ガヤ／＼とひ

つきりなしの下級生たりをはぐかつて、さすがに声が低い。

「高シヤンたら、御食後外出なさつたでしよ？ さつき、御買物包みを下げて御帰えりんなつたのよ。どうやら、ペーカリーの洋ナマらしいと睨んだわ。ねえ、押かけていつて、荒らしちゃはない？」

「そうねえ……」

利子は、何時ものように生返事になる。

「明日の予習があるし……」

「ヤだ、そんなの。利ベエつたら、すぐそれだもの。石頭の点取虫！」

「アヤちゃん、あなた一人でゆけばいゝぢやないの？」

「フフ、気の利かない御親友ね。みんなの手前つてことがあるぢやないのサ」

ちよいと部屋中を見廻して、ペロリと舌を出した。派手なブラウスから健康そうな腕をむき出しにした、そんなアヤの屈託のなさそうなるまいに、何時も利子は圧迫されて苦笑してしまふ。

S市の郊外、なだらかな彌生ヶ岡の中腹にある、県立女子高校の寄宿舎の一室だ。十二疊敷のこの部屋は定員五名。だから机が五ツズラリと並んで、それ／＼女学生らしく賑か

に飾り立てゝある。

下級生たちは届いたばかりの映画雑誌に、四方から首をつゝこんで、我がことのように気おいこんでのスターの品さために、喚き立てるような賑かさ。とうにそんな時期を通りこしたアヤや利子の眼には、微笑ましくも、愚かしくも写るのだ。

その喧しさの中で、かすかにノックの音がする。利子は耳聴く聞きつけて、ハツと表情を止めた。

ドアが明いて、長身の高杉慧子がズラリと立つていた。さすがに、ピタリと静かになつた部屋の中で、利子一人が瞳を伏せている。ノックの音を聞いた時から、その音の癖で、彼女には誰か判っている。それから、その人の訪れた目的まで、判るような気がするのだけれど……。

「ちよつと生方さん、あなた、今忙しいかしら？」

「いゝえ、先生」

勢いよく立ち上つたアヤの足元で、利子はさり気なく顔をそむける。ホラ、やつぱり……。

「だつたら、ちよつと手伝つて頂きたい仕事があるのよ、一時間ばかり」

「はい、先生。そいぢや、利子さんも御一緒に御手伝いしましょうか？」

「いえ、舍費の計算や報告書だから、あなた一人で結構」

地方育ちの女学生には、殊のほか齒切れよく聞える口調でそう云った。そのハツキリした言動が、又この東京から赴任して来た美しい教師の、人気のあるゆえんでもあつたのだけれど――。

慧子について、パタ／＼と身軀なアヤの姿がドアから消えると、又一しきり騒々しい話題が生れる。

「ねえ、高シヤン先生つたら、この頃、いやに生方さん、生方さんつて……、ねえ？」

「アラ、知らなかつたのこの人。ずっと前から、飛び切りのゴヒイキなのよ」

「でも、そういつちやなんだけど、生方さんつて、あんなに派手でベタ／＼する人だから、彼女の方が強引なんぢやない？」

さすがに、上級生の悪口はうしろめたいらしく、一人がソツと室長の利子の方を見返えつた。窓に向つたセルの後姿は動かない。だが、まるで唇が青く燃えてでもいるような……。

「でも、高シヤンだつて、ペットの一人や二

人あつたつて、仕方がないわ」

「ノウ。絶対反対！ 我等の高シヤンは、舍生全員の偶像として、断乎確保せよ！」

「バカ！ でも、先生が今着てた、チュール入りのブラウス、素敵ね」

「白が似合うのよ、彼女は……。白か黒。他の色着ると、不思議に高シヤンらしくないわ」

突然のように、利子が立ち上つた。

「あなた方！ 自習時間でしよ、お喋りはいゝ加減にして頂だい！」

何時もは至つて穏和な室長の珍しい見事にあつ氣にとられたような下級生たちの横を足早に通つて廊下に出た。

どうしたんでしよ、室長様？

ヘンテコねえ、アレかな？

あとで、そのくらいのヘラズ口が出ることは判つていたけれど、無性にいら立たしい。

誰も居ない洗濯室を通り抜けて裏庭に出た。

校友会の名が、桐蔭会と云うほどにも、学校の庭にも寄宿舎の裏にも桐の木が多い。利子はその太いに幹にもたれて、舎監室の灯を見た。それは、どの窓の灯よりも明るくて、それゆえに彼女には近より難い。気のせいかな。忍び笑いが洩れてくるような気がする。あたしは、又、この灯を見に来たのね、と

思う。足元に落ちた桐の花びらを拾つて、唇にあてた。利子は、これが恋だと信じている。だから、こんな詩が好きなのだ。

わたしの恋は

水のなかにある夕日のかほ、

あたしの恋は

真夜中のおちばのおもひ

ことばもこえもかげもなく。

だが、利子はこの詩の作者を知らない。

女の集團

くらめくような七月の陽の下に、若い咽喉一杯の喚声があがる。

白いボールが蒼穹に弧を描いて、力に満ちて落下する。受けて、パネ仕掛けのような跳躍。パスする時の、のび切つた両手の表情。

若竹のようにしなつた、女生徒たちの姿態。白い運動服に、紺のブルマーが健康な太腿を見せて、どの顔も汗で、赤らんだ表情に齒

だけが白い。利子は思いつきり跳んで、ボールを衝いた。ネットの向う側、前衛の高杉慧子の頭上に――。

そのボールを受けて、転く打込みながら、慧子が笑つたように、利子には思えた。黒曜のようなその瞳も、ボールと一緒に、キラリ

と利子にはじきかえされてくる。利子は我を忘れた。

先生が、私を見た——。彼女は夢中で跳びながら、そう思った。

今までだって、先生は冷淡なクセに、ひどく熱っぽくあたしをみつめることがあつた：

……。あたしは、時たまあたしに向けられる、あの黒い瞳に奉仕しよう。あの、先生の気まぐれな一瞥に、あたしの生涯を捧げてもいい。先生がペットを作ろうと、アヤを愛そうと私が先生に献身することを、誰もさまたげられやしない！

ブルマーの乙女たちの中で、たゞ一人黒いスカートの慧子が跳躍するたびに、見物の生徒たちの中から拍手が沸いた。ボールがはじかれ、喚声がり、午後の陽ざしが焼けつくように照りつけてくる。

だが、慧子だけは、汗もかゝないように見えた。こんな激しい運動の最中でも、額は蒼いほどにも白い。うなじのあたりでかすかに髪が波うつているだけなのだ。

「高杉先生！」

ボールを押えて、白い顔がふりかえつた。藤棚の下で、手招きしている同僚がいる。

「ぢやあね、先生は抜けますから、誰か代りに入つて続けて下さい」

小走りの後姿に視線が集つて、拍子抜けの不満がわいた。

「誰よ、高シヤンを呼んでるの、試合の途中なのに、非常識ぢやないの！」



「井上先生よ、ホラ、ニヤ／＼してるわ。どうせ大した用事もありやしないのよ」

「いゝ歳をして、奥さんも子供もいるクセに、藤棚の下で高シヤンと立話なんて、いゝ気なもんね」

一通り毒づいてから、アヤの指名で見物の中から代りの前衛が入ったけれど、利子の視線はもうボールからはずれている。ミスの連続だった。

「植さん、どうしたの？」

「利子、なにぼんやりしてるのサ、今までフラインプレー續出だったクセに……」

利子は、胸が悪くなるほどにも嫌だった。たとえ同僚にもせよ、慧子が異性と肩を並べて、親しそうに談笑していることほど不快なことはなかった。どんなに離れていても、そして、それが朝夕のさり気ない挨拶だけであっても、慧子に近づく異性に対して、利子の神経は異常に緊張する。

それがズンダリした色黒で、髭の剛い物理教師の井上だから、一層利子はやりきれない思いだった。厚顔な中年のその教師を、利子はひどく嫌っていたのだ。

ブルマーを脱ぐと、グツタリ疲れていた。汗になった牀に気持の悪い思いをしなから、

アヤたちと一緒に寄宿舎に帰った。だが、寄宿舎の空気がなんとなく落着かないのだ。

他の部屋の舎生たちが、大勢利子たちの部屋がある東側の階段下に集つて、ヒソ／＼と囁き合っている。それが利子やアヤの顔を見ると、顔を見合せながら道をひらいた。

「どうしたの？」

ヘンに困つたような表情で、返事はない。だが、二階からキン／＼ひびいてくる声を聞くと、アヤは二段とびに階段を駆け上った。

「浦辺さん、一体どうしたつて云うの！」

アヤの激しい声の正面に、隣室の室長である浦辺達江が、髪をふり乱して立つている。足元の廊下に、この東側四室の下級生たちがズラリと正座している。どの顔も眼を泣き腫らして赤い。

利子の顔を見ると、同室の三人が、すがりつくように顔を上げた。

「まつたく、何度注意しても判らないのだから！ だらしない！ あんたたちは、この寄宿舎の舎則をなんと思つてるの!？」

「浦辺さん、この人たちがどうしたつて云うの?」

利子は出来るだけ穏かに声をかけた。だが浦辺達江は蒼黒く顔をひきつらせて、もうこ

との原因は思出せないのかもしれない。どうせ、掃除かなにか、些細なことから始つたのに違いないのだから……。

「生意気な口ばかりきいて……。ヤキを入れなきや、ズルけることばかり考へてる。今日は誰が止めても、東側舎室委員の資格で私が制裁します！」

制服のまゝの達江が前に出ると、すぐ手近に坐っている少女の頬が鋭く鳴った。少女はワツと堰を切つたように声をあげて顔を蔽つた。だが、達江は一層そゝられたように、次々に平手打ちを加えてゆく。瘦せた顔が、狂つたような眼ざしで異様なのだ。

「浦辺さん、とにかく、私の部屋の人たちは私の責任ですから連れて帰ります」

「いけない！ あなたのような室長が、下級生をそうして甘やかすから、こんなに手に負えないようにツケ上るんだ！ あなた、自分たちが下級生の時、上の人にどんな制裁を受けたか忘れたの!？」

利子は微笑した。

「それは別問題だわ。——さあ、皆さん、御部屋に帰るのよ」

大半が泣きながら、それでも救はれたように立ち上つた。よろめいて、隣り同士肩を抱

き合いながら、まだ泣きじやくつている。

「あんたたちがそんな態度を採るから、下級生のシツケが出来ないんだ！ こんなことから、あたしは委員や室長としての責任がもてません！」

「だつたら、あんた、委員も室長も辞めつちまえばいいぢやない!?」

皮肉に、しかしケロリとしてそんなことを云うアヤの袖を、利子はソツと引つぱった。

部屋に入ると、神妙に机に向つてゐる下級生の一人の頬を、アヤはつゝいた。

「浦辺さんのヒスは、あんたのせいよ」

まだ愛くるしい断髪の子は、泣いた跡の眼ぶたをうす赤くして、途方にくれたような表情になる。

元は隣室の浦辺達江の部屋にいたのだ。それが達江の風変わりな愛情を嫌つて、利子やアヤに泣きついて部屋がえして貰つたのだけだ……。それ以来ことごとくに達江と対立して摩擦は時にこんなイビツな形で爆発する。

隣室では、まだ室生だけを集めて余憤をぶちまけているらしく、感情的な達江の声を縫つて、すゝり泣きの声さえ洩れてくる。

「あの人、下級生をぶつたり、ツネつたりするんだから……。一体、どんな趣味なのかし

ら?……」

耳をすましながら、アヤが呟いた。利子はアヤの顔を見つめた。利子には、達江のものぐるほしさが判るのだ。女ばかりの寄宿舎の日常が醸し出す、ヒステリックなうつとおしさ。その中で奇形な愛情を内攻させてゆくことの息苦しき――。

着更えするの忘れて、利子は暗い眼つきで壁にもたれている。

乙女の日

朝から白い夏雲が沸くような日和だつた。

もう二、三日で暑中休暇に入る。

寄宿舎から、市の南北にある学校まで市電で三十分。今朝は都合で出遅れて、利子はその市電に珍しく一人で乗った。アヤや、下級生たちのお喋りにも煩はされぬ、のびやかな時間がたのしかつた。

だが、乗るとすぐ、射すくめられるような視線に気がついた。

又、あの人だわ……。偶然にしては、あまりに逢いすぎる。内気な利子も、さすがにその熱っぽい視線の意味を悟らずにはいられなかつた。

だが、彼女はその視線の主に、冷めたく横

顔を見せる。それどころか、こうして横顔を見られていることだけでも嫌だつた。なんだか、自分が汚されているような氣持がして、だんだん腹立たしくさへなつてくる。

大学の経済科生らしかつたが、服装もとつて、目鼻立ちも卑しくはない。まだ清潔さが残つたムキな表情が、ヒタとこちらに瞳をすえている。だが、とにかく嫌だつた。

異性の熱っぽい視線をこの牀で支えていることが、迷惑なのだ。不快なのだ。男そのものがいやらしく厚顔な動物に見える。ズボンの形も大きく手垢の染みたカバンも野蠻でグロテスクに見える。それにあの垢光りした帽子の色！ 利子は殆ど身震さえる。

幼い頃からこうなのだ。はだしになつて棒つきれを下げた餓飢大將に泣かされた昔から異性は嫌はしい醜惡な存在だつた。一様にデリカシーに缺けた、毛の多い、声の大きな動物！

熱っぽい視線の前で、利子は牀をこわばらせる。電車を降りると、ホツと息を吐いた。けれど、間近に迫つた靴の音を聞くと、予感があつた。

「もし、横さん！」

誰とも知れぬ男に、名前までも知られてい

と思うと、狼狽と怒りがカツとこみあげた。

「横さん、失礼、これ……」

毛穴のひらいた顔が間近に迫って、白いものが制服をかすめて、手提カバンにねじこまれる。そのまゝ、卑屈な笑顔を残して、学生は消えた。

地たんだを踏みたい思いで、その白封筒をつかみ出し、ねじ切つて溝に捨てた。裏返えして、名前をたしかめようとも思はない。利子にはそんなに激しい面もある。だから、なに一つ喰いこむ余地もなく、彼女は高杉慧子に傾倒しているのだ。

その日の午後、利子はアヤに肩を押されて校庭に出た。

「ねえ、利子、あなた休暇中の予定あるの？」

「うゝん、別にないわ」

「よかつた！ ねえ、あたしの家に泊りがけで遊びに来てくれるわね？」

「そうねえ、伺つてもいゝけれど……、でもどうして？」

アヤは例のように、ちよつと辺りを見廻してから、声をひそめた。

「高シヤンも来るのよ！ あたしの家に——」

「あら！」

思はず声が高くなつた。

「八月の始めから、一週間ほど御泊りになるつて……。でも、これは絶対ヒミツ。みんなに知れたら大騒動」

有頂天の、相手の顔をジツと見た。

「ねえ、唄つたり、泳いだり、散歩したり、朝から晩まで高シヤンと一緒に。どう？ 凄いちやない？」

「あたしは、止すわ」

「あら、どうして？」

一ど横を向いてから、声は震えたが、卒直に云つた。

「あなたがた。二人の方が御都合がいゝんでしよう？ どうして、あたしなんぞ誘うの？」

「そうひねくれるだろうと思つていたわ。と

ころが、それが高シヤンの條件

なのよ。必ず、

あなたも誘うつてことが……」

「高杉先生が!?」

利子は悲鳴のような声をあげた。

「嘘！」

「うそぢやないわ、二人つきりよりも、横さんも御誘いなさいつて、先生がそうおつしやるんですもの……」

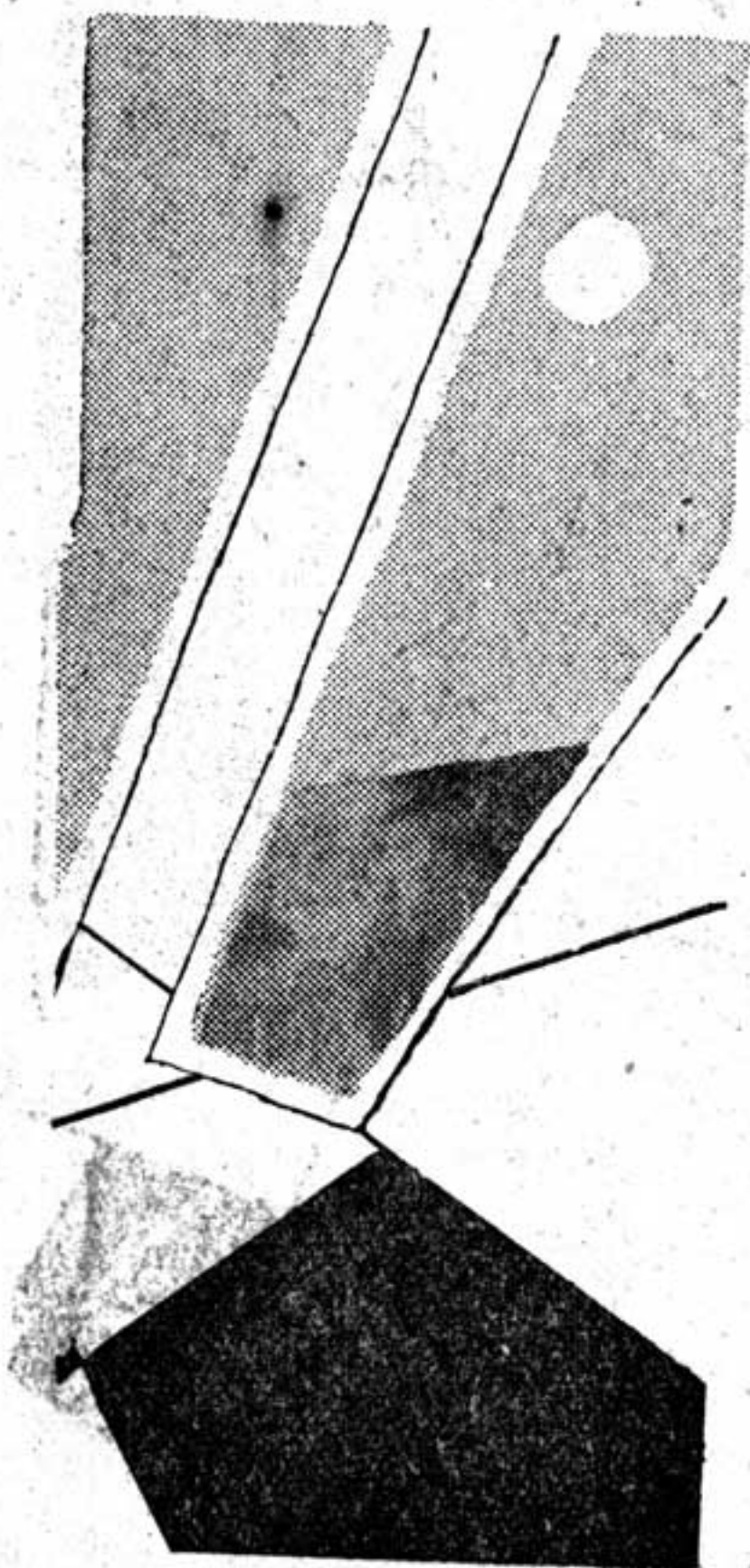
「先生があたしを……」

利子は必死に首をふつた。どうあつても、そんなことは考えられなかつたのだ。

「あたしのこと、あんなに嫌つてらつしやるのに、どうして……」

「とにかく、そんなわけだから、あたしを助けると思つて来て頂だい。お願い！ ね、この夏は、アヤの生涯の最良の夏だわ。ブラヴオ！」

アヤは利子の手をつかんで、はずみをつけてクル／＼廻る。利子はその力に引き倒されまいとして、軀をそらせながら、気持はその



渦に巻き込まれるように、滅茶苦茶に混乱していた。

翺ぶる

S市で海にそぐ川をさかのぼって十里余り、山間ながら川ぞいにひらけた平地の中心に、アヤの邸があつた。

この地方切つての旧家だが、両親は亡く、跡取娘のアヤがS市に遊学中は、気性者の祖母が一人で、古い家の仕きたり通りに、旧家の格式を守つて暮している。

アヤはツバの広い麦わら帽子で、赤いサンダルが彼女を幼く見せる。その真後に、バスの停留所の標示柱が高い。

「ねえ先生。利ベエ、本当に来るかしら？」

「来ますとも」

「だつて、昨日来た手紙だつて、なんだか曖昧だつたわ」

「見てゝごらんない。あの人、きつと来るから……」

慧子は微笑してそう答える。夏服には珍しく、ピッタリと軀の線を見せたタイトのワンピース。しかも黒一色の——。だが、如何にもその人らしい美しさが滲んでくる。

「先生、バスが来たわ」

七曲りの道を青葉がくれに、黄色いバスの車体が見えかくれする。やがてそれが、二人の前にゆるく止つた。

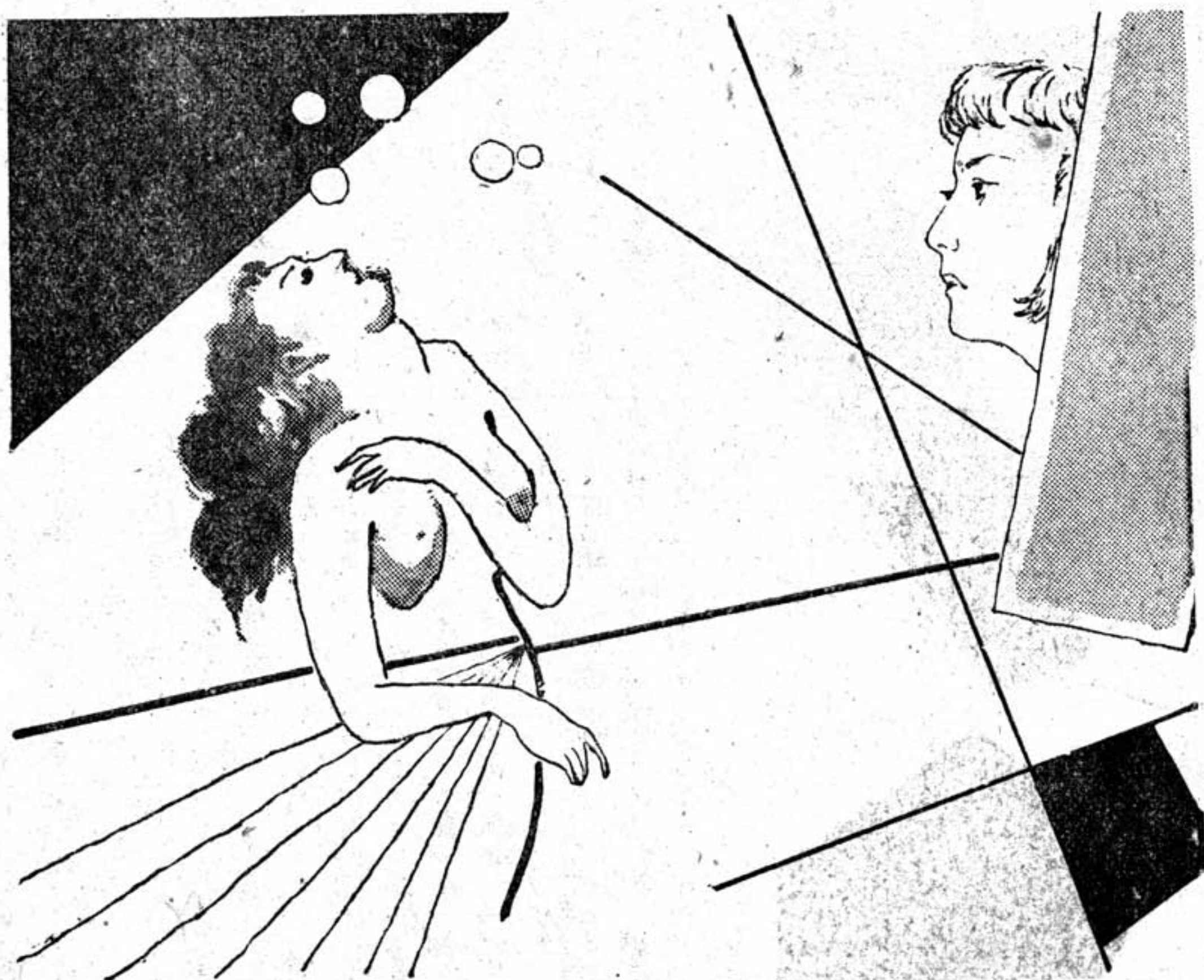
「利ベエ、待つてたわ！」

はにかんだ利子の笑顔が降り立つた。うつすらと汗を浮かべて、納得のゆかない自分の位置に困じ果てた表情。それがオズ／＼と慧子に瞳を向けた。

「先生……」

「さあアヤさん帰えりましょうよ」

利子の会釈が



眼に入らなかつたように、クルリと背を向けたのだ。利子は一瞬呆然と硬直した。この休暇中の再会に、彼女はもつと異つた種類の展開を描いていたのだから……。

やつぱりあたしは余計者なんだわ。先生もアヤも、あたしに用はありやしない。わく／＼さ呼び出して……。この人たちはあたしを黽つて……。

招かれざる客。その思いが冷めたく胸の底に溜る。しかし、その慧子のヒンヤリした冷酷さが、今はなにか小気味よくさえた。前に立つた二人の後姿にジツと瞳をすえながら、利子はそう思つた。

おかしいわ。先生は、以前から私をこんな風に育てたみたい私をいじめて、いじめ抜いて、そのみじめな恰好を、まるで舌なめずりするように、そ知らぬフリをして眺めている。

山の旧家で、誰にも制肘されない、自由な生活が始まつた。朝の床の中から、けた／＼ましくアヤの笑声がひびくのだ。食事にも散歩にも、慧子の視線はアヤだけに向けられる。かたくなに、利子は無視されている。慧子が作り出したそんな空気を、もはやアヤも、利子も怪しまない。

一台の自転車に乗つて、二人が峠をこえて

ゆく時、利子は夏草の乱れ咲く原の中に黙つて立つている。裏庭の石垣を降りた川の流れて、紺と黒の水着が飛沫をあげてもつれる時も、彼女はもの憂く石垣にもたれている。焼けつくような嫉妬には変りがないけれど、その奥の、もう一つの感情が利子を身震いさせる。冷やつこい、ひきずり込まれるような快感なのだ。

「ねえ先生、先生は男の方を愛したことがあつて？」

「いゝえ、愛したのはアヤちゃんだけ」

「フフ、だつて、井上先生と御親密だつて噂もあつてよ？」

「あの方の傍によると、吐きそうになるわ。利子さん、あんたも、ひどく井上先生が嫌いなものね？」

珍らしく声をかけられると、彼女はトッサに返事も出ない。口ごもつて、そんな慧子の鋭さが怖いのだ。

先生は知つていらつしやる。恐らくは何も彼も……。こんな畸形なあたしを作り上げたのは、先生の、この鋭い性格なのだから……。その複雑な陰影の魅惑。

賑かな二人の会話を遠く聞いて、利子の思ひは、その一点で震えている。

夜の川

夜は、広い奥座敷に三ツ床を並べる。

慧子は此処では、思いきりアヤを甘やかす。アヤは仔猫のように、精一杯じゃれつくのだ。寛大にすべてを与えられて、若い裸体がゴムマリのようにはずみ、はねかえる。

其処には教師も、女生徒もなくて、飢えて求め合う二つの女体があるばかり。布団を蹴り、蚊帳をゆすらせて、体臭がかぶさり合うのだ。

教壇の慧子は、この床ではまるで別人のよう。野卑な男のように貪婪なのだ。彼女のアブマニツクな性欲が、一切の仮面をすて、音をたて、アヤにいどみかゝる。利子は見事に無視されている。

その利子の床は、ソヨとも動かない。けれど、ほの暗い中に、利子の瞳はすべてを見つめている筈だつた。来る夜も、来る夜も……。彼女はしつかりと胸を抱きながら、床の中で両足を縮める。呻きを噛みしめる。

「あゝッ、先生！」

「アヤ、あたしのアヤ！」

けれど、利子は、同時にもう一つの、慧子の声を聞いている。それは三者三様の、複雑

な情感の投影なのだ。

利子にとつて、夜の床は練獄でもあつたし又、云い知れぬ快感の温床でもある。そうして、一週間経ち、十日経つた。山の裾に黄蘗の木が色づいて、モズがけたましくさえずり出す。そんな山里のある夜、アヤがボートを出すと云い始めた。

「でもアヤちゃん、夜は危いわ」

「大丈夫。月夜だし、それにこの川は、あたしの家の庭みたい。眼をつぶつても平氣」

ボートは石垣の下につないである。利子は危ふんだが、慧子は浴衣の袖をひるがえして、黙つてボートの舳に坐つた。

自慢した通り、アヤは達者にオールを切つたが、利子はなんとなく胸騒ぎが去らなかつた。川の流れは早い。十七夜ほどの月光が碎けて、金波銀波を描いた。

慧子の顔も、アヤの顔も月光で蒼い。川に出てから、アヤは一言も口を開かない。押し黙つたまゝ、オールの手を休めないのだ。不安に胸がつぶされそうになつて、利子は慧子をふりかへつた。

不思議に、その顔が笑つている。始めて、利子に向けられた笑顔なのだ。その時、オールの音が止つて、アヤがそれを離した。

「アッ！」と利子は声を呑んだが、瞬間、オールは夜の川にのまれて行つた。

「アヤちゃん、どうしたの！」

アヤは面変りしたように見えた。三十女のような憎悪で二人を睨んだ。

「あなたたち、二人であたしを黽つていたのね。あたしを道具にして、さんく二人でたのしんでいたのかわ。招かれざる客はあたしだつたのかわ。知らなかつた、だから、あたしは有頂天になつていたわ。先生に選ばれたのは、あたし一人だと思つて……」

声が咽喉にからんで、アヤの頬をポロ／＼と涙が光つてこぼれた。

「だけど、先生が愛したのは利子だつた。先生は利子を、狂ほしいほど愛している癖に、その愛情の手段として、あたしを利用したのよ。あたしを道具にして、さんく利子をいじめて、苦しませて、みじめな利子を見ることが、先生の畸形な愛情なんだわ。そんな変態的な愛し方しか出来ない人なのよ！」

慧子は、まるで聞えないように静かだつた。「利子もそうよ。みじめにあしらはれて、苦しんで、あたしを嫉妬しながら、残酷な、もの凄いの喜びを味つてるのよ。変態だわ。二人とも、呪はしいアブマニアだわ！ 知らない

顔して、二人であたしを黽つて、邪魔者は、あたしだつたのかわ！」

最後は悲鳴のようにひきつれた。アヤは狂つたように罵るのだ。利子は両手で舟ばたにつかまつた。足が、オコリのように震える。

慧子が、顔を上げた。笑つている。

「そうなのよ、アヤちゃん。みんなあなたの云つた通りだわ。でも、それがどうしたの」アヤの顔が醜悪にゆがんだ。

「あたし、呪つてやる！」

舟ばたを蹴つて、高い水音があがつた。アヤの姿は一瞬怪鳥のように利子の瞳に写つた。

「先生！」「どうしたの利子、怖いのか？」

「先生、アヤちゃんは……」

「大丈夫、あの人は死にやしないわ。この川で育つた河童だもの。——それにしても大、変な御月見になつたわね。こうして流れてゆくと、明朝は、S市に着くかも知れないわ」

慧子に抱かれながら、利子は今はもう、愛されていけないのかもしれない、と、思つた。

今はみじめなあのアヤに、慧子の愛情は移つているのかもしれない。この人は、そんなイビツな形でしか愛情を持てない人なのだ。

利子は抱かれながら、音もなく流れる夜の川よりも、その人が恐しかった。



そとみあ通信

讀者交歓室

藤井 晃



☆

私は本年二十七才の男色愛好者です。今まで私たちの読みたいと思う男色の記事を主にした雑誌が見当らず、淋しく思っていた折柄貴誌を手にして非常に満足しました。わけても貴方の多岐に渡る御説を毎にち楽しみにしております。

私がこの道に入つた動機は、十九才の時軍隊に入隊して、北海道出身の一人の同年兵と親しく交際を続けるうちに、ついに肉体関係を結ぶようになり、交りを重ねること数回、勿論精神的にも強く結ばれて、切つても切れぬ間柄となつたことです。

交渉の場合、私は常に能動的に挺身して彼を十二分に愛撫し、彼はいつも受身に私を満足させてくれました。

ところが、こうした二人の仲も、それから間もなく、終戦、そして軍隊解散によつて、別れ別れになつてしまつたのです。

八月三十日、集合駅で私たちは最後の別れを惜しみ、彼は北海道へ私は京都へと帰りました。

其後彼とはあじきない文通だけを交しておりましたが、北海道では降雪しきりとニュースが伝えられる初冬の或日、彼の兄なる人からの便りに接し、それに、弟は帰郷以来気の脱けたようになって、ただ貴方からの手紙だ

けを楽しみにしていたが、一週間前当地でも珍しい寒気にやられて寝こみ、それが因で急死してしまつたとの文面でした。

そのときの私の悲嘆は、ここでクダクダ述べませんが、とにかく、彼は死ぬとも、彼が私の体に植えつけた同性愛は消えず、以来ますます同性を慕う思いに、日夜悩んでおります。が、私の引込思案、氣弱さは、積極的に相手を求め得られず、この「そとみあ通信」による紹介を待つよりほかありません。

私の求めたい同性は、なるべく大津市内か又は京都市内に居住しておられる三十才位までの受動的な方です。そういう男性と真面目に交際いたしたいと思ひます。

又、京都市内に私たちのような同性愛者の集合同所がありましたら、お教えください。

(京都 M・Y 生)

★

「そとみあ通信」によつて、私たち同性愛者の悩みを解決してくださることをありがたく思っております。

小生は本年廿四才、身長は一米六十四糎位瘦せている方です。容貌は、自分から云うのもへんですが、普通よりも良い方だと人にも云われ、どちらかというと柔さしい顔の部類です。又、象徴物は普通時の長さ六糎程、最長時は十四糎位です。

趣味は、古典音楽（バッハ・ヘンデル等）と文学でございます。

好みの同性は、

一、三十才位のサツパリした性格の人

二、四十五、六才の何事も経験して来たサバケた粹な人

等です。女々しい人はあまり好きでなく、たとえば、リチャード・ウィドマークのような男性が好きです。

パッシング・アクティヴ双方有つております。映画館の内などで、相互 On the 快を知りたいと思つても、またそのような機会に一度も接したことがございません。

★

私で叶うような人が読者に居りましたら、お便り下さい。（東京 S・T 生）



「そとみあ通信」を読んで、堪らなくなつてペンをとりました。

私は身長五尺四寸五分、体重十六貫三百、体格としてはいい方だと思います。十八才で海軍に志願したときに、身体検査の時に検査官からほめられたような体格です。

若い時には日々張切つた生活を送り、いまのような気持が自分の体内にあるなどは夢にも知りませんでした。復員後或る温泉に二十日間ほど遊びに行つた折り、そこで B 氏というとてもスマートな紳士と知りあい、友達となり、往き来していましたが、ふとしたことから同性愛を教えられ、いろいろ話もきました。

別れてからも、B 氏は、汽車で三時間もかかる私の家まで訪ねて来てくれました。私の最初の人ですが、この二年ばかり音信不通なのです。

このごろでは、B 氏と似たような三十才以上の紳士的な同性を見ると、堪らなく興奮して来るのです。淋しい私にお便り願はしゅう存じます。（新潟 F・S 生）

★

私は廿四才の青年で、現在相手がないままに孤独に悩んでいる者です。

ホモの傾向に気付いたのは、中学に入つてからで、先生や上級生にあこがれていましたが、消極的な性質のため打明けることができ



ず、毎日悶々として、Onanieでわずかに慰めておりました。

社会に出てから、この傾向の人と親交もいたしましたが、肉体関係はありません。私は年下の者よりも年長者（廿七、八才から卅二

三才）に魅力を感じるので、私とつきあつたそれらの友人たちは、私と反対に年下の者に恋情を感じるようです。

大分前のことです。友人に新宿の喫茶店につれていつてもらつたとき、そのボーイが私をハンサムだとか、いい体をしているとか云いながら、寄り添つて抱擁して来ましたが、そのときの私は、初心のせい、ただ胸がドキドキするばかりでした。

私は商売人にはあまり恋愛も欲情も感じません。商売人でない年長者で、私をパッシヴに愛してくれるような人を欲しています。



私は一生ホモとして終るでしょう。ただ相手の少ないのが、残念です。孤独に悩む私はこれからどう生活していったらいいでしょうか。（東京 W・K生）

★ われわれ男色党に心から理解ある貴誌に接し、小生にとつては天にも昇る喜びにて、今より期待している次第です。

小生現在二十八才、身長五尺五寸、体重十七貫五百（68kg）、小学校時代に受持の先生に可愛がられてから、その愛されかたが身にきざみこまれ、日夜野性的な同性を幻想し、その愛撫にあやかりたく、寸時も頭を離れたことはありません。

小生の希望する男性は、自分の住居の關係上、小樽市内又は札幌市内に住むインテリ紳士で、三十才以上の野性的な長身者ですが、内地の方でも、北海道に出張せられる方でし

たら、いつでもお待ちいたします。

（北海道 K・S生）

★ まず自己紹介させていただきますと、本年二十五才（数え年）身長五尺六寸、体重十五貫、体格は一応他人よりは立派と云われ、色は白い方と云われております。

このように、割合いい体格をしているのですが、私は、野性的な筋肉隆々たる人を見ると、きたならしくは思えても、すこしも美しいなど感ぜられず、普通のサラリーマン型のインテリらしい中年紳士に非常に惑われるのです。

映画俳優では、上原、レイミランド、コールマンなどが好きで、三船等野性的な感じの者には心から悪感が走ります。なるべく九州方面の方のお便りをお待ちします。

（大分 M・A生）

答

今月は趣きをかえて、一通々々えのお答えでなく、同形式の数通の通信を列べ、そこから一、二の主題をとりあげ

それについて総合的に答えをしてみようと思います。

ここにとりあげる問題は

- 一、各自の自己紹介（自分の肉体・容貌・象徴物或は性格等の）の分析
- 二、各自の求める理想の男性についての二つです。

で、まず「自己紹介」についてですが、第一に気付くことは、ここに挙げた六人の方を通じて、それぞれ自分の容貌なり肉体なりに満々たる自信を誇示していることです。

たとえば、京都M・Y氏の通信における、「私は常に能動的に挺身して彼を十二分に愛撫し」の語のうちには、自己の強健なポテンシアル・エナジー（性的精力）なりリングナリのひそかなる誇りが窺われます。又、東京S・T氏の「容貌は自分から云うのもへんですが、普通よりも良い方だと人にも云われ、

（中略）象徴物は……」云々の一節、次に又新潟F・S氏における「身長五尺四寸五分、体重十六貫三百……身体検査の時に検査官からはめられたような体格です」の一節、東京W・K氏の「そのボーイが私をハンサムだ

とかいい体をしているとか云いながら……」の語、北海道K・S氏の「身長五尺五寸、体重十七貫五百」なる自己紹介、大分M・A氏の「体格は一応他人より立派と云われ」云々の一節——すべて満々たるプライドでなくて何でありましょう。これはナーシシズム（自己恋着）の現れなのです。

われわれソドミアは、ナーシシズムが他より非常に強いのです。勿論、中には、前月号の桐生A・K氏のように、自身の貧弱な体格に対する劣等感に起因するところ大なる同性愛もありますが、それにしても、その場合、体格が貧弱であれば、容貌とかリングに対して、やはりナーシシズムを有っているものです。

そして、そのようにナーシシズムが強いために、同性を恋するようになるケースもなかなか少くありません。

事実、同性愛者には、ハンサムな者が多い。すくなくとも、人並の容貌をその大半が有っております。醜貌の者とか畸形者などには、同性愛者は見られません。

このように自分の容貌に自信をもち、恋着

するあまりに、自分より劣つた——とソドミアは感じる——容貌の異性に興味を失し、自分と酷似した同性に恋愛を感じるようになるというケースであります。つまり、そういうケースの人にとつては、他の同性を愛することとは、とりもなおさず自己を愛することなのであります。

ナーシシズムが強いだけに、ソドミアは自我が強い。それも小乗的な自我で、内向的に現れます。ソドミア同士の座談会のような会合の場合、私はいつもそのことをハッキリと感じとつてしまうのです。心のトビラを牡蠣のように閉じて、他には容易にそれを抜いて見せない——そんなところが窺われるのです。

私のみでなく、他の人もそれを感じるとみえ、或るホモ・クラブの会合の帰途、私にそのことを指摘したウールニングの人がおりました。

私の許に寄せて来る通信にも、そうした小さな自我——悪く云えば自己本位の現れているものが往々見受けられます。

たとえば、自分のリビドについて赤裸々に





告白せずに、ただ相手を紹介してほしいという類のものです。つまりは自分の同性愛行爲を他人に知らしたくない、面子を保ちながら内緒でセックスの満足を得たいというのでしようが、それではあまりに蟲がよすぎるというものです。

私が度々云うように、同性愛はすこしも卑下するものではありませんから、堂々とアカラサマに告白してください。その上ならば、私も充分に解答し、同志も紹介します。この機会にこのことを一言おことわりしておきます。

さて、次に第二の「各自の求める理想の同性」についての問題に移りましょう。

これにも、男女間の恋愛の場合と同じく、色々の型があります。性格・肉体共自分と相似の相手を求めるもの、自分と反対の者を求めるもの、年長者を欲するもの、年少者を欲するもの其他等々。

又、自分に最初同性愛の快味をおしえてくれた男性と似た人を求める者も少くありません。前記通信中の新潟F・S氏、北海道K・S氏など、その型の人でしょう。F・S氏は

風貌の相似の点におけるそれを索め、K・S氏は愛撫方法の相似におけるそれを望んでいるようです。

大体において、年長を相手に求める者は、そのリビドにマゾ的傾向を多少でも有つものが多く、反対に年少者を欲する者は、サド的傾向を有するものが多いようですが、勿論それは一概には云えず、中には、四十五十の見ペデラスト的体格の人で、若い美青年から受け身にマゾ的に愛されたいなどの希望を寄せて来る通信もあります。

又、これと云つて理想的の型をもたず、そしてその愛撫形式も能動的被動的どちらでも可という融通性のあるソドミアもあります。これも男女間の恋愛の場合と同じだといえましょう。

前記六通の通信に共通するところは、いずれもそうした理想の相手を求めることの難きを悩んでいる点で、それは重々察することはできますが、といつてすぐと軽々には紹介できませんので、熟考の上適當の同志を紹介するとしましょう。

最後に個々のお答えを二、三書きそえてお

きましよう。

京都M・Y氏へ——京都市内にも同性愛者の集合場所があるとは聞いておりますが、まだ手許に確実な調査がありませんので、いづれ近い内に、自分で調べた責任ある報告を紙上に掲載することをお約束しておきます。

東京W・K氏へ——「孤独に悩む自分はこれからどう生活していつたらいいか」とのご相談ですが、これは一般同性愛者に共通する重要な問題です。

まず性の問題、これには前云つたように相手を求めることの難さが伴います。文面で察すると、あなたはウールニング傾向のように見受けられますから、男色喫茶店のボーイでは、同じ傾向同士のため、充分な満足は得られないでしょう。

やはり最も堅実な、相手を求める道は、本誌のような紙上を通じて、適当な相手を紹介しうけることがいいだろうと思います。徒らに孤独を嘆くことはありません。

第二は、同性愛者の社会生活の問題です。現代の社会では——いつの社会でもですが——同性愛者に対して、理解も同情もありませ



ん。勿論、へたな同情などはしてもらいたくありませんが、同性愛者の何たるかを理解だけはしてもらいたいのですが、そんなことはクスリにしたいくありません。

それどころか、男が男を恋するなどといえは、「変態」なる蔑称で呼び、軽侮の眼で見られる状態です。そうした周囲の中で、自分のリビドも満たさねばならぬところに、同性愛者

の悩みがあるわけなのです。

自然、同性愛者たちは、自分の相手を求めることを、又求めた相手と交歓することを、人に隠れてコソコソとやるようになる、それが一層同性愛というものを「変態」的に裏街道的に一般の人に見せるようになったものでしょう。

そこで私は、機会あるごとに、同性愛とは卑下するものでも何でもないのだから、男女間の恋愛と同じように、同性愛も堂々とやれと唱えるのです。このことは、唱えらるべくして、いままで何人も唱えなかつたことなので、私は敢て主張するわけなのです。

最近も、或る同性愛者たちの会合において私がこのことを主張したのですが、そのとき一人のサラリーマンの人が、

「われわれが同性愛をおおびらにやつたら、それこそ同僚間の噛いものになり、会社にいられなくなります」

と云つたが、その点は私にも解らぬわけではないのですが、そうした困難を乗り越きり、乗り越えて、一般の人の眼を開かせてこそ、後代につづく同性愛者たちに幸福を与えるも

のでしょう。

自分一人のみのことを考えてはいけません。同性愛者に特有の小さな自我をすてて大乗的な自我の上に立ち、自ら率先して難関を乗り越きつて、真の幸福をつかまねばなりません。

要するに、ほんとうの強さをもつことです。同性愛者はあまりに弱過ぎるのです。オドオドしすぎているのです。それは通信の文面の端々にも窺われ、それが一層私の心を奮い立たせて、このように主張させるわけであります。理解なき社会の中で、人に隠れて、コソコソ相手と交歓するところにこそ、被虐的な楽しさがあるのだと云う者には、我又何をか云わんやです。

(同性愛者を凡ゆる角度から分析し、統計もとつてみたいと思いますので、今後の「そとみあ通信」投稿には、年令・職業・結婚の有無・肉体や容貌の詳細事項・性格・傾向(被動・能動)並に理想の男性の型愛撫方法・男色歴等はかならず書添えて頂ければ幸いです。

——藤井 晃——



まど・ふえちすとの手記

甘美なる糞尿

私はあの音を聞いたのだ。シヤアと云うか、サラ／＼と云うのか、あの音だ！ そう思つた瞬間私は……

菅 芳 一 郎

パリには「硝子便所」があると云う。四方ガラス張りの特殊な構造で、女の用便を見物させるのである。

硝子便所！ なんと云う素晴らしい着想だろう！ 僕はその記事を読んだだけで、もう亢奮を押えられない。その夜は眠られないままに、そのパリの硝子便所を空想しながら、面を書いて見た。

書くとも云つても紙切れに鉛筆でチヨコチヨコ書くのではない。まづ寸法を割出して、新聞紙大の方眼紙に下絵を書いてから、今度は白紙に烏口で写し出す。私は某家具製造会社の木工だが、製図もやるから、こんなことは御手のものなのだ。

硝子便所の記事は極く簡単で、詳しい構造は判らないから、すべて私の空想によつてデッチ上げた。全体を光る硝子と金具で仕上げると、中の女性は、やつぱりブロンドの

パリジエヌがふさわしい。そして、コルセットとブラジャーだけの女よりも、普通に衣服を着けている女のポーズの方が、私には嬉しいのだ。

殊に、美しい裾長の夜会服を着た貴婦人の用便の図は、一体どのようなであろうか、と思う。ニューモードの紹介などで、豪華な衣服をまとつた美人を見ると、

「こんな衣服を着ていても、人間なら大小便をするのだ——」と、私の考えはすぐ其処に飛躍する。一頃は、女性の顔を見ると、すぐその人の排泄のポーズが浮んで来て、その他のことは考えられない程だつた。

数年前、私は墓参のために故郷に帰る車中にあつた。私は当時二十そこそこで、単調な東北線の景色に飽いてしまつたが、ふと便意を催して、便所に立つた。

よい具合に、便所の前には誰も居らず、鍵もかゝつて



居なかつたから、私は何気なくその、重い戸を明けたのだ。

ところが、その狭い便所の内には、既に先客がいるではないか……。私はハツと胸を衝かれたが、その時はもう、真正面から、その光景をみつめてしまつていた。

汽車の便所特有の、あの高い便所にまたがつてゐるのはまだ十二、三才ほどのセーラー服の少女だつた。オカッパ頭の少女は、今用便の最中なのだ。

ぼんやり、飛んでゆく、窓外の景色を見ていたら、少女は、不意に戸を明けた私とピッタリ視線を合はせたが、だからと云つて、成人の女性なら、必ず見せたに違いない、羞恥や狼敗は塵ほどもなかつた。

それは実に無邪気な、愛らしい光景だつた。その窓からは秋の陽ざしが、赤々とさし込んでゐる。少女は私と顔を合はせたまま、無心だつた。瞬間、私はなんと云う美しさだらうと思つた。

少女はゆつくり腰を上げると、汽車の動揺にちよつとよろめいて、私の軀にもぶつかりながら便所から出て行つた。私は暫くぼんやりしてゐたが、やがてズボンを押下げ、彼女がしたように、便器にまたがつた。

私が美しいと感じた少女の匂いは、勿論汽車のことだから既にある。私はそれが非常に残念なことに思はれた。そうして、少女の後で便器にまたがつて見ると、私は今までついそ一度も注意して見なかつた、自分の排泄に就て、新しい眼で眺めずには居られなかつた。私は汽車の動揺にゆられながら、ジロジロと、他人のようにも珍しく自分の

排泄を見守つたのだ。

だが、先刻の少女に比べて、私のそのポーズは我ながら不様で間が抜けている。どうヒイキ目に見ても美しいとは云えなかつた。私は自分の排泄にはひどく失望を感じてしまつたのである。

帰京して毎日工場に通うようになって、あの車中の少女の、無心な姿が忘れられない。もう一度でいいから女性のその姿態を眺めたいと、そればかりを考えるようになった。

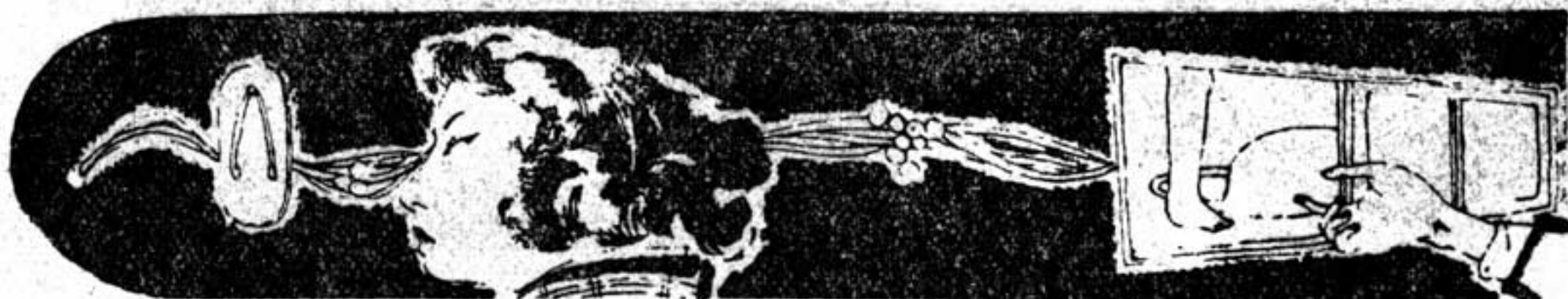
工場にも、塗装や磨きの方に、四、五人の女工さんがゐる。便所も近接してゐるのだが、勤め先であつてみれば、まさか女便所の戸を明けるわけにはゆかない。私の下宿先は男ばかりで、女は五十すぎた下宿屋の婆さんばかりだから、私の望むような場面はありやうがないのだ。私は毎日毎日そのことばかり考えつめて、悶々の日を送つた。

「ああ、俺に尿を溶びせかけてくれる女性はないだろうか？ 俺は女性の尿の中で溺死したい！」

こんなにつきつめた悲願を抱くようになって仕舞つた。そして、殆ど不可能と思うそのことが、どうしても念頭から去らないのだ。

以前は夜は独学の時間だつたのに、私はそれ以来、夜の街をさまよい歩くようになった。

とても、こんな思ひで一杯になつた頭をかゝえて、殺



風景な下宿の部屋に、一人ポツネンと坐っている気にはなれないのだ。私はさまざまの幻想を描きながら、寝静まつた夜の街をさまよつた。その頃は、妄想を描くことだけが、私に許されたたのしみだつたのだ。

夜の邸町を歩いて、ある邸宅の前に出ると、まづ私が考へることは、「この家の便所はどの方向だろう？」と云うことであり、次には「若い女性がいるだろうか？」と云うことだつた。

だから、私はその邸の門の前に佇んでは、その邸にふさわしい便所と、美しい女性の姿を空想。した時には和風の温和な女性、又は現代的な肉体派美人など、さまざまに私の空想は飛躍する。それが、現実は何の慰安もない、一職工たる私の、はかない自慰だつたのだ。

だが、こんな夜々を過しているうちに、憶病な私も、遂にはもつと実際的な手段を採るようになった。内攻するばかりだつた、止むに止まれぬ悲願に動かされてしまったと云つてもいい。人一倍潔癖だつた私が、遂に其処まで墮ちてしまったことが、我乍ら不思議でもあるし、又哀れでもあつた。

その始めての夜は、何かに追はれるように自分の部屋に歸つて、机の前に坐つても、まだ動悸が納らなかつた。激しい感動にわなういて、心臓が破れそうだつたのだ。当然、これが病みつきになつてしまった。

犬に吠えられて、ほうほうの態で逃げ歸つたこともあるし、暗い庭の立木の枝にぶつかつて、怪我をしたこともある。

る。

しかし、覗く現場を発見されたことはなかつた。これは暗いためと、その家の人たちが自分の家の便所に安心しきつてゐるためだ思ふとう。私はやはり若い、清らかな感じがする女性を覗くのがたのしかつた。

そんなことを続けているうちに、こんな私に恋人が出来たと云つたら、人は笑うだろうか？ 会社でも仕事には熱心だが、人つき合ひの悪い私は変人扱いをされていたのだ。ところが、塗装をやつてゐる友枝が私に好意を持つてくれることを知つた。

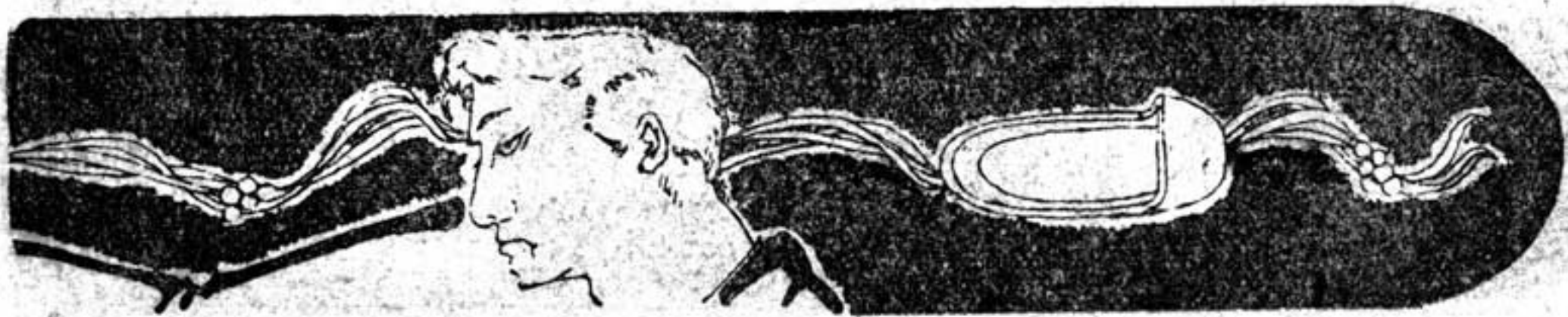
孤独な私には、まるで眼が覚めるような喜びだつた。私たちは工場がひけると、毎日一緒に街に出る。勿論毎晩映画を観たり、お茶を飲んだりする金はないが、貧乏は貧乏になり、若い私たちは幸福だつたのだ。

友枝は小柄だが、色白で、糸切歯が目立つ、愛くるしい顔つきだつた。父親は製本職工だつたが、来春になったら弟が中学を卒業するから、それまで結婚は待つてくれと云つた。私は待遠しい思ひで、彼女との婚前交際をつづけていたのだ。

こうして友枝と一緒に街を歩いたりすると、私としては当然のことだが、彼女の排泄のことが気になつてくる。映画などに入つて、私は尿意を催すと、必ず友枝に、

「君、便所に行かない？」

と、誘う。そんな時、首をふられると私は失望した。たまには、



「私も行くわ」

と云うこともあるが、だからと云つて、まさか婦人便所までついてゆくわけにはゆかない。私は友枝に自分の病癖を知られることを恐れてはいたが、二人で向き合っている、思はずこんな質問をすることもあつた。

「君、一日に何回ぐらい便所にゆく？ 大便は何回するの？」

なにも知らない友枝は、顔をく赤して、ケラケラ笑い出してしまふ。

「どうして、そんなヘンなことを聞くの？」

「ヘンなことぢやないさ。大切な生理だもの。君の健康状態が判るしさ。——ねえ、何回くらいするの？」

「フフ、、、いやだわ、真面目な顔してそんなこと……」

笑つてばかりいて、本気に返事しようともしない彼女と向い合つてみると、私はなにか、もどかしい、飽き足りない想いにかり立てられてくる。

一日も早く友枝と結婚して、彼女の美しかるべき糞尿を、私の自由にしたい——と云う希望と、破壊を恐れる気持がゴツチャになつて、一そう私を焦立たしくさせるのだ。私は夜下宿の床に入ると、さまざまに彼女の排泄のポーズを空想しては、自らわびしい陶醉にふけつたのだ。

しかし、結婚までにまだ半年以上あると思うと、とてもそんなに待てそうになかつた。私はとうとう蒸暑い八月の或る日、友枝を強引に私の下宿に誘つたのだ。今まで、外では毎日会つていたが、彼女は下宿に来たことはなかつ

たから、もの珍しそうに殺風景な部屋を見廻している。

そんな無邪気な彼女の様子を見てみると、とても私は話切り出す勇気が出ない。結婚してからの、彼女の幻滅を恐れて、私の変態的な排泄物狂崇に就て、それとなく話しておくつもりだつたのだけれど、無垢な処女に対して、とても打明けられること柄ではないのだ。

私はすっかり無口になつてしまつた。彼女はそんな私の様子に驚いたらしく、しきりに話かけて来たが、私は破局を目の前に見たように、絶望的になつてしまつていた。意固地に黙りこくつていたのだ。

「私、帰るわ」

暫くすると、彼女はそう云い出した。

「駄目だ。もう少し居なさい！」

それから又暫く二人とも黙りこくつていたが、

「ねえ、帰つてもいいでしょう？」

「駄目だ！」

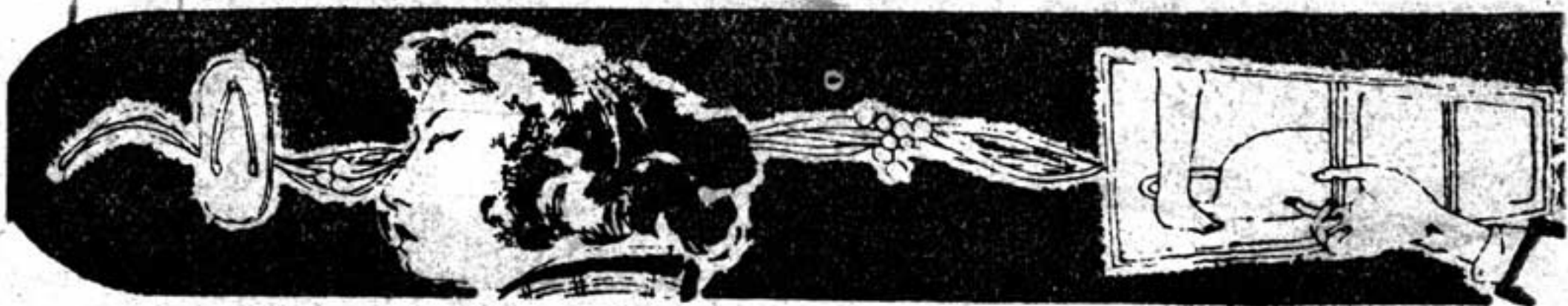
「ぢやあ……御便所は何処なの？」

少し顔を赤らめて、彼女はそう云つた。

「私、御便所に行きたいわ、何処だか判らないんですもの……」

私はどうしてか、ぼんやりして、友枝の顔を見つめた。なんだか信じられなかつたのだ。

「意地悪ね、そんな顔しないで、早く教えてつたら……」もう立ち上つている彼女の足元に、私は這うようにして近よつた。



「友枝ちゃん、御願いだ。おシッコなら、此処でしてくれ！ ホラ、僕はこうして此処に寝るから、僕の顔の上に腰掛けてしてくれればいいんだ！」

彼女を仰ぎ見るように、疊の上によこたわつて、私は必死に彼女を見上げた。

今度は友枝の方が、ポカンとした表情になった。そして、哀願しながら足元にすりよつてゆく僕を見ると、彼女は無気味そうに後ずさりする。

「ねえ、お願いだ！ 僕の一生のお願いなんだ！ ホラ、こうやつて……」

夢中になつて友枝の足をつかむと、彼女はキャツと声をあげて飛びのく。私は理性を失つて、尙も彼女の体をとらえようとしたと、友枝は蒼ざめて、

「いやッ！」

と叫ぶと、サツと室外に飛び出てしまった。彼女が、階段を転がるように駆け下りる音を聞いて、私はハツと正気に戻つた。そして、「万事は終つた」と感じると、私は頭をかかえて倒れてしまったのだ。

どうにもならない悔いと、苦い自己嫌悪がこみ上げて、軀を切断されるようなのだ。友枝は俺を軽蔑し、呆れ果ててしまっただろう——。私は一晩中呻き通した。

翌朝、とにかく、もう一度友枝に逢つて、釈明しようと思いついた。私は重い頭をかかえて工場に行つた。だが、友枝の姿を見つけて、傍に行こうとすると、彼女は顔をそむけて、足早に姿をかくして仕舞う。

再び私は絶望の底につき落されて仕舞つた。翌日からもう工場に行く元氣もない。下宿の一室にゴロゴロと転がつて、夜も晝もない生活がつづいた。頭も胸も暗く押しつぶされるようで、ものを考える氣力もなかつたのだ。この失恋は私にとつて、二重の意味で生甲斐を奪つて仕舞つたからなのだ。

そうした日が、十日も続いただろうか。或る夕方、私が例によつて疊の上にぼんやり転がつていると、入口の襖がスーッと明いて、誰か女が立つてゐるではないか——。ハツと起上つて見ると、あの小柄な友枝が、泣いた後のような、複雑な微笑を浮かべてゐるのだ！

「あたし、来たわ……」

それだけ呟いて、彼女はソツと部屋の隅に坐つた。私は夢かと疑つた。

「それぢやあ……」

友枝は肯いた。微笑してはいるが、彼女の顔はひどく蒼い。彼女も苦しんでいたのだ……。しかし、私のすべては許されたのだ、と思うと、天にでも昇るような氣持だつた。私はまだ夢のように、友枝の傍に近よつて行つた。

こうして、私の夢は実現された。私たちはまだ結婚していないが、目下幸福の絶頂にある。

×

×

×



少年は一度ベッドに入ってから、再び起きてパジャマのまゝ階下に降りて行つた。食堂の出窓に、読みかけの本を忘れていたことを思出したのだ。

ドアを明けると、戸棚の前の人がふりかえつた。嫂の多賀子だが今夜は腫が濡れたように大きい。なにか洋酒壺を持つている。「眠れないから、あたし、内緒で酔っぱらつちやおうと思つたのに、啓さんに見つかつちやつた」

普段はしとやかで老成ぶつた嫂が、なにか運つ葉な感じで笑うのが少年には別人のようにもの珍らしく、生々と写つた。

「御嫂様が酔っぱらふの僕、見たいや。」

「あら、ナマ云つてゐるわ。あたしが酔うと怖いよ。いゝ？」

彼はゴクリと唾をのんで、肯いた。

「誰にも内緒よ、いゝわね？ ちや、この壺を持つて、あたしの御部屋に来るのよ！」

どうも、何時もの嫂とは違つていた。少

年は大事に洋酒の壺を抱えて階段を登りながらこの嫂の変貌が、もう一ヶ月にもなる、兄の長期出張と何等かの関係があるかもしれない……と、漠然と感じていた。

「なんだつて、そんなに吃驚した顔で私を見るの？ 酔つてゐるから馬鹿にするのね、いけないいつたら！……生意気な子ね！」
酔つた美しい嫂の、そんな乱暴な言葉を浴

華

や

か

な

痴

夢

マ
ゾ
ン
ヒ
ス
ム佐
貫

啓

びて途方にくれながら、しかし少年は、口もきけないほど、気持がうわづつていた

「啓さん？ あんた其処に寝るのよ。バカ？ ベットの下の？」

云ひつけられた通りに、少年はベッドの下に腹這ひになつた。この美しい嫂の言葉には、妖しい引力があつたのだ。

「ホホホ、啓さん、いゝ恰好たわ、丁度いゝ踏み合？」

嫂は彼の躰の上で気持よさそうにはづみをつけて飛び上つた。薄物のガウンの裾が乱れた。少年はアツと声をのみなから、背中を弓なりにして耐えた。その頬に彼女のスリッパが飛んだ。

「啓さん、ホラ、そのスリッパをとつておいで？ うゝん、口でくわえてくるのよ？」

ベッドの上から、キラ／＼光る腫で見下している嫂の足元に、少年はスリッパをくわえ、四つん這ひになつてにじりよつてくる。しかし嫂は、その少年の顔をスリッパごと蹴りかえして仕舞うのだ。

「ホホ、もう一度？」

少年は犬のように、幾度もスリッパを運んだ。嫂の美しい驕慢さに恍惚としながら翌朝の食堂で、少年は再びしとやかに臍たけた嫂の姿を見出していた。昨夜の狂乱の名残りは一点もない。「夢」——少年は、朝の陽の中で呆然と立つていた。

殘 虐 秘 録

刑場の女たち

意識は死んでも神経は末だ生きている。首をはねられた一の臺の御局の肢體が、ぶるぶると身振いをした。白刃を下げた若い役人が、さつと土色の顔になると、ふらふらとその場に倒れる……

川 野 京 輔

一
豊臣秀吉が浅井長政の息女の艶色に惚れ込んで迎えて妻としたのは、既に晩年の事。

淀君である。

賢明謹直な婦人だと言はれ、愚鈍、淫乱の毒婦とも言はれる淀君が、果していずれであつたかは知らぬが要するに彼女も、当時の上流婦人の特質たる、限られた知識と、狭い洞察力、そして偏執と、傲慢さを持つた一女性に過ぎなかつたのではない。

唯、淀君には、衰えざる豊艶の美があり、それに伴う女の慾求も亦人一倍持合わせていた事が、とやかく言はれる原因であつた。

それ故に、表面は謹嚴を粧いながら、内は淫猥な心情と言う不健康さが人の目

についたものである。

乳兄妹の大野治長とは早くから通じていた外、前田利家とも、徳川家康とすら、ねんごろだつたと云う記録も残っている。

この淀君が、秀吉との間に、もうけた子が秀頼であつた。

秀吉は、且つて、子が無かつたので、甥の秀次を関白にしていたが、実子が出来たとなると、どうも秀次が邪魔で仕方がない。

将来、秀頼の敵になるのは必定と言う訳で警戒している。

ここに、きれ者と評判の石田治部少輔三成の辣腕が期待され、三成は、関白秀次逆心ありとして、これを高野山に追いつめ、つめ腹を切らせてしまつた。

のみならず三成は、残忍にも、秀次の五人の君達、三十余人と数えられた嬪妾のことごとくを京は三條の河原で殺誅している。

根が好色の秀次の、淫乱ぶりは、淀君に輪をかけた位の凄まじさで、当時の評判であつた。

大名、小名の奥方であれ息女であれ容色の美女があれば、うむも言はさず、己の後宮につれて来た。

はなはだしきに至つては、土民百姓の娘に

迄、手を染め、玄宗が三千の美姫も、かくあつたかと思はれる盛況であつた。

かかる愛妾の中で、特に寵愛を、ほしいままでにした三十三人の女性が、関白の、ありがたくもない、おしよばんで、三條河原の露と消えたのである。

その、いたましくも亦、美しい模様を書こうと言う訳だが、何せ三十三人もいるので、事は面倒である。

中から適当に五、六人ひろつて披露する。

二

検視役は、言はずと知れ石田治部少輔。お茶坊主と蔑まれ、小人物と軽じられた三成であつたが、歴史の教える処、必ずしも、然らず、寧ろ芯のしつかりした、独自の風格を持つた特異の人であつた。

特異の人とは、今で云うサディズムの傾向があつた事を言う。

三十余人の美女を目の前で大量殺人し、あどけない五人の子供を処刑したと言うハードボイルド振りである。

罪のない女、子供を処刑しようと言う事からして、なまじつか佛心を持つていたら到底出来る仕事ではない。

それを、すつぱりとやつたと言うから、小気味よい位の決断力である。

しかも、それが、もの靜かな白面の三成によつて行はれる時、一種、不思議な魅力を感じるのである。

刑の執行は、まず五人の君達から始められた。

仙千代丸と言う五才の若君が、役人の手にした刃で刺殺される。

しきりと母を求めて、泣き叫ぶ仙千代丸のいたけない口を、役人の大きな手が、息も絶えよと、ふさぐと、瞬間、押しつぶされた悲鳴がもれる。

役人の刀が鋭く光る度に、幼い命が消えていく。

己の処刑を待つていた君達の母たちは、人目もかまわず、かけ寄ると、涙ながらに、愛し子の死骸に、抱き附いて放れない。

なぜ自分達を先に殺さぬかと、憤りと怨みに、氣も転倒せんばかり、はつたと正面の三成を、睨んだが、彼はただ笑うだけだつた。

冷やかな彼の唇をついて出た言葉は、いづれ殺される身に、何が悲しかろうと云うのであつた。

矢来の外で、処刑を見ていた人々の間には

そつと涙を拭う者が多く、石田を非難する声も、ざわざわと聞こえる。

嬪妾の最初は、上臈一の台の御局、前の大納言殿の息女にて、三十に余らせ給ひける――と記された艶然たる女性が処刑された。

中年の肉附も豊かな美女が、河原の荒むしろの上に、座した様子は、いたましくも亦妙に肉感的である。

羅衣を通して純白の肌が、縄目の跡もむごたらしく居並ぶ検視の目を射た。

「あつ」軽い叫びがもれたと思つた瞬間、一の台の御局の美しい肢体から魂が宙に飛んでいた。

二番目の小上臈の於妻の御局は、「朝顔の日影待つ間の花に置く、露より脆き身を惜まじ」と文字通りの寂しい美しさを見せて、十六才の命を絶つた。

正座した於妻の御局の、小さな足は後で、十字に組み合はされていたが、首筋に大刀がさつと触れるのを合図に、左右に開かれ、そのまま体は、前へのめつて、二本の脚が空をかく。

余りの、むごたらしさに人々の目は、思はず地に、はつたが、三成だけは、傲然と威をただしていた。

意識は死んでも神経は未だ生きている。側に捨てられた一の台の御局の肢体が、ぶるぶると身振いをした。

白刃を下げた若い役人が、さつと土色の顔になると、ふらふらとその場に倒れる。

「見苦しい奴」

三成が不興気に呟く。

一寸ナンバーが飛んで、六番目には、於ちやの前と云う愛妾が処刑されている。

この婦人は、当時の貴婦人の輕薄さに似ず禪に興味を持ち、かねがね世理無常を悟っていたので、少しも騒がず、「今迄暮してきたこの世が実は夢かも知れない。今その夢がさめるのではないだろうか」と言つた莊子めいた三十一文字を残して死んでいったのは、あつぱれである。

この落附いた婦人の毅然たる態度には、あわれさと言うより、何か偉大さが感じられ、三成は面白くない。

悲しみ、もたえ、恐怖に打ひしがれた女体にこそ、彼の偏執は満足させられたらしいと言ふから、そのサデイスト振りは相当のもの。

十一番目には、死ななくてもよい命を、十五の身空で棒に振つた姫様の話がある。

着いて見れば、既に秀次は無く、自らは捕えられて三條の河原に送られたと言う不運の主。



未だ男を知らぬ処女の柔肌に、無残や、荒縄を打たれ、乱れる黒髪にくしも当てられず、伏眼がちに、いじらしくも覚悟を決めた様子には、胸ふさがる、思いであつた。

これでは余り可愛相だと、淀君の勧めで、その助命を決定した秀吉は急いで早馬を、河原に飛ばさせた。知らせが、もたらされた時、丁度佳人のかぼそい肢体は、河原をそめた血潮の中に、はかなくも横たわっていた。

早馬の使者は、両手を合はせて首をたれると、美姫の処刑に間にあわなかつた遅延を詫びるのであつた。

このあたりが、この殺人劇の頂点となつて、劇的な興奮を呼ぶ。

十九番目は於喝食の前と言う。随分、変つた名前の婦人だが、美

出羽は、最上家の姫で、東国きつての美人

と歌はれ、今を盛りのあでやかさである。

好色関白の秀次に召されて、厭々、都に、

の愛妾達に、「では、お先に、三途の川で待

つていましょう」と言つた意味の歌で、呼びかける、ニツコリ笑つた。

検視の役人達にも、一応の礼をつくし、なにかんずく正面の三成には、わざと大仰な挨拶をすると、西の空を眺め、朗々と辞世の句を読んだ。

悲劇、終盤の山はなんと云つても二十九番目の於杉の前の最後であろう。

この婦人は、先年より胸を患い、御殿にも上れず、浮世を寂しく、はかなんでいたが、「捨てられし身にも縁や残るらん、跡慕い行く死出の山越」と悲しくも美しい思情を込めて歌つた。

胸を患う人特有の、透き通る様な蒼白い肌が、真赤な血で色どられ、細つそりした腰が暫らく生を求めて、ふるえていた。

かくて三十三人の処刑が行はれたが、その間、実に四時間余り。

午の刻より申の終りまでかかつたと言う。後には、既に命のない白い亡軀が、無造作に、投げ捨てられてあつた。

形ばかり、こもをかけた下から、様々な恰好をした屍体がのぞいていた。

あわれな処刑に悲歎の涙を流した矢来の外では、やがて本来の彌次馬根性が甦がえり、

獵奇の視線が、女の屍体の腕、脚を求めて、異常な興奮が、辺りを包んでいる。

めいめい勝手な評定があり、殺された女の品定めが口喧ましく行はれたが、結局は、めつたに見られぬ美女の大量殺人の興味に十分満足していた。

せめて屍体なりととも、涙ながらに待機していた親類の者達には、三成から、屍体の下へ渡はないむねの達しがあつた。

「余りにも残酷だ」

「血も涙もない仕打ち」

親類達は、再度訴えたが、にべもなく却下される。

側に、直ちに、大きな穴がほられ、非人どもが、集まつて屍体の埋没が始まる。

いやしい目附きで、非人どもは、次々と、こもを、はぎ取ると、屍体をかかえて、穴に

抛り込む。

既に冷たくなつた物言はぬ美女の屍に、非人たちは、思い思いの、慾情をひそめて、しばしの抱擁を楽しんでいた。

未だぬくもりを見せ、ピクついている屍体には、あさましくも非人どもは、聞くに堪えぬ言葉でののしつて奪い合つた。

幾本かの白い手足が宙に浮いて、折からこ

もる夕もやに、霞む様は、いたましくも、亦美しい詩情に満ちていた。

異常なる天才児三成は、この殺人劇の一部始終を、あかず冷然と、しかもある種の情熱をもつて演出した。

閉幕の後に、彼が胸に去来するものは何か。

秀次なき天下の趨勢か。

はては美姫三十余人を殺したほろ苦いくやみか。

いや、そうではない。

彼自身の組んだ劇の圧倒的成果の後にくる空漠たる満足感だつたに相違ない。

石田三成と言う男は、結局、奸佞謀略の政治家であると共に、亦、稀有な殺人の芸術家だつたのである。

完

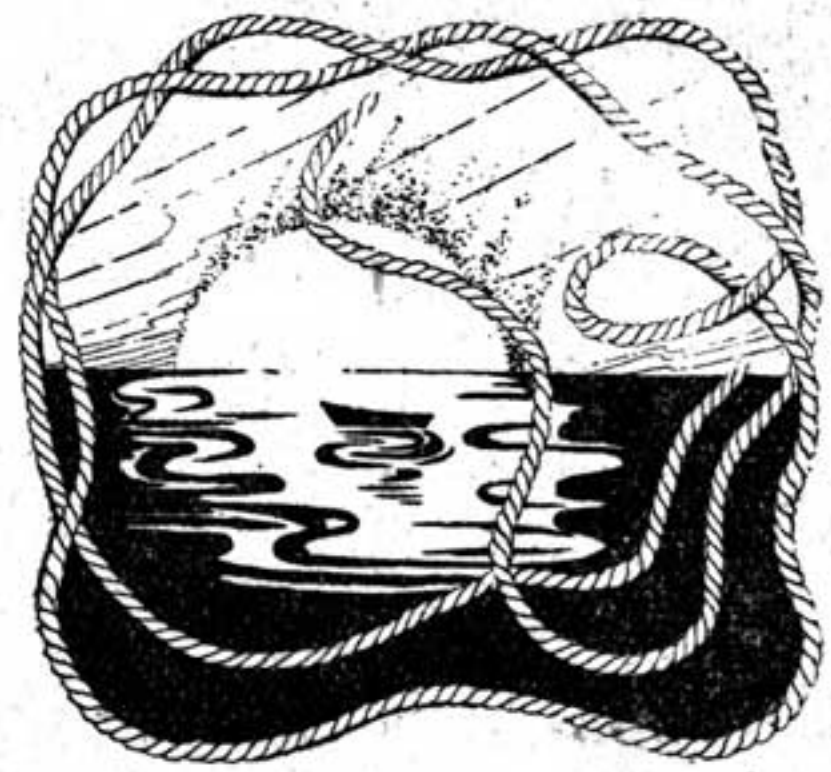
受 読 者 通 信

★私は二十八才の独身の青年です。十七、八才から二十五、六才迄の方御交際を御待ちして居ります。

(広島 K生)

★私は廿四才の青年です。私のよき兄となつて下さる、廿四、五才位迄の方御交際下さい。地方の方でも手紙にて交際出来たら幸です。

(東京新宿 W・K生)



悦

虐

通

信

流れ行く死體

縛られた経験はあつたが場所がボートの上だけに、なんとも收拾のつかぬ混亂で、ジーンと耳鳴りがしてくるのだ……

神奈川 冴子

その人の眼つきは、なにか尋常でないような気がした。何処かピントが合はなかつた。でも、尋常でないと云えば、私の方だつて、大きなことが云えた義理ではない。お互に、何処か狂っているのだ。

始めに逢つたのは新宿駅の中央線ホームの時計の下だつた。会社の帰えりだから午後六時。ホームはごつたがえしていた。ハンドバッグを抱え直して時計の下に立つと、横合ひからスーツと近づいて来て、「S子さんですね？」

手紙で打ち合はせた通りに、グレイの夏服で、本を二冊抱えている。上ぜいはあまりないが、ガツシリした肩巾が眼についた。

あんなに熱情的な手紙をよこしたのにかゝわらず、逢つた第一印象はなんとなくもの憂そうで、口数も少なかつた。すぐ駅を出て、三越裏の喫茶店に入つた。

内丸と云うその人は、注文したコーヒーが運ばれてくると、ミルクも砂糖も入れず、ブラツクのまゝ飲んだ。

「相当変つた人だな——」とは思つたが、しかし、不快な感じは少しもなかつた。たゞ、

なんだか暗く、偏執的な感じがあつたのは止を得ない。

内丸は北区の、ある新制中学の教師だと云うことだつた。

「学校の教師なんて、息苦しいですよ」

と、ボサツとした調子で云つたが、彼のような性癖の持主にとつては、そうだろうと肯けた。その時私は何気なく、

「あなたの学校、男女共学ですか？」

どうしてそんなことを尋ねたのか、自分でも判らない。彼は頭をもたげるように私を見て、否定も肯定もせず、

「つまらんですよ」

と、云った。

別段会話は弾まなかつたが、彼は少しイラ／＼して、落着かない様子に見えた。時々光る眼で私をジッと見たが、喫茶店を出ると、
「ぢやあ、いづれ是非……。又御手紙しますから——」

それだけ云つてあつさり別れた。しかし、その翌日私が会社から帰ると、もう速達が来ていた。

日曜日の午後逢ひたいと云う文面だつたがその日曜日は明日だから、私は内丸の勢急さに驚いた。しかし、彼を避ける気にはならなかつた。内丸は、それまで私が交際した他の男性にはない、なにか一本気なところがあつた。その余裕のないムキな感じが、好もしく思はれたのだ。

日曜日は朝から小雨だつたが、出掛ける頃には雨は上つた。私は絹のワンピースで家を出た。例の時計の下で、この日はバーバリのレインコートを着て鞆を持つて立つていた。

「浅草に行きませう」

顔を合はせると、イキナリ彼はそう云つた。

「浅草？」

「えゝ、ボートに乗りたいです」

「ボートなら、この近くだつてありますわ」

「いや、隅田川で乗りたいです」

彼はハッキリそう云つて、サツサと先に立つた。私はそんな断定的な彼の態度が面白かつたし、彼にひきづられてゆくのがたのしかつた。

しかし、田原町で地下鉄を降りても内丸は一向川の方に行こともせず、グルグルと仲見世などを歩き廻つた。日曜の浅草は雑踏していたし私はだん／＼神経が疲れて来た。だから、肩を並べて黙つて歩いている彼に、そつと尋ねたのだ。

「ボートにはお乗りになりませんか？」

「いや、まだ早いです。ボートは日の暮れ方に限りますからね」

昂然とそんなこ

とを云つた。変人には違ひないが、そんな一風変つた調子に、私は又グイとたぐりよせらる思ひだつた。そして、今日はもう彼の氣が向くまゝに、黙つてつき合うつもりだつたのだ。

それからまだ浅草を歩き廻つて、いゝ加減草臥れた頃、内丸はやつと隅田川の方へ足を向けた。そろ／＼涼風が立つて、なるほど



雲がかすかに色ずき始めていた。

私達は松屋の裏側近くから、ボートに乗った。原色で塗り立てられた真新しいボートの胴には「海つばめ号」と白く書いてあった。彼はしつかりした手つきで漕ぎ出したが、一言も口をきかなかつた。あまり黙っているので心配になつて話しかけても、何か上の空の様子で、返事もろくにしない。私はだんだん不安になつて来た。

真夏なのに、川の上は風が相当強かつた。私達のボートは川下のほうに流れるように早やかつた。日曜だけに大分ボートが出ていたけれど、それはみんなもう私達とは逆に引揚げてゆく船ばかりだつたのだ。

暫くして、なんと云う橋なのか、大きな橋の下まで来ると、内丸は漕ぐのを止めて、オールを引きあげた。

「中休みですの？」

「……………」

黙つたまゝ、彼は立ち上つた。ボートがグラ／＼ゆれる。その眼を見た時、私はハツとした。ギョツと体が縮みそうだった。彼が靴から出したのは荒縄だつたのだ——。その縄を持つたまゝ、彼はゆつくり私に近よつてくる——。

「どうなさるの？」

一切無言だつた。彼の手が触れそうになつた時、私は後に身をひいたが、グラ／＼と、今にも顛覆しそうに揺れるので、しつかりボートのヘリにつかまつた。スカートを乱したまゝ……。

小さなボートの中で、巧みに中心をとりながら、内丸は私を縛ろうと云うのだ。まさかボートの中で、そんなことが行はれようとは思はなかつたから、私は仰天してしまつた。それに、抵抗すると、今にも顛覆しそうだったから、私は彼の意志通りにグル／＼縛り上げられて仕舞つたのだ。両手は後手にねじあげられ、彼は容赦なく縄を締めた。だから、胸にもお腹にも、荒縄がグイ／＼喰ひこんで私は歯を喰ひしばつても、自然に呻き声が出た。

内丸はボートの底に転がつた私の上に、レインコートですつぽりかぶせた。そして、ボートは再び動き出したのだ。頭からレインコートをかぶせられて、真暗になると、スーツと恐怖がしのびこんで来た。縛られた経験はあつたが、場所がボートの上だけに、なんとも收拾のつかぬ、混乱でジーンと耳鳴りがしてくるのだ。

船底に転がつているのだから、直接波のぶつかる音が、耳や頭に飛び込んでくる。泳がない私にとつては、まづたく船板一枚の下が地獄なのだ。いや！ たとえ泳げたにしろ、こうがんじがらめに縛られてはどうなるものではない。

被虐の悦びを求めて、その悦びをもたらししてくれる男性を、あれほど求めた私だけれどまだこんな恐怖の経験はなかつた。ジーンと体中の毛穴が粟立つてくるのだ。だが……。

その恐怖の底に、やはり甘美と云うにはあまりに恐怖が強かつたけれど、その戦慄が強ければ強いほど、それに伴う悦びも強かつたのだ。苦痛や恐怖と一緒に、まるで影のようにそれに伴つてくる快感——。

両手がしびれて来たが、私はまだ芋虫のように転がされたまゝだつた。内丸は黙々と、たゞひたすらボートを漕ぎつゞけているらしい。辺りには波の音だけが満ち／＼と、単調なオールの音が、繰り返されるばかりなのだ。まるでそれが永遠につゞくようにさえ思はれて、私はたまらなくなつて叫んだ。

「ねえ、止めて！ 私をどうするの？ ボートを戻して頂だい！」

オールの音が止んで、顔の上のレインコ―

トが、少しばかりめくられた。眼の前に、汗が流れた彼の顔があつた。

「ねえ、どうするの？ 後生だから縄をほどいて！」

「駄目だ。どうしてつて？ それはね、君はもう死体なんだから……僕は自分で殺した女の死体を、これから海に捨てにゆくところなんだ」

私はあつと言葉に詰つた。内丸の言葉、も思ひがけなかつたが、そう云つた彼の表情は、まるで狂人のようにニタ／＼と笑つていたからなのだ――。

「いやッ、怖いわ！」

浅草に戻して……」

「怖い？ フフ、ふ、そんなことはないよ。」

君はもう死んでるのだから……」

そう云つてから、彼は急に手をあげて、空を指した。

「ほら、ごらん、まるで血のように赤い夕焼だ！」

子供のように嬉しそうに、彼はそう叫んだ



のだ。

がなじがらめに縛られた私にも、その夕焼の色が見えた。本当に、彼が云つたとほり、血の色のような朱の雲だつた。莊嚴な落日。

美しかつた。「マゾにとりつかれた男女を焼く火の色だ」と、私は思つた。

私はその時、もうわけの判らない、無茶苦

茶な感動に酔つているようだつた。舁の苦痛は忘れて仕舞つていたのだ。ぼんやり、いや、うつとりと、内丸の顔をみつめていた。

彼も放心したようにオールの手を休めて、西の空を凝視していた。我を忘れたようなその表情に、夕焼の反映がうつゝている。その少しばかり口をあげた表情が、私は急にいとしく思はれたのだ。

「内丸さん！」

「シーッ！」

彼は唇に指を当て、背中を丸めた。

「喋つちやいけない、黙つて！ ほら、船が追つかけてくる！ ね、聞えるだろう？」

彼の真剣な調子に、私はドキ／＼しながら

耳をすませた。確かに、ボン／＼／＼と、景気のいゝ発動機の音が聞えてくる。

「ほら、あれは水上警察の巡視船だ。僕を追跡してるんだ！ 逃げよう！」

再び、顔の上にレインコートがかけられてボートはグイ／＼と水を切つた。発動機の音は間もなく近づいて、何事もなく私たちのボートの傍を通り抜けて行つてしまつたが、内丸はまだ懸命に漕ぎつゝけているらしい。

もう、海に近いらしく、潮の香りがしのびこんでくる。だが、まだボートは一直線に漕がれるばかりなのだ。

もう、夕陽は沈んでしまつただろうかと、私は思つた。いや、まだかすかに、私の死体の上に、その残光を投げているかもしれない。

私は船板の底の、水の色を思つた。そしてその深い／＼紺青の海の底に、こんなにもグ／＼に縛り上げられた私の死体が、オモリをつけられて、垂直に、何処までも／＼も落ちてゆく光景を脳裡に描いていた。

(おわり)

★

★

★

あぶ・すとおり

痰慕症ざんげ

鮮紅色の痰を水に浮かすと、まるでそれは、エラで苦しげに呼吸する金魚のような弾力があるに違いありません。

吉野 精一

白いホーローびきの壺

『どうして私が好きになつたか話して頂戴』
『僕はあなたのような美人を初めてみたんです』

——天然色映画のせいだ、そう囁いて、またしても女の腰を抱き、大きくかぶさるように、唇を寄せていく男優の頬が、こころなしか、ポーツと赭くなりました。

『忘れては厭です』
うつとりと、唇を半開きにして、男の唇を受ける女優の頬も、羞らいにポーツと上気し

ます。

それから激しい接吻！

いま流行の、

『火の接吻』

という歌は、そんな接吻をいうのかも知れません。

観客の目が、吸われるようにスクリーンに釘づけとなり、やるせなくつく吐息、亢りに身を引き緊める小さな動作、——そんな気配が暗い場内に、一瞬、さざなみ立ちました。

おそらく、アベック同志など、思わずお互い身を擦り寄せ、せつなくその手を握り合つ



たことでしよう。

だが、私は、そんなラブ・シーンを観ても少しも気持が動かなかつたのです。

動かなかつたどころか、寧ろ、嫌悪さえ覚えていました。

『ふん、男と女がキッスするなんて、いったい、どこがいいんだらう？ 演技かもしれないが、けがらわしい！』

言葉には出しませんが、胸の中で、苦が苦

がしく呟いていました。

——スクリトンの接吻は、まだ濃厚に続いていきます。

『永い永い接吻！』

男の胸に、しおらしく静かに当てていた女の手が、いまはもう、力のかぎり男の首を抱き、男の手も女の胸を抱いて絞らんばかり。

『ゴクリ』

隣りの席か、後の席か、男か女かは判りませんが、たしかに生唾を呑んだような音がきこえました。

（チエツ、お安くイカレてやがらア。だからアチラの映画はやることも、観るやつも不潔だというんだ……）

私は、急に不愉快になつて来て、スツと立ちあがると、きゆうくつな客の膝の間をぬけ休憩室へ入つたのです。

たとえば、二度くり返して観る者があつたとしても、ラブ・シーンの途中で立ちあがる者など、観客の中には一人もないでしょう。

だから、——もしも、そんな私の態度に気がつき、

（この人、こんなときに、どこへ？）

そんな疑いを持った人があつたとしても、おそらくは、我慢がならずトイレットにで

もたつたのだろう……くらいにしか思えなかつたでしょう。

じじつ、休憩室には誰いもず、観客席に入つていく者は一人、二人あつても、出てくる者は一人もなかつたのです。

平日の午後……

さすがに浅草だけあつて劇場は七分の入りでしたが、銀座あたりの劇場でよくみかける映画は二の次ぎ、休憩室でヘンに大膽なポーズをして、饒舌つていゝアベックもなく、じつに静かでした。

——私は、頭をソファアの背にのせ、ゆつくりと煙草を喫い出しました。

そして、上着のポケットにしまつてある、ウイスキーのポケット瓶の口を、クリクリと開けたり閉めたりしながら、

（きようのお土産はどうかな？）

視線を、向うの入口の壁の隅にある、白いホーローびきの壺に結んでいました。

そのゾクゾクする気持！

私の胸は、期待に息苦しくさえなり、何んともいえぬ快感で軀じゆうがキューツと引き緊つて、痺れるほどです。

『あア……』

私は、目を閉じて、その感覚に酔つていま

した。

と——。

そのときです、……サツと前を人がとおりブーンとジャスミンの香水が、鼻孔を際りました。

（おや？ いまどき……？）

あわてて、目をあけると、二十二、三、ちよつと久我美子に似た娘が、あの白いホーローびきの壺に、

『クーツ』

鼻を嚙りあげるようにして、ペツと痰を吐いたのです。

そして、二度ばかり、軽く、ペツ、ペツと唾をすると、私には大して気もとめずに、颯爽と観客席の扉を押して姿を消しました。

（何ンという好運だろう。あんな美しい娘が目のもえで……）

私は、躊躇なく腰をうかし、ポケット瓶をとり出すと、一瞬、あたりの人影をうかがいだれもないとみきわめると、歡喜にドキつく鼓動も烈しく、その白い壺のほうに狙つて進んだのです。

瞬間息もつまるばかり

いつのころからか、そんなものに執着をも

つようになつたのでしようか？
いえ、もう遊ばれば、ずいぶん古いむかしのことになります。

たしか、あれは、小学生の二年——九ツのときだつたと思います。

——或る日、私は、お晝休みの一刻を、級友たちと一緒に、校舎の壁に並んで、『劔玉』競争をやつていました。

『劔玉』というのは、今では殆ど姿をみませんが、木製の赤い球を、同じく木製の『十』字型の台(?)の皿に、大、中、小、順に掬つて乗せてゆき、最後に、先端の劔に、赤球の穴をスポツと掬つて突きとおす——れいの玩具です。

『ホラ、チヨイ、チヨイ、チヨイ……』

列になつてゐる一人一人に、挑戦していつて、相手が途中の皿に球を乗せられなければ勝つ、こつちがへたすれば負け、——そんなふうの遊びでした。

その日は、私が大將で、順に相手の前に立つて、競争をしてゆきました。

私は、——勉強はあまりできなく、いつも中位の成績でしたが、不思議と遊びは上手で『劔玉』は強がつたのです。

二人、三人、四人……と、相手をやツつけ

て、福ちゃんという、おやじが鉄道の助役をしているのが自慢の子の前に来ました。

『いいか、福ちゃん、いくぜ——ホラ、チヨイ、チヨイ、チヨイ……』

私は、ここでも、まず先勝しました。

『強いなア……精ちゃん。よし、僕も負けなぞ』

球の紐をスーツと下へいぐと、福ちゃんは、弾みをつけて、掬い出し、左右の大、中皿から裏がえしの小皿に、ヒヨイと谷渡りさせようとした途端、球はクラクラと揺れて、ポコリと下へおち、福ちゃんは負けてしまいました。

『負けたね……福ちゃん』

私は、次ぎの子のほうに、一步、足を進めようと思いました。

すると——

『精ちゃんはずルイや。裏の小皿に、唾つて濡らしてあるんだもの、沁らないで乗るの当り前だ。ズルイや』

福ちゃんが、口を尖がらしていいました。

唾つけてるつて？　へんなこというな。僕はそんな汚いもん付けてやしないぞ。福ちゃんこそ、唾つけてくるくせに、沁つて負けたもんだから、口惜しくてへんなこというんだろ

特選傑作寫眞

【第1集】泣く悦虐秘圖 眞寫
愛好者諸兄におくる特選写真集は悦虐の極致をとらえたカメラ最高の技術

キヤビネ判印画紙焼付三枚一組五百円

岩風呂の被虐 眞寫

【第2集】大膽奔放に描き出された被虐の極致美幻想に生きる女体の緊縛美の陶醉境

キヤビネ判印画紙焼付三枚一組五百円

制服の女學生

【第3集】特に良家の女子大生が悦虐写真のカメラの前に純潔の姿態を投げ出した傑作

キヤビネ判印画紙焼付三枚一組五百円

危機一髪處女責

【第4集】おびえおののく汚れなき処女肌を無残にさいなみしかも尙おそいかゝる責縛

キヤビネ判印画紙焼付三枚一組五百円

う。ヤナ奴！』

じつさい、私は、小皿に唾などつけてはいなかつたのです。

ところが、福ちゃん、何を思つたのか、いきなり、私の顔へ

『バカ！』

そう叫んで、ペツと唾をひっかけました。

『汚ないな！』

私は、腹の底から怒つて、平手で頬にネットリくつついた唾を擦り除り、それを福ちゃんの顔にくつつけると共に、思いきり唾をひかけてやろうと思つたのです。

けれども、そう思い乍らも、ひっかけられた唾を擦りとりうとしたときに感じた何ンともいえない触感には、そんな憤りもポヤツと忘れてしまつたのです。

それは、——生れてはじめて経験した快い感覚でした。

お風呂にはいつて石鹸で顔を洗うような感じでもなければ、熟れたトマトの種子のころのプヨプヨをつけた感じでもなく、ポチに舌でペロペロと舐められたような感じでもなく、ともかくもこれまでに味つたことのない不思議な感じでした。

それも、——もしも福ちゃんが、少年ご

ろにも女の子みたいなキレイな子で、嫌いはなかつた……というのならいざ知らず、ふだんから鉄道の助役のおやじを鼻にかけ、弱い者はいじめる、先生には叱られる、顔も不細工で、猪首ズングリの、感じのよくない子だつたのですから、ほんとうに不思議です。

『バカヤロー、あとで覚えてろ！』

私は口ではそうどなると、校庭の隅の洗面所のほうにむけて走り出しました。

けれども、それは、周囲の目が沢山あつたからで、洗面所の蛇口のところに来たとき、やはり、その唾を洗いおとすことは、どうしても未練がでて、できなかつたのです。

私は、長いこと、くつついた唾を、コネコネと頬に手で擦りつけて、そのヌルヌルした感覚にウツトリしていました。

……こんなことがあつてから、どうしてももう一ぺん、だれかから、唾をひっかけて貰いたくてならなくなつたのです。

(どうしたら、こつちの気持を気づかれずに唾をひっかけて貰えるだろうか？)

私は、いろいろ、考えました。

そして、考えあぐんだ末、いいことを思ひついたので。

それは——

エプロン責め姿

【第5集】

新妻責めの幻想か悪夢のたわむれはいつ盡きるともなく繰り返えされる
キヤビネ判印画紙焼付三枚一組五百円

ガンヂガラメ

高手
小手

【第6集】

悦びと苦しみの幻想にあえぎのたうつ女体がかもし出す匂ひある姿態美の極
キヤビネ判印画紙焼付三枚一組三百円

艶風淫ら責

【第7集】

あくなき責にニタリ微笑む三本指の男恐怖とはうらはらに悦にうづく女体
キヤビネ判印画紙焼付五枚一組五百円

やわ肌責五態

【第8集】

ぬめぬめとしたやわ肌細目に盛り上る緊縛の極致美五態
キヤビネ判印画紙焼付五枚一組五百円

東京都千代田区神田神保町二ノ三四

日本特集出版社代理部

振替東京二四二五一番

級は違いますが、女生徒ばかりの二組の、芳ッちゃんという女の子が、女の子同志で口論しますと、きつと、唾を飛ばしつける癖のあることを知つたので、この子を揶揄つて、怒らし、唾をひッつけて貰うと思つたのです。

機会は早く来ました。

福ちゃんに、ひッかけられてから一ト月くらいたつた或る放課後、——当番の『お掃除』で、廊下を四ツン這いになつて拭いている女の子の中に、芳ッちゃんがいるのを発見、私は、チャンスとばかり彼女の背後からついてゆき、スーッと勢いつけて迂り拭き出した芳ッちゃん右足のスリッパの踵を、グッと踏んだのです。

『タッ!』

急ブレーキ(?)がかかつた芳ッちゃんはもろにズンデンドウと前のめりに転びました。

『だれよ、バカ!』

キーキーいう声で振りむいた芳ッちゃんは廊下で鼻の頭を擦りむいたらしく、赤く腫れています。

『ご免、ご免……かんにんしてね……わざとじゃないんだよ』

私は、いかにも困つた顔つきで詫びたので

す。

『わざとじゃない? 嘘よ、わざとよ。わざとじゃないつて、こんな広い廊下で、あたしのスリッパ踏むわけないわよ、鼻血が出て来たじゃないの? 先生にいいつけてやる!』

涙を、ボロボロこぼして、立ち上ると、芳ッちゃんは駈け出そうとしました。

(こりや、困つたぞ)

そこで、私は、背後から芳ッちゃんの肩をつかまえ、

『ご免、ご免ツて謝つてるじゃないか。ね、許してくれよ』

『うるさい! 男のくせに何よオ! バカ』

そう顔をキツとさせると、噂どおり、芳ッちゃんは、私の顔めがけて、パアッと大口あけて、かみつかんばかりの表情で、ベツトリ唾をひっつけたのです。

『ううッ!』

唾は私の鼻の下にひッかかり、瞬間、息もつまるばかり。

それが、また、生れて初めての快感で、クラクラするような感覚に痺れ乍ら、私はめくるめく思いで、その場に立ちすくんでしまいました。

芳ッちゃんも、男の子には初めてひッかけ

たらしく、ハツとして、——ひッぱたかれるとても思つたのでしようか、

『あんた悪いのよ! 意気地なし!』

そんな詫びともアクタレ口ともつかぬことをいつて、バタバタと逃げていきました。

(フフフ……怒つちやアいないよ。僕が黙つていても、唾ひっかけてくれるなら、あの子お嫁さんにしようかなア……)

私は、お嫁さんというものが、どういふものなのかも知らず、そんなことを考え乍ら、鼻の下にひッかけつた芳ッちゃんの唾を、人差し指の腹で、ネトネトこすつていました。

慕わしき妖しの生き物

(やつぱり、あの娘は、肺が悪い。元氣そうだったけど、どうもそういえば、あの顔色の鮮かな血色は、気温でノボせていたのではなく、結核のそれなのだったナ……)

ウイスキーのポケット瓶から、広口フラスコに移しかえた、痰をみながら、私はそんなことを考えていました。

浅草の劇場の休憩室で、手早く取つて来たあの痰壺の痰。

久我美子に似た娘が吐いていつたもので、

——福ちゃんに、偶然、唾をひっかけられたことが開眼となり、私の唾への愛着は、年と共にふかまり、いつか、それは痰への愛着と変つていったのです。

それも——

はじめのころは、顔などにひっかけられていた、あの感触が堪まらなかつたのですが、それが次第に変化してゆき、唾のような粘着性のないものよりは、痰のような粘着性があり、液体よりはこ体に近いものへの執着となつていったのです。

その転機というのが可笑しいので、——二年ほど前、新宿の或る飲み屋で、一杯ひっかけてますと、

『ねえ、いいさん、何か唄わしてよ……』

入つて来た三味線ひきがあつたのです。

『あんまり、粹なもの趣味がないんでね』

『じゃア、モダン都々逸でも……？ ね？』

『モダン都々逸ツてのはどんなんだい？』

『まア、唄わして頂戴』



——そんなことから、気やすくなつて、その女にも、二、三杯、ふるまつたわけです。ところが、まだ二十五、六とみえるその三味線ひきは、妙に痰のからむ声で唄うし、話

なんだな？』

『アラ、風邪ひいてて、ちよつと気管わるくしてるんで……。あつちのほうはダメ』
『それでもなさそうだ』

『ほんと。でも、肺病や喘息でないからご安心して……。ハイ、ご返盃』
ところが、その女が、焼鳥を焼く煙にムせて、突然、ゲホンと濁つた咳をしました。

(オヤ？)

そう思つて、顔をみた瞬間女が口を押えるより早くパツと小さな痰が私の頬にひっかかりました。
『うッ！』

唾に対しては、あれほど魅力を感じるくせに、痰に対しては何故か嫌悪していた私でした。

大袈裟に顔をしかめて、狼狽小指で、ひっかかつた痰を拭こうとしました。

だがそのときの感覚それは、もう唾どころのさわぎではなく、虫歯にクレオソートを注ぎ込まれたときのような、気が遠くなる快感でハア！と溜息さえ出しました。

(同じ粘液でも、唾と痰ではこんなにも変り

していると、さもさりげなくチリ紙で、口をぬぐうのです。

はじめは気がつかなくなつたのですが、たび重なるとその動作が気になり、

『君、ずいぶん唾はくね？ 濡れやすいたち

があるのか?)

考えないでもなかつたのですが、その官能を刺激する感度の違いと疼きにはボウーツとなつたのです。

——私が、痰に対して魅力を感じるようになったのは、じつにこのときからでした。

しかも、それも、風邪などで気管支を痛めたときに吐く、透明な痰などよりは、明らかに、呼吸器疾患しか吐かぬ黄色やグリーン

の痰に、その魅力を感じるようになっていったのです。

しかし、そんな痰は、やたらに触感できるわけありません。

そこで、思いあまつたすえが、劇場などの痰壺から、そんな痰を蒐めて来ては、これをよく磨いて水をはつたフラスコにいれ、観賞することにより、自分の頬や額に、それがひつかかつている気分になることを覚えたのです。

もちろん、はじめのころは、蒐めて来た痰を、つまんで、くつつけてみようとしたことがあります。

だが、吐きたての痰とちがい、時間の経っている痰は流動的になつていて、ダラシがないのです。

——停車場の階段などで、よく、鮮紅色の

痰が、ベツトリと吐きすてられているのを見ることがありますが、そういうとき、激しい衝動を感じ、

(拾いたい!)

身をかがめて、手を出そうかと考えるときもありました。

けれども、さすがに、その真似まではできかねました。

でも、あんな新しい鮮紅色の痰をつまんだならば、まるでそれは、水からはね出して、エラで苦しげに、ピク、ピクと呼吸している金魚のような弾力があるにちがいありません。

そして、それを、フラスコに入れ、水をはつたならば、ピチピチと泳ぎ出すのではないでしようか……!

痰壺から、痰を集めるのには、大きなスプーンぐらいのガーゼ張りの網をもつて新鮮なのを掬い、形をこわさぬように、ウイスキーのボトルに入れて帰るのです。

これを、広口フラスコに水をはり、浮べます。

すると、電灯の光線をうけて、痰は何か生きてくる物の如く、七彩に妖しく妖しく輝く

のです。

その美しさ!

(いつたい、こんな美しい痰を吐いた人は、どんなに美しい人なのか? それは男だつたらうか? 女だつたらうか?)

そう想像してくるうちに、私の官能は、痰につつまれて、ネットとり際られるような錯覚におちいるのです。

そのジーンとする感覚!

それは、この世でいとなめる凡ゆる悦楽もかなわないと思います。

——私も、ことし二十七歳、或る日本橋の商事会社につとめていて、つきあいや何やらで、けつこう遊びの誘惑もありますし、女の肌も知らぬわけではありませんが、この痰が誘う夢心地にまさるものはありません。

接吻? あんなものはイミありません。

抱擁? あれもツマナないものです。

私には、ただ、フラスコに浮く不思議なものだけが、凡てです、慕わしいのです。

二日、三日……痰が腐敗して、これを捨てるときは、この世の最愛の者と別れる辛さです。

——久我美子のようなあの娘の痰が、シェークリームのような輝きをみせてきました。



まどひずむ・すとおりの

双^ふ生^た児^ごの犬

俺は高給で雇はれて来た、道化師だ。美しい女主人たちの惨酷なサチズムを満たす、金で買はれたピエロなのだ——。そんな自嘲にもかゝらず、萬龜夫はこの姉妹にグイグイひかれていった。

比企狂一郎

幻 覺

菊地万龜夫は寢床の中で思いつきりノビをする、この頃ではもう癖になつてしまつた煙草に火をつける。

朝の床で、といつてももう晝に近いが、とにかく寢起きの床で腹這いになつたまゝ、喫いつける一本の味は又格別だつた。しかし、そんなさゝやかな贅りでさえ、寢起きのしびれた頭にはなんとなく空恐しい。

つまり、それほどにも彼の経済状態は逼迫している、と云うことにもなるわけだが——。

彼自身も無意識の裡にそれを感じるらしく、片手で無精つたらしく朝刊をひきよせた。第一番に視線を走らせるのは勿論求人欄だった。

それから失望の唸り声をあげて、ガサ／＼と新聞を丸めてから、さも腹立たしそうに放り出してしまふ。こゝまでが彼の毎朝の日課なのだ。

「才子、世に容れられず」

など、嘯いていたのは始めの頃で、この二三日はもうそんな空元氣さえもない。人夫でも工夫でもと云う実力派ではなく、いたづらに髪長く手白き文弱の徒だから、こう切羽つまつてから、そう／＼恰好なアルバイトの口がある筈はない。

だが、今朝の万亀夫は、ギョツと新聞を握りしめると、「オッ！」と声をあげた。喰い入るように紙面をみつめる。それから急に寝巻をかなぐりすてる。恐しい勢いで布団と蚊帳を押し入れに叩き込む。こればかりは手練の早業だった。

それから十五分後、万亀夫は山手線の車中にあつた。七月の末だと云うのに詰衿の制服を着こんで、工大の徽章や衿章もキチンと忘れていない。垢光りのしたズボンに、それで

もちやんと折目がついているのは、治にいて乱を忘れざる、現代青年の嗜みだった。

釣革につかまつて揺られながら、もう一度破り取つて来た広告を出して見る。

「別荘書生を求む、期間八月一杯、衣食給与他に手当高額支給、当方女家族」

何度見ても、万亀夫にはお誂え向きのアルバイト口だった。別荘と云うからには多分海岸か温泉地に違いない。其処でどんな仕事をさせられるにしても、衣食給与と云うのが何より素晴らしい魅力である。

折角夏休みにはなつても、北海道の生家まで帰省するには、往復の汽車賃だけでも容易ではない。又、無理して帰つてみたところで父親の愚痴と、幼い弟妹たちの騒々しさで明け暮れる家であつて見れば、出来ることなら敬遠したい。

しかし、この春から勤めて来た、アルバイトの口を、先月から打切られてしまつた彼は、とにかく長いこの暑中休暇中の、身の振り方に窮してしまつていたのである。

指定された場所は、目白台のある邸町の一劃にあつた。その西歐風の、洒落れた門の前に立つてから、万亀夫はひどく緊張した。これは競争が激しいぞ——と、思つたのだ。

果して通された応接間には、七、八人もの先客がある。それが新来の彼に、一せいによそ／＼しい視線を向けた。そして彼はそんな落着かぬ時間を相当に待たされた。

やがて愛くるしい女中に案内されたのは、サンルームに続く居間らしかつたが、ソファの横の飾棚の上に、生えているような大鹿の剥製が、見事な角を張っている。正面の掛時計の下にも熊のような動物の首が此方を向いていて、女世帯にしてはちよつと変つた雰囲気だった。

男のくせに、子供の頃から蟬とりやトンボとりが嫌いで、女の子たちの人形遊びにばかり仲間入りしていたような彼には、剥製だと判つてはいても、なにかうらめし気な動物の首は、気持がいゝものではなかつた。

女主人と云うのは、まだ三十前と思はれる美人である。白地に縫いとりのある着物を涼し気に着て、つや／＼と冷めたい光沢のある帯をしめていたが、容貌は驚くほど日本人ばなれして、髪もブロードに近かつた。

いきなり映画の話になつた。それならばと勢いこんで最近のフランス映画を話題にする

と、

「ストリップも、最近マソネリでつまらな

「いようね」

と、まっすぐに視線を向けられて、万亀夫はドギマギと、言葉のつぎ穂を失つてしまつた。それで、ストリップの話かと思つて聞いていると、それはスピッツとか、コーリーとかの、洋犬の話だつたりして、万亀夫はだん／＼自信を失つてくるようだつた。

彼女は始めに彼が差出した履歴書を取りあげたが、別段それに眼を通すでもなく、小さくた／＼んだり、細かく裂いたりして、無心にもてあそぶのだ。

相当人馴れもしているつもりなのに、どう云うものか、この女主人の飛躍の多い話術には氣押されて、我ながら間の抜けた応答になつてしまふのが氣になつた。

「ちよつと失礼」

そう断つてから、この白い和服の人は、スラリと立ち上つて姿を消した。

彼はホツと氣がゆるむのを感じながら、その後姿を見送つたのだが、まだそのドアに、白い手がかゝつてゐるかと思はれる時、

「あら、お一人ですか？」

反対側のテラスから入つて来たらしく、其処のレースのカーテンの前に、やはり白い和服の女性が立つてゐた。

万亀夫はギョツとして、思はず立ち上つた。そして、反射的に後のドアを振りかへつた。今、このドアから出て行つたばかりの人が、反対側のカーテンの前に立つてゐるのだから――。

白い着物の衿のあたりに見える、アザミの花の縫いと模様も、濃いグリーンのひやつこい帯の光沢も、それから彫の深いエキゾチックな美貌も、やはり、今の女主人その人に違ひないのだ……。

その人の、からかうような微笑も、やはり先ほどと同じものだつた。白晝夢――。万亀夫はゴクリと固唾を飲んだ。それから、俺は、よほどボケてゐるらしいぞ――、と思つたのだが……。

「あなた、犬好き？」

それは先ほども尋ねられた問だつた。万亀夫は口ごもりながら、同じように答える外はなかつた。

「あまり、好きぢやないです」

事実、犬にしる猫にしる、動物はどうにも肌にはぬ性分だつたのだ。

その人は例の、熊のような剥製の首を抱えて頬をよせながら、よく透る声をあげて笑つた。良家の女性にしては、何処か不遜な、ま

るで挑戦するような笑声である。

「おや、波子、此処に居たの？」

万亀夫はふりかへつて、再びドアの処に白い和服の人を見た。そして、あつけにとられた彼の顔が、二度、三度、振子のように二人の女性を見較べる。――生写しと云うのはこんなものではない。

見分けようのない同一人で、又、明かに別人である二人の女性は、そんな万亀夫の混乱を掻き立てるやうに、ピタリと並んで彼の前に立つた。そして、同じ笑声をひゞかせて笑いこけた。

犬 獣

指定された日時に、万亀夫は身の廻りの品をつめこんだトランクをさげて到着した。この由布家の別荘は、平塚と大磯の中間あたりの海岸にあつた。その辺の漁師の家ともかなり離れて、高い松林の中に、青い瓦の洋館が見える。

月子、波子と呼ばれる美しい双生児姉妹が、この由布家の女主人であつた。この女性たちは、その容貌と同じやうに、生活の雰囲気もひどく日本人ばなれしてゐた。少くとも、日本の上流家庭に育つたやうな、しつけや、嗜

みの跡は何一つ見られない。それに代つて、何の制肘も受けぬ、奔放な個性が若い万亀夫を眩惑するようだった。

「仕事つていつても、別段して頂くこともないわ」

採用されることに決つてから、その人はそんな人を喰つたような云い方をした。それが月子の方か、波子の方なのか、万亀夫には依然として判らなかつた。相変らず髪のウェーブから、ベルトやネクレスまで同一だったから、見分ける手がかりがなかつたのだ。

「まあ、八月一杯、この家で御好きなことをして遊んで頂くのね」

そう云つて二人で肯き合つてから、一時ほども厚さのある、真新しい百円札の束をテーブルの上に置いた。ついそれに気を奪はれてみると、肉付のいゝ白い手に、キラリとにか光つた。

ハッと息を吞んで、思はず腰を浮かしたがその銀色のナイフの刃は、紙幣の束の上に当てられてゐる。そして、ズバリと見事な切れ味だった。

「これ、貴方のサラリーですわ」

半分になつた、もう札とは見えない束を、万亀夫の眼の前に押してよこした。

「ひと月経つて、御歸えりになる時に、残りの半分を差し上げます」

涼しそうな表情でそう云つた。

「……」

気を吞まれて、傍の低い椅子にかけているもう一人の方を振りかへつた。同じ涼しい顔だったが、まるで彼の反感を楽しむように、そのローリング・チェアを軽くゆすつてゐるのだ。

「家の中を御案内するわ」

否応はなかつた。まだ脇の下に汗を感じながら、双生児姉妹のうしろから、木偶のようについて廻つた。三、四十年前に建つたらしい、古い構えだつたが、さすがに豪華な調度品がドッシリした艶を見せてゐる。

サロンの天井はつゞ抜けになつていて、二階のテスリの向う側に見える部屋が、姉妹の居間らしかつた。ゆるやかな階段を登ると、姉妹はその部屋のドアを開けた。その後から何気なく入ろうとして、万亀夫は底気味の悪い唸り声を聞いた。

ドアのすぐ向うに、小牛ほどもある獣が二匹、四ツ足をふんばつて、ラン／＼と光る瞳でジツと彼を見すえている。不意の闖入者に対して明かに敵意を示しながら、威嚇するよ

うに唸るのだ。

意外だつたゞけに恐怖が二倍になつた。思はず逃げる姿勢になつた時、二匹の獣は大きく吠えた。

「ジュピター！」

「サタン！」

姉妹の声を、彼は制止と聞いたのだが、そうではなくて、かえつて合図のように、ヒラリと躍りがゝつて来た。

耳までも口が裂けた、悍猛な顔が眼の前にかぶさつて来て、万亀夫はアッと顛倒した。男のくせに、猫も抱けないほどの動物嫌いと来ている。まして、突如正体不明の獣に襲いかゝられては、一たまりもなかつた。

情けない悲鳴をあげて、はね起きようと横つ飛びになつたはずみに、もう一匹にぶつゝかつた。ザラリとした毛の感触と、獣の異臭に血が氷るようなくらめきを覚えた瞬間、その獣と一緒に、ゴロ／＼と階段を転がり落ちてしまつたのだ。

はじけるような笑声がした。耳元でハアハアと、轡かわのような音がして、二匹の犬がダラリと赤い舌を垂らしながら、彼の躰の上に前肢をかけてゐる。鼻の先と、両方の眼から耳にかけては真黒で、正面の厚い胸毛は見事

な純白に輝いている。
もう動く元
気はなく
て、

動顛していたのだ。

大の男がそのザマだから、面
白い見物だつたには違
いない。しかし、

なんと云う傍
若無人な
笑声だ

じるようにして笑いこけているのだ。生々と
頬に血の気をのぼせながら、まるで、嬉しく
てたまらない、と云つた風の笑い方だ。
笑いながら、再び彼女たちは呼んだ。

「ジュピター！」
「サタン！」

二匹の犬は音もなく階段を駆け登つて、
女主人たちの牀にピッタリとよりそつた。美
しい双生児と、これもまた寸分違はぬ二匹の
犬が並んでいる。まるで、ギリシヤ神話の中
にでも出てくるような……。万亀夫はまだ恐
怖の去らぬ面持ちで、階段の下からそれを見
上げた。無邪気に笑っている彼女たちは、ま
るでニンフのように美しく、とらえどこ
ろがなかった。

醜態を晒らした面目なさもあつて、彼
は何々に自分に与えられた部屋に引き揚
げた。勢いこんで来たアルバイト口が、思い
もかけず居心地の落着かぬものになつて、途
方に暮れたと云つてもいい。

あの正体不明に見えた獣が、なにかの写真
で見たことがある、セント・バーナード種の
大犬であつたことは判つたが、小牛ほどもあ
る、あんな寧猛な面構えの犬を、部屋の中で
飼う神経が不可解だつた。



万亀
夫はジ
ツと手足
を縮めたま
ゝ転がつてい
た。見栄も気取りも
念頭になく、たゞ恐怖で

ろう。
月子、波
子の姉妹は
階段の手すりに
もたれながら、牀をよ

この無気味な思いは、あんなにも瓜二つの双生児姉妹を見出した時から、その美しい姿につき纏つてはいたけれど、日本では稀有な大犬が、しかも二匹も現はれるに至つては、彼の常識ではなんとも割切れないのだ。

「あなた、犬好き？」

と、尋ねた時の、彼女たちの表情を思い出した。

或は、犬が嫌いなことが、条件だったかもしれないのだ。そして、その想いはすぐ、あの余りに多すぎる報酬に結びついた。半分に切られた百円札の束……。

そう云えば、札束を半分に切つた、まるでギャンブル映画でもやりそうな仕打ちにも、なにか彼女たちの異常な神経を見せられるようだった。

鮮かなナイフの切れ味の跡に、まるで相手を小馬鹿にしたような、残忍な嘲笑が感じられて、万亀夫はこの別荘での、明日からの生活に、なんとも知れぬ恐怖を感じて、身震いするようだった。

乗馬圖

海辺の別荘で不思議な生活が始まった。朝は葡萄棚の下でテラスで、夜は古めかし

い燭台のついた広い食堂で、姉妹と万亀夫は食事をとる。その他には給仕をする、さだという若い、無口な女中がいるだけだった。しかし、当然のことのように、二匹の犬がその女主人たちの足元に横になつて、首だけをキツと上げて、警戒するように彼を凝視しているのだ。

月子と波子との見分けがつかないように、万亀夫にはジュピターと、サタンとの区別もつかない。しかし、彼の毎日は、この二匹の犬によつて、完全に支配されたと云つてもいい。

ある夜半、フツと眼が覚めると、部屋の中で異様な息づかいがする。ガバツと半身を起こすと、真黒な闇の中にラン／＼と光る清い瞳があつて、かすかな唸り声が、遠く近く地鳴りのように迫ってくる。

ジュピターとサタンだ！と思つたが、闇のなかの恐怖は押えようもない。万亀夫はベッドの上で身動きも出来ず、掌一杯の汗を握りしめた。歯の根が合はない、声も咽喉にひつか／＼つてしまう。

廊下の方向で鋭い叫び声がした。すると低い唸り声がもの凄く咆哮に変わる。ベッドの右と左から、窓硝子がひびく程にも、かわるが

わる吠え立てるのだ。今にもあの白い毛に蔽はれた前肢が、牀に飛びついてくるような恐怖に襲はれて、万亀夫は思はず頭をか／＼えてベッドにつ／＼伏して仕舞つた。

闇の中で、彼のそんな狼狽を見届けたように、甲高い笑声がひびく。勝ちほこつたような例の嘲笑だ。そして、それが合図のように、二匹のセント・バーナードは吠えながら、ジリ／＼と後退してゆく。笑声も遠くなつてゆくのだ。

万亀夫はその笑声にひかれるようにベッドを転がり落ちて、這いながら廊下を覗いた。広間に消え残つた鈍い灯りの中を、長いガウンをはおつた月子と波子が、その二匹の寵犬を従えて、ゆつくり階段を登つてゆくところだった。

食事中でも、入浴中でも、女主人たちの命令一下、猛犬は彼に襲いかゝる。だから四六時中こんな恐怖に晒らされて、万亀夫は次第に瘦せてゆくようだった。云はれた通り、仕事らしい仕事はなかつたが、こんな状態ではトランクに詰めこんで来た本を読むことも出来ない。

「菊地さん、あなたあんなに犬嫌いのクセに、よく帰る気にならないことね？」

「ホホ、、、いかに？ ジュピターたちの
歡待ぶりは？ 今に、もつと仲よくして貰う
つもりよ」

大きな瞳に、いたづらつ児のような表情を
浮かべてそんなことを云う姉妹に、万亀夫は
たゞ弱々しい微笑を見せる。この女主人たち
の特異なサジズムに翻弄されながら、唯々と
してこの別荘にとゞまつてゐる心理が、自分
でも不思議だつた。

彼はそれを、切断された札束の、残りの半
分への執着だと思ひたかつた。しかし、この
由布家の双生児姉妹と、二匹のセント・バー
ナードにまつわる、妖しい雰囲気魅されて
いることは否定出来なかつた。

僕は高給で雇はれて来た、道化師だ。美し
い女主人たちの苛酷なサジズムを満たす、金
で買はれたピエロなのだ。――

そんな自嘲にもかゝらず、万亀夫はこの
姉妹にグイ／＼とひかれていつた。容貌から
服装、声音から性格まで寸分違はぬ二人の女
性が醸し出す、麻薬のような魅力に溺れてい
つた。万亀夫は自らピエロの役に甘んじたの
だ。

だが、この由布別荘のもつ不思議な雰囲気
には、まだ／＼謎がありそうだつた。

二階には月子
波子姉妹の部屋
のほか、もう
一部屋あつた。
しかし其処はし
っかり鍵がかゝ
つて、人が居る
ような気配はな
い。

だが、万亀夫
は間もなく、女
中のさだが、そ
の部屋に朝晩食
事らしいものを
運んでゐるのに
気がついた。こ
の事は、若い彼
の好奇心を煽り
立てずには居な
かつた。美しい
姉妹の隣室に、
ひそかにかくま
われる男？……
しかし、こん
なにも奔放な女



主人たちが、何故そのことを秘密にしなければならぬだろう？

彼は機会を見つけては、女中のさだにその秘密を尋ねた。だが、双生児姉妹の乳母の娘だと云う無口なさだは、黙つて首を振るばかりだつた。彼は一瞬に彼女を追及せずには居られなかつた。

「ねえ、男かい。え、そうだろう？」

「……」

「ねえ君、僕に云つたつて、御主人たちには知れやしないぜ？」

さだは万亀夫をみつめて、根負けしたように短かく云つた。

「犬がいるのですわ」

「えつ！ まだ犬が居たのかい！」

彼の大声に驚いて、さだは恐しそうに辺りを見廻した。そして、慌てゝ云い直した。

「いえ、御病氣の大旦那様がいらつしやるのです。月子様、波子様の御父様にあたる御方ですわ」

「あの人たちの御父さんが、どうして……」

しかし、それからはいくら問い正しても、さだはプツリと黙つてしまふ。そして、うすら寒むように、単衣の袖を合はせるのだ。そんな彼女の態度に、彼の好奇心は一層刺

戟されて、ジツとしてはいられなかつた。夜になると、ジュピター、サタンの二匹の牡犬を擁して、ピタリと寢室に引きこもつて仕舞う双生児たちの、寢室での生活も、ひそかに盲想を描くだけでは我慢出来なかつた。

それに、丁度万亀夫の部屋の真上に当るあの謎の部屋では、深夜になると、かすかな物音がするのだ。それは気のせいかな、なにか金屬が触れ合うような音とも思はれた。

そのかすかな音と、さだの言葉の謎にひかされて、万亀夫はとう／＼或る夜、禁断の二階へ登つたのだ。

さすがに階段から上る勇氣はなくて、庭からベランダに通じる、非常梯子を登つた。八月とは云つても海岸の夜気に、白い浴衣一枚の彼は、冷めたい鉄の手すりをつかんで、胸震いするようだつた。

暗いベランダを手さぐりで歩いた。若い好奇心で恐怖を忘れていたのだ。時候に似合はぬ厚いカーテンが張られて、その部屋は暗かつたが、さすがに硝子戸が一枚繰られている。其処のカーテンが、かすかに風でゆれているのが判つた。

そつと近よつて、僅かに光りが洩れる、その隙間に眼をあてた。

五、六坪の洋間だが、ベッドはなくて、絨氈の上にジカに寢床が敷かれている。その絹夜具らしい床の上に、瘦せ劣えた老人が一人、朽木のように横になつてゐる。

それから、動き廻つてゐる、白い裸体が見えた。しかも二人……。月子と波子にまぎれもなかつた。美しい双生児は豊かな裸体を晒らしながら、老人の床の廻りをグル／＼と歩き廻つた。それは、真黒な乗馬靴をつけただけの、異様な裸身で……。

彼女たちは一条もまとつていなかつたが、まるで半世紀も前に流行したような、赤い婦人帽をかぶつてゐる。そして、ガチャ／＼と鋭い音をさせてゐるのは、その乗馬靴のカガトについた銀の拍車に触れ合う音だ。風を切る無気味な音は、彼女たちが手に持つた、細い鞭がしなう音なのだ。

赤い帽子と白い裸身と、黒光りする乗馬靴との、眼がさめるようなコントラスト。そんな不思議な風俗が、彼女たちのエキセントリックな容貌をいやが上にも引き立てゝ、妖しい美しさを醸し出している。

万亀夫は息を呑んだ。しかし、彼の瞳をひきつけたのは、彼女たちの美しさよりも床の上の老人の表情だつた。どう見ても中風か何

かで、半身不随らしいその老人が、彼女たちがその周囲を歩き廻るにつれて、床の上で不自由な軀をクネ／＼とくねらせる。

両手をヒシと握りしめて、眼がキラ／＼とうるんで見える。それはまるで甘美な夢を追うように恍惚と、我を忘れた表情だつた。老人はこみ上げてくる喜びを抑えきれないように、咽喉をゴロ／＼鳴らしながら、歩き廻る月子、波子の姿を眼で追うのだ。

彼女たちが、その老人をまるで威嚇するよう、鋭い鞭の音をさせると、彼は床から軀を乗り出すようにして、低く唸つた。鞭の音と、カチャ／＼と拍車の触れ合う音が、明かに老人の亢奮を倍加させるらしい。

あまり思いがけぬ光景に、万亀夫は呆然として我を忘れた。まるで、夢を見ているような、不確かな気持だつたのだ。だがその時、双生児たちは白い手をあげて、何か叫んだようだった。

すると、今まで何処に居たのか、あのジュピターとサタンが、真一文字に万亀夫の足許に殺到してくるのだ。彼は悲鳴をあげて飛びのいたが、大犬たちは厚いカーテンを蹴破るような勢いで飛びついてくる。

彼は足をとられて、固いペランダの上に横倒

しになつた。犬共はその万亀夫の肩に肢をかけて、すさまじく咆哮する。そして、彼の寝巻をくわえ、部屋の中に引きずり込むのだ。

「ホホホ、、、、なにしに來たの？」

「丁度いゝ、私たちの親孝行の手伝いをさせてやるわ」

姉妹は、惜し気もなく白い裸身を晒し、鞭を持つた手を腰にあてゝ、甲高く笑つた。

「馬におなり！」ペタンと床に坐りこんだ万亀夫の顔の前で鞭が鳴つた。

「馬におなりつたら」

四ツん這いになつた彼の背中に、ズツシリと重い女体が馬乗りになる。固い拍車が彼の胸を締めつける。鞭の音、拍車の音、双生児たちのけた／＼ましい笑声。その中で万亀夫は不思議な快感に身を焼かれ、喘ぎながら床を這い廻るのだ。

瀕死の老人の、陶醉にゆがんだ表情が眼の前にあつた。そして、その正面の壁には、双生児たちによく似た外国婦人の肖像が掛けられてある。その婦人は乗馬服を身につけ、今姉妹たちがかぶっているのと同じような、婦人帽をかぶっている。

八月が過ぎて、彼の任期はもう終つた筈だが、菊地万亀夫は下宿には歸つて来ない。

彼も又、美しい女王に駆使される、犬の一匹としての生活に、甘んじてしまつたのか……。

あの中風の老人の部屋にかけられた肖像の主は、西独生れの、彼の妻だつたと云う。横浜で手広く貿易商を営んでいた彼は、或る日乗馬姿の外国娘に恋し、遂に結婚した。これが由布家の双生児姉妹の母なる人だ。

そして、このドイツ生れの花嫁が由布家に嫁ぐ時、連れて來たセントバーナードが、今のジュピター、サタンの祖にあたる。

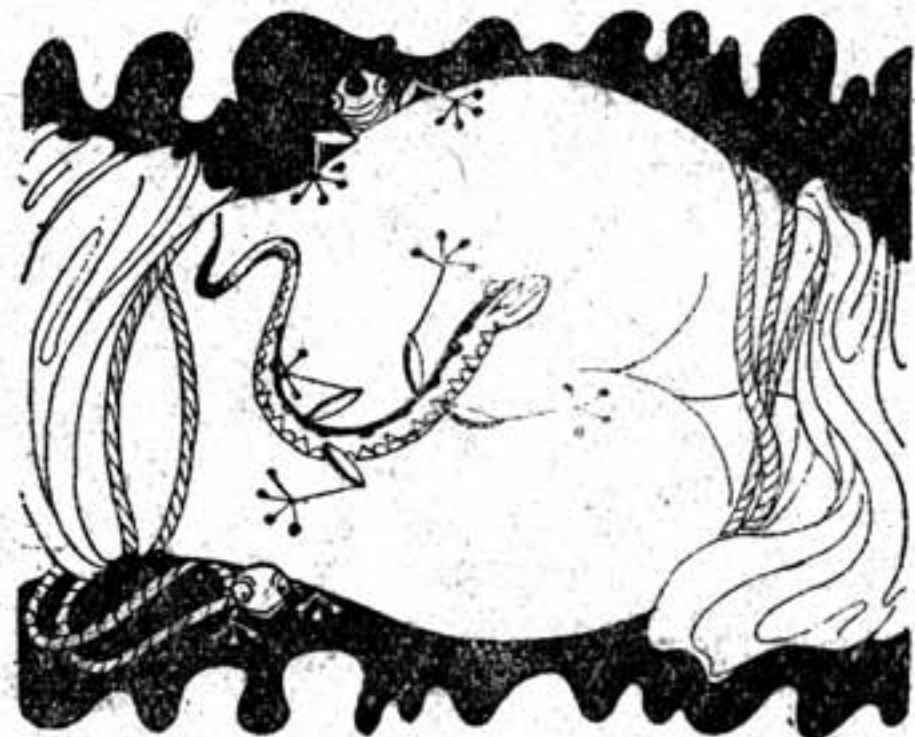
愛妻に先き立たれた父は、その倂を追つて半生を送り、幼い姉妹は犬たちと一緒に奔放に育つた。そして、あまりにも容貌、性格を同じくして生い立つた双生児の悲劇は互に相求めて、片時も離れることが出来ず、遂に世の常の幸福はられなかつたのでもあろうか

老いた父親は、美しく生成した姉妹の上に若き日の愛妻の倂を見た。美しかりし妻の、かつての乗馬姿への激しい追憶と願望は、彼の娘たちを妖しいサジストに仕立て上げてしまつたのだ。

もう秋の由布別荘では、どのような生活が続けられているか、それは想像に難くない。

しかし、月子と波子と、それからあの犬との間の生活の実体は、誰も知らない。

讀者交歡室



さちすと

★私は「風俗草紙」等一号より購読して居りますが、喜多玲子氏、北原環氏の絵は素晴らしい情感をもつて私を楽しませて下さいました。

私は「美女の縛り絵」「縛つた美女の首を斬落した絵」に激しい魅惑を持つていて、その様な絵に接した時は、異常な興奮をおぼえるのです。どういう訳

か少年の頃より、首なし美人の絵に異常な興味を持っています。印象に残るものでは「袈裟と盛遠」江戸川乱歩の「盲獣」城昌幸の「狂い恋」「パリの青髻事件」天城一の「夢の中の犯罪」、銭形平次物にもそんなのがあつた様に思います。多くの読者の内には、私と同じ様な趣味をもつた方がある事と思います。又、その様な画を少しでも載せて頂くことを是非お願いします。

(原紅)

★全国の同志の皆様、二十九歳の会社員ですが、日夜女性を責める夢になやまされています。が、僕の欲求に応じられる女性がいけません。と云うより氣持をうち明けられる女性がありません。

ん。

同病の女性の方、是非御手紙下さい。(姫路 M生)

「びしつ」となるむちの音、
「ううつ」と呻く女の声……数十分の後に白い裸身に幾條かの縄とみゝずの走つた赤い跡を残して汗にまみれたまゝぐつたりと動かなくなつた女に私はそろそろと愛撫の手をのばしてゆく。

「風俗草紙」を読んでから私の幻想に何かの可能性が見え出した様な気がする。それは砂漠を旅する人が水を飲み盡くし、すべてをあきらめた時、はるかかなたに緑のオアシスを認めた喜と同じである。

サディズム！ この言葉に対しては色々の解釈や見解があるが、

私は原則的には男性のもつ潜在的な加虐性の強調せられたものと解する。激しい、痛みを覚

えたり、傷痕を残したり又は出血を見る様な社会的見地からも非難されるべき行爲はつゝしむべきである。サディズム的な行爲は前戯的性格が強いのであるから同性間、若くは女子のサディズムには趣味が薄いと云えるのである、御理解ある方の文通を待つ。(M、T)

☆サディズムの皆様、本号の「責め」の特集はいかゞでしたか。雑誌にはバラエティが必要なので、惜しい原稿が四五本掲載洩れとなり、所期の目的を充分果たすことが出来ませんでした。が、すぐ引続いて第二回の特集を企画致してをります。本誌に於て充分責めの秘訣を會得せられたら、愛人なりモデル嬢なりに直々縄を掛けて見るのも面白いでせう。現実の女体の緊縛は、原始的で爆発的な何かを呼ぶかも知れませんが、しかしやゝアナクロの匂いもします。諸氏は玲子氏の画の官能的画風、悦虐の雰囲気、陶酔するに止めて、閨房に於いてはもう少しスマイル

なサデズムを探究するのも、よいかも知れません。

まぞひすと

★女性サデイストの皆様！

小生二十三歳で大学生であります。貴婦人の犬となつて飼われる事を人生最高の理想としておる者であります。所詮空想に止まつております。たゞ小生の顔がブルドックに似ておりますので、ブルとか「ブルちゃん」などと呼ばれる事で、わずかに自分が犬であると云う気持ちになる事が出来るのです。

しかし、もつともつと徹底的に犬として扱われたいのです。どうか願望をかなえて下さい。勿論ブルドック宛に御手紙下されば、ブルドックとしてお返事致します。

又秘密さえ守つて下さるのでしたら、小生の方から御指定の場所に出向き御命令のまゝ、い

かなる行爲でも致します。

失礼な事は誓つていたしませ

ん。相手の方としては、上流に属する十八歳から、三十歳位までの美しい女性で、特にお医者様の奥様は尊びます。物質的には何のお礼も差上げられませんがあなたの足の裏を犬として嘗めるとき、それはあなたにとつてもお金に代えられない愉楽なのではないでしょうか。これに対して何物もあなたから要求致しません。犬として扱つていただけたら、それで十分なのです。

どうか小生の願をかなえて下さい。(武蔵野 T・K生)

★風俗草紙拜見致しまして、アブノーマルな趣味の共鳴者の多い事に驚きました。小生も肉体を極度に酷使するあのアクロバチックなものに興味をもつております。

貴紙八月号肉の曲芸師を拜見

するまでは、一人なやんで愛好家をさがしていたのです。

あの物語に出て来るアクロの素晴らしさ、訓練の物凄さ、血潮のうづくのを覚えました。全身を麻痺させる様な喜びは、アクロ同好者でなくては恐らく判らない喜びでしょう。

同好者の通信をいたしたいと思ひます。(茨城 T・M生)

★編集部の皆様、私は貴誌以外にも二、三の同様なグループに属して居り、マゾヒストとしての私(二十三歳)サジストとしてのT子(二十五歳)と五年間も關係を續けて居ります。いまだにこのアブノーマルな状態から脱ける事が出来ないのです。

これから益々同好の皆様とまじわりを深くして頂きたいと思ひ、皆様に誌上からよろしく御願ひ致します。

もしこんなにあまい文でも載せて頂ける様でしたら、私達の

いろいろの秘密のプレイを同好の人達に知つていただきたいと思ひますし、又同好の方々の秘楽の技も発表して頂きたいと思うのです。

更に私は貴誌を通じて、男性マゾヒスト、女性サデイストの方々と是非文通をさして頂きたいと思ひます。(京都 A・I生)

★小生は先頃より貴誌の読者となつた者ですが、被虐に非常に興味を持っています。残酷に責めて下さる愛好家がおいででしたら御紹介下さい。どんな残酷な仕打ちをも甘んじて受けま

す。連絡方法などお知らせ下さい。(横浜 T・K生)

★先づは御誌の隆々たる御發展御慶び申し上げます。本号も素晴らしい出来ばえです。八月号で市川市のF氏の通信に接し私と同じ様な女装愛好者を見出しどんなに嬉しく、心強く感じた事でしよう。又、

九月号で相磯武雄氏の「隠花植物」挿画も共に素晴らしいですね。出来得れば写真も載せて下さい。

私の好みは和服です。誰も居らぬ処で、赤い腰巻や派手な長襦袢、着物を身につける時こそ女裝愛好者の醍醐味と云へます。

私はいつも女裝者同志のクラブ（会合）を夢みてゐます。お互に観賞し、カメラに撮つたり、衣裳の取換へも出来るのです。又餘興にくじを引き、当つた者が皆の前で責められたり、一枚一枚衣裳をぬがされたりするのです。何んと楽しいではありませんか。

女裝愛好の方や理解ある女性の方お便りをおまちして居ります。

（大阪・重田生）

☆マゾヒストの皆様、本号は愛讀者の山本氏提供による豪華なマゾヒスト画廊を巻頭に飾つ

て、皆様にお贈り致します。又、一読アブな雰囲気陶酔するフェチストの告白三篇、いかがでしたか。

近く本格的なマゾヒズム特集を行う爲に着々準備中ですので、今から御期待下さい。次号にも特異なマゾ読物が豊富に掲載されます。

そとみあ

★京阪神のソドミニストの方々に御願ひいたします。小生芸術家の卵なんです、文通して下さる方があれば仕合わせに思います。

（大阪 T生）

☆風俗草紙九月号を見て、これまで一人で悩んでいた事に相談相手が出来た様な気がします。

兵隊当時ある戦友と強烈な同性愛におちいり、その戦友は戦死しましたが今だに忘れられず、平常は会社勤めで、まして田舎町の事故、こう云つた性格をかくすのに日々非常に苦勞をして

おります。

思ひきり心のうちを語れる相手がほしいのです。是非御紹介下さい。当年二十八歳の青年ですが、一日も早くよき人の与えられる事を祈つてやみませぬ。

（岡山県 T・T生）

★私は本年二八歳の農村青年です。何卒御交際下さい。

現在中学生から六十歳位のおぢいさんまで沢山の友達が有つて面白く遊んで居ます。長野の一同好者様、東京のKS様、TS様御便り下さい。そして機会に恵まれましたら親しく語り合いましよう。

（埼玉県 杉田二三雄）

★前略御免下さい。私は野性的な方で三十五歳以上の方を望んで居りますので、第二号で拜見しました鶴見M・O様なら三十七歳とはつきり解つて居りますので、御近づき願ひたいと思います。

私は廿一歳で身長一米五十六厘のウールニングの者ですが相手がなく日夜苦惱し続け今だに経験皆無です。

何卒私の求める人との邂逅の一日も早からん事を切望致して居ります。（熊本市 O・S生）

★私は貴誌を非常なる喜びと昂奮を持つて拜読させて戴き、感激のこゝろ未だ冷めやらぬ心地です。

理想としては、粗暴、野卑な男性的センスの人を望みますが、そうでなくとも理智的で端然思慮分別のある英国紳士風の年配の方に魅惑を覚える者です。

私は当県のT私立大学に通学している二十一歳のウールニングです。どなたか御交際下さい

（X生）

★風俗通信第一号で「ソドミア」社交場を知り得ました。つきましては、早速の御願で

すが僕は其様な所で「ボーイ」として働き青春の情熱を捧げたのです。

同封にて「フランスウィック」或は「イブセン」宛の内容にてマスター宛にて僕の氣持を訴えて有ります故、御手数ながらいづれへか（なるべくフランスウィック）御廻送の御便宜を計つて頂きたく重ねて御願ひ申上げます。
（長野県 ○・K生）

☆私も同志の者です。御交際致したいと思ひます。御便り下されば100%御返事を差上げます。

（徳島市 M・S生）

★私は今年二十三歳になる青年で性格はいたって女性的であります。身長五尺五寸、体重十五貫、若柳流の名取で現在の所に居りますが、時折上京もいたします。

真心の恋愛がしてみたいのです。私の希望する「ペデラスト」は野性美な人を望んで居ります。

す。適当な方が御座居ますなら御紹介下さい。（広島 MM生）

☆拜啓、小生そどみの愛好者ですが、何分とも関西在住の爲意に任せず、一度上京、フランスウィックも訪れましたが、思うにまかせませんでした。何卒早急に京都、大阪の社交場御報せ下されたく御願ひ申上げます。

小生二十八歳ですが、終生、事務的な必要のないかぎり結婚して自由にまかせぬ様になるまいと考えております。しかし相手のない淋しさはたえようもなく、堪えがたくあわれであります。

文通小生宛に封書なればどんな送られて結構です。葉書だけは御かんべん願ひます。

（大津 Y・H生）

★一ソドミア愛好者です。私は過去に数多くの人と、いろいろな交際を結んで来ましたが、現

在は誰とも関係を結んで居りません。唯一人、二十六歳のNという青年が居ります。私が始めてソドミイを教わつたのがこのNですが、私はこのNが大嫌いなのです。

又、名もしらぬ或る青年をひそかに慕い続けて居りますが、願ひの叶う筈ありません。

申しおくれましたが私は、十九歳、今春高校を卒業したばかりです。自分なりの青春を、幸福をつかみたいと思つてペンを握りました。愛情ある同好の皆様（年少の方でも結構です）心からお救い下さる事を切望致して居ります。（岡山 H・K生）

★僕はリングに非常に憧れを持つ者です。逞しき変化に富んだリングの所にいけば、ヨニ等は何の興味もないのです。

僕を愛撫してくれる方より、むしろ僕は、僕の思い通りに相手の肉体を愛撫さしてくれる方

を望みます。僕の体の特徴を申し上げますと身長163cm 体重四七キロのやせ型です。美男子ではありません。（岡山縣 S・F）

☆ソドミア諸兄の投書が毎日歴倒的に多く、その整理や回送に実に苦心してをります。しかしこの隠れたる交情に、本誌は深き理解と激しき援助を片時も忘れません。皆様に御満足戴けるような新企劃を、唯今秘かに練つてをりますので、近くお目見得することとせう。

☆なお、別掲の如く読者の投書投稿をドシドシお願いいたします。投稿は、成べく小説的スタイルより、御自身の真実の経験、告白を素直に書かれたものを歓迎します。誰でも、他人に一寸話せないような特異な（或いは秘密な）経験の一つや二つ持つてゐるもので、それを綴られることをおすすめて致します。住所氏名の秘密は厳守致しますから、何卒御安心下さい。

それでは又次号に。

（擔當 編集部 T・U）

落城秘史。第一話

北の庄落城慘記

やがて炎と煙の渦巻く中から、あれこそ手柄とばかりに、自分の具足や頭をこがしながら、背に負い、横に抱きかかえ、中には虫の息なのを長い黒髪を引ずつて、いくたりかの女たちが連れ出されてくる……

岩堀 光

古庄 英生 畫

前書

「はしばしばた合戦しじゆう」と、附題された古草子のあることは、賤ヶ嶽合戦の一部の研究者たちの間ではよく知られているとのことである。

著者は、北の庄攻城に参戦した、足輕、三平なるものであり、当時の実戦参加者のルポとしても珍重されているようだが、歴史的な価値はあまりないようだ。

と、いうのは本の内容が、日常瀕繁に繰返された、当時の合戦に参加した、兵士の、日々の生活や、その被害者である、無辜な人々

の慘めさを小説的に叙述しているにすぎないからである。

ところで、歴史というものは、生き動く小説的真理よりも、死んで動かぬ、文献類を尊重するもので、わたしが、古草子を取りあげて、あらためて、その内容の若干を紹介する気になつたのは実はこの古草子の学問的無価値さがきにいっただけである。

足輕三平なるものは、羽柴軍の部隊、堀秀政騎下の士に組していた。組頭の名は太左衛門といった。わたしが、合戦の研究家に訊ねたところ、それ以上には、つまり、当の草子から判断される以上には、下人の略歴など、

わかる手段はないそうである。

古草子は文章も話の構成もはなはだ下手い。たぶん、たいして教養が高くない、どころか、むしろ、無智に近かつた著者が、思ひだすまま、みたままに、気ままにかき続けたものであろう。わたしは、紹介に当つて、時にはできるだけ、その原文の味を残したいと思つてゐる。というのは、それはそれで、なかなか味もあり、直接的なひびきを伝えているところがあるからである。

草子は、北の庄落城の前夜の挿話からはじまつてゐるが、著者は、それまでに、なんら賤ヶ嶽の合戦のいきさつに筆をふれていない



で、ただ、いきなり、恋に勝ちなかつたひとの、かならずしも、人の世に、幸多く、出世者とはなり申さぬことわり、剛勇、鬼と呼ばれし、柴田どのの、最後もまた哀れといわんか云々といったところからはじめている。

柴田勝家が恋の勝利者であつたかどうか、彼の妻であり、北の庄落城に、美人薄幸の哀れをとどめる小谷の方に、真実、羽柴秀吉がほれていたかどうか、わたしの知る範囲では確実な証拠はない。ただ、推定で「そう」もあろうかと思われるフシがなきにしもあらずという程度である。

両者のハッキリした争いの原因は、本能寺の変後、信長公の仇をいち早くうった羽柴に天下の勢が、しぜん集り、彼の上役でもあり信長公の妹のテイ主でもある柴田勝家が、その風下におかれることをいさぎよくしない感情をもつていたことである。

その上、真偽はともかくとして、羽柴秀吉が、じつさい、小谷の方にほれていたとすれば、たぶん、柴田はよけい面白くなかつただろう。

小谷の方は、織田信長の妹で、名をお市といった。麗容衆に秀れ、兄にも寵愛されていた。はじめ近江の浅井長政に嫁ぎ三人の姫を

もうけたが、良人が、越前の朝倉義景との盟約を重じ、信長と朝倉不和の時に、兄に反抗する悲運にあつた。

浅井の本城小谷城が、いよいよ織田勢に囲まれ、落城寸前になつた時、信長は、義弟に開城を進めた。浅井は承知しなかつた。信長は、攻城の大將、羽柴秀吉に、小谷城を落すように、やむなく命じたが、お市は必ず助けだせともいつた。秀吉は一流の弁説で、浅井を説得し、彼を自殺させ、お市と三人の姫を無事に救いだした。天正元年、彼女、二十六才の夏である。

その後、兄の名声と権威に加え、彼女の美貌ゆえに、袖ひく手も数多だつた。羽柴秀吉も、その中の熱心な一人だつたという推定はいかにもありそうだ。

未亡人小谷の方になつたお市は、十年近く独身を通していたが、天正十年九月、柴田と結婚した。兄が変死し、そうわがままも通していられなくなつたのだろう。

当時、彼女に柴田を推薦したのは、信長の三男信孝だという。そのためか、柴田は、織田家後嗣問題の時、信孝を推した。

さて恋には勝つたが、柴田勝家にとつては先君の愛妹であり、群雄の垂涎の的である美

貌の小谷の方の腫が、なにかにつけ、かつての恋の競争者たちと、彼とを比較して眺めているように思える。中でも、次の天下人と噂されるようになった、秀吉の存在が、たまらなく圧迫感をもつてくる。猿だとか、藤吉だとか、かつては呼び捨てにしてきた相手だけに、くらべられるだけでも、織田家にあつて鬼とまで呼ばれた剛勇無双の彼、そして、それをほこりにしている彼にはたまらない。そういう感情が爆発したのは、織田家後嗣問題で、彼の信孝説に対し、秀吉が、三法法師をたて、打勝つていらいである。

信長の長男、信忠は父の変死の時、やはり奮戦して死んだ。その子の三法法師が、織田家をつぐのは当然至極というのである。ことに柴田が、たとへ、凡庸であろうとも信長の次男信雄をさしおいて信孝をえらんだのでは通らない。

後嗣になり損なつた信孝は、天正十年十月兵を挙げて、秀吉を討とうとしたが、逆に城を囲まれ降参した。柴田が越前地方大雪のため出兵できなかつたからである。明けて三月雪解けを待つて、いつたん許された信孝は再び岐阜に兵を起し、秀吉が、そのため大垣に出兵したすきに、柴田は、近江に兵を挙げ

た。

柴田軍の先鋒、佐久間盛政のため賤ヶ嶽を守つていた羽柴軍の部將中川清秀は討死、同じく高山長房は退却、残る桑山重晴も、柴田軍に抗するすべもなく、敗走せんとしたところを、やつと、羽柴との盟約で、かけつけた丹羽長秀に叱咤されて踏みとどまつていた。丹羽は、信長幕下で、柴田と並び称された名將である。

柴田勝家は、本陣を東野山においていたが先鋒佐久間隊が大勝利で、尙、勝に乗じて、いつきよに敵を全滅さそうと深入りするのを引止めた。彼は玄蕃に、自分は長年、丹羽や猿めといつしよに戦つてきて、彼等の戦場の駆引を充分知り盡くしている。賤ヶ嶽も、丹羽が援軍にきたからには、そう簡単に、今日明日というふうには落ちまい。それに、必ず猿めが引返してくる。そうなれば、味方の軍勢が割れて、互いに孤立することになる。今日のところは早く引返せよ、というのだつた。だが、玄蕃は、勝家の命令をきかなかつた。すでに勝つたも同様の戦いになぜ兵のいきを抜くことがあるでしょう。だいいち、岐阜近くまで、信孝軍を攻めにいつている秀吉が、それまでにどうしてもどれるものですか

というのである。彼は、四月二十日夜まで、前進を続け、激戦と戦勝に心がゆるみ疲れた兵を休めた。

佐久間軍が、まどろんだとも思へぬ数刻後にわかに、「秀吉参陣」の声が、誰いうともなく起つた。佐久間が偵察隊をだすと、はや、彼の部隊のまわりは万燈会の如く篝火のつきぬ光りの海、人馬山野に満ちる有様、その神速鬼神の如き、敵に、急に、玄蕃までが意気挫け、退却命令をだした。それを追撃する羽柴軍。たちまち玄蕃隊の隊伍は乱れる。その報が、柴田陣に到着すると、全軍浮足立つ。それをおびやかすように、きこえる、鉄砲の音、人馬のどよみ声。わずかな間に、柴田勢は命令を待つものもなく、思い思いに逃げ散り、勝家の周りに、旗本三千騎を数へるばかりになつてしまつた。

柴田が、北の庄城に、逃げ戻つたのは、その夜ふけである。

古草子の著者が北の庄に、柴田軍をおつて到着したのも、同じ夜の数刻後である。その羽柴軍第一線攻城部隊は、まず、城の周りの城下の街々に放火し、城塀にとりついて夜明けを待った。著者、足輕三平は、当夜、攻撃部隊に加わらず、放火兼街道警備隊に配下さ

れていたのである。

古草子の挿話はその夜の記述から始まる。

はしばしばた合戦草子――

秀吉公は、攻城に際して、特別命令をだして、この度の戦さでは、城内の、女狩りすべからずと、注意した。

足輕たちには、それが、甚だ不満である。

合戦に際して、別に大將首をひろうかなにかたいした幸運がなければ、戦争の恩典に浴するようなどとはない彼等である。ただ、行く先々で、平和な時には、思つてもみぬひろいものがある。ことに攻城の折など、ふだんなら頭も上らぬ上流の女を、時には、二つに折り、三つに重ねて、したいままにするたのしみもある。足輕たちの不平に対して、組頭太左衛門が答えた。

「おん大將の心配は、北の庄の城内なんだ。れいの小谷の方。あの人にかんどのことで、またきらわれちや、味も蓋もない道理。そのための命令なんだ。だから、今夜がどうつてことがある訳じあない。こうしてあつちこつちに火の手のあがつた街だ。町家や百姓の女房、娘など、煙にまかれて迷うもあるう。ほとけ方便とは、ここの理をいう。戦さは、わ

れらのような古強者こそ、要領を心得ているものだ。われらが、いま、あやしみの影みえたりといへば、お身たち、探せ探せ。だが、もし、みつけないでせば、ひとりじめのてがらにするな。獲物が何匹でも、みなものになるが、こうした狩りの仁義じや」

足輕たちは、さればこそとばかりに、そのあやしのかげを求めて散つた。しかし、町人百姓とて、戦さなれた今日、いざという時に隠すべきものを隠すぐらひはしつていた。なかなか、あやしの影一つみつからないのが例である。ただ、はじめは、城内ですら、勝家の歸りを、戦捷とみてとつたほどの、戦機の変りようだから、まだまだ、街には、敵の侵入をしらぬものもいるだろう、とそれがたのしみだつた。

しかし、こうしたうわさは、戦う本人たちよりも、民百姓たちのほうが、はるかに、早くしつてしまうから、不思議なもの。あたりに、女のおの匂ひすらない。

はや、しのめが近くなる。やつとのこと、九作という、足輕仲間でも、丈高く大力なのにつりあわず、頭の悪い評判の男が、左右の掌に、をなごの髪を巻きつけてあらわれたのが、最初で最後だつた。



焼け残つた倉の
長びつにひそんで
いたという、二人
は女房らしく眉青
くなまめいて、年
増は三十路ばかり
今一人は二十才を
越えぬ若妻。後に
十五と十二才ばか
りの、まだ、童髪
の女の子。さすが
に大力だけあつ
て、よう、四人を
地にひきずつてき
たもの。女たちの
前すそ乱れ、うち
の原の草むす風情
さへなまめかしく
匂わしていた。な
かでも、いがいに
感じたのは、ちい
さいこの役にたた
ずという証拠もな
げなありさまだつ
た。初春のこの頃

に、まだとよの思いもむなしく、め生えたあ
りさま、きいてみると、年増女房の娘たちと
いうことだつた。若妻は、年増のテイ主の弟
に婚いできて、まだ十日とたたぬとか。
「新戦場も同じじや。おれが、手柄に、一番
乗りじや」

九作が叫んで、はたと、逃げようとする相
手の弱腰を蹴りつける。「あッ、あれ！」と
両手を突張り足をはねても、なんとも、太刀
うちならぬ勝負だつた。思うがままの、槍先
のさびとならんありさま。頭の太左衛門が、
身震いして、

「うぬ、につくき九作めのはたらき！ われ
らほどの古武者、ひけをとらぬわ！」

これは、手を合す、年増のエリをとる。

「母者！」

「こわや！」

と、泣きかけるこまやかなも、つれづれの
なぐさみ、慈悲は戦場のはつとはいいいなが
ら、哀れさのきわみという地獄絵だつた。

「おれはあれをすました」

「こつちの谷渡りは、まだじや」

など、勝手放題、やつと朝の明けきるころ
には、胸乳や、はや、曲げ隠す力もなげに投
げだした、ももに、いくすじとなく流れる鮮



やなくれない。
その女たちの髪を
ふたたびたね起
して、

「ううツ、こうま
で、つとめました
に、いのちだけ
わ」

と泣き叫ぶの
もかまわず、まだ
燃えつきぬほのほ
の側まで、ひきず
っていった。

「未練残すな！
後でしるしが残つ
て訴えられては、
めんどろになろう
ぞ」

と、かしの命
令と共に、火に投
げ、突き入れた。
四人共に頭髪を結
びあわして一つに
していたから、ひ
とりひとりが逃れ

ようとあがくほどに足許乱れ、わけのわからぬ悲鳴と共にむせび倒れた。

——やがてはあとかたとしてなくならんに、さまでは、みとどけえざりし、なまみだぶ。

——と、古草子は結んでゐる。

勝家が城にいて戦つたのは、廿二日と廿三日のひるまでで、その夜には、城内に酒肴を配して別れの宴をはらせている。三平はその有様を、後に捕えた小谷の方の女中からきいた。それによると、小谷の方は勝家が戻つてきた時、城の大手門まで出迎えた。戦いは勝つていると、そのひる伝使がついたばかりなので、戦捷の祝いをのべるためだ。ところが勝家は、小谷の方がなにかいいそうになるけふりに、馬から飛降り「市どの、驚かれな。勝家、猿めに、叩かれ申した！」といった。わめくような声だ。小谷の方は黙つたまま頭を下げていた。それから、廿三日夜まで、夫婦は言葉も交わさなかつた。

いよいよ、最後の宴とせると、小谷の方は、勝家と共に、天守の上に登つた。勝家は押出すような声で、

「おみ、城をでられぬか？ 故上さまの妹たるおみ、変事はござるまい？」

と、いつて、じつと、うかがうように、妻の顔色をみた。妻が拒んでくれることを祈つて。

小谷の方は、相変らず黙つていた。

「どうなさる？」

だいぶたつて、勝家が、辛棒ならぬげにたずねた。小谷の方は細々とした声でいつた。

「三人の姫たちが哀れで、なんとしても」

「うむ、姫たちは、今夜にでも、城外にだし申そう。ただ、わいらは、お身の上が思われな。決心をききたいのじやが」

「市は、勝家どのの妻でござりまする」

「おお、死んでくりやるか！」と、よろこばしげに、勝家は家臣の中村文荷齋を呼んで、姫たちを秀吉の許に送り出すよう命じた。

もう頭はないとはいえぬ姉姫のほうは、母に似て、美しい容貌の中にも、勝気さを思わせる眼に、涙を浮かべ、

「いや！ わらわは、母者人と共にいるのじや。ええい、離しや！」

と、手をひき袖をひく、女中たちを叱りつけた。その肩や腰つきに、もう、女らしさ以上の、男心をひきつける風情があるのに、さすがに、抱きよせ、母の側を引離そうとした、勝家の小姓たちも、ためらいがちだった。

「母も後ほど参りましようほどに、ようききわけてたも」

と、小谷の方はいつて、小袖のたもとを顔にあてた。勝家は、怖る怖るその肩を抱いた。古草子の著者が、捕えたみつという女の言葉として、小谷の方のこの時の心境を語っている。日頃、寵愛していた、彼女を手許によび、クシやコーガイなどを渡し、城を出るよういつた。そして、みつが、なぜ、お市もそうしないか、と攻めると、

「わらわとて、逃れでとうは思いますが、秀吉どのの心をしりながら、つれのうしてきたを。なんで今更……いいえ、前にはあの方の手で浅井を、今また良人を攻めほろぼされては、秀吉どのとて、もはやわらわを、兄上在世当時ほどにはあつかわれまい。尼法師にとされる成行きまでは、あの方の意地な想いを満足させられる道具になるばかり。わらわは、柴田どのに嫌ぐ心もなかつた。むしろ、秀吉どのに親しみもあつたが、あの方と、わらわの中には、なにかしら、からだの近ずきを拒む、想いがあつたのでな」

と、泣いたという。ともあれ、戦乱の世の女の哀れを身に受けたような彼女が、いかに愛児たちと別れてまで、美しく死なうと思つ

たかが察しられる。

勝家は、家臣に命じて、天守の下層に火をつけるよう命じた。そこには枯草が一杯つめてあつたとも、爆薬がしかけられていたとも伝えられる。瓦や何やらの破片が、十町余離れた愛宕山に陣取る秀吉陣まで飛んだという。だが、いずれも、軍書の粉飾であろうと思われる。古草子では、城に火が発せられると、すわこそ、お方を救への命がでたとあり此度の合戦、第一の手柄に及ばんと、城内に雪崩いる將兵のもようがしるされている。

三平たちも組頭太左衛門が、「うつかり小谷のお方をみつけても、抱きかかえたりおんぶしてつれたすな。一番の手柄したさが身の仇になる。後になつて、足輕輩に、いやらしいところに手指ふれられたと思えばくやしい女心。おん大將に、うらまれれば、分別もなり難いのでう」という、冗談まじりの注意を受けて、城に走りこんでいる。

やがて、炎と煙の渦巻く中から、われこそ手柄とばかりに、自分の具足や頭をこがしながら、背に負い、横に抱きかかえ、中には虫のいきなるを、長い黒髪ひきずつて、いくたりの女たちが、連れだされてきた。そして目的の人でないかわかると、

「こいつも、だましおつた！」

と、物をいえなくなっている女の胸や腹を踏みにつたり、蹴倒したりした。「あれよ、あれよ」という、拒み声もものかわ、小谷でなくば、なんと金目のものをとばかりに、着ているものをひき破り、たもとを裏返したり、エリを捕へて、素裸にひきむいたり、なかには、いのちをかけて、救けだしたになにもたぬとは、憎さも憎し、と、ばかりに、もとの燃えさかる火の中に、「ひー」と泣き喚ぶのもかまわず、投げこんだり、なにもかもが、突風のように、すぎては繰返し寄せる激しさで進んでいった。

後では、せめて、死体なりともと、たたかう人もなく、ほのほもややおさまつた中から喉をつき、くびれ、踏み殺され、しめ殺された死体などいつさいごつちやに、集めては、顔ではわからぬと、わざとらしく、からだをのぞきこむいたずらさえ行われはじめた。

だが、そうして、死んだ女は、ともかく幸福だが、城を出ようとして、意地悪い、足輕組にとつかまつた女などは哀れだ。

三人の小谷の姫たちのように、上流の女性とは別格だ。たとへば、秀吉の陣につれられて

いつた中の長姫をみて、秀吉は、とたんに、激しく輝いていた瞳をやわらげ、「どれ、こちらへこられよ。秀吉が、重さをはかつて信ぜよう。大きいなられた」と下へもおかぬもてなしよう。五年して、その人が、太閤秀吉に、大阪城や淀城をたてさせた寵姫淀になり次女は京極中納言の妻、三女は徳川二代將軍の妻として、三代家光と中宮和子を生む。そんな宿命をはらんだ。落城の最中で、秀吉の特別命令がまもられ、城内の女は北の庄に関する限り、これ以上の悲しみにあわずにすんだものの、ふつうは、強姦、輪姦の末殺されたり、売られたりした。城を出た女は、落人として、百姓や町人の落人狩りのエサになり山野に醜惡なむくろをよこたへたり、やはり淫売にされた。ほかに、野武士という一群があつて、もつとひどいめにもあう。明治の世においても、維新の落城史の中に、戦死した女子軍を、裸にしてあらためたり、敵の娘を捕えてさらしものにしたたり、はしごにしぼつて兵たちに姦させたりした例がある。

おそろしいのは、戦争だし、それがかもしだしさらけ出させる人間の心のけものめいた面である。古草子の挿話の最後の一例をあげて、反省の具に供してみよう。

みつが捕えられたのは、三平の隊である。

「おん方にお仕え申していましたもの」

と、彼女は最初、そういえばたすかと思つていつた。それが、かえつていけなかつたのは、太左衛門が、ふところをさぐつた時、金銀打つた、クシ、コーガイなどがでてきたからである。

彼女は、その頃武家の中でいつぱん化されはじめたこしまきを着ていた。男の胸をさぐる感覚に、拒むようにふせぎつづけたため、品物を、盗みだした女とされた。

「いいえ、お方さまのおかたみに」

と、彼女は懸命にいつたが、はじめから、十八、九の熟した色かげんにめをつけて、明け方にせまる総攻撃までのぶりようをなぐさむ、心の動いていた連中、なにかといつてはしだいに露骨に、彼女をいびりだした。

本来なら上司に、怪しければ、怪しいとして報告するのが順序だが、そうしたところではさぶらいに伽をさせられるのが落ちとしていつて連中、報告は、じぶんらが満ち足りた後でよしと、車座の中央に、みつを押しやつて「どこまでも、おん方の許しを得たというなら、証拠のある筈、みせてみよ。なかるうがないはずだ」。

「ひよつとするとこやつ、他の味方に密書を送る使者では、ござらぬか」

「そうだろう。なかなかしぶとい面魂」

「いいえ、そんな」

と、みつがおののけば、相手はすかさず、それなら、みずから、帶紐といて、なにももたぬところをみせよ、という。拒むほどにしつこく、ついには、恥をしのんで、みつはそろそろと腰巻をぬぐ。下着もとれば、わざとらしいしさい顔で、足輕共、じろじろと、篝火のあかりが、白い肌にゆらめく、まだ男をしらぬ、城の奥住いのからだを眺め、腰巻のエリをほごしたり、下着の紐を切りさいたり密書の行方をたずね顔をする。

「どれ、まだしらべるところがある」

と、ひとりが引寄せようとするのを、みつは抗う。相手は力をこめてひいておいて、ふいにその手を離せば、「あッ」と、彼女が両脚を宙にあげて、草に背を打ち倒れる。

「わッ!」とはやし笑う声に、たまらぬ思いで、起き直る腰を、蹴られる。思わずしらず犬のように這つて……。それでは、密書をかいたところが、月の光にも、暗うてようみえぬわいと、後ろの山肌を、はつしと手でたたく。「ひえッ!」と、前にのめると、音

の高々ひびく快感に、ひげをぬらして、こ踊りする男までいる。

あち、こちにと倒され、這わされ、女犬め

ワンとなけ、泥棒犬めと、はやされる。

「もう、もう、お許し、下され」

と、みつは、言葉もとぎれがち、からだ中が、熱湯の中にあるようにもえ、それでいてシンの寒さにふるえる感じ。

「さほど許されたくば、密書をもたぬ最後のあかしどころを調べて信ぜよう」

「それには、月による照らしてみせぬか」

「かがりに、焼ける心配もあるまいに」

震へ、おたけび、やつと明け方の攻撃命令の寸前に、許されたけれども、すでに、みつは、ひとりあるきも出来ない。

焼け残りの小屋跡に、手足をしぼられ投げこまれた。その日の朝に北の庄が落ちた。彼女は、夕方、太左衛門に引出され、秀吉に対して、盗人を捕えましたと、報告された。

三人の末たの美しい姫に、小谷の方の容麗を思いやつていた秀吉は、そのクシコーガイに残る香をかぐと、彼女をうしなつたかしやくに責められてか、

「憎い女子もあるものかな。城に死ぬこそあつぱれなに、主のものを盗み、ぬけいだすと

は、武家のならいにそむく奴。みせしめじやさかさにはりつけい!」

と、いつた。

みつは再び、足輕共に、いまはなお、ふれられても痛みの身にしむものを、昨夜と同じつとめをさせられた。今度は半ば公然と。

「ああ、殺してたも」

と、手すり足する力も、やがてはなくなりまなじりさいて、血の涙をながさんばかり、それでも、なにを、女犬めが人間らしいことをと、少しでも拒めば、足裏で、そこを踏みにじり、ついには、さかさに、柱の人となつた。秀吉の浅慮というべき彼女の最後だが、この合戦では、他に、勝家の養子、柴田伊賀守の重臣、山路將監も、返り忠というので、母や妻、娘ら七人をさかさにつられていた。刑の前の凌辱は、身分の高下なく行われた。落城にともなうこうした凌辱は、勿論珍しいことではないが、北の庄落城に於てはそれが酸鼻をきわめた。その女主が、容麗を一世にうたわれたお市の方だけに、この落城惨記は、美貌ゆえに、彼女の一生につきまとい、愛欲の葛藤を思はせる。

(をはり)